

福島県文化財調査報告書第106集

国営総合農地開発事業

母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅷ

唐松 A 遺跡
又兵衛田 A 遺跡
戸屋塚群

1982年3月

福島県教育委員会
財団法人福島県文化センター

福島県文化財調査報告書第106集

国営総合農地開発事業

母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅷ

唐松 A 遺跡
又兵衛田 A 遺跡
戸屋塚群

序 文

国営総合農地開発事業である母畑開拓建設事業は、福島県中通り地方を貫流する阿武隈川の上流部右岸の郡山市・須賀川市・石川町・玉川村・東村・中島村の6市町村にわたり、南北およそ30km、総面積4,379haにおよぶ広大な面積を対象として、農業近代化のための水田基盤設備・開畑・水田および畑地への灌漑等を行う事業です。

阿武隈川の流れは、古来その流域に豊かな耕土を堆積し、政治・経済・文化の中核となる地域を形成して現在に至り、県民生活の大動脈としての役割を果たしてきました。この流域には古代以来の古墳・官衙跡・寺院跡さらにはそれらを支えた集落跡・生産跡など貴重な遺跡が数多く残っています。

当母畑地区もその一部であり、今年度に母畑地区全体の表面調整が完了した結果628の遺跡が確認されました。これら遺跡の保存と開発との調和を図るため昭和56年度の開発に際し東北農政局母畑開拓事業所と事前協議を行い、郡山市の唐松A遺跡、須賀川市の早稲田古墳群・又兵衛田A遺跡・戸屋塚群、石川町の七郎内C・七郎内D遺跡の6遺跡について記録保存のため発掘調査を実施することになりました。発掘調査は福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター遺跡調査課に委託し実施したもので、ここにその調査成果を報告書として刊行することができました。本書はその一部ですが埋蔵文化財の保存・活用のみならず学術研究上にも役立つことを願いたします。

最後に、ご協力いただいた地元有志・郡山市・須賀川市・石川町各教育委員会関係者、市役所・町役場関係者、東北農政局母畑開拓建設事業所および開発関係機関各位の埋蔵文化財に対するご理解に深く感謝の意を表します。

昭和57年3月

福島県教育委員会

教育長 邊 見 榮之助

あ い さ つ

近年開発にともなう埋蔵文化財の発掘調査が年ごとに増加しております。財団法人福島県文化センター遺跡調査課は、その設置以来埋蔵文化財保護の立場にたって国営総合農地開発事業母畑地区内の遺跡調査に従事してまいりました。その結果、阿武隈川東岸の南北約30kmにわたる広大な地域の、原始から近世にかけての歴史解明に多大の成果をあげることができました。

昭和56年度は、郡山市から石川町にかけての6遺跡について発掘調査をしましたが、それらは縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、さらに中世・近世と長期間にわたっています。いずれの遺跡もその地区において歴史上重要な役割を果たしたものであり、また貴重な文化遺産でもあります。本報告書には本年度発掘調査した6遺跡のうち唐松A遺跡・又兵衛田A遺跡・戸屋塚群の3遺跡について、その成果をまとめたものです。

母畑地区における埋蔵文化財の発掘調査は、今後も継続して実施される予定であり、それらの成果についても逐次発掘調査報告書として刊行いたします。これらの報告書が阿武隈川東岸の歴史を解明するための、基本的でしかも重要な記録になるものと確信しております。本報告がいささかでも関係各位の参考にごされ、学問発展の一助となれば幸と存じます。

最後に、この調査に御協力いただきました関係諸機関および地元の皆様께に厚く御礼申し上げます。

昭和57年3月

財団法人福島県文化センター

館長 佐藤 光

例 言

1 この報告書は、国営総合農地開発事業母畑地区にかかる遺跡の、昭和56年度の発掘調査報告書である。

2 この報告書には、昭和56年度に発掘調査を実施した6遺跡のうち、郡山市に所在する唐松A遺跡、須賀川市に所在する又兵衛田A遺跡・戸屋塚群の3遺跡を取めた。

3 この母畑地区事業の促進にあたっては、東北農政局(母畑開拓建設事業所)と福島県教育委員会(文化課)とが埋蔵文化財についての協議を行い、埋蔵文化財の保存を図るとともに、事業計画上保存困難な地区について発掘調査を実施し、記録保存に努めている。

4 昭和56年度の発掘調査費は、国庫補助・県費と東北農政局の負担金からなる。

5 福島県教育委員会は、発掘調査を財団法人福島県文化センターに委託した。福島県文化センターでは、56年度は母畑地区に遺跡調査課の次の調査員を配して調査にあたった。

課長	目黒 吉明(福島県教育委員会出向)	文化財主事	阿部 俊夫(文化センター職員)
専門文化財主査	若林 伸亮(福島県教育委員会出向)	文化財主事	橋本 博幸(文化センター職員)
文化財主査	大河 峯夫(福島県教育委員会出向)	文化財主事	高橋 信一(文化センター職員)
文化財主査	小平 良男(福島県教育委員会出向)	文化財主事	松本 茂(文化センター職員)
文化財主事	辺見 陽一(福島県教育委員会出向)	文化財主事	福島 雅儀(文化センター職員)
文化財主事	玉川 一郎(福島県教育委員会出向)	文化財主事	安田 稔(文化センター職員)
文化財主事	大越 道正(文化センター職員)		

6 各遺跡の調査員名は各編中扉に記した。

7 本報告書は下記により分担執筆し、目黒が監修した。

序章	若林
第1編 唐松A遺跡	若林, 辺見, 橋本, 高橋
第2編 又兵衛田A遺跡	若林, 辺見, 橋本, 高橋
第3編 戸屋塚群	若林, 辺見, 橋本

凡 例

- 1 本報告書は調査員が分担執筆し、執筆者名を文末に記載した。
- 2 用字・用語については統一を計ったが、時間的な制約から細部に不統一な点がある。
- 3 報告書執筆の基準は次のとおりである。
 - (1) 実測図中の方位は磁北を示し、本文中に記した方位角度は磁北からの偏度である。
 - (2) 実測図中および本文中の P₁・P₂……は1号ピット・2号ピット……を表す。
 - (3) 遺構実測図は原則として $\frac{1}{8}$ ・ $\frac{1}{20}$ ・ $\frac{1}{30}$ ・ $\frac{1}{40}$ ・ $\frac{1}{60}$ ・ $\frac{1}{80}$ 縮尺で採録し、各々にスケールを付した。
 - (4) 遺物実測図は原則として石器を $\frac{2}{3}$ ・ $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{2}{5}$ 、土器を $\frac{2}{3}$ ・ $\frac{1}{3}$ ・ $\frac{1}{2}$ 、玉を原寸、土製品を $\frac{1}{2}$ 、拓影を $\frac{2}{5}$ で採録し、各々にスケールを付した。
 - (5) 土器実測図および拓影の断面は、縄文土器・弥生式土器・土師器は白ヌキ、須恵器はベタ黒に区別した。なお土師器内面のスクリーントーンは内黒土師器を示す。
 - (6) 遺物写真は任意の大きさとレイアウトした。
- 4 各編での引用文献については執筆者の敬称を省略し、参考文献として各編末尾に記載した。
- 5 本文中で使用した略号は次のとおりである。

S I …… 竪穴状遺構 S B …… 掘立柱建物跡 S K …… 土 坑
S D …… 溝 跡 S X …… 特殊遺構
- 6 発掘調査の資料は次の略号の組み合わせにより整理し、福島県文化センターにおいて保管の予定である。

市町村略号 郡山市……C Y 須賀川市……S K G
遺跡略号 唐松A遺跡……K M・A 又兵衛田A遺跡……M B D・A

目 次

序 章	1		
第1節 調査経過	1		
1 昭和55年度までの経過(1)	2 昭和56年度の調査経過(4)		
第2節 遺跡周辺の自然的環境	6		
第3節 母畑地区周辺の歴史的環境	8		
第1編 唐松 A 遺跡	11		
第1章 調査経過	13		
第1節 位置と地形	13		
第2節 調査経過	15		
第2章 遺構と遺物	17		
第1節 調査の方法	17		
1 調査の方法(17)	2 基本層序(17)		
第2節 竪穴状遺構	19		
1号竪穴状遺構(19)	2号竪穴状遺構(20)		
第3節 土 坑	22		
分布状況(23)	1号土坑(23)	2号土坑(24)	3号土坑(24)
5号土坑(24)	6号土坑(25)	13号土坑(25)	15号土坑(25)
18号土坑(31)	22号土坑(31)	24号土坑(31)	26号土坑(32)
ま と め(34)			
第4節 掘立柱建物跡	34		
1号建物跡(34)	2号建物跡(36)	3号建物跡(38)	
第5節 鍛冶遺構	38		
1号炉(40)	2号炉(40)	27号土坑(41)	ま と め(41)
第6節 その他の遺構・遺物	42		
1号溝(42)	2号溝(42)	2号溝周辺出土遺物(43)	特殊遺構(45)

B・C-4・5グリッド内焼土遺構・ピット群(46)	その他の遺構(47)
表土出土の遺物(48)	石器(52)

第3章 考 察	57		
第1節 遺物について	57		
第2節 遺構について	60		
竪穴状遺構(60)	土 坑(62)	陥し穴状土坑(62)	その他の土坑(63)
弥生時代の土坑(63)	掘立柱建物跡(64)		
第3節 鍛冶遺構について	64		
第4節 唐松館跡との関連について	65		
第5節 唐松A遺跡の変遷	68		
第2編 又兵衛田A遺跡	111		
第1章 調査経過	113		
第1節 位置と地形	113		
第2節 調査経過	113		
第2章 遺構と遺物	117		
第1節 竪穴住居跡	117		
1号住居跡(117)			
第2節 埋 壙	120		
1号埋壙(120)	2号埋壙(121)	3号埋壙(123)	4号埋壙(124)
5号埋壙(126)	6号埋壙(129)	7号埋壙(130)	
第3節 土坑・特殊遺構	130		
土 坑(130)			
特殊遺構(132)			
第4節 遺物包含層・その他	133		
トレンチ(133)	遺物包含層(136)		

第3章 考 察	152
第1節 遺物について	152
第2節 遺構について	154
竪穴住居跡(154) 埋 甕(154)	
第3編 戸 屋 塚 群	189
第1章 調 査 経 過	191
第1節 位置と地形	191
第2節 調 査 経 過	191
第2章 遺 構(塚)	194
1号塚(194) 2号塚(196)	
第3章 考 察	197

挿図・表・図版目次

序 章

〔挿図〕

第1図	母畑地区位置図	1
第2図	母畑地区開発計画図	3
第3図	調査遺跡位置図	5
第4図	遺跡周辺地形区分図	7
第5図	唐松A遺跡周辺遺跡分布図	9
第6図	又兵衛田A遺跡周辺遺跡分布図	10

第1編 唐松A遺跡

〔挿図〕

第1図	唐松A遺跡周辺地形図	14
第2図	唐松A遺跡遺構配置図	16
第3図	唐松A遺跡内土層堆積状況	18
第4図	1号竪穴状遺構	19
第5図	2号竪穴状遺構	20
第6図	1・2号竪穴状遺構出土土器	21
第7図	1・2・4・8・9号土坑	26
第8図	3・5・6号土坑	27
第9図	15・18号土坑	28
第10図	11・12・13・14・20・21・22・24号土坑	29
第11図	7・23・25号土坑	30
第12図	19・26号土坑	32
第13図	13・15・18・20・23号土坑出土土器	33
第14図	1号建物跡	35
第15図	2号建物跡	36
第16図	3号建物跡	37
第17図	鍛冶遺構	39
第18図	羽口	40
第19図	27号土坑	41
第20図	1号溝状遺構	42
第21図	2号溝状遺構	43
第22図	2号溝状遺構周辺出土土器	44
第23図	特殊遺構	45
第24図	B・C-4・5グリッド内焼土遺構・ ピット群	47
第25図	F-9・10グリッド遺物出土状況	48
第26図	遺構外出土土器(1)	49

第27図	遺構外出土土器(2)	50
第28図	遺構外出土土器(3)	51
第29図	石器(1)	52
第30図	石器(2)	53
第31図	網代編模式図	59
第32図	唐松館跡全体図	67

〔表〕

第1表	2号竪穴状遺構内ピット一覧表	22
第2表	18号土坑内ピット一覧表	31
第3表	土坑一覧表	32
第4表	特殊遺構内ピット一覧表	46
第5表	B・C-4・5グリッド内ピット一覧表	46
第6表	土器観察表(1)	54
第7表	土器観察表(2)	55
第8表	土器計測一覧表	56
第9表	石器一覧表	56
第10表	第I群C類分類表	57
第11表	縄文時代早期～前期の竪穴住居跡一覧表 (本調査)	61
第12表	縄文時代早期～前期の竪穴住居跡一覧表 (試掘)	61

〔図版〕

1	唐松A遺跡遠景(1)(北から)	71
2	唐松A遺跡遠景(2)(西から)	71
3	唐松A遺跡全景(1)	73
4	唐松A遺跡全景(2)	73
5	1号竪穴状遺構検出状況	75
6	1号竪穴状遺構	75
7	2号竪穴状遺構検出状況	77
8	2号竪穴状遺構	77
9	各土坑全景及びセクション	79
10	3号土坑	81
11	5号土坑	81
12	6号土坑	81
13	23号土坑セクション	81
14	15号土坑検出状況	83
15	15号土坑	83
16	13号土坑	83
17	23号土坑	83

18	1号建物跡	85
19	2号建物跡	85
20	B-6・7グリッド西壁土層断面	87
21	3号建物跡	87
22	鍛冶遺構(1)	89
23	鍛冶遺構(2)	89
24	1号炉検出状況	91
25	1号炉(1)	91
26	1号炉(2)	91
27	1号溝状遺構	93
28	2号溝状遺構	93
29	特殊遺構	95
30	B・C-4・5グリッド内焼土遺構・ ピット群	95
31	1・2号竪穴状遺構出土土器	97
32	13・15・18・20・23号土坑出土土器	97
33	縄文土器(第I群a・b類)	99
34	縄文土器(第I群c類)	99
35	縄文土器(第II・III群)	101
36	縄文土器(第III群)	101
37	弥生式土器(第V群)	103
38	縄文土器・弥生式土器底部資料	103
39	15号土坑・G-9グリッド・2号溝状遺構 周辺出土遺物	105
40	鍛冶関連遺構・2号溝状遺構周辺出土遺物	107
41	石器(1)	109
42	石器(2)	109

第2編 又兵衛田A遺跡

〔挿図〕

第1図	又兵衛田A遺跡周辺地形図	114
第2図	又兵衛田A遺跡遺構配置図	116
第3図	1号住居跡	117
第4図	1号住居跡出土土器	118
第5図	1号住居跡出土石器	119
第6図	埋甕位置図	120
第7図	1号埋甕平面図・断面図	121
第8図	1・2号埋甕	122
第9図	2号埋甕平面図・断面図	122
第10図	3号埋甕平面図・断面図	123
第11図	3号埋甕	124
第12図	4号埋甕平面図・断面図	125
第13図	4号埋甕	126
第14図	4号埋甕内出土玉	126

第15図	5号埋甕	127
第16図	5・6号埋甕平面図・断面図	128
第17図	6号埋甕	129
第18図	7号埋甕平面図・断面図	129
第19図	1・2号土坑	131
第20図	2号土坑出土土器	131
第21図	1号特殊遺構	132
第22図	又兵衛田A遺跡土層断面図	134
第23図	H~J-5・6グリッド遺物出土 位置図	135
第24図	遺物包含層出土土器(1)	137
第25図	遺物包含層出土土器(2)	138
第26図	遺物包含層出土土器(3)	139
第27図	遺物包含層出土土器(4)	140
第28図	遺物包含層出土土器(5)	141
第29図	遺物包含層出土土器(6)	142
第30図	遺物包含層出土石器(1)	143
第31図	遺物包含層出土石器(2)	144
第32図	遺物包含層出土土製品	145
第33図	その他の遺物	146
第34図	網代編み痕模式図	153

〔表〕

第1表	土器観察表(1)	147
第2表	土器観察表(2)	148
第3表	土器観察表(3)	149
第4表	土器観察表(4)	150
第5表	石器観察表	151

〔図版〕

1	又兵衛田A遺跡遠景(北から)	157
2	又兵衛田A遺跡遠景(東から)	157
3	1号住居跡セクション	159
4	1号住居跡全景	159
5	埋甕(1)	161
6	埋甕(2)	163
7	埋甕(3)	165
8	1・2号土坑	167
9	1号特殊遺構	167
10	E・F-6グリッド堆積土断面	169
11	C・D-7・8グリッド遺物包含部分	169
12	埋甕	171
13	1号住居跡出土土器(1)	171
14	1号住居跡出土土器(2)	173
15	遺物包含層出土土器(1)	173
16	遺物包含層出土土器(2)	175

17	遺物包含層出土土器(3)……………	177
18	遺物包含層出土土器(4)……………	177
19	遺物包含層出土土器(5)……………	179
20	遺物包含層出土土器(6)……………	179
21	遺物包含層出土土器(7)……………	181
22	遺物包含層出土土器(8)……………	181
23	遺物包含層出土土器(9)……………	183
24	遺物包含層出土土器(10)……………	183
25	1号住居跡・遺物包含層出土石器(1)……………	185
26	遺物包含層出土石器(2)……………	185
27	遺物包含層出土土製品・4号埋甕内出土 石製品……………	187

第3編 戸屋塚群

〔挿図〕

第1図	戸屋塚群周辺地形図……………	192
第2図	1・2号塚配置図……………	193
第3図	1号塚……………	195
第4図	2号塚……………	196

〔図版〕

1	戸屋塚群遠景……………	199
2	1号塚調査前全景……………	199
3	1号塚セクション……………	201
4	2号塚セクション……………	201

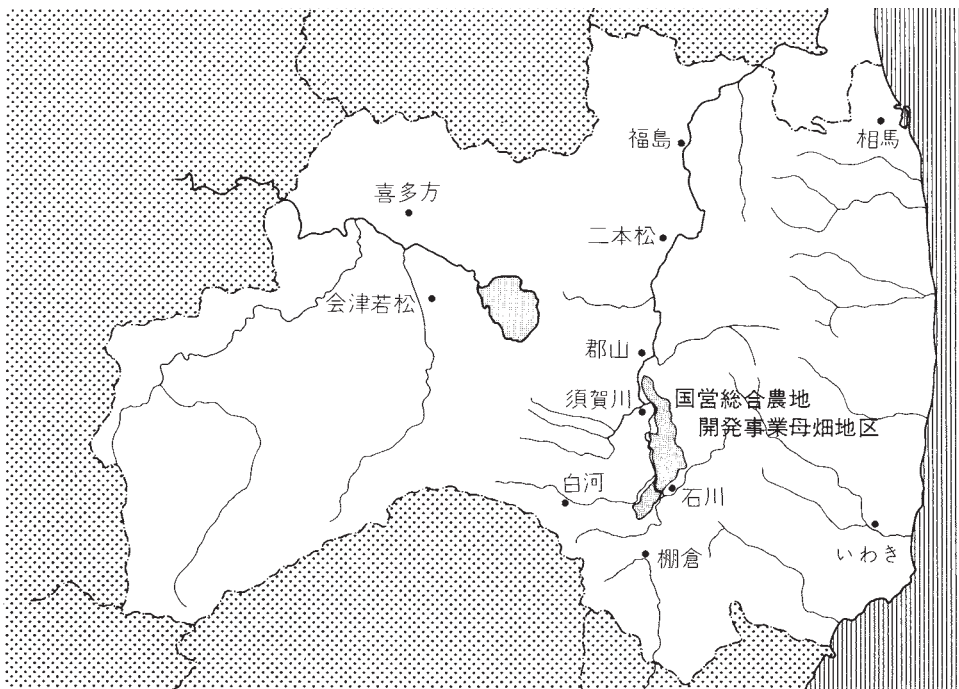
序 章

第1節 調査経過

1 昭和55年度までの経過

国営総合農地開発事業母畑地区は、阿武隈山地西縁丘陵地帯に4,379haにおよぶ農地を開発するために昭和43年から開始された事業である。阿武隈川の右岸、南北約30km、東西約5kmの狭長な地区で、郡山市・須賀川市・石川町・玉川村・東村および中島村の2市1町3村にまたがっている。事業の概要は、阿武隈川の支流北須川の上流部に千五沢ダムを築造し、大規模な灌漑および開田計画をたてたが、昭和45年度以降の米の生産調整を含む農政転換により開畑と畑地灌漑に変更され、昭和67～68年に完成することを目標に工事と計画の再検討が併行して進められている。

福島県教育委員会では昭和44年度に母畑事業区内の遺跡分布調査を実施したが、昭和51年度から、開畑・圃場整備等の工事着手にともない福島県教育委員会と東北農政局母畑事業所との間で埋蔵文化財の取り扱いについて具体的な協議を行い、埋蔵文化財保護に対応してきた。昭和52年度には財団法人福島県文化センター内に遺跡調査課を新設し、調査を委託し実施してきた。昭和51年度以降の調査の詳細は、下記報告書および表のとおりである。



第1図 母畑地区位置図

発掘調査

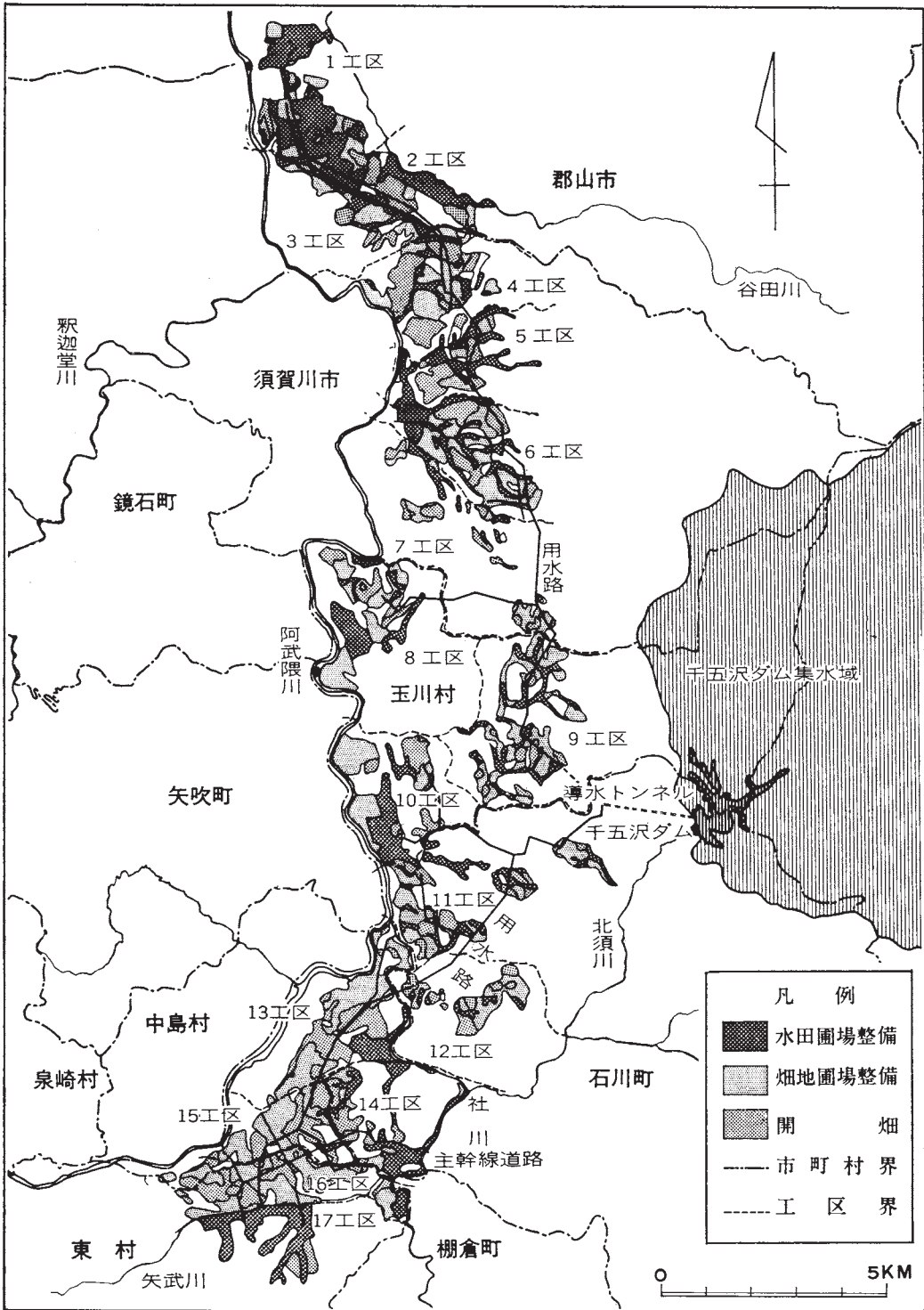
- 『石川町上森屋段遺跡発掘調査概報』（福島県文化財調査報告書第60集） 昭和52年3月刊
- 『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ』（福島県文化財調査報告書第67集） 昭和53年3月刊
- 『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ』（福島県文化財調査報告書第74集） 昭和54年3月刊
- 『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅳ』（福島県文化財調査報告書第84集） 昭和55年3月刊
- 『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ』（福島県文化財調査報告書第85集） 昭和55年3月刊
- 『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅵ』（福島県文化財調査報告書第95集） 昭和56年3月刊
- 『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅶ』（福島県文化財調査報告書第96集） 昭和56年3月刊

市町村名	郡山市	須賀川市	石川町	石川町・中島村	東村	備考
工区	2	5	6	11	15 16	
昭和51年度					上森屋段	60集 概報
昭和52年度					佐平林 谷地前C 赤根久保	67集 Ⅱ
昭和53年度				達中久保	佐平林 板倉前B 爪内古墳群	74集 Ⅲ
昭和54年度		山田B 下小山田古墳群		源平A 源平C	十三塚群 佐平林 谷地前C 西原	84集 Ⅳ(5・11・15工区) 85集 Ⅴ(16工区)
昭和55年度		大久保A 沼沼平東 沼沼細平 沼沼塚群		杉内B 杉内C 杉内E	十三塚B塚群	95集 Ⅵ(11・15工区) 96集 Ⅶ(5工区)

分布調査

- 『母畑地区遺跡試掘調査概報Ⅰ』（福島県文化財調査報告書第61集） 昭和52年3月刊
- 『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅱ』（福島県文化財調査報告書第66集） 昭和53年3月刊
- 『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅲ』（福島県文化財調査報告書第73集） 昭和54年3月刊
- 『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅵ』（福島県文化財調査報告書第83集） 昭和55年3月刊
- 『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅴ』（福島県文化財調査報告書第97集） 昭和56年3月刊

市町村名	工区	周知 遺跡	昭和51年		昭和52年		昭和53年		昭和54年		昭和55年		昭和56年		計		総遺 跡数
			踏 査 面 積	発見 遺跡	踏 査 面 積	発見 遺跡	踏 査 面 積	発見 遺跡	踏 査 面 積	発見 遺跡	踏 査 面 積	発見 遺跡	踏 査 面 積	発見 遺跡	踏 査 面 積	発見 遺跡	
郡山市	1 2	4 0							80.0	9	102.8	21	440.8 —	33 4	440.8 182.8	33 34	37 34
須賀川市	3	6									344.5	31	186.2	40	186.2	40	46
	4	16									—	1	—	3	344.5	31	47
	5	18					193.0	21	301.8	33	—	—	—	1	193.0	25	43
	6 7	5 5					46.0	5	137.9	22	—	3	60.0	13	347.8 197.9	39 38	44 43
玉川村	8	10									292.9	20		9	292.9	20	30
	9	0											262.8	9	262.8	9	9
	10	8		—	1	—	4				283.9	14	262.8	9	283.9	19	27
石川町 (中島村)	11	24					291.8	16	—	1					291.8	17	41
	12	5									113.6	4	20.0	1	133.6	5	10
	13	39							317.4	21					317.4	21	60
	14	48					10.0	2	200.6	7					210.6	9	57
東村	15	26	150.0	2	—	1	85.7	2	—	1					235.7	7	33
	16 17	4 1		1	145.0	15	216.9 165.4	32 14							361.9 165.4	48 14	52 15
計		219	150.0	3	145.0	17	1008.8	95	1037.7	94	1137.7	96	969.8	104	4449.0	409	628



第2区 母畑地区開発計画図

2 昭和56年度の調査経過

昭和56年1月26日、福島県教育委員会と母畑事業所との間で、昭和56年度事業実施区域内の埋蔵文化財について第1回の保存協議が行われた。その後5月6日にいたり、次の6遺跡については記録保存のための発掘調査を実施し、残余の遺跡については工区除外、盛土工法などで遺跡の保存を図ることで協議が成立し、財団法人福島県文化センターに発掘調査が委託された。

各遺跡の工区・所在地・調査期間は次の通りである。

工区	遺跡名	所在地	遺跡の種別	調査期間
2	唐松A遺跡	郡山市田村町岩作字唐松	(縄文・弥生・土師)	5月25日～7月29日
5	早稲田古墳群	須賀川市下小山田字早稲田	(古墳群・中近世墓跡)	5月18日～11月21日
5	又兵衛田A遺跡	須賀川市小倉字高柴	(縄文包含地)	9月7日～10月27日
6	戸屋塚群	須賀川市大栗字戸屋	(中・近世塚群)	8月3日～8月11日
11	七郎内C遺跡	石川町大字中野字下ノ町	(縄文・土師集落跡)	5月18日～8月21日
11	七郎内D遺跡	石川町大字中野字七郎内	(縄文・土師集落跡)	6月11日～8月6日

福島県文化センター遺跡調査課は、昭和56年度に3名の増員を得て総計23名となった。母畑関係の調査には12名をあて3班編成とし、発掘調査および分布調査に対処した。唐松A遺跡は縄文時代早期末葉と推定される住居跡と製鉄関連遺構が検出された。戸屋塚群は径8m前後の2基の塚を調査した。早稲田古墳群は遺構の分布範囲が10,000㎡以上におよぶため1班が専ら発掘に対応したが農作物の作付状況、多量の土坑墓、縄文時代晩期包含層との重複等々の関係で予想外の長期発掘となった。七郎内C遺跡と同D遺跡は至近距離のため同一班で同時併行して発掘調査を実施した。特に七郎内C遺跡では、縄文時代中期の遺物包含層が予定地外まで拡がっており、予定期間を延長して調査せざるをえなかった。

調査日程との関係で、発掘調査を実施した全遺跡において現地説明会を開催することはできなかったが、七郎内C・D遺跡については8月1日に石川町教育委員会の協力を得て、早稲田古墳群については11月21日に須賀川市教育委員会の協力を得てそれぞれ開催することができた。

本報告書には、昭和56年度に発掘調査した6遺跡のうち、「唐松A遺跡」「又兵衛田A遺跡」「戸屋塚群」の3編を収録した。「早稲田古墳群」は『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅸ』(福島県文化財調査報告書第107集)に収録し、「七郎内C遺跡」「七郎内D遺跡」の2編は『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅹ』(福島県文化財調査報告書第108集)に収録した。

分布調査の結果については、『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅵ』(福島県文化財調査報告書第103集)に本年度の試掘結果と共に、6年間にわたり母畑事業区の全面積を踏査した結果を集成した「母畑地区遺跡一覧表」とこれに対応する地図が収録されている。(若林伸亮)



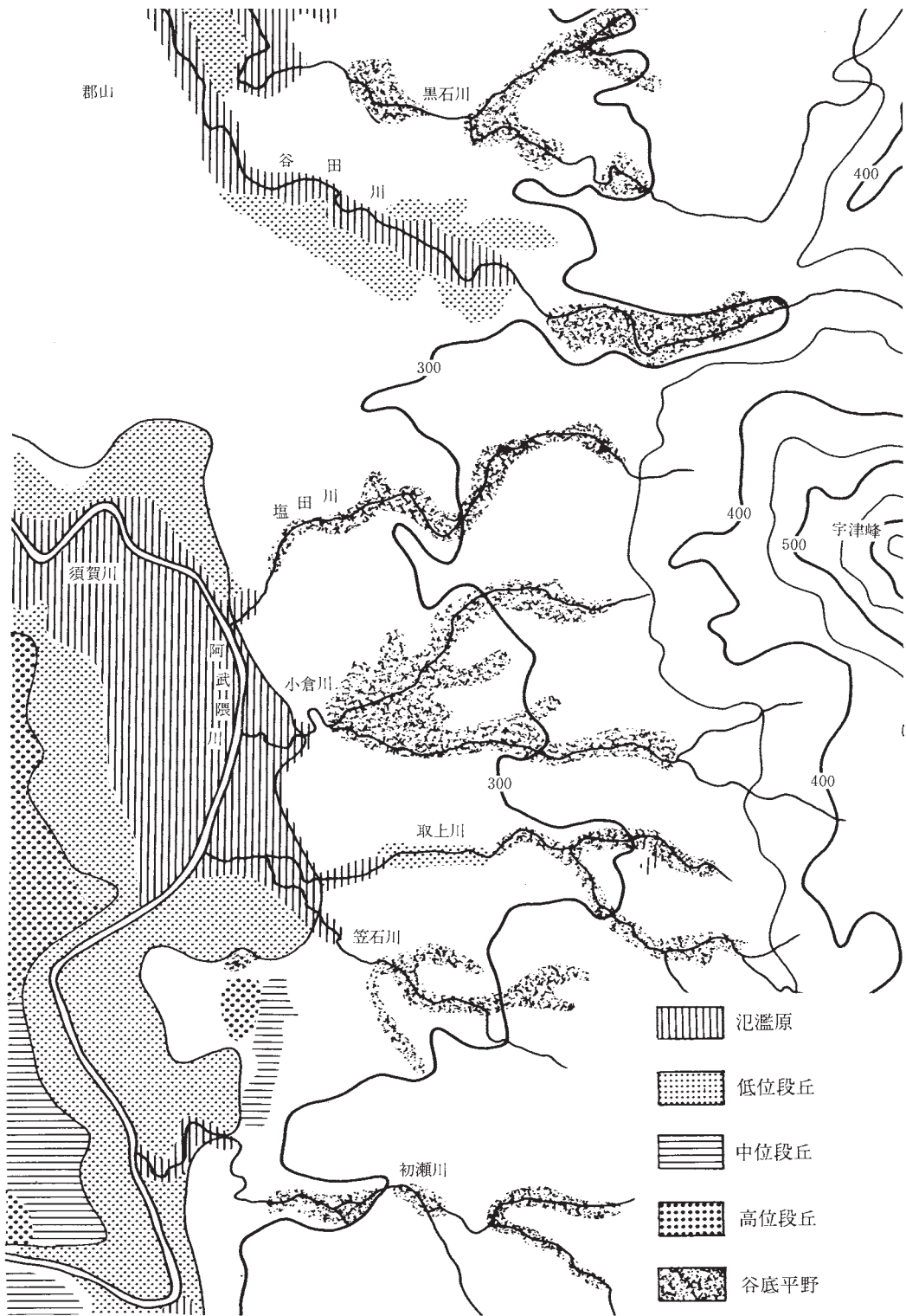
第3図 調査遺跡位置図 (国土地理院・5万分の1・須賀川)

第2節 遺跡周辺の自然的環境

国営総合農地開発事業母畑地区は、阿武隈川上流部右岸に位置している。阿武隈川流域は古くから「中通り」と呼ばれ、北から福島・本宮・郡山・須賀川・白河の各盆地が並んでいる。阿武隈川は、概してこれら諸盆地の東端近くを北流しており、従って右岸は阿武隈山地西縁丘陵地帯に接し、小規模な沖積地がみられるにすぎない。母畑地区周辺の地質を概観すると阿武隈山地を構成する花崗岩・花崗閃緑岩を主体とする深成岩からなるほぼ定高性の丘陵地帯が阿武隈川本流近くまで接近している。阿武隈川左岸の郡山盆地では、郡山層・大槻層など洪積世の砂礫質堆積物が広い台地を作り、須賀川盆地以南では石英安山岩質熔結凝灰岩の丘陵・台地がみられ、台地面は郡山盆地の郡山層に対比される矢吹層が薄く堆積している。沖積層は阿武隈川およびその支流の沿岸に狭長に分布しており、阿武隈山地西縁丘陵地帯では袋状の谷底低地がみられる。

阿武隈山地西縁丘陵地帯の地形は、海拔高度400m以下、起伏量100m以下である。須賀川市大東地区から玉川村泉地区にかけては、観音山(453m)を中心として起伏量100m以上あり残丘と認められるものもあるが、全体としては起伏量60m以下のなだらかな円頂丘のつらなりが大部分を占めている。氾濫原は阿武隈川沿いに不連続にみられる。これは阿武隈川が所々で花崗岩質基盤岩を侵食し急流を作るため、急流の上流部に袋状の氾濫原を形成したためと考えられる。玉川村より下流部の氾濫原には自然堤防、後背湿地、三日月湖跡などの発達が見られるが、石川町より上流ではその発達が明瞭でない。河岸段丘は所々で分断され連続していない。低位段丘は郡山盆地の大槻面に対比されるもので、流域全体にわたり比較的明瞭に指摘できる。中位段丘は郡山盆地の西の内面に対比されるものであるが、阿武隈川とその支流社川の合流点より上流部には広く分布しているが、下流部では断片的に認められるにすぎない。下流部の中位段丘面には集落の立地している例が多い。上位段丘面は阿武隈川右岸では山脚末端付近にわずかに認められるにすぎず、しかも侵食や崩落によりかなりの傾斜を示し、平坦面としてはほとんど認めることができない。上位段丘面は郡山盆地の郡山面に対比して考えることができる。

本報告書に収録した3遺跡の立地条件は、それぞれ異なっている。唐松A遺跡は、郡山盆地の大槻面に対比される谷田川の中位段丘面に位置しており、周辺は石英安山岩質熔結凝灰岩の台地にかこまれている。又兵衛田A遺跡は、小倉川の袋状谷底平野を望む丘陵末端の比高10mにおよぶテラス状地形に立地している。眼下に狭長な水田がみられ、わずかの畑地を除けば大部分が山林であり、花崗岩の深層風化した褐色森林土壌に覆われている。遺跡から東に向かっては丘陵が切れ、阿武隈山地の一峯東山がはるかに望める。戸屋塚群は阿武隈山地西縁丘陵地帯の一般的特色である円頂丘陵の頂上部付近に立地しており、標高350m余を示す。(若林伸亮)



第4図 遺跡周辺地形区分図

第3節 母畑地区周辺の歴史的環境

国営総合農地開発事業母畑地区および周辺部4,400ha余の表面調査により、周知の遺跡219、新発見の遺跡409、合計628の遺跡が確認された。遺跡の種類別延数は次のとおりである。

種類	縄文	弥生	土師	古墳	板碑	塚	城館	その他	計
延遺跡数	120	23	431	37	11	43	45	4	714

縄文・弥生時代の遺跡は、約半数が石川町以南に集中しており、特に阿武隈川とその支流社川の合流点付近から南西部の阿武隈川右岸上位段丘面に濃密な分布を示す。また郡山市田村町周辺、須賀川市南部から玉川村にかけても遺跡の集中がみられる。古墳時代以降の遺跡は発見された遺跡総数の60%ほどを占めるが、遺跡の集中地区は郡山市田村町から須賀川市江持・堤地区にかけてと、石川町沢井・赤羽地区の2地区に多くみられ、玉川村から石川町の北部にかけては分布が粗である。古墳と塚は須賀川市と石川町に多く分布する。

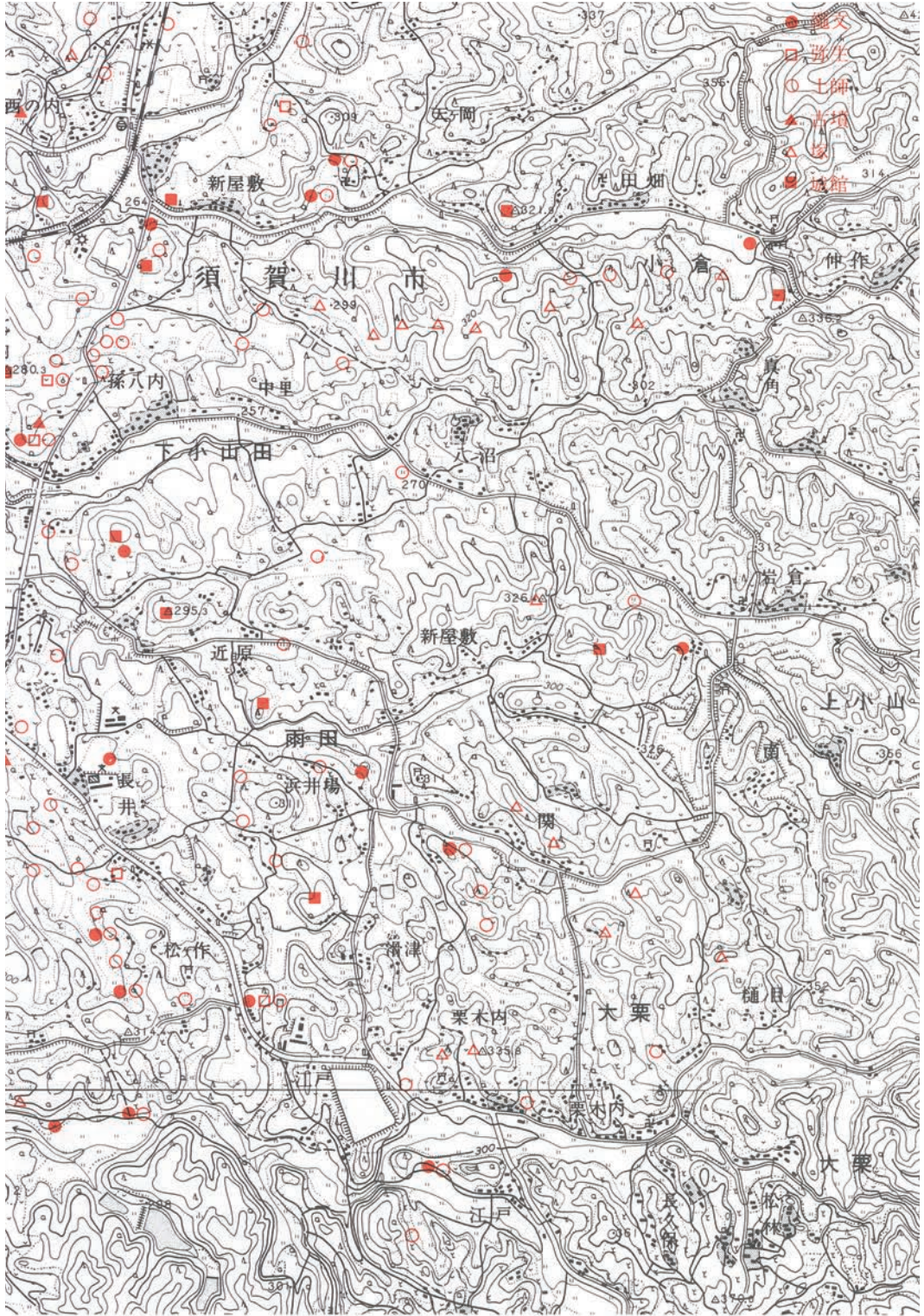
遺跡の分布と地形との関係を見ると、郡山市・須賀川市の場合地形と遺跡立地との関係は明瞭でなく、各種各様の地形条件の場所に各時期の遺跡が立地している。しかし局部的には縄文・弥生時代の遺跡が高燥な台地末端、丘陵斜面、高位段丘上に多く、土師器・須恵器の散布する遺跡は低位段丘や自然堤防上に多いという一般的傾向が認められるにすぎない。古墳は丘陵地帯の末端部や段丘崖の部分に多く確認されている。石川町の遺跡は阿武隈川・社川が形成した段丘上に分布している。石川町の総遺跡の15%以上が縄文時代から平安時代までの複合遺跡であり、しかもこのほとんどが段丘上に立地することからして、長期間にわたり同一地形面が生活の場として選択されてきたと考えられる。

本報告書に収められている3遺跡周辺の歴史的環境を略述すると、唐松A・又兵衛田A両遺跡を含む縄文遺跡は全域に散在しており、その立地には二つの傾向が認められる。一つは唐松A・大供四十坦・地藏田B・荒小路・一斗内等の遺跡は沖積地の段丘上に位置するものであり、他の一つは丘陵斜面または丘陵頂部近くに立地するもので又兵衛田A遺跡をはじめとして豆田A・洞川岸A・山田C・浜井場Bなどの遺跡があげられる。唐松A遺跡の東南東5kmには宇津峰があり、南北朝時代南朝方の拠点宇津峯城が作られ、山麓一帯は戦場となった。中世文書に柄久野原・矢柄城・三與田城・八田河などの地名が散見される。また戦国時代末期の二階堂・田村・石川・伊達の各氏が対立抗争した場所でもある。唐松A遺跡に接する唐松館跡は文献・遺物・遺構いずれをみても、どの時代に位置づけるか確定要素をもたない。戸屋塚群の周辺には塚が数多く分布しているが、遺物がほとんど出土しないので時期・性格について速断することはできない。

(若林伸亮)



第5図 唐松A遺跡周辺遺跡分布図 (国土地理院・2.5万分の1・須賀川東部)



第6図 又兵衛田 A 遺跡周辺遺跡分布図 (国土地理院・2.5万分の1・須賀川東部)

第1編 唐松 A 遺跡

(含・唐松館跡)

遺跡記号 CY-KM・A
所在地 郡山市田村町大字岩作字唐松
時代・種類 縄文時代-竪穴状遺構・土坑群
弥生時代-土坑
鍛冶遺構
中世-館跡
調査期間 昭和56年5月25日～7月29日
発掘担当者 目黒吉明
調査員 若林伸亮 辺見陽一
橋本博幸 高橋信一
協力機関 郡山市教育委員会

第1章 調査経過

第1節 位置と地形

唐松A遺跡は、郡山市田村町大字岩作字唐松に所在する。国鉄水郡線磐城守山駅より水戸寄り1.8km、唐松第1踏切の北へ100mの地点に位置し、北には阿武隈川の支流谷田川が西流し、これに沿って国道49号線が走っている。国道49号線岩作歩道橋より南東約500mで当遺跡に達する。今年度発掘調査を実施したのはその一部分であり、土地利用の現況は普通畑である。今年度の調査から除外された東側の部分は桑畑・普通畑・宅地等に利用されている。なお今年度発掘地区に南接する水田は、10数年前に造成のため削平を受けており、遺跡の一部分は破壊されていると思われる。

唐松A遺跡の立地する谷田川の谷底平野には、谷田川の侵食・氾濫等により作られた小規模な河岸段丘が3段認められる。氾濫原は海拔高度247m前後あり、低位段丘は1.5～2.0m程高い。中位段丘は更に2.0～2.5m程高く251～252mで、唐松A遺跡はこの面に立地している。上位段丘面の確認はかなり困難であるが、比高1m程度の段丘面が山脚末端部にわずかに残存している。谷田川の流路は谷底平野の北部に偏在しており、北岸には段丘はわずかしか認められず、大部分は比高20m程度の急崖で丘陵地帯と接している。これに対して南岸は広い段丘面を残し、なだらかな丘陵性台地に移行している。したがって谷田川の流路は南から北に向かって次第に移動したものと考えられる。また谷田川の河川勾配は割合ゆるやかで、氾濫原を蛇行しながら流下していた。唐松A遺跡の東約250mには三日月湖の跡が狭長な水田として地図・航空写真及び現地観察により指摘でき、段丘崖の追跡においても曲率の小さい円弧状の段丘崖が所々にみられる。

谷田川の谷底平野の表層地質は、やわらかい砂・礫で構成され、中位段丘面は郡山盆地の大規模面に対比されている。北部の丘陵地帯は黒雲母花崗岩が風化侵食されたなだらかな丘陵性台地であり、部分的に郡山層の堆積が認められる。南部の丘陵性台地は大部分が石英安山岩質溶結凝灰岩で構成されており、局部的に郡山層が残存している。

唐松A遺跡周辺の歴史的環境を略述すると、谷田川の谷底平野部には遺跡の分布が少なく、洪積世台地及び丘陵部に遺跡が集中している。遺跡の大多数は土師器・須恵器の遺跡であり、弥生時代の遺跡は極度に少ない。(遺跡分布図参照)

縄文時代の遺跡は谷田川の段丘面に本報告書記載の唐松A遺跡をはじめ、縄文時代早～前期の遺物を出土する地蔵田A遺跡、縄文時代前期～中期の遺物包含層を持つ地蔵田B遺跡、後期の土器片を多量に出土し、墳墓や祭祀遺跡と考えられる配石遺構を持つ荒小路遺跡が立地している。



第1図 唐松A遺跡周辺地形図

唐松A遺跡の北東1.5kmの袋状谷底平野には大供四十坦遺跡があり、南部にも小深田遺跡や洞河岸A遺跡などが、いずれも袋状谷底平野や沖積段丘面に立地している。また洪積台地上にもいくつかの縄文時代遺跡が知られている。これら縄文時代遺跡のほとんどは土師遺跡と複合しており、縄文時代の単独遺跡として現在確認されているのは荒小路遺跡のみである。弥生時代の遺跡は2カ所が確認されているにすぎない。

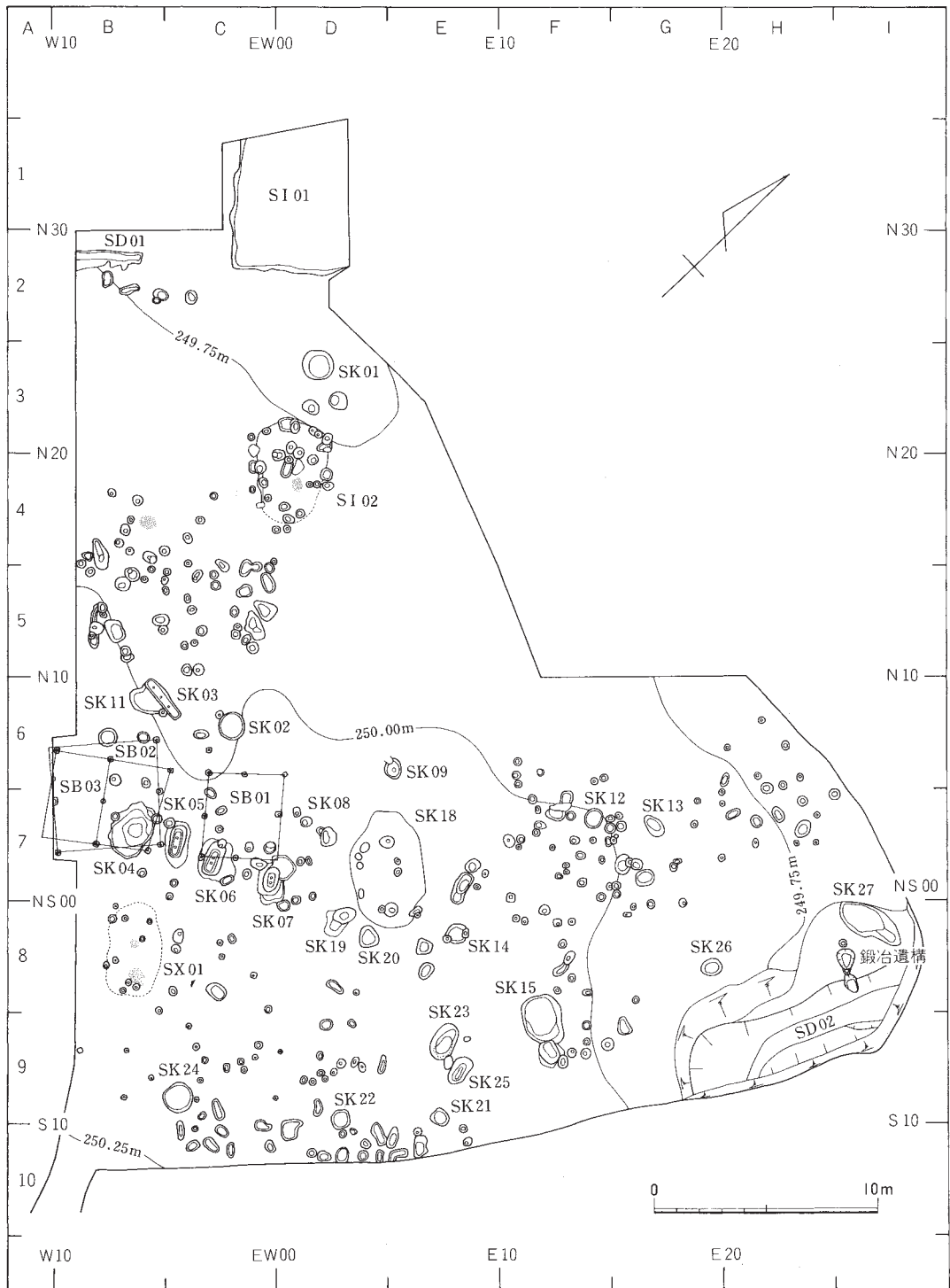
中世の城館跡とされているものの中には、豪族屋敷村とよばれる中世の開拓に関連して作られた遺構も含まれるが、これらと城館跡を区別することは困難である。唐松館跡は唐松A遺跡と重複しており、今年度発掘調査した地区に東接している。周辺の城館跡には、細田城をはじめ御代田城・須賀川城・狸森城・今泉城・矢柄城など、「藤葉栄衰記」「伊達成実日記」「奥陽仙道表鑑」に見られる城館跡がある。また唐松館や東接するカナイ館など館としての伝承と遺構を持っていないが、文献に現われない城館も数多く確認されている。(若林伸亮)

第2節 調査経過

当遺跡は、母畑開拓事業所との昭和56年埋蔵文化財保存協議の結果、記録保存のための発掘調査を実施することになった。調査区域のほぼ全面にみつばが栽培されていたため、その収穫を待って5月25日より調査を開始し、7月29日に終了した。なお発掘調査区の周辺はすべて水田であり、排土の処理が不可能なため、調査区を二分割し、一方を調査する場合他方を土砂置場にし、調査終了後逆に土砂を移動して他方を調査するという変則的な調査方法を取った。

発掘調査日誌概要

- 5月25日 プレハブ建設、バルコンおよび発掘器材搬入、グリッド設定、表土除去開始。
- 5月27日 ベンチマークを設定。250.10m
- 5月29日 遺構検出作業を開始する。
- 6月2日 縄文時代早期住居跡と思われる遺構を検出する。
- 6月4日 第1次調査区表土除去作業終了する。
- 6月16日 掘立柱建物跡と思われる柱穴を検出する。
- 6月29日 第1次調査区完掘する。
- 7月8日 ブルによる排土運搬と第2次調査区の表土除去を開始する。
- 7月10日 弥生時代の土坑を検出する。
- 7月15日 調査区北東部で、溝に接して鍛冶場跡と思われる遺構を検出する。
- 7月23日 第2次調査区完掘する。
- 7月29日 調査のすべてを完了し撤収する。(若林伸亮)



第 2 図 唐松 A 遺跡遺構配置図

第2章 遺構と遺物

第1節 調査の方法

1 調査の方法

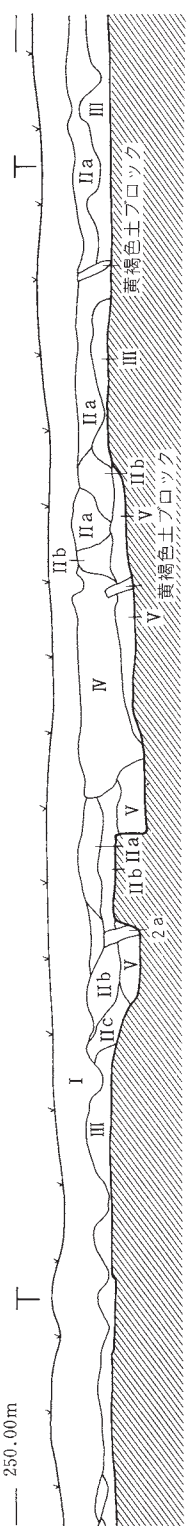
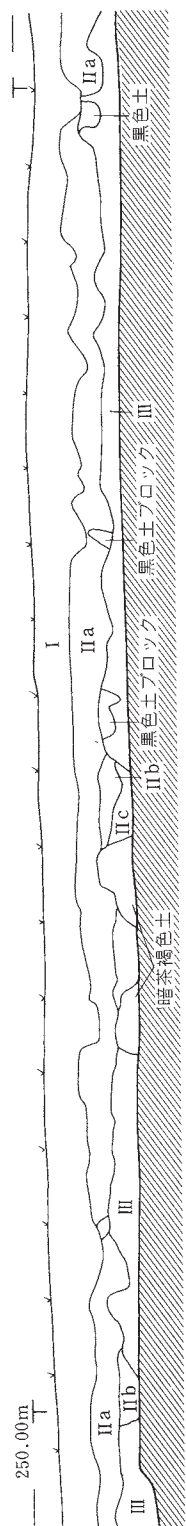
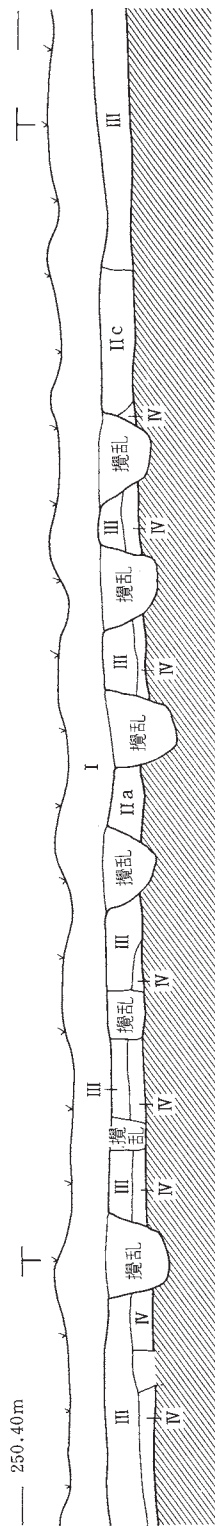
発掘調査区の設定は、グリッド法を用いた。1グリッドは5×5mを基本とし、遺跡全体を基盤目状に分割し、これを単位発掘区として調査を実施した。南北の基準線の偏度はN-56°30'40"-Eである。グリッドの符号は遺跡の南西隅より、南北方向にアラビア数字を東西方向にアルファベットを付した。本遺跡のグリッドは、A～I-1～10のように割り付けた(第2図参照)。また、遺跡の中央にNS00・EW00の原点を設け、N00, S00, E00, W00を用いて標示した。土層観察のため、C-1～7の東壁、B～I-7の南壁の2本をセクションベルトとして残し記録した。記録の方法は、遺構横断土層図を $\frac{1}{20}$ 、土坑関連図を $\frac{1}{10}$ に、小ピット・1号溝状遺構・2号溝状遺構を $\frac{1}{20}$ で、その他の遺構は $\frac{1}{10}$ ないし $\frac{1}{20}$ の縮尺を使用した。

2 基本層序 (第3図)

本遺跡は、段丘崖線や耕作時の掘り込み等により各所に攪乱を受けている。しかし、遺跡全体の層序の乱れは少なく、第I層耕作土より第IV層黄褐色土(遺構検出面)までの4層が認められた。ただ、第II層黒褐色土は含有物・しまり等にa～eまで5層に分けられる。これは、遺跡の立地する微地形が北西方向にゆるやかに傾斜しているため生じたのであろう。遺物は第II・III層中に含包され、第IV層黄褐色土以下には認められなかった。

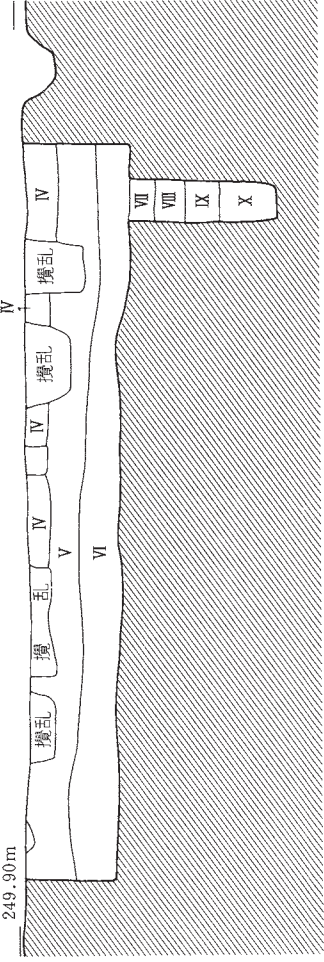
E-5グリッドにおいて4×1mのトレンチを設定し深掘り土層を観察した。第IV層黄褐色土(検出面)は約20cm前後まで耕作溝の攪乱を受けており、遺構検出作業時にも東西方向に走る幅約40cmの耕作溝を多数検出した。第V層黄褐色土は粒子が粗く、しだいに明度を増し層厚20cmを測る。第VI層黄褐色粘質土で、少量の砂質土・黒色土粒を含み粘性有りしまっている。層厚は30cmを測る。第VII層灰白色土で粒子が細かく粘性強い。層厚15cmを測る。第VIII・IX層は灰黄褐色土でしだいに砂質性が増してくる。層厚は各々20cm前後を測る。第X層は砂層で、検出面より130cmで湧水が認められる。

また、第II・III層中に、火山灰(パミス・スコリア)を含有し、遺構によっては堆積土中に同様な火山灰を含む。これは、各生活面ごとに数回の火山活動が行われ、今後の研究次第で年代決定の大きな手懸りとなる。 (高橋信一)



調査区内土層堆積状況

- L-V 黄褐色土 (L-IVより明るい)
- L-VI 黄褐色粘質土
- L-VII 灰白色土
- L-VIII 灰黄褐色砂質土
- L-IX 灰黄褐色砂質土 (L-VIIIより砂質性に富む)
- L-X 砂層



第3図 唐松A遺跡内土層堆積状況

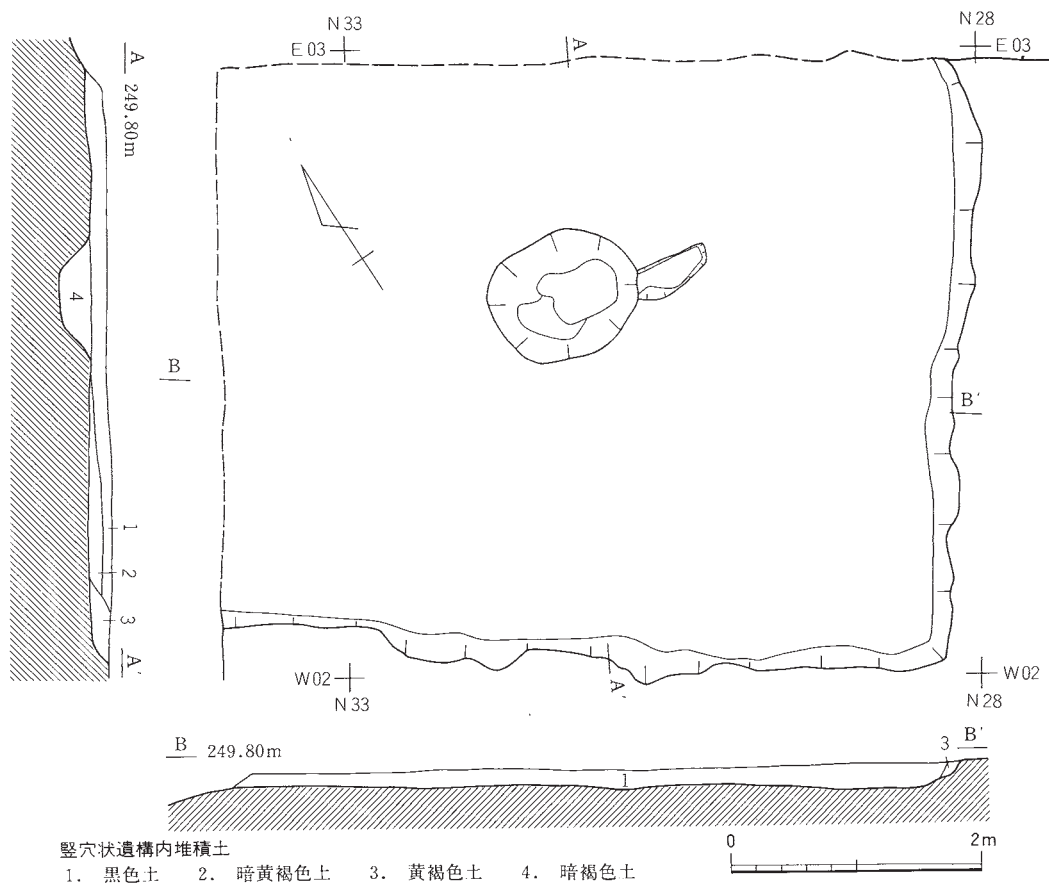
第2節 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構 S I 01

遺 構(第4図, 図版5・6)

調査区最西端のC・D-1・2グリッド内に検出された遺構である。北側は段丘崖となり、西側は水田造成のため削平を受けており、その形状と範囲をとらえることはできなかった。残存する平面プランは、東西5.7m、南北4.9mを測り、ほぼ方形を呈すと考えられる。壁高は最も残りのよい東南コーナーでは約20cmを測り、他の壁では低く10cm前後を測る。

遺構内堆積土は、第1層黒色土が住居全面に堆積しており、床面直上に第2層暗黄褐色土、壁崩壊土と考えられる第3層黄褐色土がそれぞれ確認された。床面は地山の黄褐色土で軟弱である。本遺構の中央には、東西1.2m、南北1.1m、床面からの深さ24cmを測る円形の土坑が検出された。



第4図 1号竪穴状遺構

堆積土は黒褐色土1層である。

遺物(第6・30図, 図版31・42)

本遺構より出土した遺物は縄文土器と石鏃・剥片である。縄文土器は小破片で, I-c類, III群(1・2)が約15点程出土している。また, 石鏃(5)は無茎で先端部を欠損しており, 他に流紋岩質の剥片が十数点出土している。

まとめ

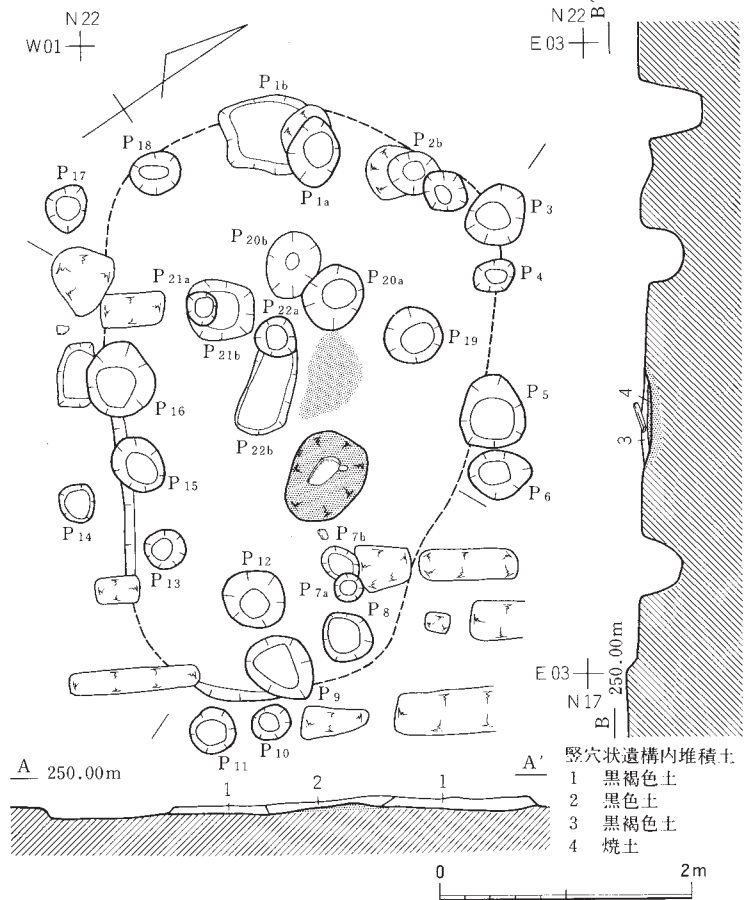
本遺構は, 北・西壁がすでに破壊されており全体を把握することは困難である。出土遺物も少なく, 時期および性格等についても不明瞭な竪穴状遺構である。(辺見陽一)

2号竪穴状遺構 S I 02

遺構(第5図, 図版7・8)

本遺構は, C~D-1, C~D-2グリッドに位置する。北西側は1号土坑に隣接する。本遺構はすでに床面まで削平されており, 確認されたのは黒褐色土が薄く堆積していた範囲とピット群だけである。しかし, 後世の溝が東西に走っており, 北東側は不明瞭であった。

平面プランは不明瞭であるが, 黒褐色土やピット群の配置により, 長軸4.82m, 短軸3.08mの北側がやや膨らむ不整楕円形を呈すと考えられる。壁は, 南壁の一部を確認したにすぎず約8cmの高さを持つ。遺構内堆積土は,

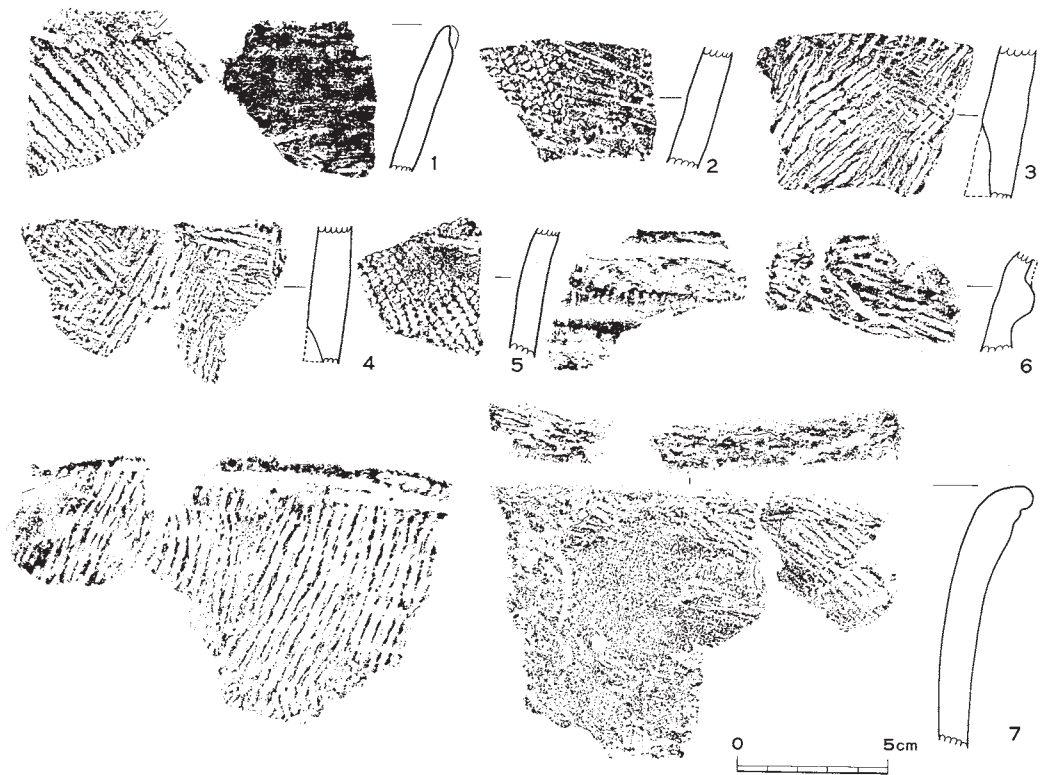


第5図 2号竪穴状遺構

大きく3層に分かれ中央の第2層の黒色土には焼土が散布していた。床面は検出面と同じL-IVの黄褐色土で、ほぼ平坦につくられている。全体に軟弱で、貼り床は確認されなかった。溝跡は床面までも及びこれを破壊している。

炉は本遺構の中央より東寄りに構築されていた。長径72cm、短径60cm程の楕円形を呈し、床面を8cm程掘り窪めた地床炉である。炉の中央には細長い24×14cmの石がたてかけるような状態で検出された。炉内には焼土が堆積しており、炉底および炉壁は熱変のため赤褐色を呈していた。

ピットは、炉より1.5～2.5m程離れた位置に、炉を囲むように検出された。径は40cm前後のもので、22本を数える。深さは5～43cmとバラツキが多く認められる。ピットは切り合ったものや、P₁₉・P_{20a-b}・P_{21a-b}・P_{22a-b}のように他のピットに比べ内側に囲むピットもあり、本遺構が一時期だけでなく数期にわたり建て替えられたことが考えられる。各ピットの立ち割り調査では、埋土がL-IVの黄褐色土に少量の黒褐色土粒を含むため柱痕を把握することはできなかった。ただP₁₉では径35cm程の柱痕を確認しており、丸柱を底面に裾え付けて使用したと考えられる。



第6図 1・2号竪穴状遺構出土土器

第1表 2号竪穴状遺構内ピット一覧表

(単位cm)

No	P _{1a}	P _{1b}	P _{2a}	P _{2b}	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P _{7a}	P _{7b}	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
規模	56×41	94×60	33×32	40×34	53×44	32×26	58×51	50×40	23×22	32×24	39×39	56×50	32×27	36×36
深さ	43	5	15	44	50	12	19	16	16	11	19	30	25	12
No	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P _{20a}	P _{20b}	P _{21a}	P _{21b}	P _{22a}	P _{22b}
規模	51×48	32×31	30×28	46×38	60×56	39×33	40×34	46×45	51×49	53×42	28×24	54×48	32×32	95×36
深さ	31	19	15	15	25	33	22	29	35	32	38	15	20	12

出土遺物(第6・30図, 図版31・42)

本遺構より出土した遺物は縄文土器片・剥片・石鏃である。堆積土は薄く、遺物は一部を除き大半が床面に伴う状態で検出された。

第6図7は、P₁₆近くの床面より出土した縄文土器の口縁部破片である。口唇部付近が短かく外反する深鉢型土器であろう。外面には条が縦走する捺糸文を、内面の口唇部付近に横位の捺糸文が施文されている。色調は暗黄褐色を呈し、胎土に多量の繊維や細砂を含み、焼成は良好である。後述のI-C₁類に属する破片である。

他の3～6も縄文土器であり、I-C類とⅢ群に属する。他に磨滅した小破片が36点出土しているが、I-C類に属するとみられる。

石器は堆積土第1層中より石英粗面岩質の無茎石鏃(10・12)で、基部に抉りの入るものが2点出土している。他に、P_{1a}とP_{2b}に隣接する床面より12点の剥片が出土した。流紋岩・チャート質で小破片のため図化しなかった。

まとめ

本遺構は、2号竪穴状遺構と名称を付した。これは、検出期において東西方向に走る溝跡や堆積土第1層が薄く分布しており、どのような遺構であるか不明確であったためである。精査により、72×60cmの地床炉を検出した。ピットはP₁₉で柱痕を検出しただけで他のピットも半截したが不明であった。柱穴と推定されるP₁～P₁₈から本柱の上屋構造が推定され、P₁₉～P₂₁は旧柱穴とも考えられたが炉に近く構造的にも不明な点があり本遺構が拡張されたものかは不明である。

本遺構は、竪穴住居跡と考えられ、床面よりI-C類が出土しており縄文時代早期末葉の遺構と考えられる。(高橋信一)

第3節 土 坑

今回の調査で27基の土坑が検出された。検出された土坑は、伴出遺物も少なく時期・機能については不明瞭な部分が多い。個別の特徴・計測値は土坑一覧表にまとめた。次に、土坑の分布状況、代表的な土坑の形態の特徴について説明を加える。ただし、27号土坑に関しては、鍛冶遺構との関連も考慮し、第4節にて説明を加える。

分布状況（第2図）

本遺跡は、北側は河岸段丘崖となり、西・南側は水田造成のため大きく削平されており、旧地形は不明である。検出面の微地形について触れておく。調査区の微地形は、25cmのコンター線は3本しか現われず標高では249.75m～250.25mと50cmの比高を持つ。北側にゆるやかに傾斜する河岸段丘上に立地する。

1号土坑は調査の北西部に検出され、他の土坑と異なって単独に分布し、2号竪穴状遺構に隣接する。4～7、19・20・23・25号土坑は、250.00mのコンターに沿って立地しており、5～7号土坑は直線的に土坑の短軸方向に並ぶ特色を有する。他の土坑は散在して分布している。

次に、陥し穴状土坑と考えられる6基の土坑について、分布状況を述べていく。陥し穴の機能を推定される土坑は、ある程度の深度を持ち、形態は壁面等が崩落しており原形を留めていないが、長方形・小判形がみられる。また、土坑内より出土する遺物は少なく、年代を決める手掛かりは少ない。土坑の分布状況の特徴からA～Cグループに分類される。Aグループ(3号土坑)は、他の土坑と比べて単独で存在し、底面に3個のピットを持ち長軸方向N-82°-Eを示す。Bグループ(5～7号土坑)は、短軸方向に並ぶ土坑群であり、平面形は長方形ないし楕円形を呈す。長軸方向はN-34°～47°-Wを示す。各土坑間の距離は1～2m程で、検出面からの深さは1.3m前後を測り、底面にピットを有する。Cグループ(23・25号土坑)は底面および側壁が不明瞭であるが、陥し穴状土坑と考えられる。長軸方向N-21°～24°-Wを示す。間隔は50cm程である。

弥生時代の土坑は1基(15号土坑)だけの検出であり、調査範囲が限定されており、周辺に同様の土坑が存在するかは不明である。

次に時期不明の21・22・24号土坑について述べる。3基の土坑共に、検出状況・堆積土・形態等に類似性を持ち、南東部の調査区において東西方向に直線的に並ぶ。また、2・11号土坑や12・13号土坑も隣接しているが、出土遺物・形態等に相違がありグルーピングは不可能である。18号土坑は他の土坑と異なり、底面に10数本のピットを持ち独立した状況で立地している。出土遺物から13・18号土坑は同時期に開口していた可能性が強い。

1号土坑 SK01（第7図、図版9）

調査区北西部で、2号竪穴状遺構に隣接して検出された土坑である。検出面は、地山・黄褐色土上面である。検出時のプランは長軸1.4m、短軸1.4mを測り円形を呈する。底面は長軸1.32m、短軸1.32mを測る。壁面は直角に近い角度で立ち上がる。検出面から底面までの深さは53cmを測り、断面は「□」字状を呈する。

堆積土は4層に分けられる。第4層は黄灰色粘土であり、壁面に貼り付けるように検出面から

底面まで幅20cmで検出された。これは、下面が砂層を含むため水の流入を防ぐためにとられた処置であろう。1～3層は中央が窪んだレンズ状の自然堆積である。

本土坑は、遺物は何も出土せず時期は不明である。堆積土の状況から比較的新しい時期のものと推定され、性格は構築上の特徴を考えれば貯蔵穴の機能を果した土坑であろう。

2号土坑 SK02 (第7図, 図版9)

調査区中央のC-6グリッドにおいて検出された土坑である。検出面は、地山・黄褐色土上面である。平面プランは、長軸1.23m、短軸1.2mを測りほぼ円形を呈する。検出面から底面までの深さは26cmを測り、断面は「L」字状を呈する。堆積土は4層に分けられる。上面は耕作等により攪乱を受けており、底面直上には少量の黒褐色土粒を含む砂質の暗黄褐色土が堆積している。遺物は4層中よりII-C類の土器片が出土しており、本土坑は縄文時代に位置づけられよう。

3号土坑 SK03 (第8図, 図版10)

B・C-6グリッドにおいて、11号土坑を切る状態で検出されたAグループの土坑である。検出時における上幅の平面プランは長軸2.55m、短軸1.08mを測り長方形を呈する。長軸方向はN-82°-Eを示す。底面は長軸2.08m、短軸35cmを測る。底面の長軸方向に直径10cm前後、底面より深さ15cmのピット3本が50cmとほぼ等間隔に一列に並んでいる。短軸方向の断面形は、開口部が広くしだいに狭まりながらほぼ垂直に底面まで至り、「Y」字状を呈する。検出面から底面までの深さは85cmを測る。

堆積土は6層に分かれ、下部には壁崩壊土と考えられる黄褐色土が堆積しており自然的な埋没と考えられる。遺構内から年代を推定するような遺物は出土せず時期は不明である。重複関係からすれば11号土坑より新しい時期の土坑であろう。

5号土坑 SK05 (第8図, 図版11)

Bグループの西端に位置し、C-7グリッドにおいて検出された土坑である。上幅の平面プランは長軸1.44m、短軸68cmを測り、楕円形を呈する。長軸方向はN-43°-Wを示す。底面は長軸1.03m、短軸28cmを測る。底面の長軸方向に直径15cm、底面より深さ18cmのピットが2本検出された。短軸方向の断面形は、開口部が広くしだいに狭まりながら垂直に底面まで至り、「Y」字状を呈する。検出面から底面までの深さは1.24mを測る。

堆積土は9層に分かれ、下部には壁崩壊土と考えられる黄褐色土が堆積しており、自然的な埋没と考えられる。遺構内から年代を推定するような遺物は出土せず時期は不明である。

6号土坑 SK06 (第8図, 図版12)

Bグループの中位に位置し、C-7グリッドにおいて検出された土坑である。上幅の平面プランは長軸1.68m、短軸83cmを測り楕円形を呈する。長軸方向はN-34°-Wを示す。底面は長軸88cm、短軸31cmを測る。底面の長軸方向に直径10cm前後、底面より深さ5~10cmのピットが2本検出された。短軸方向の断面は、3・5号土坑と同様に開口部が広くしだいに狭まりながら垂直に底面に至り、「Y」字状を呈する。北東壁は攪乱を受けやや広がる。検出面から底面までの深さは1.28mを測る。

堆積土は7層に分かれ、下部には壁崩壊土と考えられる黄褐色土が堆積しており、自然的な埋没と考えられる。遺構内から年代を推定するような遺物は出土せず時期は不明である。

13号土坑 SK13 (第10・13図, 図版9・16・32)

本土坑は、調査南東部のG-7グリッドにおいて検出された遺構である。検出面は地山の黄褐色土上面であるが、耕作溝のため攪乱を受けており、検出は不明瞭であった。検出時における平面プランは、長軸1.08m、短軸78cmを測り、不整楕円形を呈する。検出面から底面までの深さは20cmを測る。断面形は鍋底を呈する。堆積土は4層に分かれ、上面には黒色土が、床面直上には明黄褐色土の堆積がみられる。

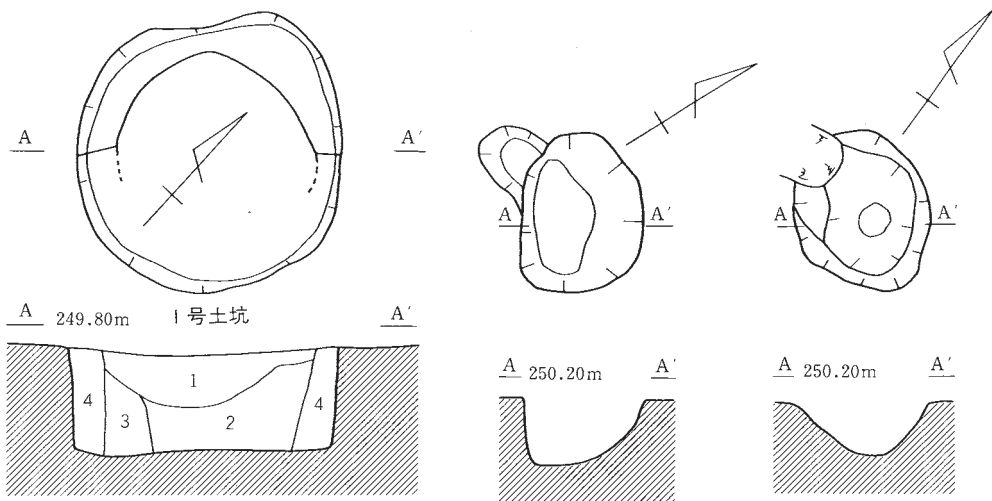
遺物は第4層明黄褐色土上面よりボロボロ状を呈するI-C類の縄文土器が横位の状態で出土している。このため、本土坑は縄文時代早期(?)の時代と考えられる。

15号土坑 SK15 (第9・13図, 図版14・15・32)

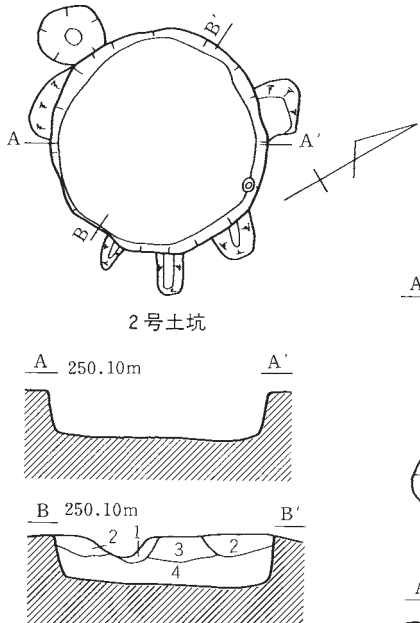
F-8・9グリッドにおいて検出された土坑である。検出面は地山の黄褐色土上面で、周辺は東西方向に走る耕作溝により攪乱されている。また、断ち割り調査に際し南東側に小ピットを検出した。図化した埴形土器(20)や高杯の脚部(21)が検出面より出土している。平面プランは、長軸2.24m、短軸1.8mを測り、不整楕円形を呈する。検出面からの深さは10cmで断面は皿状を呈する。堆積土は3層に分かれ、黒色土・暗茶褐色土・暗褐色土がレンズ状の自然堆積を示す。

遺物は検出面および堆積土より弥生式土器片が出土している。20は器形名称は不明瞭であるが、埴形を呈すると考えられる。底部付近が収縮し、体部上半に連弧文を施す。21は高杯の脚部破片である。部分的に沈線文が観察され、連弧文を施したものと考えられる。9は朱彩が施されており、他にⅢ-b~c類がみられる。本土坑は上記の出土遺物より弥生時代中期と考えられる。

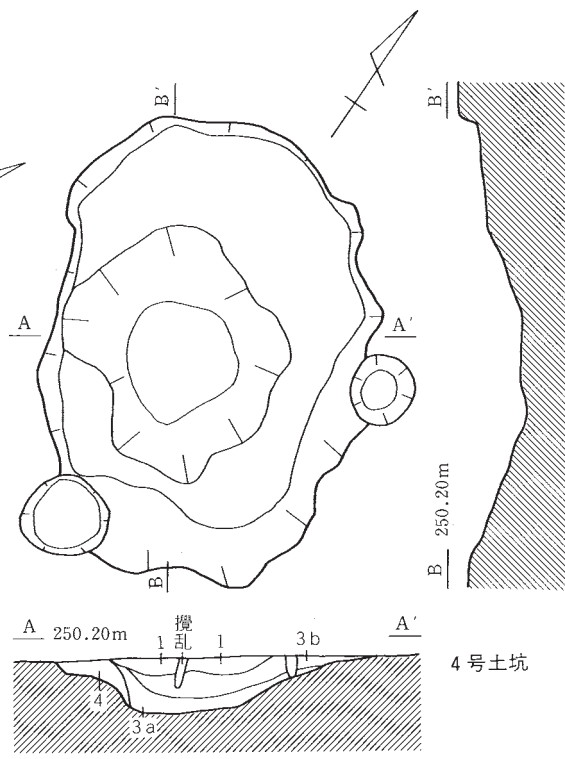
また、断ち割り調査から南東側に小ピットを検出した。平面プランは長軸1.2m、短軸1.1mを測り楕円形を呈する。検出面からの深さは25cmを測り、断面は開口部が広がる「U」字状を呈する。



- 土坑内堆積土
- 1 黒灰色土(ロームブロック・粘土ブロックを含む)
 - 2 黄灰色土(ボロボロ状ロームブロック・黒灰色土を含む)
 - 3 暗黄灰色土(多量の黒灰色土を含む)
 - 4 黄灰色粘土



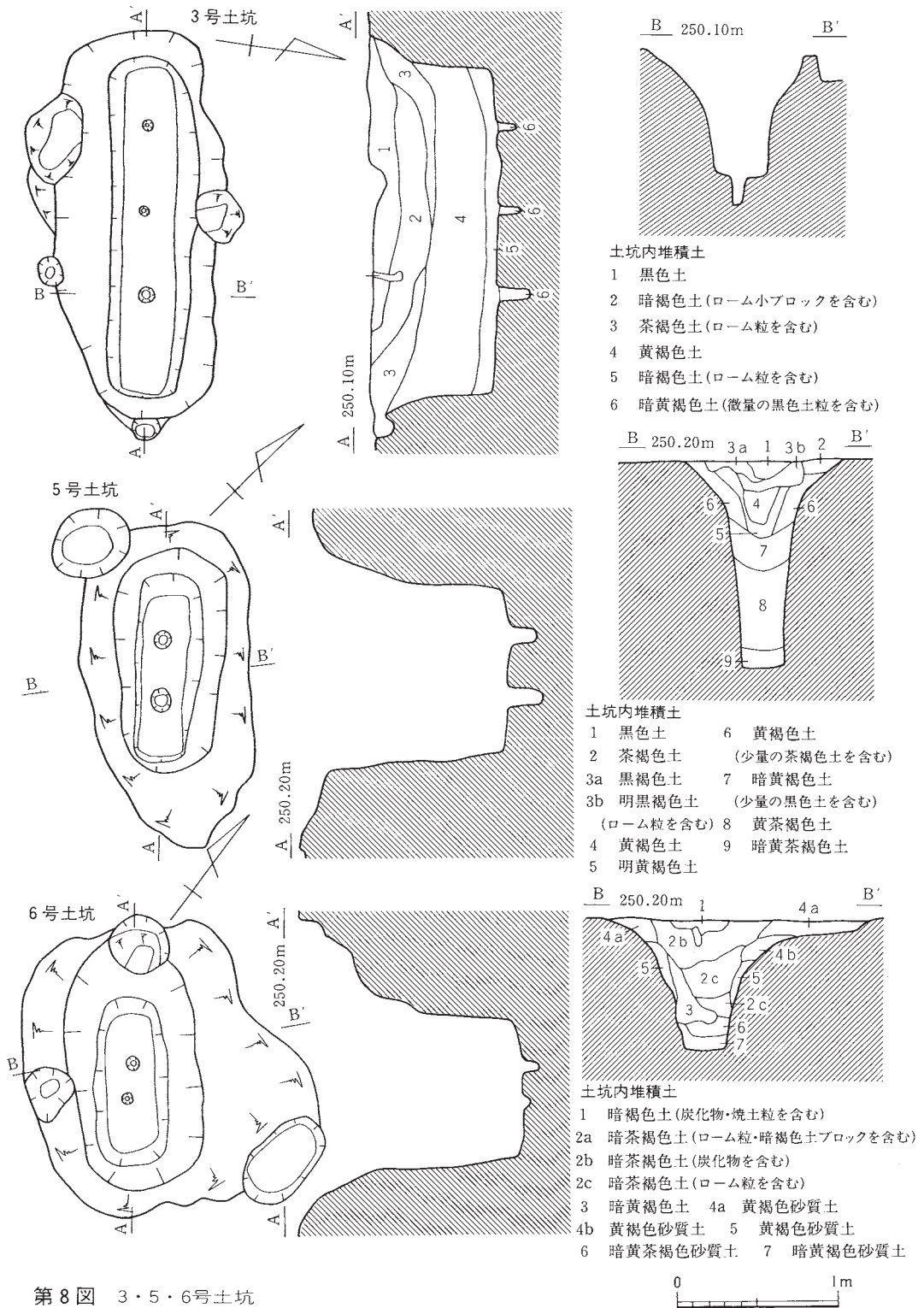
- 土坑内堆積土
- 1 黒色土
 - 2 暗褐色土(黒色土粒を含む)
 - 3 茶褐色土(ローム粒・炭化物を含む)
 - 4 明茶褐色土
(多量のロームブロック・ローム粒を含む)



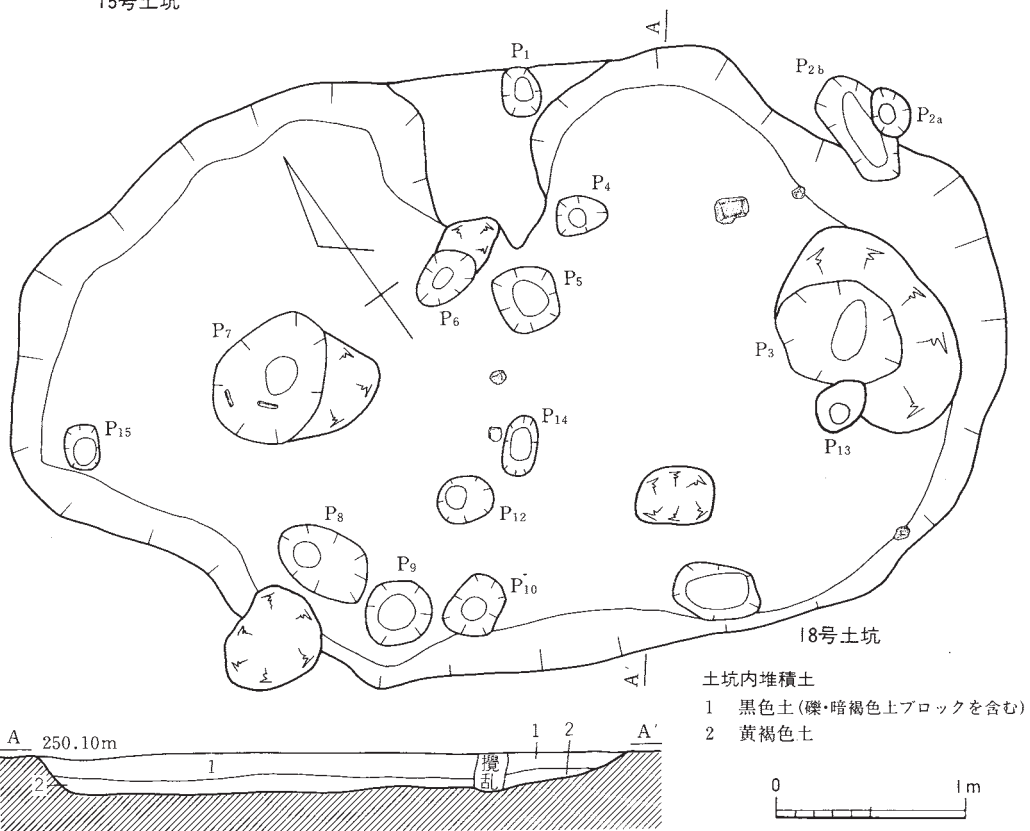
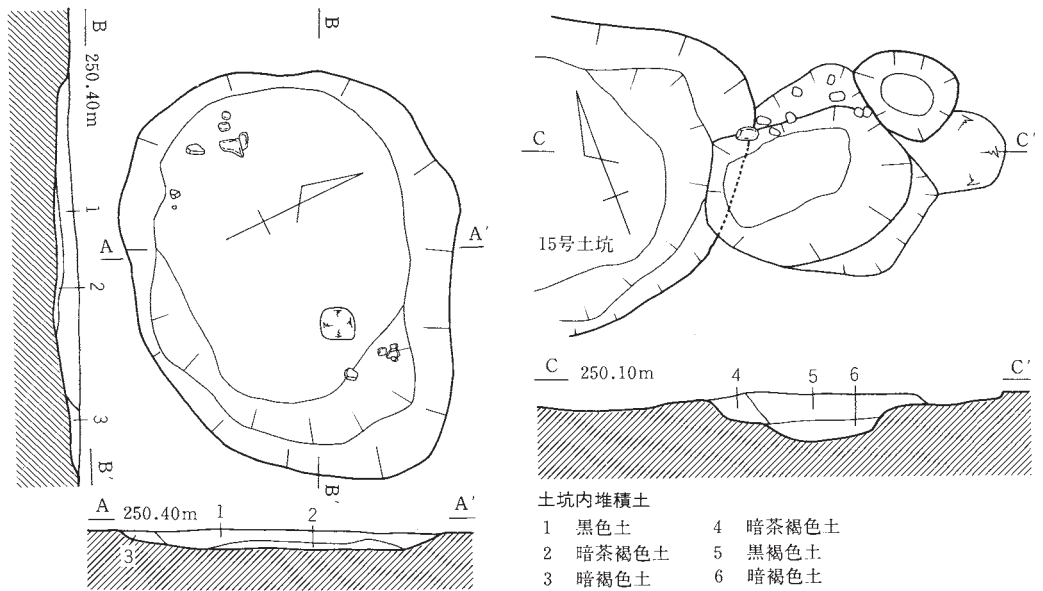
- 土坑内堆積土
- 1 暗褐色土
 - 2 茶褐色土
 - 3a 暗黄褐色土(多量の黒褐色土を含む)
 - 3b 暗黄褐色土(少量の黒褐色土を含む)
 - 4 黄褐色土



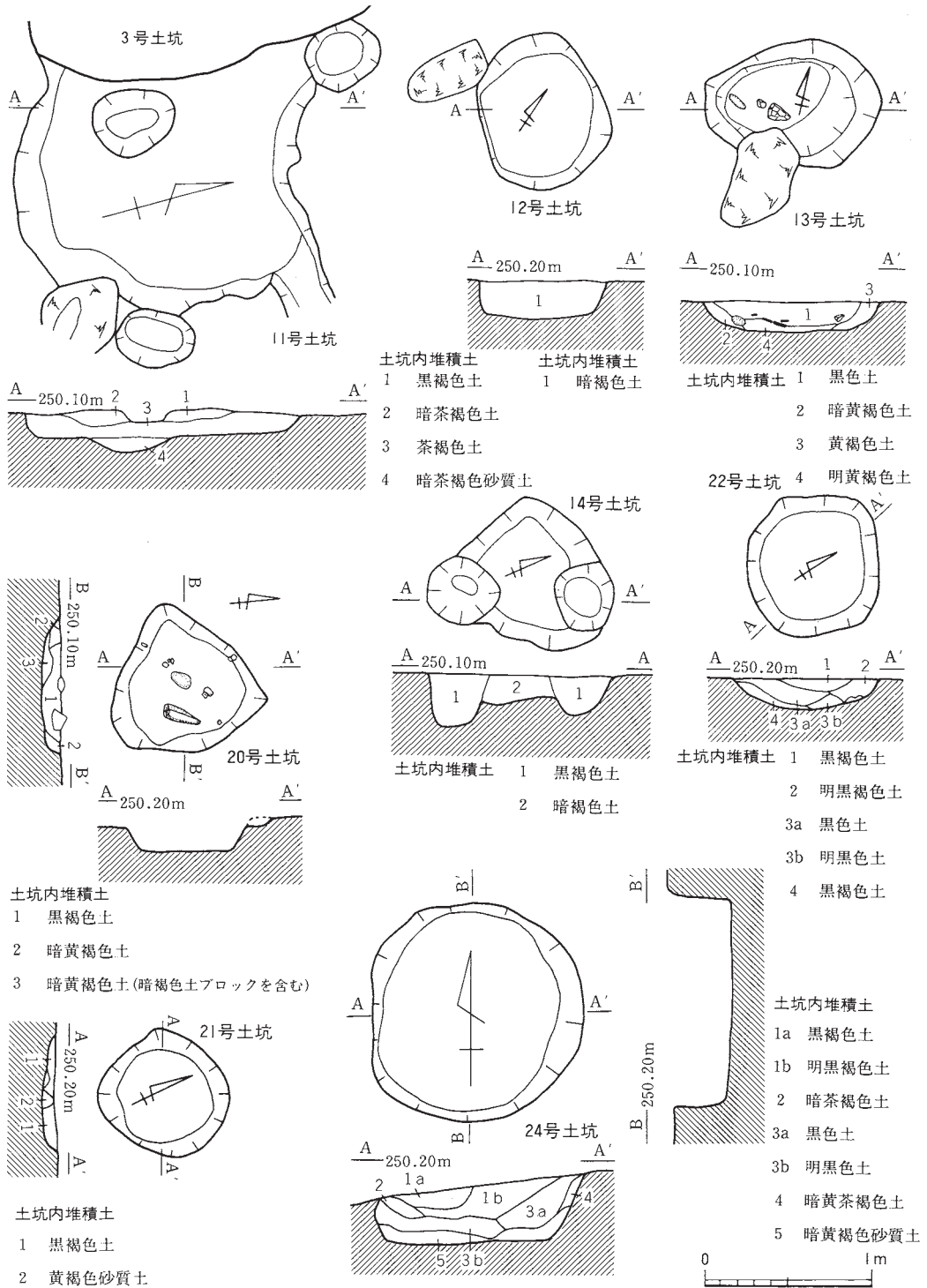
第7図 1・2・4・8・9号土坑



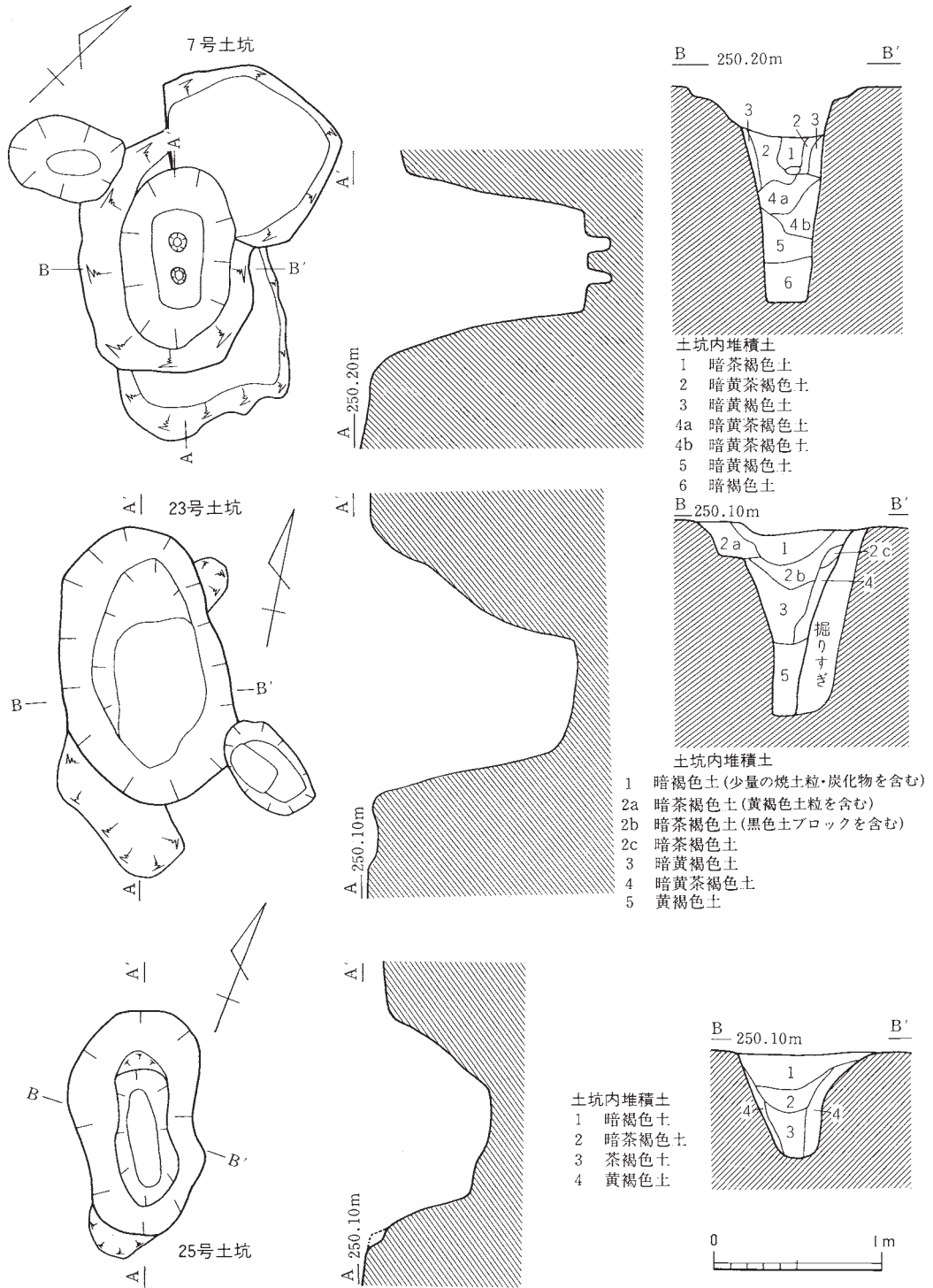
第8図 3・5・6号土坑



第9図 15・18号土坑



第10図 11・12・13・14・20・21・22・24号土坑



第11図 7・23・25号土坑

堆積土は3層に分かれ、自然堆積と考えられる。特に1層中には5cm前後の小石が十数点出土している。本土坑は15号土坑に切られていることから、時期は弥生時代以前と考えられる。

18号土坑 SK18 (第9・13図, 図版32)

D・E-7・8グリッドにおいて検出された遺構である。南東側に19・20号土坑が隣接する。検出面は、黄褐色土上面である。検出時において東西方向に走る数本の耕作溝や、黒色土の埋土を持つP₁₃~P₁₅が確認された。平面プランは長軸2.6m, 短軸1.57mを測り、不整楕円形を呈する。堆積土は検出時の黒褐色土と床面直上の黄褐色土に分けられる。検出高からの深さは30cm前後を測る。

壁面は床面より約50°の角度で立ち上がるが、北東側壁の立ち上がりは不明瞭である。底面は地山の黄褐色土で全体に軟弱である。底面には15本のピットが検出された。直径が20cm前後、底面より深さ30cm前後を測る。各ピットの埋土は、礫やローム粒を含む黒色土で、柱痕等は確認されなかった。

第2表 18号土坑内ピット一覧表 (単位 cm)

No	P ₁	P _{2a}	P _{2b}	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
規模	20×16	28×20	62×30	70×58	28×20	38×32	16×13	70×60
深さ	8	10	20	33	9	10	15	26
No	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅
規模	52×33	35×35	26×25	45×30	30×25	15×15	32×18	18×3
深さ	17	12	13	8	8	24	15	22

本土坑の堆積土第1層中より出土した遺物は縄文土器の小片でI-C類に属する。この遺物は縄文時代早期末葉と考えられており、本土坑は縄文時代早期前後に構築されたと推定される。また、土坑

の底面より12本のピットを検出したが、柱痕等は確認されず性格は不明である。検出の状況は、2号堅穴状遺構や後述する特殊遺構に類似する。

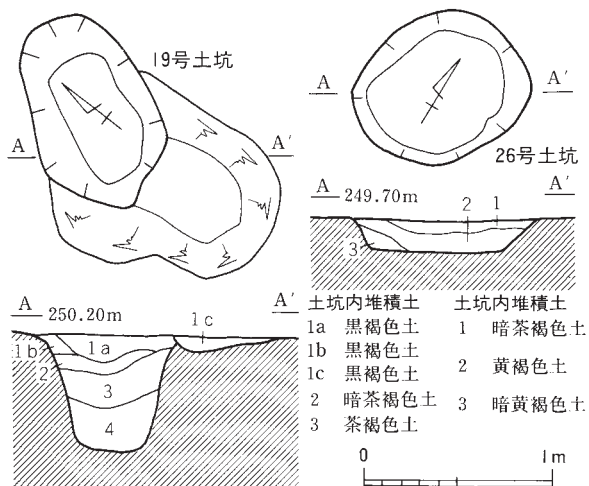
P₁₃~P₁₅は、本土坑の堆積土第1層黒褐色土を掘り込んでおり、ピット埋土は建物跡の各掘形内の埋土に類似する。周辺にも同様なピットが数本存在するが、建物跡として把握することはできなかった。建物跡の埋土に類似しており、平安時代以降につくられたと考えられる。

22号土坑 SK22 (第10図)

D-9グリッドにおいて検出された土坑である。付近には東側4mに21号土坑、西側7mに24号土坑が位置している。平面形は長軸85cm, 短軸80cmの隅丸方形を呈し、深さ20cm前後である。断面は鍋底状を呈する。堆積土は黒褐色土で、黄褐色土粒・焼土粒を含む。遺物は土師器の小破片が1層より確認されている。本土坑の所属時期・性格は不明である。

24号土坑 SK24 (第10図, 図版9)

C-9グリッド内の暗茶褐色土上面において検出された。長軸1.36m, 短軸1.35mを測り、不整



第12図 19号・26号土坑

し、規模は長軸95cm、短軸80cmを測り、検出面からの深さは22cmである。壁は緩やかに立ち上が

第3表 土坑一覧表

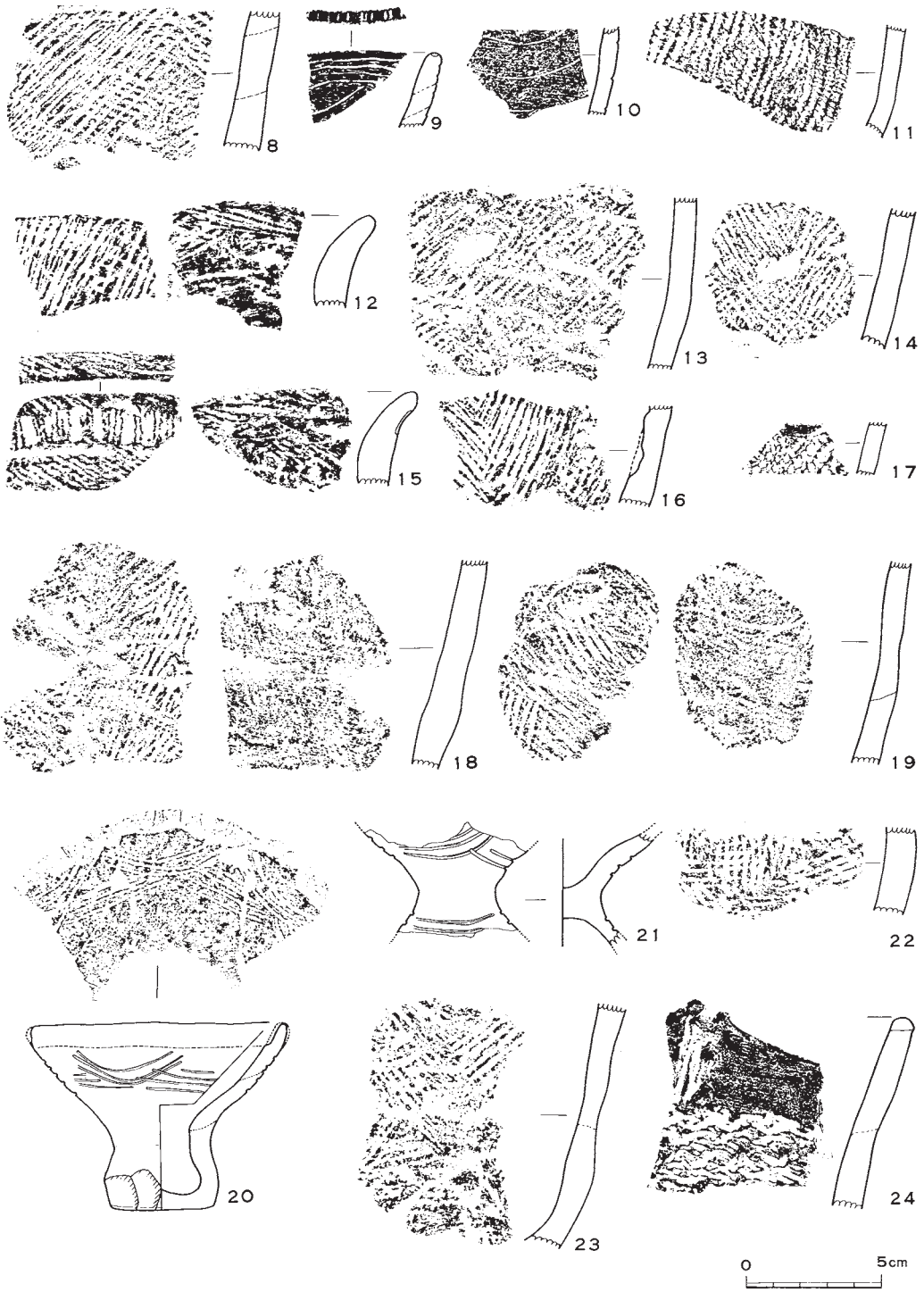
(単位 cm)

№	平面形	上幅	下幅	深さ	地区	形態	出土遺物	図番号	備考
1	円形	140×140	32×132	53	D-3	I		7	
2	円形	123×120	113×107	26	C-6	I	I-C類	7	
3	長方形	255×108	208×35	85	B-6	IV		8	底面に小ピット有り
4	不整形	255×180	67×62	31	B-7	VI		7	
5	楕円形	144×68	103×28	124	C-7	V		8	底面に小ピット有り
6	楕円形	168×83	88×31	128	C-7	V		8	底面に小ピット有り
7	楕円形	102×68	61×32	142	C-7	V		11	底面に小ピット有り
8	方形	88×66	62×33	42	D-7	III		7	
9	円形	91×75	18×16	30	E-6	II		7	
10	————								欠番
11	不整形	172×138	140×128	11	B-6	VI		10	
12	楕円形	95×77	74×65	24	G-7	V		10	
13	楕円形	108×78	67×40	18	G-7	V	I-C類	10	
14	不整形	110×90	64×30	25?	E-8	VI		10	両端にピット有り
15	不整形楕円形	224×180	172×135	13	F-9	V	V群	9・13	南東側にピットを切る
16	————								欠番
17	————								欠番
18	不整形楕円形	260×157	238×140	24	D-7	V	I-C類	9・13	ピット有り
19	楕円形	110×67	不明	64?	D-8	V		12	底面掘りすぎ
20	不整形楕円形	92×84	70×67	14	D-8	V	I-C類	10・13	
21	隅丸方形	85×71	59×58	10	E-9	III		10	
22	隅丸方形	85×80	67×64	19	D-9	III		10	
23	不整形楕円形	171×103	76×54	122	E-9	V	II-b類	11・13	側面掘りすぎ
24	不整形円形	136×135	122×110	35	C-9	I		10	
25	楕円形	140×69	61×18	65	E-9	V		11	
26	不整形円形	95×80	73×67	22	G-8	II		12	
27	不整形楕円形	306×142	210×132	40	I-8	VI		19	鍛冶関連遺構

円形を呈す。検出面から底面までの深さは35cm前後で、断面は南壁がやや膨らみを持ち「U」字状を呈する。堆積土は5層に分かれ、壁付近より順次自然埋没したと思われる。検出面からの深さは北西側が最も深く40cmを、南東側では25cmを測る。遺構堆積土中より遺物は出土せず、時期・性格等は不明である。

26号土坑 S K26 (第12図, 図版9)

G-8グリッドにおいて検出された土坑である。平面プランは不整形円形を呈



第13図 13・15・18・20・23号土坑出土土器

り、堆積土は3層に分かれる。遺物は出土せず、時期・性格は不明である。

ま と め

検出された土坑は24基を数える。調査時に付した番号に従い、主な土坑について説明を加えてきた。これらの土坑は、形態から基本的に円形・楕円形・方形・不整形に分類され、また断面・規模・性格からさらに細分される。

I類(円形土坑) 長軸が1mを超える土坑で、底面は平底や鍋底状を呈する。断面は円筒形を呈する。

II類(小型円形土坑) 長軸が1m以下の土坑で、底面は平底や鍋底状を呈する。断面は円筒形を呈する。

III類(方形土坑) 一辺が80cm前後で、コーナー部は隅丸を呈する。底面は平底で、断面は箱状を呈する。

IV類(長方形土坑) 1基のみの検出で、長軸2.55m×短軸1.08mを測り、底面に小ピットを有し、断面は「Y」字状を呈する。

V類(楕円形土坑) 長軸が1mを超える大型の土坑や、長軸が1m以下の小型の土坑がある。底面にピットを有する土坑、断面が「Y」字状や円筒状を呈する土坑がある。

VI類(不整形土坑) 上記の分類に属さず、規模や形態が不明瞭な土坑。

以上、本遺跡より検出した土坑について細分してきた。性格が推定されたのは貯蔵穴状土坑・陥し穴状土坑で、大部分は不明である。

(高橋信一)

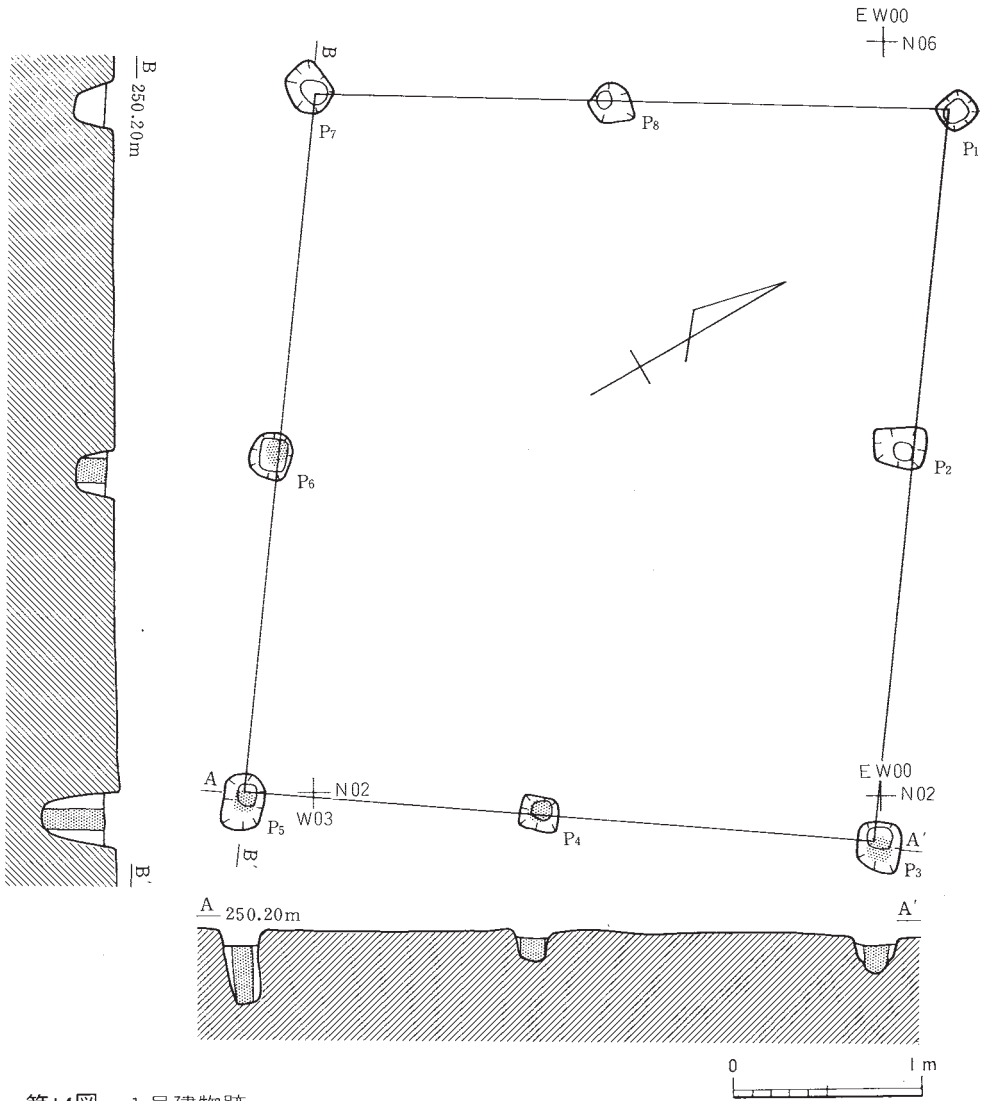
第4節 掘立柱建物跡

調査区内より検出された建物跡は3棟である。検出された建物はすべて2間×2間の規模を持つ。他にもこれらの建物跡の柱穴と形状や埋土が類似するピットがあることから、周辺にも建物が存在した可能性が強い。

検出された3棟は1号建物跡を除いて重複しているが、柱穴からの出土遺物もなく構築時期を推定することは困難である。

1号建物跡 S B 01 (第14図, 図版18)

C-6・7グリッドにおいて検出された建物跡である。検出面は地山の黄褐色土上面であるが、付近には攪乱ピットが多数有りどのピットが本遺構の柱穴であるか確認するのは困難であった。検出されたピットから規模は東西2間×南北2間で東辺3.92m、南辺3.34m、西辺3.74m、北辺



第14図 1号建物跡

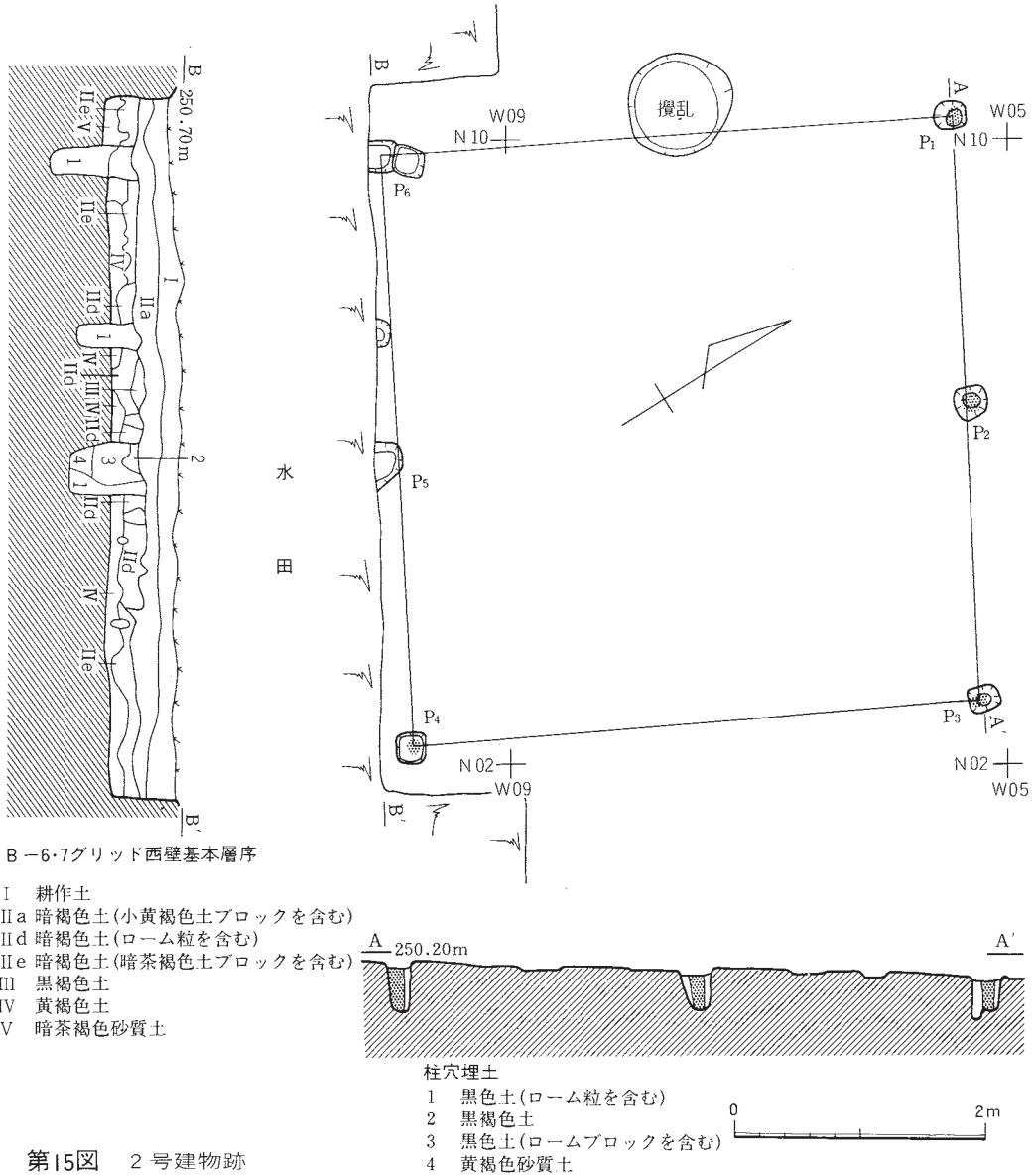
3.36mとややゆがみをみせ、南北に若干長い方形を呈する建物跡である。建物の東側柱列の柱痕を通る軸線の傾きは $N - 126^\circ - E$ である。

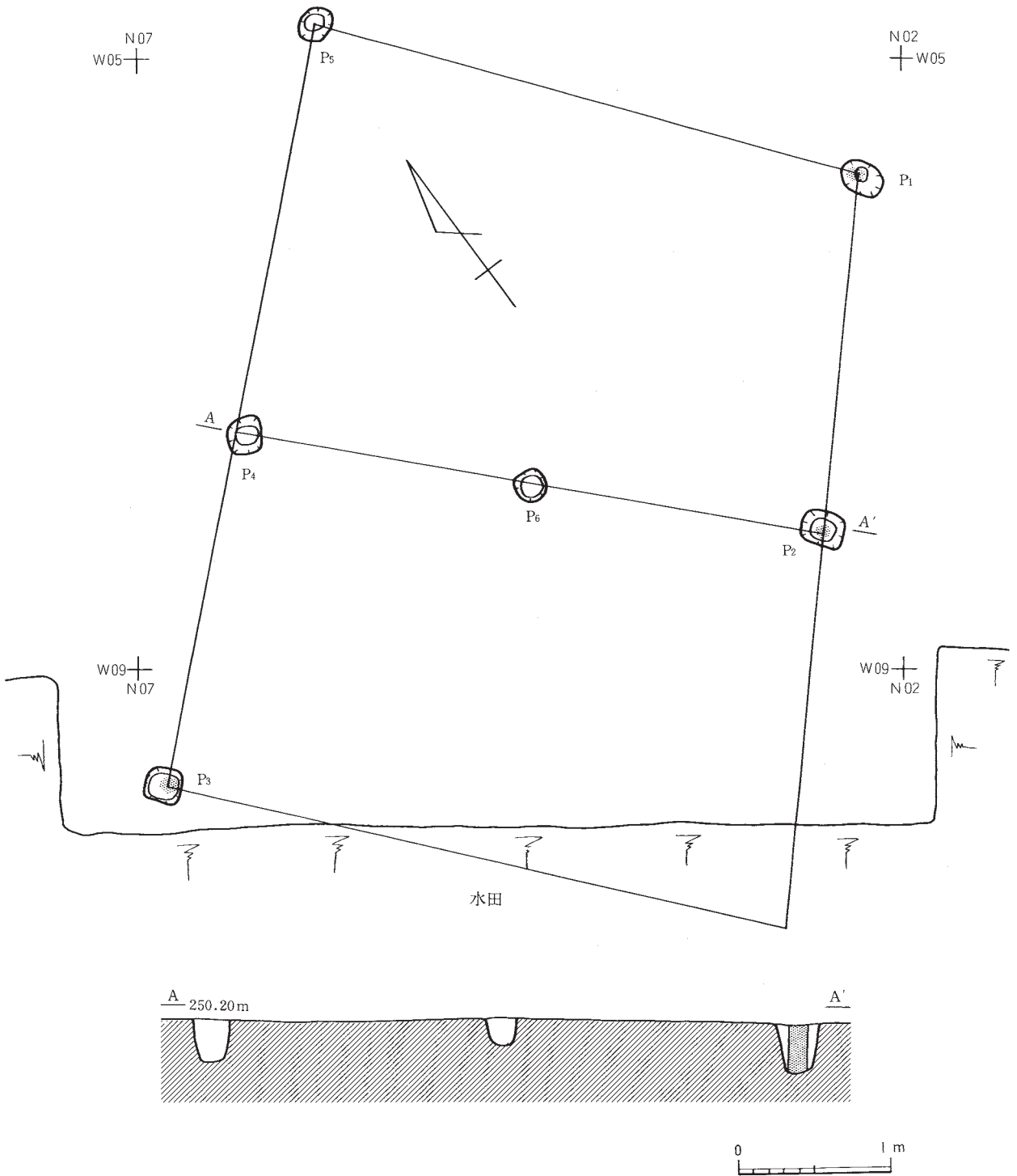
掘形は一辺20cm前後の方形に近く、検出面からの深さは20~40cmを測る。柱痕は $P_3 \sim P_6$ で検出された。径は約10cmであり、円形を呈する柱が使用されたと考えられる。各柱穴の埋土は黒色土に若干の黄褐色土小ブロックを含み、柱痕部分はしまりのない黒色土である。柱痕が検出されなかった柱穴もあるため明確な柱間寸法をとらえることはできなかった。東側柱列では北より、1.84m+2.08m、南側柱列では東より1.8m+1.54m、西側柱列では南より1.82m+1.92m、北側柱列では西より1.6m+1.76mを測り、間尺は一定ではないが検出された3棟の建物跡では

最も形の整った建物跡である。本遺構の柱穴・埋土より出土した遺物はなく構築時期については不明である。
(橋本博幸)

2号建物跡 S B02 (第15図, 図版19)

S B01の西側2mと近接し, B・C-6・7グリッドにおいて検出された。東西2間×南北2間の建物跡と推定される。本建物跡はS B03と重複しているが, 切り合い関係は不明である。検出された柱穴は6本(P₁~P₃, P₄~P₆)で, P₃とP₄の間では柱穴は確認されなかった。また, 西側





第16図 3号建物跡

柱列部分は一部調査区外となるため、北西隅(P₆)の柱列は明瞭にとらえられなかった。本建物跡の軸線方位はN-118°-Eである。

検出された柱穴は一辺25cm前後を測り、ほぼ方形を呈する。深さは検出面より30~40cmを測る。埋土はS B01同様黒色土が主体をなしている。柱痕はP₁~P₄から検出されており、径15cm前後の円形を呈していることから、丸柱が使用されていたことが考えられる。不明瞭な部分もあるため本建物跡の規模は正確でないが、東辺で4.72m、南辺で4.56m、西辺で約4.76m、北辺で約4.62mを測る。柱間寸法は2.3m(7.5尺)前後であったと思われる。出土遺物はなく、構築時期等は不明である。

なお、本建物跡の西側柱列部分における土層断面の観察により、建物跡の柱穴は本遺跡の基本層のⅡ a層上面から掘り込まれていることが確認された。(橋本博幸)

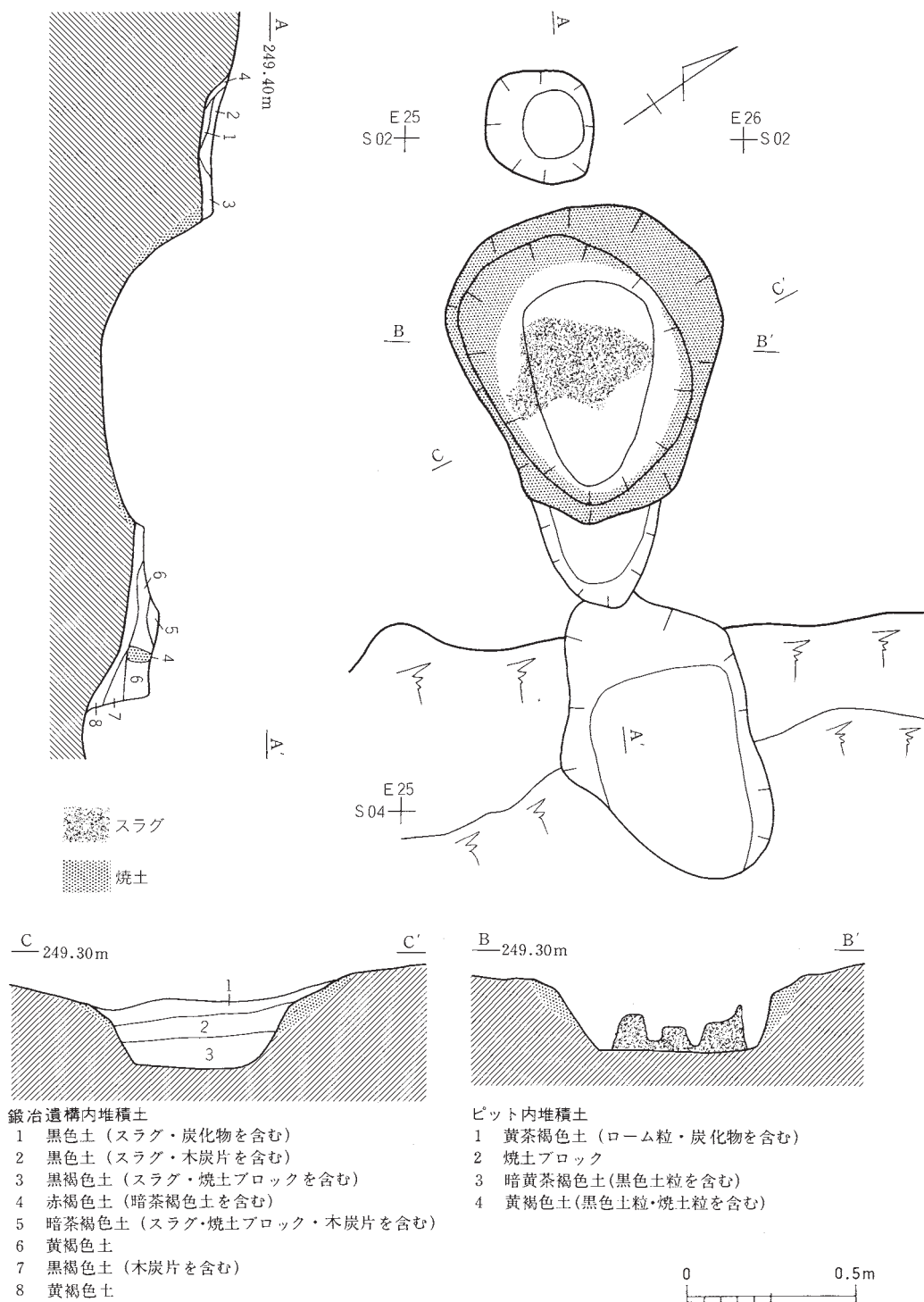
3号建物跡 S B03 (第16図, 図版20・21)

B・C-6・7グリッド内で、S B02と重複した状態で検出された建物跡である。本建物跡も西側柱列部分は未調査のため不明瞭であるが、東西2間、南北2間の建物跡であったと考えられる。整然とした方形は写しておらずかなり歪んでいるが、規模は東側柱列で3.70m、南側柱列で約4.60m、西側柱列で約4.10m、北側柱列で5.10mを測る。掘形は一辺20cm前後の不整形方形を呈しており検出面からの深さは15~30cmを測る。柱穴や柱痕を検出できなかった部分もあり、形状に歪みがあるため柱間寸法は明確でない。検出された柱痕は12cm前後の円形であり、1・2号建物跡と同様丸柱が用いられていたと考えられる。P₂とP₄間のほぼ中央から径20cm、深さ15cm、埋土が黒色土の柱穴と思われるピットが検出されており、ベタ柱の建物跡であった可能性が高い。

本跡柱穴からは出土遺物はなく、時期は不明である。(橋本博幸)

第5節 鍛冶遺構

調査区北東部において、2号溝状遺構の調査時に検出された遺構である。炉(火床)は、2基検出された。鍛冶遺構を検出した地区は、5.0×3.5m程の範囲を削平し整地している。溝状遺構内は30cm程埋没しており、その上に黄褐色土(ローム)を用いて貼り床とし平坦な面をつくる。整地された鍛冶遺構の周辺より鉄棒・焼土・木炭・2本の羽口が検出された。また1号炉の北側に検出された27号土坑は堆積土中に焼土・木炭を含み、鍛冶遺構との有機的な関連が指摘される。



第17図 鉄冶遺構

1号炉（火床）(第17図, 図版22～26)

調査区I-9グリッドより検出された炉である。整地され、緩やかに傾斜する位置に立地する。平面プランは、楕円形を呈し、上幅で長軸80cm、短軸68cmを測る。底面は、黄褐色土で部分的に熱のため赤色し硬化している。底面は、平坦で断面は鍋底状を呈する。

堆積土は、鉄滓・木炭粒・焼土を含んだ黒色土ないし黒褐色土に分けられる。壁高は緩斜面に構築されているため各壁ごとに若干異なる。B-B'では、北側で45cm、傾斜角度70°、南側で40cm傾斜角度55°をそれぞれ測る。各壁は熱のため20～40cm幅で赤変している。遺構の中央、堆積土2・3層中には多量の鉄滓が堆積していた。鉄滓の中に赤変したスサ入り粘土が付着していた。この鉄滓が集中していた上面の第1層黒色土には多くの木炭を含み、底面直上の黒褐色土には焼土を多く含む特徴がみられる。

また、本炉(火床)の10cm程上方には径約35cm程のほぼ円形を呈するピットが検出されているが、性格については不明である。

2号炉（火床）(第17図)

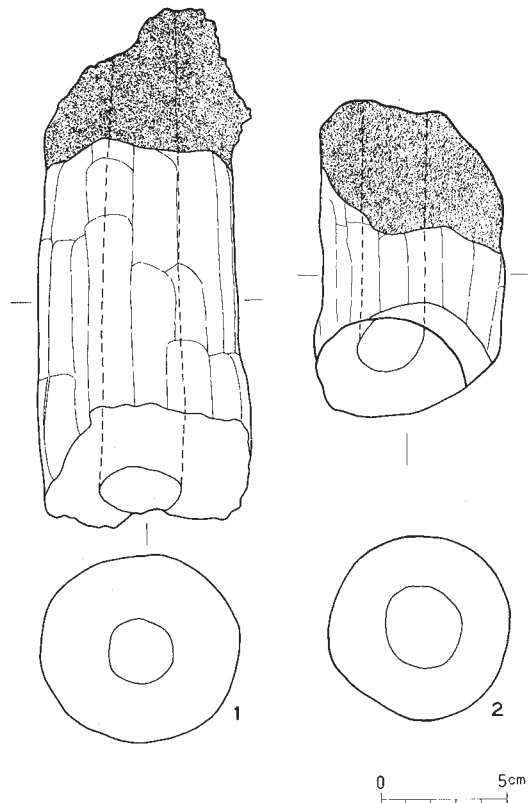
1号炉(火床)および2号溝状遺構調査時に検出した炉(火床)である。1号炉に破壊されており、2号炉上面に黄褐色土を貼り付けており、確認がくれた。平面プランは1号炉に破壊され不明瞭な部分もあるが、長軸83cm、短軸69cmを測り、楕円形を呈する。

炉体内堆積土は、黄褐色土と黒褐色土がみられ、焼土および木炭は少ない。また、赤変した部分も少なく、本炉廃絶後整地していたことがうかがえる。

遺物(第18図, 図版40)

鍛冶遺構に関連する遺物として2点の羽口が出土している。2本共にI-9グリッドより鍛冶遺構の検出面で確認された。

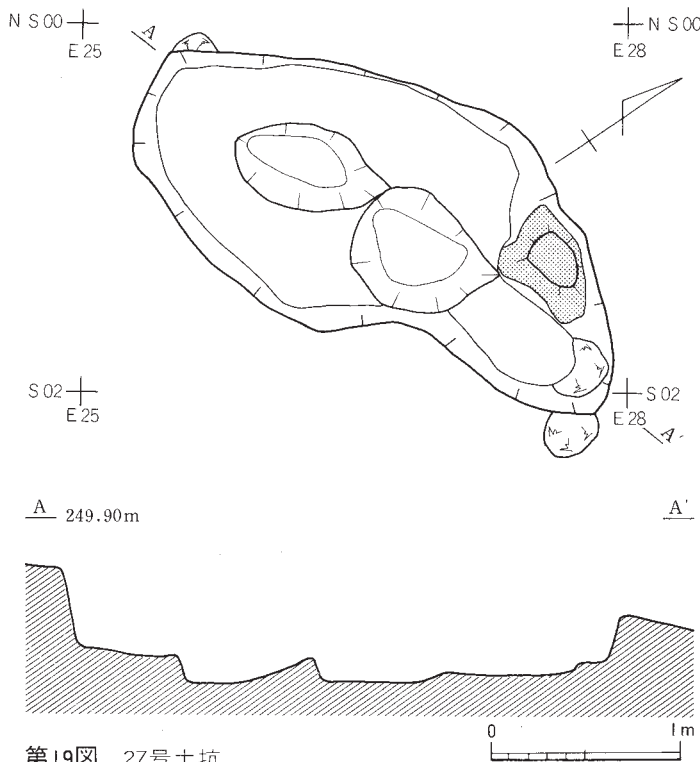
羽口-1 残存長20cm、外径8cm、孔径2.5cmを測る。先端より5.6cm程の部位に鉄の溶滓が付着しており、熱のため灰色に変色



第18図 羽口

した部分も観察される。この部分は羽口を炉壁に装着していたためと考えられる。変色した部分から約40°の角度を持って炉壁に装着したと考えられる。外面にはヘラケズリが施されている。色調はやや赤味を帯びた黄茶褐色を呈し、胎土中に石英・雲母等の砂粒を含む。

羽口-2 残存長12.5cm, 外径7.2cm, 孔径3.1cmを測る。1と同様, 先端部に鉄の溶滓が付着し, その基部近くは羽口が溶変し, タール状に変容している。また熱のため灰色に変色した部分も観察される。外面にはヘラケズリが施され, 部分的に指頭痕等もみられる。色調は, やや赤味を帯びた黄茶褐色を呈し, 胎土中に石英・雲母等の砂粒を含む。鉄滓は, 茶褐色のこぶし大のもので, 錆化が著しいものが多く製錬滓は含まない。



27号土坑 SK27

(第19図, 図版23)

調査区東端 I-8 グリッドにおいて検出された土坑である。2号溝状遺構に隣接し, 整地内より確認されており, 鍛冶遺構との関連が考えられる。平面プランは, 東西に長く, 長軸2.92m, 短軸1.4mを測り不整楕円形を呈する。最深部は60cmを測り, 中央部付近に, いくつかの凹部が存在する。

堆積土は, 上面の黒褐色土とボロボロ状を呈する黄褐色土を含む茶褐色土に分けられ

第19図 27号土坑

る。また, 東側に焼土を投げ棄てた部分がある。遺物は何も出土していない。

まとめ

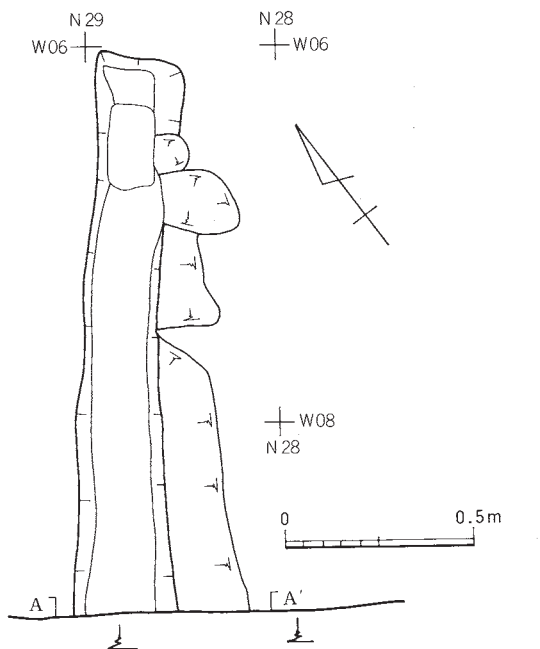
2号溝状遺構精査時に検出した鍛冶遺構である。溝跡が埋没後, 6.0×5.6mの範囲で整地し旧溝跡面に黄褐色で貼り床を施し, 緩斜面をつくり炉体を構築している。27号土坑は鍛冶遺構が操業時に開口していたと考えられ, 堆積土中より焼土やスラグが出土している。(辺見陽一)

第6節 その他の遺構・遺物

前節まで、当調査の主要な遺構である竪穴状遺構・土坑・建物跡・鍛冶遺構について述べたが、ここではその他の遺構として、溝状遺構2条、特殊遺構、焼土遺構、ピット群、および表土(L-I)～検出面(I-IV)上面より出土した遺物について報告する。

1号溝 SD01 (第20図, 図版27)

調査区北西端, B-2グリッドにおいて検出された溝状遺構である。南側は調査区外であるが, 南北方向に走る。確認された部分の全長は2.94mを測り, 南東側は攪乱を受け, やや幅が広くなる。南西壁の土層図では, 第Ⅲ層暗茶褐色土を掘り込んでつくられていることが確認された。幅45cm, 深さ22cmを測る。堆積土はローム粒を含んだ黒褐色土と下層の暗茶褐色土に分けられる。堆積土からみる限り, 水の流れた形跡はない。遺構内の出土遺物は皆無のため時期等は不明である。

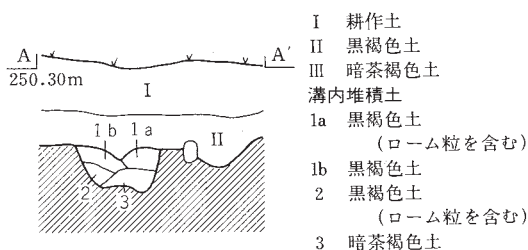


2号溝 SD02 (第21図, 図版28)

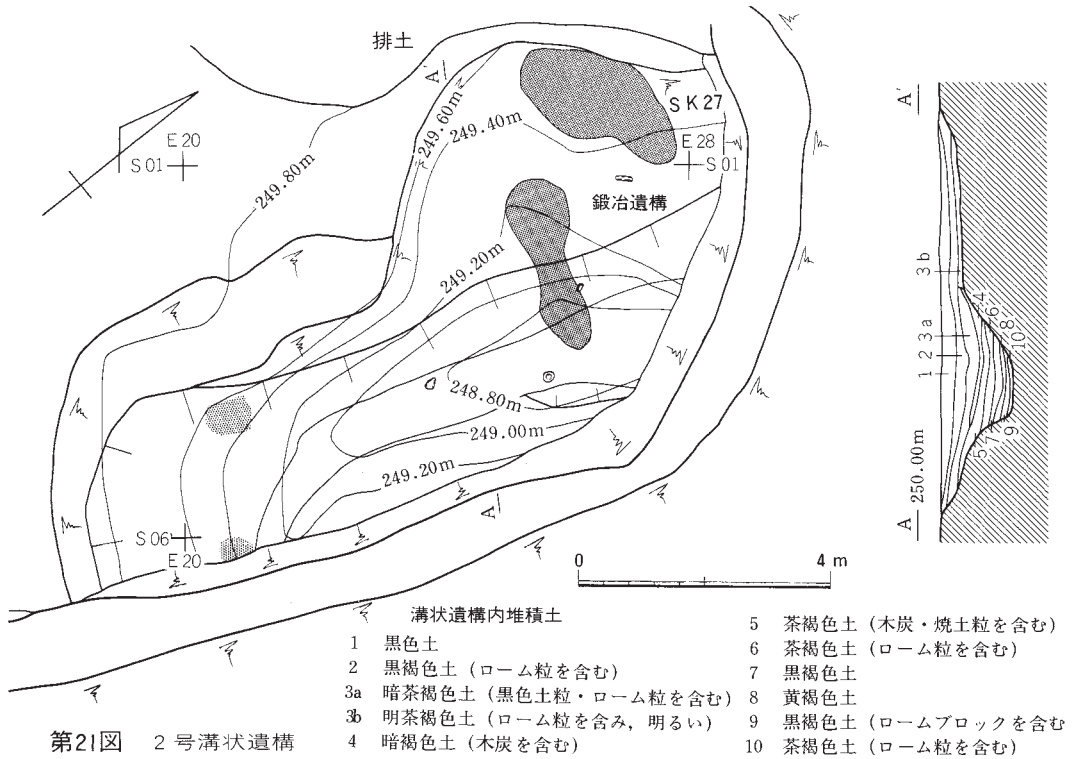
調査区東端G・H・I-8・9グリッドにおいて検出された溝状遺構である。東側は段丘崖となり, 南側は道路のため破壊されている。この溝状遺構精査時に鍛冶遺構を検出した。

上幅は約2.8mを測り, 南北方向に走りG-9グリッドで緩やかにカーブして東西方向に向きをかえる。深さは検出面より0.8~1.4mを測り, 底面は北東方向に緩やかに傾斜している。断面形はくずれた「V」字状を呈する。

堆積土は自然堆積で10層確認された。基本的には黒色土・茶褐色土・黄褐色土で, 含有物・明度により細分される。平面的分布は把握することはできなかったが, 底面より20cm程上面に黄褐色土を貼り付けやや平坦な面をつくる。この面はレベル的には1号炉との関連が考えられ, 4・



第20図 1号溝状遺構



第21図 2号溝状遺構

5・6層中に焼土・木炭・鉄滓が確認されており、鍛冶遺構操業時の底面と考えよう。北東端の底面には黒色土・礫が散布しており、10層の茶褐色土をみる限り水の流れた形跡は確認されなかった。鍛冶遺構より古い時期と推定される。

2号溝周辺出土遺物 (第22図, 図版39, 40)

2号溝およびG・H・I-8・9グリッドより出土した遺物について説明を加える。出土した遺物は土師器・須恵器・かわらけ等である。図化した土器は総て $\frac{1}{3}$ の破片より図上にて復元した。杯・高台付椀・甕・小型甕・小皿・小型土器・高杯・燈明皿の器種が認められる。

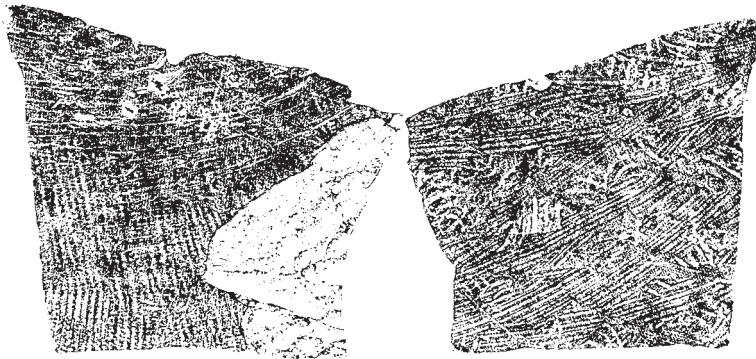
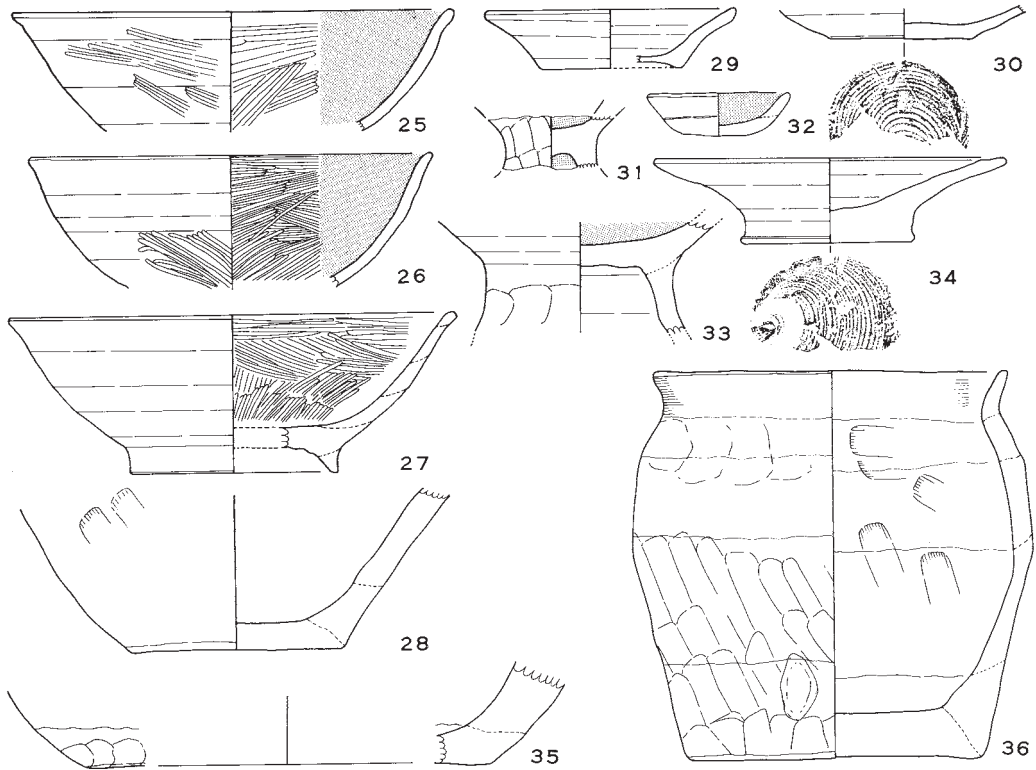
杯は2点ある。25・26は底部を欠損しており、ロクロ成形で、内面はいずれもヘラミガキを施し、黒色処理している。外面には斜方向の丁寧なヘラミガキを施している。27は高台付碗であり、土師器で、胎土は精練されており硬質である。ロクロ成形で、内面に横・放射状に丁寧なヘラミガキを施す。底部は高台を貼り付け、底面はナデを施しているため切り離しは不明である。34の小型皿は、硬質な土師器で、胎土は精練され緻密である。ロクロ成形で、底面は若干張り出す。切り離しは回転糸切り無調整である。29・30はかわらけ質の燈明皿である。共に底部は回転糸切り痕がみられ、30の内面は一部炭化物のため黒色化している。

32は小形土器の鉢破片である。1段の輪積み痕がみられ、内面は黒色処理している。外面に

ナデが施され、底部に木葉痕が観察される。

31・33は高杯と器種不明のものであるが、台部の破片である。31は外面にヘラケズリが施され、内面は黒色処理している。33の台部はロクロ調整、外面にヘラケズリを施し、内面にはヘラミガキのち黒色処理している。

36は小型甕である。胴部中位に最大径を持ち、口縁部は緩かに外反する。口縁部内外面に横ナデ、胴部外面上半にヘラナデ、中位より下半まで縦位のヘラケズリ、内面は不定方向のヘラナデ



第22図 2号溝状遺構周辺出土土器

を施す。

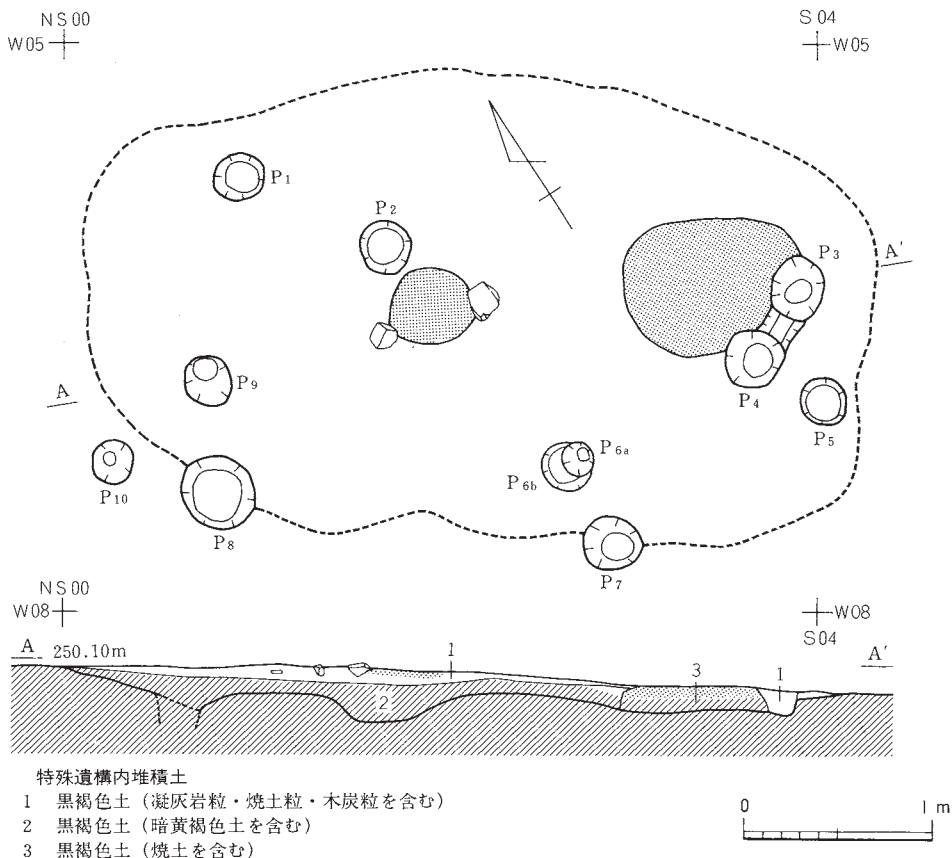
28・35は土師器の破片で、ヘラケズリやヘラナデが部分的に観察されるにすぎない。

37は須恵器・甕の体部破片である。外面にタタキのちロクロナデ、内面はタタキののち不定方向に0.8cm単位のヘラ状工具によるナデを施す。

2号溝およびG・H・I-8・9グリッドより出土した遺物について説明を加えてきた。大半は堆積土の1・2・3・4層中より出土しており、2号溝および鍛冶遺構から時期を明らかにする遺物は確認されなかった。(高橋信一)

特殊遺構 SX01 (第23図, 図版29図)

B-8グリッド内で検出された遺構である。検出面では黒褐色土が南北に長く分布していたが、プランは明確に把握することはできなかった。掘り込み精査の結果、堆積土は黒褐色土1層であり、最も深い部分でも8cmと非常に薄い。黒褐色土の分布範囲は長軸4.1m、短軸2.4mを測り不整



第23図 特殊遺構

楕円形を呈する。底面は黒褐色土に地山である暗黄褐色砂質土が混入した面であり、それほどしまっていない。中央部が若干低くなっており、ゆるやかに四周に立ち上がる。本遺構を確認した時点で、南側に焼土が検出されていたが、これは本遺構の底面が焼け赤変したものであることがわかった。その範囲は東西20cm、南北92cmを測る。また、ほぼ中央部にも直径40cmの薄い焼土面が、南と北に若干焼けた小礫を伴って検出された。本遺構部分においていくつかのピットが検出されているが、ℓ-1除去後に検出されたものはP₁、P₂、P₅～P₈である。これらは直径約20cmの円形のピットであり、深さは10cmを測る。本遺構からは出土遺物がなく時期・性格は不明である。

第4表 特殊遺構内ピット一覧表

(単位 cm)

(橋本博幸)

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P _{6a}	P _{6b}	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
規模	37×25	28×27	33×28	32×30	25×25	18×16	28×28	30×28	38×38	26×24	22×22
深さ	11	9	11	9	10	20	15	6	18	26	6

B・C-4・5グリッド内焼土遺構・ピット群 (第24図, 図版30)

B・C-4・5グリッド内において検出された焼土遺構およびピット群である。中央の焼土遺構を中心にピット群が楕円形に廻る。検出面は地山の黄褐色土上面である。

焼土遺構は、長軸83cm、短軸74cmを測り楕円形を呈する。検出面からの深さ15cmを測り、堆積土は2層に分けられる。上層は暗赤褐色土でボロボロ状を呈するロームブロックや黒褐色土ブロックを含み、下層は暗黄褐色土で焼土ブロックや黒色土粒を含む。周壁および底面は熱のため硬化し赤変している。

ピットは24本検出された。各ピットは1辺が40cm前後で、埋土は少量の黒褐色土粒を含む暗黄褐色土である。遺物はP₈の埋土中より縄文土器I-C類が1点出土している。

第5表 B・C-4・5グリッド内ピット一覧表

(単位 cm)

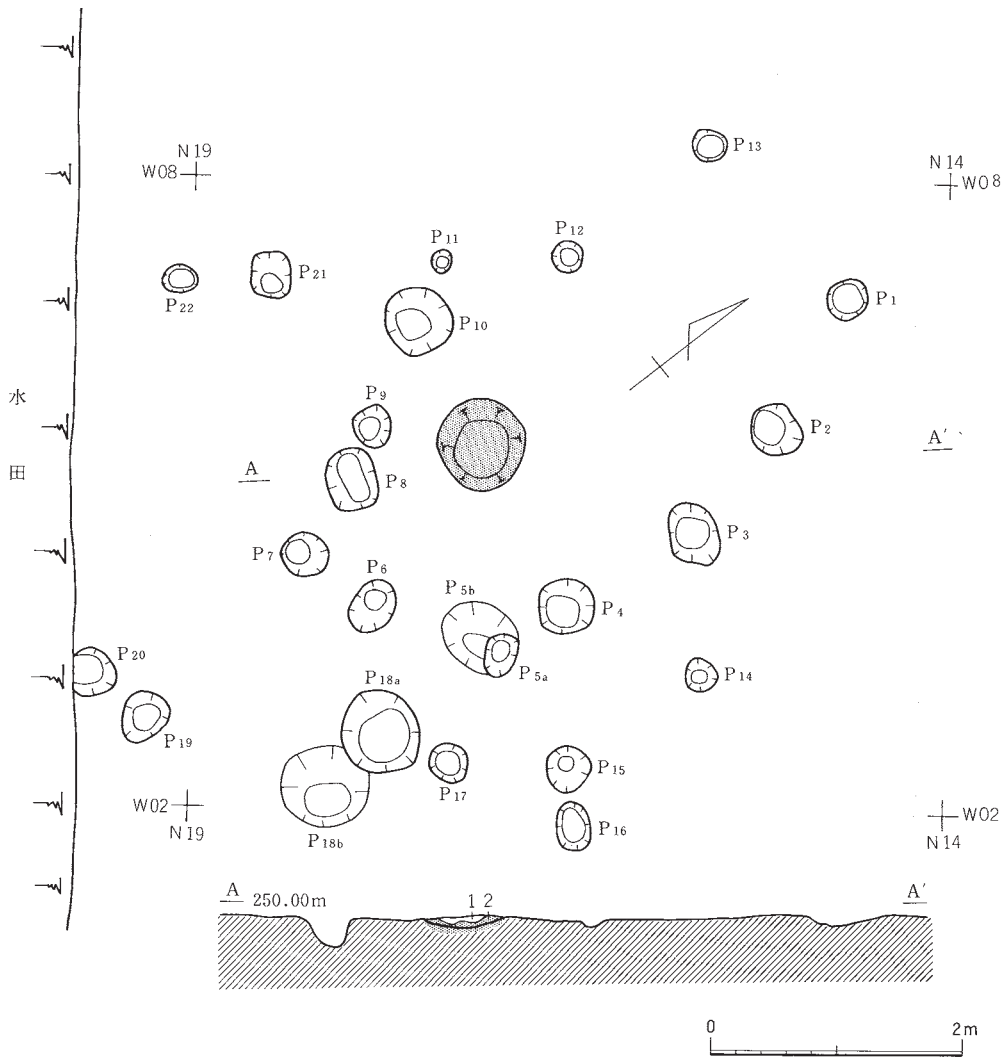
No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P _{5a}	P _{5b}	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
規模	34×30	44×40	47×38	44×44	34×24	66×51	44×33	38×34	49×40	32×30	53×51	19×16
深さ	35	25	23	48	38	30	38	30	38	14	32	17

No.	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P _{18a}	P _{18b}	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂
規模	25×24	28×25	26×25	37×35	39×26	33×30	65×61	70×64	42×36	39×33	36×31	28×23
深さ	12	12	20	13	33	23	26	15	45	20	15	15

まとめ

B・C-4・5グリッド内より検出した焼土遺構は、堆積状況・形態より地床炉と考えられる。また24本のピットは柱穴とも考えられるが、P₂～P₁₀までのピット半截調査では柱痕を把握することができなかった。しかし、地床炉の存在や、ピットの埋土が2号竪穴状遺構の柱穴と類似している。このため、焼土遺構・ピット群は住居跡であった可能性が強い。時期はP₈の埋土中より、縄文土器I-C類が出土しており、縄文時代早期末葉以降と考えられる。

(高橋信一)



第24図 B・C-4・5 グリッド内焼土遺構・ピット群

その他の遺構

調査区の北東部を除いて、数多くのピットが検出された。検出面は地山の黄褐色土上面である。各ピットの埋土は、表土類似の黒褐色土、黒色土・暗褐色土が確認される。掘形自体が小さく十分なセクションを観察したのは少ないが、柱痕は確認されなかった。組み合わせ及び平面形についても検討したが、建物跡やその他の遺構に比定されるものはなく性格は不明である。

検出面には、東西方向に走る幅20cmの溝が多数観察されるが、土層観察によれば第Ⅱ層を掘り込んでおり堆積土も表土に類似しており近年の耕作溝と考えられる。

表土出土の遺物

発掘調査区内で、表土(L-I)から遺構検出面(L-IV)まで出土した遺物を取りあつかう。調査区全体を1辺5m単位のグリッドに分割し、北西隅より東西列にアルファベット(A・B・C…),南北列をアラビア数字(1・2・3…)で表記し、層位を明記して遺物を取り上げた。

遺物は、主に縄文土器であるが、少量の弥生式土器・土師器・須恵器が混入している。遺物の中には調査区内で検出された遺構に該当する土器も出土している。多くは小破片であり、図化可能な遺物はみあたらない。次に、F-9・10グリッドにおける遺物出土状況と調査区全体の遺物分布について述べていく。

F-9・10グリッド(第25図)

F-9・10グリッドのL-III(黒褐色土)上面の遺物出土状況である。耕作等による攪乱を受けておらず、プライマリーに遺物が包含されている。

土器は第II群が総てで、II-b・c類が出土している。分類の項でも述べるが、この土器はそれほどの時間差はないものと考ええる。

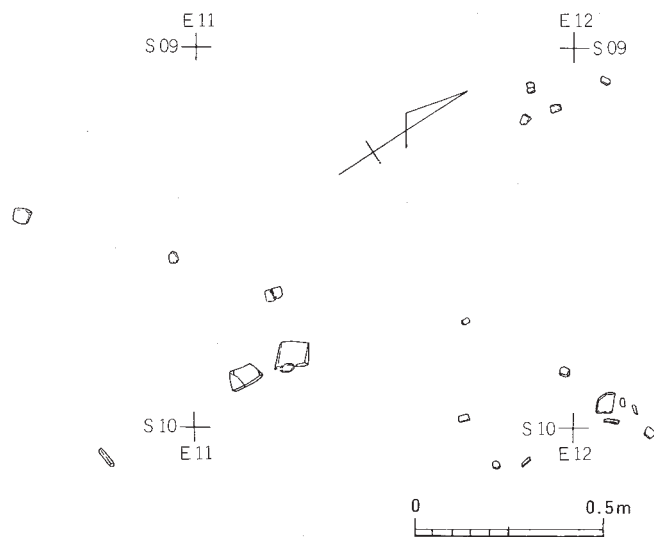
遺物の分布状況

遺物の出土状況を概観する

と、2号竪穴状遺構、18号土坑、B・C-4・5グリッドを中心に縄文時代早期末葉の土器群が、15号土坑を中心に弥生式土器が、G・H・I-8・9グリッド内の2号溝状遺構を中心に土師器・須恵器が出土している。また、整理の段階では、層位ごとの遺物の時間的に区分することはできなかった。これは、地表面より検出面までの深さが平均して20cm前後と浅く、耕作による攪乱のためと考えられる。

次に、粗掘りおよび遺構検出作業時に採集した遺物について略述する。分類および各土器群の問題については考察の項でまとめた。

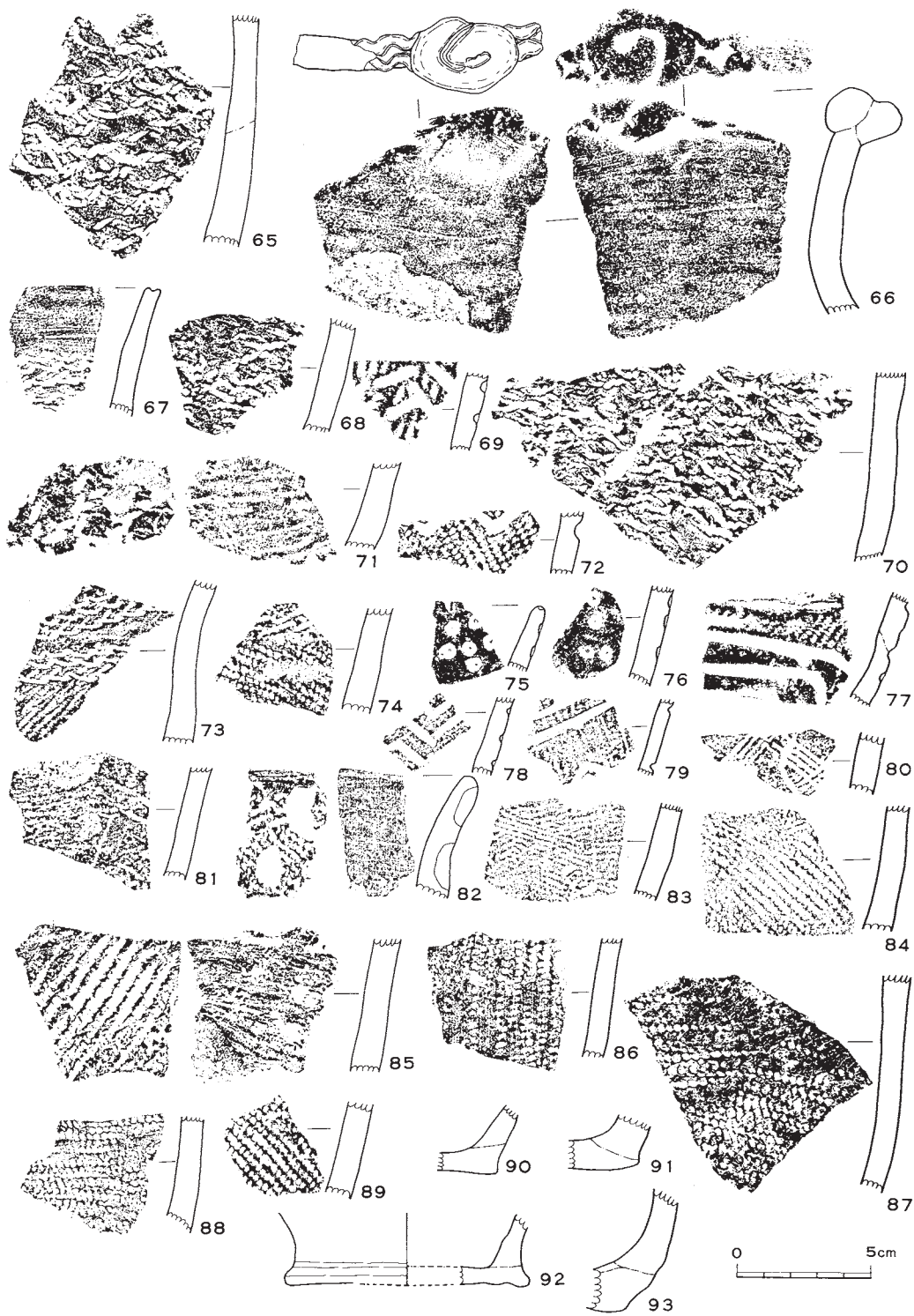
縄文時代早期前半に位置づけられる沈線文系土器(38~40)や微隆起線文系土器(41~44)が7点程出土している。早期末葉に位置づけられる土器群(47~62)である。胎土中に繊維を含み、捺糸文・無文・条痕・擦痕が器面に観察される。条が縦走する捺糸文(47・51・57・58)や斜方向に相



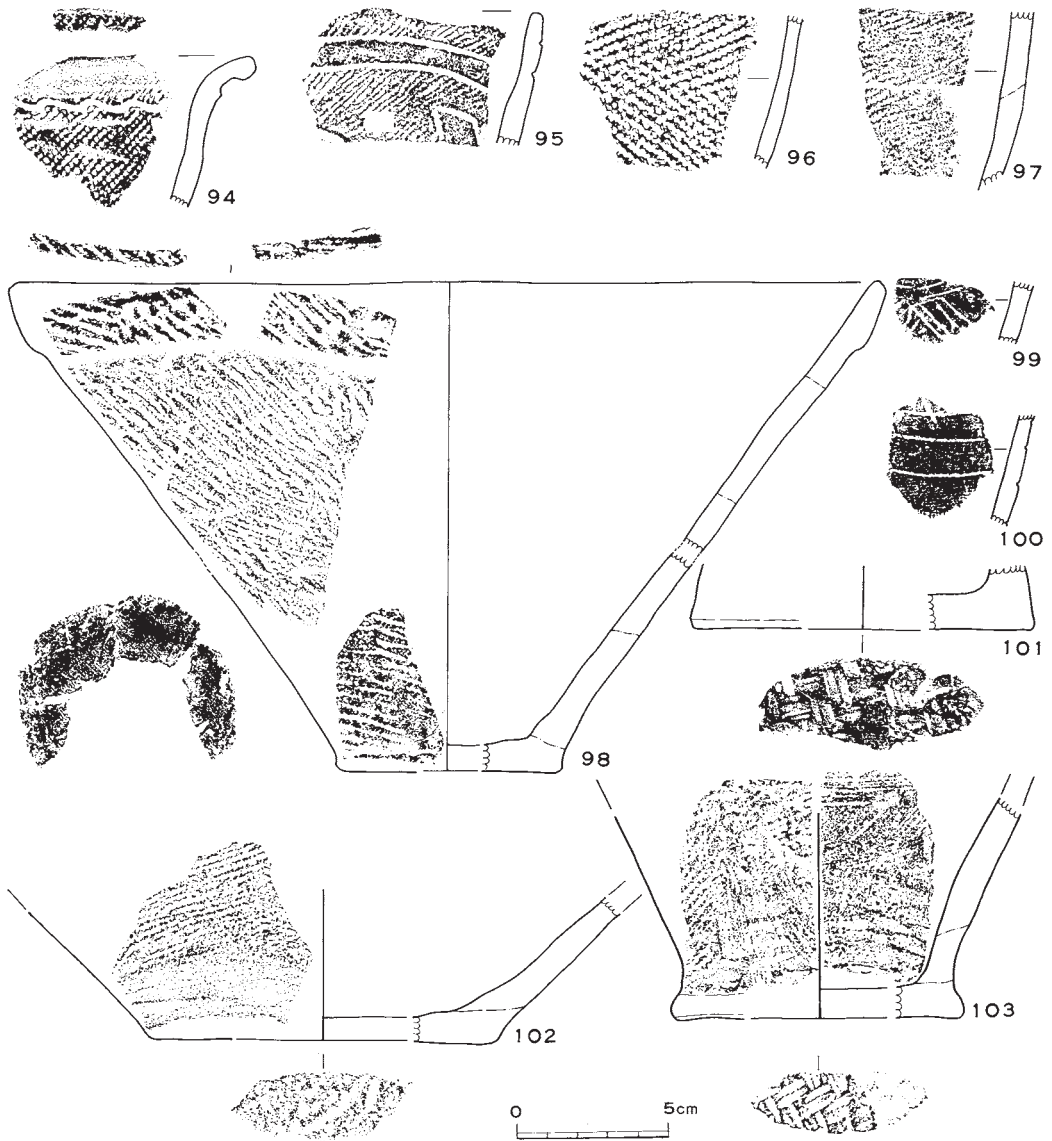
第25図 F-9・10グリッド遺物出土状況



第26図 遺構外出土土器 (1)



第27图 遺構外出土土器 (2)



第28図 遺構外出土土器 (3)

互に縦走する撚糸文(48・52・54～56・60・63・64), 無文または条痕を施すもの(50・53・61)が認められる。62は横位の撚糸文で, 71は撚糸文圧痕がそれぞれ施されている。

前期の土器は, 竹管による円形刺突を施した土器(75・76)や, 不整撚糸文を施した土器(65・67・68・70), 口縁部破片で口唇部に粘土紐により渦巻状の貼り付け(66)が認められる。

他に, 沈線によって区画された縄文や変形爪形文を施した土器(72・77～79), 縄文を施した土器(73・74)が認められ, 前期より後期までの土器が出土している。

弥生式土器は少なく、F-5グリッドを中心に7点出土している。折り返し口縁を持つものや胴部外面に縄文が施された土器(96・97・98)や沈線文によって縄文が区画された土器(95)、または沈線文だけの土器(99・100)があり、中期後葉に相等しよう。

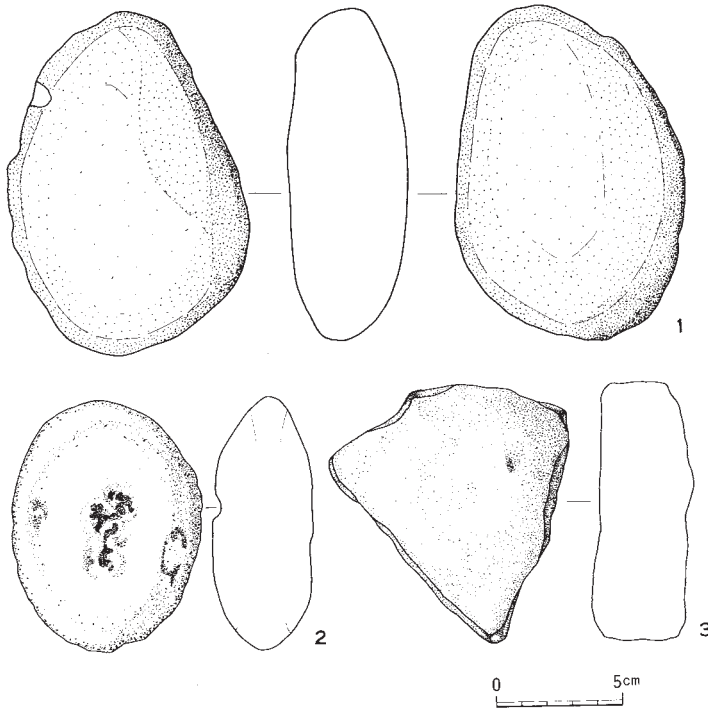
土師器はE-3・4グリッドの第Ⅲ層中より小形土器(32)が出土しており、他に小破片のものが数点検出されているが、図化するには致らなかった。

石 器 (第29・30図, 図版41, 42)

本遺跡より出土した石器は、磨石・凹石・石皿(?)・石鎌・石錐・石篋・石匙・不定形石器のほか、剥片が多数出土している。他に図化していないが、打製石斧の破片が1点出土している。計測値および石質は第9表に記した。

磨石(1), 凹石(2), 石皿(3)は、各1点ずつ出土している。石質は磨石・凹石は安山岩質で、石皿は凝灰岩質の破片である。

石鎌(4~7, 9~12)は8点出土している。無茎で三角を呈するもの(5・6)や、無茎で基部に挟りの入るもの(4・7・12)、先端部を欠損した二等辺三角形を呈するもの(9・10・11)がある。石質は流紋岩(4・8)・頁岩(6)・チャート(7・9)・石英粗面岩(5・10~12)である。流紋岩の石鎌は、剝離等が磨滅しており一部観察することが困難であった。

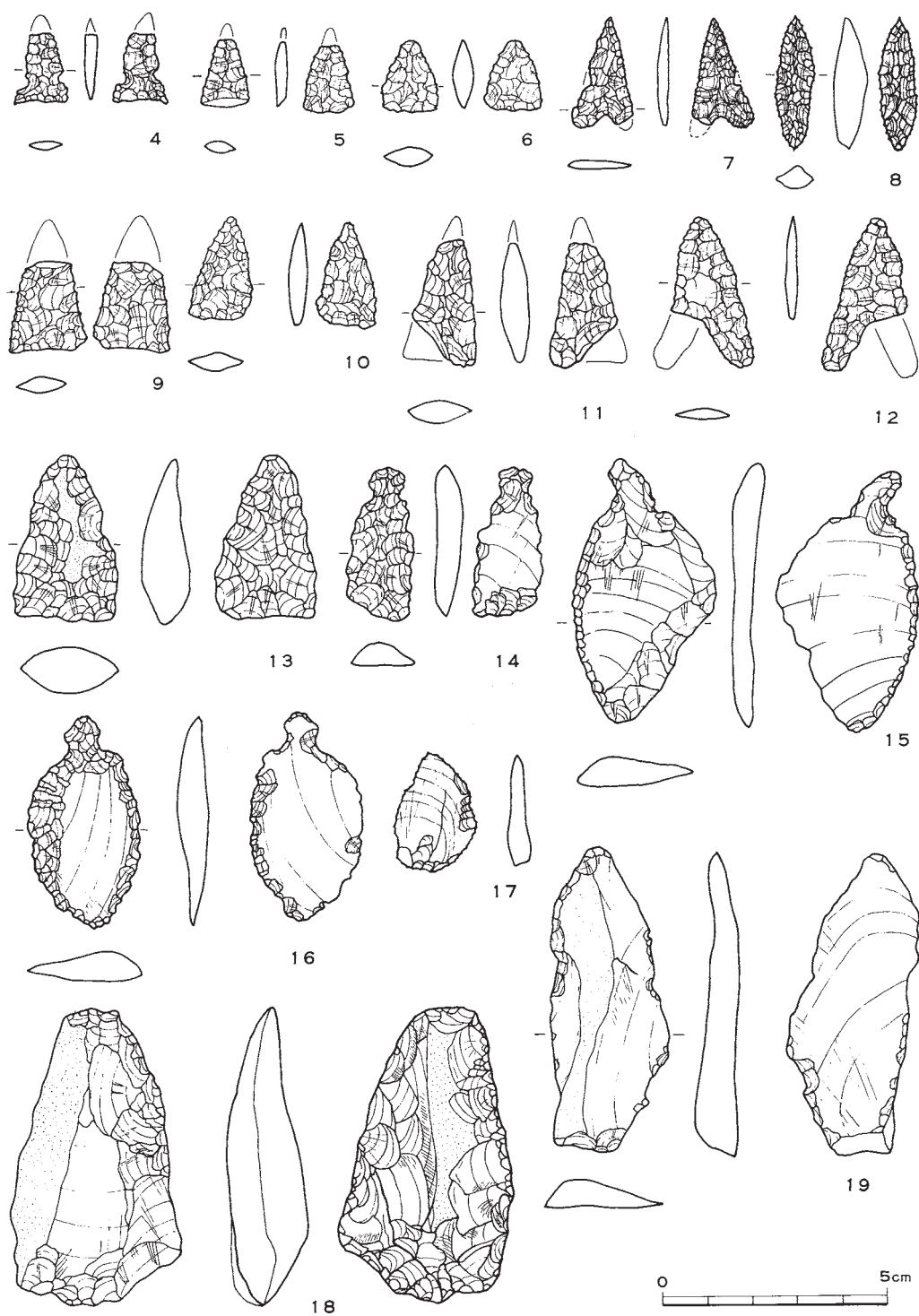


第29図 石器 (1)

石匙は、3点出土している。縦型石器(14~16)で、縦長剝離を利用し、つまみ部と刃部を区画している。刃部の加工は両面より行われている。3点共に頁岩である。

石篋(13)と石錐(8)は各1点ある。両面が剝離加工されている。石質は、チャートである。

他に不定形石器(7~19)があり、剥片に調整剝離を加えている。ナイフまたは削器として利用されたものであろう。(高橋信一)



第30図 石器 (2)

第6表 土器観察表(1)

図番号	出土地区	層位	文様	調整		器厚	色調	胎土	焼成	分類	備考
				外面	内面						
1	SI01	ℓ-1	縄文R-L		捺痕(?)	9	暗黄褐色	纖維	良	Ⅲ	
2	SI01	ℓ-1	縄文R-L	ナデ	ナデ	10	灰褐色	粗砂	良	Ⅲ	
3	SI02	床面	燃系文			14	暗黄褐色	纖維	良	I-C ₁	
4	SI02	床面	燃系文			12	黒灰色	纖維	良	I-C ₁	
5	SI02	ℓ-1	縄文R-L		ナデ	8	暗黄褐色	粗砂	良	Ⅲ	
6	SI02	床面		条痕(?)	条痕	10	灰褐色	纖維	良	I-C ₇	
7	SI02	床面	燃系文		燃系文(?)	12	暗黄褐色	纖維	良	I-C ₉	
8	SK13	ℓ-1	燃系文			12	茶褐色	纖維	良	I-C ₁	
9	SK15		1本描沈線	ナデ	ナデ	8	赤褐色	纖維	良	V-a	朱彩
10	SK15	ℓ-1	1本描沈線	ナデ		7	暗黄褐色	細砂	良	V-a	
11	SK15	床面	縄文・直前段多条		ナデ	6	黒灰色	細砂	良	V-b	
12	SK18	ℓ-1	燃系文		条痕	11	黒灰色	纖維	良	I-C ₂	
13	SK18	ℓ-1	燃系文			9	茶褐色	纖維	不良	I-C ₁	
14	SK18	ℓ-1	燃系文			9	茶褐色	纖維	不良	I-C ₁	
15	SK18	ℓ-1			条痕	11	暗茶褐色	纖維	良	I-C ₇	
16	SK18	ℓ-1	燃系文			11	茶褐色	纖維	不良	I-C ₁	
17	SK18	ℓ-1	縄文L-R		ナデ	7	暗茶褐色	細砂	良	Ⅲ	
18	SK18	ℓ-1	燃系文			11	茶褐色	纖維	不良	I-C ₁	
19	SK18	ℓ-1	燃系文			10	茶褐色	纖維	不良	I-C ₁	
20	SK15	検出面	1本描沈線	ナデ	ナデ	7	暗茶褐色	細砂	良	V-a	坩
21	SK15	検出面	1本描沈線	ナデ	ナデ	8	暗茶褐色	細砂	良	V-a	高坏
22	SK20	ℓ-1	燃系文			11	茶褐色	纖維	良	I-C ₁	
23	SK20	ℓ-1	燃系文			10	茶褐色	纖維	不良	I-C ₁	
24	SK23	ℓ-2a	不整燃系文	ナデ	捺痕(?)	10	灰茶褐色	細砂	良	Ⅱ-b	
25	SD02	ℓ-3		ミガキ	ミガキ	5	茶褐色	微砂	良	VI	ロクロ・内黒
26	SD02	ℓ-2		ミガキ	ミガキ	5	茶褐色	微砂	良	VI	ロクロ・内黒
27	SD02	ℓ-7			ミガキ	7	灰茶褐色	微砂	良	VI	ロクロ
28	SD02	ℓ-8		ナデ		11	灰白色	粗砂	良	VI	
29	SD02	ℓ-3		ロクロナデ	ロクロナデ	6	茶褐色	微砂	良	VI	
30	SD02	ℓ-3		ロクロナデ	ロクロナデ	7	灰茶褐色	微砂	良	VI	
31	SD02	ℓ-2		ヘラケズリ		14	灰茶褐色	微砂	良	VI	内黒
32	E-3・4	L-Ⅲ		ナデ		3	灰茶褐色	微砂	良	VI	
33	SD02	No.2		ロクロナデ	ミガキ	10	灰茶褐色	微砂	良	VI	内黒
34	SD02	ℓ-4		ロクロナデ	ロクロナデ	12	灰茶褐色	微砂	良	VI	
35	SD02	ℓ-3		ヘラケズリ	ナデ	20	灰茶褐色	粗砂	良	VI	
36	SD02	ℓ-4		ヘラケズリ	ヘラナデ	12	茶褐色	細砂	良	VI	
37	SD02	No.1		タタキ・ナデ	タタキ・ナデ	14	青灰色	微砂	良	VI	
38	C-8・9	検出面	沈線文		ナデ	11	灰茶褐色	粗砂	良	I-a	
39	F-9	検出面	沈線文		ナデ	7	暗灰褐色	粗砂	良	I-a	
40	F-9	検出面	沈線文		ナデ	11	暗灰褐色	粗砂	良	I-a	
41	E-6	L-Ⅱ	微隆起線文		条痕	4	赤茶褐色	細砂	良	I-b	
42	E-9	検出面	微隆起線文		条痕	6	暗灰褐色	細砂	良	I-b	
43	E-6	L-Ⅱ	微隆起線文		条痕	6	赤茶褐色	細砂	良	I-b	
44	C-5	L-Ⅱ	微隆起線文		条痕	6	暗灰褐色	細砂	良	I-b	
45	G-9	L-Ⅲ	燃系文			11	黒灰色	纖維	良	I-C ₁	
46	E-4	L-Ⅱ		条痕(?)	条痕	14	黒灰色	纖維	良	I-C ₇	
47	B・C-4	L-Ⅲ	燃系文		条痕(?)	11	暗黄褐色	纖維	良	I-C ₂	
48	D・E-5・6	L-Ⅲ	燃系文			9	暗黄褐色	纖維	良	I-C ₁	
49	E・H-6・7	耕作溝	燃系文		条痕	11	黒灰色	纖維	良	I-C ₂	
50		表採			条痕	14	暗褐色	纖維	良	I-C ₇	
51	D-4	L-Ⅲ	燃系文		燃系文(?)	14	暗黄褐色	纖維	良	I-C ₂	
52	B-5	L-Ⅲ	燃系文			10	暗黄褐色	纖維	良	I-C ₁	
53		表採		条痕(?)	条痕(?)	12	黒灰色	纖維	良	I-C ₇	
54	D・E-5・6	耕作溝	燃系文			13	黒灰色	纖維	良	I-C ₁	
55	C-6	L-Ⅲ	燃系文			10	暗黄褐色	纖維	良	I-C ₁	
56	D・E-6	検出面	燃系文			12	暗黄褐色	纖維	良	I-C ₁	
57	D-3	L-I	燃系文		条痕(?)	9	暗黄褐色	纖維	良	I-C ₂	
58	ベルト内	L-Ⅱ	燃系文			12	暗黄褐色	纖維	良	I-C ₁	中央土層ベルト
59		表採	燃系文			9	暗黄褐色	纖維	良	I-C ₁	

第7表 土器観察表(2)

図番号	出土地区	層位	文様	調整		器厚	色調	胎土	焼成	分類	備考
				外面	内面						
60	D-4	L-III	捺糸文			12	暗黄褐色	纖維	良	I-C ₁	
61		表採		条痕	条痕						
62	B-3・4	L-III	捺糸文			13	暗黄褐色	纖維	良	I-C ₅	内面・内黒
63	D・E-6	L-II	捺糸文			9	暗黄褐色	纖維	良	I-C ₁	
64	D-3	L-I	捺糸文		擦痕(?)	10	灰褐色	纖維	良	I-C ₄	
65	E-9	検出面	不整捺糸文		ナデ	11	灰褐色	纖維	良	II-b	
66	F-9	L-III	粘土紐・渦巻文		ナデ	10	茶褐色	細砂	良	II-c	
67	C-2	L-I	不整捺糸文	ナデ	ナデ	7	茶褐色	細砂	良	II-b	
68	E-9	検出面	不整捺糸文		ナデ	9	灰褐色	纖維	良	II-b	
69	E・H-6・7	耕作溝	沈線・縄文(?)		ナデ	8	暗黄褐色	細砂	良	III-a	
70	E-9	検出面	不整捺糸文		ナデ(?)	10	灰褐色	纖維	良	II-b	
71	B-7	検出面	捺糸文圧痕		条痕	10	暗黄褐色	纖維	不良	I-d	
72	B-4	L-III	縄文L-R, 沈線		ナデ	8	黒褐色	粗砂	良	III-d	
73	B-6	L-I			擦痕(?)	10	暗茶褐色	細砂	良	I-c	
74	E-3・4	L-I			ナデ	10	暗褐色	細砂	良	I-c	
75	E・H-6・7	耕作溝	円形刺突	ナデ		7	赤茶褐色	粗砂	良	II-a	
76	E・F-5	L-I	円形刺突	ナデ		8	赤茶褐色	粗砂	良	II-a	
77	C-5	L-I	縄文R-L, 沈線		ミガキ	7	茶褐色	細砂	良	III	
78	B-7	耕作溝	縄文(?) , 沈線			7	茶褐色	纖維	良	III	
79	E-7	L-I	縄文(?) , 沈線			5	茶褐色	纖維	良	III	
80	D・E-8	検出面			ナデ(?)	9	暗黄褐色	纖維	良	III	
81	C-2	L-I				8	暗茶褐色	粗砂	良	III	
82		表採	変形爪形文, 縄文		ミガキ	12	茶褐色	粗砂	良	III	
83	D-7	L-I			擦痕	9	茶褐色	細砂	良	III	
84	B-4	L-III	縄文R-L		ナデ	10	暗黄褐色	細砂	良	III	
85		表採	縄文L-R		擦痕(?)	10	暗黄褐色	纖維	良	III	
86	C-3	L-III	縄文L-R		ナデ	8	暗黄褐色	粗砂	良	III	
87	C-5	L-I	縄文R-L	ナデ	ナデ	9	暗黄褐色	粗砂	良	III	
88	C-3	L-III	縄文R-L		擦痕	10	暗褐色	細砂	良	III	
89	C-7	L-I	縄文L-R		ナデ	10	暗茶褐色	細砂	良	III	
90	SK20	ℓ-1				13	茶褐色	細砂	良	IV	
91	C-2	L-I				13	暗茶褐色	細砂	良	IV	
92	D・E-8	検出面		ナデ		7	暗黄褐色	纖維	良	IV	
93	SK20	検出面				12	暗黄褐色	纖維	不良	IV	I-C類
94	D・C-7・8	検出面	縄文L-R		ナデ	7	暗黄褐色	微砂	良	V-b	
95	H-8	L-I	縄文L-R, 沈線	ナデ	ナデ	6	暗黄褐色	細砂	良	V-b	
96	E・F-8・9	表採	縄文・直前段多条		ナデ	6	暗黄褐色	細砂	良	V-b	
97	D-3	L-I	縄文		ナデ	6	暗茶褐色	細砂	良	V-b	
98	G-9	L-III	縄文・直前段多条		ナデ	10	灰茶褐色	細砂	良	V-b	
99	ベルト内		I本描沈線			6	暗灰褐色	細砂	良	V-a	中央土層ベルト
100	D-2	L-II	I本描沈線			6	暗黄褐色	細砂	良	V-a	
101	D-5	L-II				12	茶褐色	細砂	良	IV	V-b類・網代痕
102	B-7・8	検出面	縄文L-R		ナデ	10	暗黄褐色	粗砂	良	IV	V-b類・網代痕?
103	C-7	L-II	縄文L-R	ケズリ(?)	擦痕	9	茶褐色		良	IV	V-b類・網代痕

- 注) 1. 胎土の項目は胎土中に含まれる砂粒を示し、粗砂・細砂・微砂を用いた。
 2. 分類の項目は第3章考察第1節遺物で示した分類を示す。
 3. 器厚の計測値はmmが単位である。

第8表 土器計測一覧表

No	図番号	器種	法 量
1	20	埴	口径9.6 cm, 器高7 cm, 底径3.7 cm
2	21	高坏	脚径2.8 cm, 残存高4.1 cm
3	25	杯	口径17.5 cm, 残存高4.8 cm
4	26	杯	口径15.9 cm, 残存高5.3 cm
5	27	高台付椀	口径17.7 cm, 器高6.2 cm, 底径8.2 cm
6	28	甕(?)	残存高6.2 cm, 底径8.3 cm
7	29	杯	口径9.8 cm, 器高2.3 cm, 底径5.6 cm
8	30	杯	残存高1.2 cm, 底径5.6 cm

No	図番号	器種	法 量
9	31	高坏	脚径3 cm, 残存高1.6 cm
10	32	小型土器	口径5.7 cm, 器高1.8 cm, 底径5 cm
11	33	台付鉢(?)	脚径6.2 cm, 残存高3.6 cm
12	34	小型皿	口径13.8 cm, 器高3.4 cm, 底径6.8 cm
12	35	甕(?)	残存高2.1 cm
13	36	小形甕	口径14 cm, 器高15.4 cm, 底径11.5 cm
14	98	鉢	口径28.9 cm, 推定器高16.1 cm, 底径7.2 cm

第9表 石器一覧表

図番号	出土地区	層位	種類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
1		表採	磨石	136	94	46	460	安山岩	
2		表採	凹石	98	74	40	428	安山岩	
3		表採	石皿(?)	100	94	34	250	凝灰岩	石皿の破片(?)
4		表採	石鏃	(19)	(13)	4	(0.5)	風化流紋岩	アメリカ式石鏃
5	S101	ℓ-I	石鏃	(15)	(11)	3	0.6	石英粗面岩	
6	G・H-8	検出面	石鏃	(16)	12	6	1.2	頁岩	
7	C-5	L-II	石鏃	25	(14)	3	(0.6)	チャート	先端部一部欠損
8	E-6	L-III	石鏃	30	8	7	1.4	流紋岩	
9	B-7	検出面	石鏃	23	13	5	1.2	チャート	
10	S102	ℓ-I	石鏃	22	13	5	1.1	石英粗面岩	
11	B-3	L-III	石鏃	(33)	(17)	6	(1.7)	石英粗面岩	基部一部欠損
12	S102	ℓ-I	石鏃	35	(14)	3	1.5	石英粗面岩	
13	D・E-8	L-I	石鏃	36	23	10	7.4	頁岩	
14	E-4	L-II	石匙	33	17	5	2.4	頁岩	
15		表採	石匙	47	26	6	7	頁岩	
16	G-9	L-I	石匙	60	31	5	6.8	頁岩	
17		表採	不定形石器	27	18	4	2.3	チャート	
18	H-8	L-II	不定形石器	87	20	9	11.5	チャート	
19	F-7	L-I	不定形石器	67	26	7	2.1	チャート	

(1) 出土地区は遺構名, 出土グリッドを示す。

(2) 長さ, 幅, 厚さは最大値である。

(3) ()は現存部分の数値である。

第3章 考 察

唐松A遺跡の調査は、試掘調査で範囲の確定した北西部を調査したが、部分的な調査であり、遺跡全体に関して考察することは困難である。本遺跡より縄文時代早期から弥生時代・平安時代・中世までの遺構・遺物を検出した。遺物・遺構・鍛冶遺構・唐松館との関連について若干の検討を行ってみたい。

第1節 遺物について

縄文土器は第I群より第IV群まで分類される。第V群は弥生式土器、第VI群は土師器等である。

第I群 早期の土器群を一括し、施文・調整等によりa～d類に細分した。

〔a類〕 沈線文系土器の破片である。口縁部および体部の破片で、表面に太い沈線(幅2～3mm)が横位・斜方向に、38・40には刺突文が施される。胎土中に長石粒・石英粒等を含み、焼成は良好である。色調は灰色から黒味を帯びる。口唇部や内外面とも丁寧なナデが施されている。田戸下層式期に位置づけられる土器群である。

〔b類〕 微隆起文系土器である。口縁部および体部の破片で、表面に微隆起線を施し丁寧なナデ、内面に条痕を施す。胎土は洗練した微細を含む。色調は暗灰褐色を呈する。野鳥式または榎木I式に比定される土器群である。

〔c類〕 本類は早期末葉に比定される大畑G式併行の土器群である。形態は底部の破片が少ないが尖底状を呈すると考えられる。口縁部は短かく外反する。胎土中に繊維を含む。繊維が胎土中に混入した場合、断面において繊維がサンドイッチ状を呈する場合は認められる。焼成は胎土中に繊維が混入しているため脆弱であり、8のように取り上げ、水洗いに際しポロポロになり細片化する土器もみうけられる。地文は、捺糸文・条痕・擦痕があり、それがいくつか組み合っている。また、無文の土器もみうけられる。

第10表 第I群C類分類表

分類	外 面	内 面	個数
C ₁	捺糸文	無 文	21
C ₂	捺糸文	条 痕	4
C ₃	捺糸文	捺糸文+条痕	2
C ₄	捺糸文	擦 痕(?)	1
C ₅	条 痕	条 痕	1
C ₆	不 明	無 文	1
C ₇	不 明	条 痕	4

第10表に施文の組み合わせをまとめてみた。図化した土器の表面には条が縦走・横位する捺糸文を施文しており、内面に施文される土器は少ない。

本類を特徴づける地文は捺糸文である。条が縦走する捺糸文(47・51・57・58)や斜方向に相互に縦走する捺糸文(48・52・54～56・60・63・64)が認められる。

〔d類〕 胎土に繊維を含み、外面に撚糸文の圧痕、内面に条痕を施す(71)。色調は暗黄褐色を呈し、繊維を含み、内部と外部で色調が変化しサンドイッチを呈する。源平C遺跡に類例があり早期最終末から前期初頭と考えられる土器である。

福島県内において早期最終末の土器を出土する遺跡は、いわき市大畑貝塚(馬目他1978)、いわき市西の作遺跡(いわき市1976)、石川町上森屋段遺跡(菅原他1977)、飯館村赤石沢遺跡(竹島他1973)葛尾村広谷地B遺跡(馬目・山田1979)、石川町源平C遺跡(日高・芳賀1980)等が報告され、近年阿武隈中部地開発事業に伴う試掘調査でしだいに本群に属する資料の提示が行われてきた。

C類に類似する土器は、飯館村赤石沢遺跡・都路村山口E遺跡(高木・福島1981)、葛尾村広谷地B遺跡、県外では白石市明神裏遺跡(白石市1976)に求められ、早期末葉、大畑G式期と同時期と推定される。

また、広谷地B遺跡の資料は「縄文や撚糸文を多用する特徴があり、口縁部文様帯において沈線文の欠落に様式的退化を求め、大畑G式土器より後出し縄文時代前期初頭の位置づけ」(馬目)されている。本遺跡においても口縁部文様帯において沈線文は全ての破片において欠落している。しかしながら、現段階ではその類例に乏しく、本類はとりあえず早期末葉から前期初頭の土器群としてとらえておきたい。

第Ⅱ群 前期に属する土器群である。施文および調整等から時間的変遷で以下に細分する。

〔a類〕 竹管による円形刺突を施した土器である。75・76の2点が認められる。大木3式期また諸磯a式期に属する土器であろう。

〔b類〕 不整撚糸文が施される土器群である。24は口縁部が波状を呈し、口唇部に竹管による刻みが施され、体部に不整撚糸文が施されている。65・68・70は接合しないが同一破片に考えられる。胎土中に微量の繊維を含む。67は口唇部に一条の沈線を廻らし、不整撚糸文を施す。胎土に繊維は含まない。

本類は、一見して大木2b式期に近い地文を施文に持つ。しかし、口唇部の刻みや波状を呈する口縁部、不整撚糸文、体部内面のヘラミガキ調整の欠除等があり、大木2b式期より後出的な要素を持つ。類似する資料としては都路村遠上前B遺跡(山内・鈴鹿1981)、繊維を含まない67は、宮城県七ヶ浜町大木田貝塚(八巻他1979)にその類例が求められ、大木4式期と考えられる。

〔c類〕 口唇部に粘土紐を渦巻状に貼り付けた土器(67)で大木4式期に相等しよう。

第Ⅲ群 縄文の施文される土器群である。沈線により区画された縄文を持つ72・77や、縄文に変形爪形文を施した82等がある。72は後期中葉に、82は石川町上森屋段遺跡(菅原他1977)に類例があり前期後半に位置づけられよう。

縄文のみ施された土器類は84～89である。縄文は単節のものが多く、条は斜行するもの、横走するもの、縦走するものがある。内面に条痕状または擦痕状の調整痕を持ち、焼成は良好である。

時期は前期後半，大木5式期前後であろう。

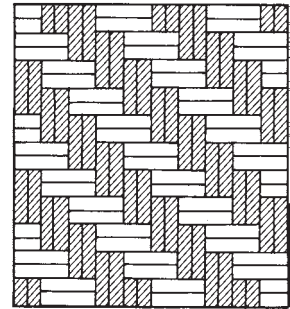
第IV群 底部資料を一括した。

出土遺物の中で底部資料は数少ない。図化した底部は総て縄文時代と弥生時代の時期である。93はI-C類の底部と考えられ，胎土中に繊維を含み，形は砲弾状と考えられる。92は微量の繊維を含み底部はやや上げ底気味を呈し，体部から底部にかけてやや外方に張り出す特徴を持つ。前期頃の資料と考えられる。102は外面に縄文L-Rが施され，内面は剥離のため調整は不明である。

101と103には，底面に網代痕が観察される。101は小破片のため地文，調整等は不明である。103は，外面に縄文L-R，内面に擦痕を施す。体部より底部にかけて外方にやや張り出す。

網代編みについて(第31図)

網代痕は，粘土に表面を圧痕して観察した。経緯共に2本組になって編まれている。経は4本超え，4本潜り，2本送り，緯は4本潜り，4本超え，2本送りである。103では経緯の間隔は4mm前後で編み方は規則的である。101と103は網代編は類似するが同一破片ではない。



第31図 網代編み模式図

第V群 弥生式土器で，15号土坑，G・F-9グリッド周辺より出土している。いずれも小破片で，器形を判別できるものは少なく，図化した土器は高杯・埴・鉢で，他の破片は識別が困難である。

〔a類〕 1本の鋭い工具によって沈線文が施された土器群である。9は口縁部破片で口唇部に刻みを持ち，内外面に朱彩が施されている。10・100は壺形土器の体部破片であろう。20は埴形土器の破片である。口唇部は剥離しており，体部上半に沈線上の施文が施されている。21は高林の脚部破片である。外面に沈線状の施文が施されている。

〔b類〕 縄文を施した土器である。98は鉢形土器の破片である。折り返し口縁を持ち，外面全体に縄文の直前段多条R_Lが施され，断面には粘土紐痕がそれぞれ観察される。

他に，沈線によって区画された縄文L_Rを施された土器(95)や縄文L_Rを施された土器(97)がある。

本類のような，一本描沈線や直前段多条の縄文を持つ土器は，石川町源平C遺跡(日高・芳賀1980)や本宮町陣場遺跡(馬目1971)が知られており中期後葉に位置づけられる。

第VI群 土師器・須恵器を一括した。

今回の調査では，土師器・須恵器の量は少なく，実測・図化した遺物は13点である。土器の種類は，高杯・小型土器・杯・高台付椀・皿・台付鉢・カワラケ質杯・小型甕・甕である。特に2

号溝状遺構を中心に出土している。

高杯形土器(31)や小形土器(32)は、その使用年代から栗田式期以前の遺物であろう。杯(25・26)は底部が欠損するため明確な時期比定はできないが、ロクロ使用や黒色処理、ヘラミガキの多用を考慮すれば平安時代の所産であろう。

高台付椀(27)は、高台が三角形を呈し、口縁部の外反等を合せ白瓷系陶器に形態が類似している。底面は高台を付るためナデを施し、ロクロからの切り離しは不明である。内面には丁寧なヘラミガキが施され、胎土は精練された微砂で硬質である。福島県内において本類に類似する土師器は二本松市郡山台遺跡4号溝上層出土器(根本・辻他1980)や郡山市柿内戸2号住居跡(木本・鈴鹿他1982)・本宮町関畑遺跡(渡辺他1982)西区1号ピットより出土している。同時に出土した須恵系土器・あかやき土器より11世紀前後と考えられており、本類もこの時期の所産であろう。

34は、杯より皿形に近い形態の土師器である。底部を厚く切り残し、一見して台付皿に類似する。回転糸切り無調整で、いわゆる「あかやき土器」に近い土器と考えられ、11世紀前後の年代が考えられよう。

台付鉢(33)は、ロクロで再調整され、外面に横位のヘラケズリ、内面にヘラミガキと黒色処理が施されている。小型甕(36)は、硬質で、外面には体部下半に縦位のヘラケズリが施されている。

甕(28・35)は底部付近の破片で、表面は磨滅・剝離が著しく、調整・器形等についても不明瞭な部分があり所属時期は不明である。

須恵器の甕破片(37)は、内外面にタタキ→ナデが施され、新しい調整の要素が認められる。

第2節 遺構について

調査区において検出された遺構は、竪穴状遺構2基、土坑27基、掘立柱建物跡3棟、鍛冶遺構、溝状遺構2条、特殊遺構等である。遺物の項で述べたように、各遺構の時期を考察することは困難なため、主に各遺構の構造・性格等について若干の検討を進めていきたい。

竪穴状遺構

竪穴状遺構は2基検出されている。1号竪穴状遺構は北・西壁が破壊され不明瞭であり、床面は軟弱でピット等は検出されず出土遺物も少ないため性格等は不明である。2号竪穴状遺構は、構造・規模より縄文時代末葉の炉跡を持つ竪穴住居跡と考えられる。次に県内の類例をあげる。

福島県内における縄文早期から前期初頭までの主要な竪穴住居跡を第11表に示した。また矢吹地区・阿武隈中部地区の試掘で検出されたものを表12にあげた。このように1遺跡において数軒にすぎない。しかし、いずれも遺跡全体の面としての調査でない。

現在、福島県において、最も古い時期に属する住居跡はいわき市竹ノ内遺跡(いわき市1981)であろう。平面形は不整円形を呈し、炉を持たず、柱穴と思われる盲孔14本を検出した早期末葉に位置づけられる石川町上森屋段遺跡3号住居跡(高倉他1977)や郡山市鳴神遺跡12号住居跡(福島県教育庁文化課:1975・1981)、前期の都路村石橋遺跡(大越他1981)について触れておく。

石川町上森屋段遺跡では縄文時代早期末葉より前期初頭までの住居跡4軒を検出した。早期末葉の竪穴住居跡である3号住居跡は、不整円形を呈し、柱穴は壁柱穴が円形に巡る。炉は攪乱のため不明である。他の3軒は木根による攪乱のため形態は不明である。

第11表 縄文時代早期～前期の竪穴住居跡一覧表(本調査)

(単位m)

遺跡名	住居番号	時期	平面形	規模	柱穴	炉	備考
竹之内		早期初頭	不整円形	5.38×5.0	壁柱穴	なし	
上森屋段	SI 01	前期	隅丸方形(?)	3.8 × ?	不明	中央南西壁寄り	
	02	前期	不明	4.4 × 4.0	不明	東壁寄り	
	03	早期末葉	円形	2.4 × 2.2	壁柱穴	中央	
	04	前期	楕円形	4.2 × 3.5	不明	不明	
鳴神	SI 12	早期末葉	楕円形	3.3 × 2.8	壁柱穴	中央・東壁寄り	住居跡外柱穴
石橋	SI 01	前期(?)	隅丸方形	2.8 × 2.5	壁柱穴	不明	
	02	"	"	2.8 × ?	不明	不明	
	03	"	隅丸方形(?)	不明	壁柱穴	不明	
唐松A	SI 02	早期末葉	不整楕円形	4.8 × 3.1	壁柱穴	南東壁	
達中久保	SI 25	前期前半	長方形	3.5 × 3.0	不明	西壁寄り	
	27	"	"	3.0 × 2.5	不明	なし	

第12表 縄文時代早期～前期の竪穴住居跡一覧表(試掘)

町村名	遺跡名	形態	時期	備考	町村名	遺跡名	形態	時期	備考
常葉町	富作	方形(?)	常世I		都路村	山口E	長方形(?)	大畑G	
"	上屋敷A	方形(?)	前期初頭		川内村	田ノ入	方形(?)	早期～前期前半	
都路村	遠上前A	方形(?)	大木1		天栄村	羽黒山C	方形(?)	前期初頭	
"	釜作	方形(?)	大畑G		"	前原B	方形	早期～前期前半	

郡山市鳴神遺跡は奈良・平安時代の集落であるが、早期末葉に位置づけられる12号住居跡を検出している。平面形は楕円形を呈し、壁柱穴が楕円形に廻り、住居跡外にも柱穴が存在する。

前期の都路村石橋遺跡では3軒の竪穴住居跡を検出している。平面形は3軒ともに隅丸方形を呈しているが、炉跡は攪乱のため所存は不明である。

以上、早期前半から前期までの住居の平面プランを中心に述べていたが、次に形態・炉跡・柱穴等により各期別に分類してみる。

第I期……早期前半・竹ノ内遺跡

平面プランは不整円形を呈し、炉跡を持たず、柱穴は壁柱穴である。

第II期……早期後半、上森屋段・鳴神遺跡

平面プランは円形ないし楕円形を呈し、炉跡を持ち、柱穴は壁柱穴や住居外柱穴を持つ。
第Ⅲ期……前期，石橋遺跡

平面プランは方形を呈し，コーナー部では一部隅丸となる。炉の存在は不明。

3期に分類が試みられるが，数少ない資料でまだ疑問の点も多く，今後この期の報告の増加を持って再考したい。

関東において花積下層式期における竪穴住居跡の集成と解説をした倉沢(村田・倉沢他1979)によれば，「早期最終末に位置づけられる打越式期の住居は楕円形が主体で，前期初頭の花積下層式期になると楕円形や台形(方形)に近いが，2つの形態が存在しさらに関山期に至り，方形(台形)プランに統一される」という。平面プランの変化を楕円形→楕円形・台形(方形)→方形(台形)に捉えており，第Ⅰ期から第Ⅲ期までの分類との妥当性が言えよう。

唐松A遺跡下において検出された2号竪穴状遺構は，平面プランが楕円形を呈し，炉跡・壁柱穴等より竪穴住居跡と考えられ，第Ⅱ期に属することが，構造および遺物等から考えられる。

土 坑

本遺跡では27基の土坑が検出された。第3節のまとめで述べたように，性格は不明である。性格の推定される陥し穴状土坑・貯蔵穴状土坑・その他について若干の検討を加える。

陥し穴状土坑

本遺跡では，6基の陥し穴状土坑が検出された。調査範囲も遺跡全体からみれば一部分にすぎず，方向性・形態による分布の差異については十分な検討をすることはできなかった。次に陥し穴状土坑の特色および性格について述べていく。

陥し穴状の機能を果す土坑は，ある程度の深度を持ち，形態は壁面等は剥落しており，原形を留めていない。当時の原形を留めているのは，底面等であり，本遺跡において検出した土坑は，開口部・底面部の計測値を記載した。深度に関しても，検出面(L-Ⅳ黄褐色土)よりの深さを表わした。概要については第2章第3節分布状況でまとめているが，方向性・配列からAグループ(3号土坑)，Bグループ(5～7号土坑)，Cグループ(19・23号土坑)に分類される。形態をみれば長方形・不整楕円形がみられ，底面に小ピットを有し，断面が「Y」字状を呈し，深度は検出面より85～142cmを測る。また調査中に土坑の黄褐色土中に黒褐色土がサンドイッチ状に堆積しており，側壁崩壊し，一時開口し，側壁が崩壊し自然堆積という埋没過程を辿ったものであろう。

近年の大規模な発掘調査を中心に，各地で陥し穴状土坑の発見が相次いでおり，その機能や性格については多くの考察がみられる(今村1976，今井・宮沢1976)，須賀川市大久保遺跡(玉川・芳賀他1981)や本遺跡で検出された長方形ないし小判形の土坑群と，東村西原遺跡(大越・山内

1980)において検出された溝状土坑は機能的には陥し穴として利用されたと考えられるが、形態的差異が認められる。この差異は、狩猟動物・方法または立地の問題から生じるのか興味深い問題である。また、本遺跡では河岸段丘の先端近くに立地しており、陥し穴状土坑と地形との密接な関係が考えられる。しかし、同土坑の検出が6基と少なく、今後の調査によっては同辺にも同様な土坑が存在する可能性もあり、同じ河岸段丘面に立地する郡山市鳴神・柿内戸遺跡検出の土坑群や類例増加によってしだいに問題点・性格・機能が明らかになるであろう。

その他の土坑

13・18・20号土坑より縄文土器(I-C類)が出土している。18号土坑は底面にピットを持ち、竪穴状遺構に近い形態をとるが、地床炉もなく、性格を裏づけるような遺物も出土せず不明確な土坑である。13・20号土坑は堆積土中や底面から縄文土器(I-C類)が出土しており、縄文時代の一時期に開口していた可能性が強い。

1号土坑は周壁に20cm前後の粘土を貼り付けており湧水を防止している。堆積土の状況は第I層表土類似の堆積土も混入しており比較的新しい時期で、貯蔵穴的機能を果たした土坑であろう。

弥生時代の土坑

15号土坑は弥生時代中期末葉と考えられる土坑である。近年、この時期の土坑は数多く発見されており、本遺跡の周辺でも郡山市柏山遺跡(伊東他1972)、本宮町陣場遺跡(馬目他1971)、須賀川市大久保遺跡(芳賀他1981)等において類似する土坑が検出されている。

各遺跡において検出された土坑より出土した土器類は完形は少なく破片や一部欠損したものが多し。本土坑の検出面から出土した高杯や埴は総て破片であり、調査時に出土した弥生式土器片を観察しても同一個体の破片と考えられるものはなかった。このことは、土坑との関連で土器は完形でなく破片や一部欠損したものを置いたという考え方は妥当性の高いものであろう。

弥生時代における土坑の性格については、「墓壙説」が強くいわれている。15号土坑は長軸2.2m、短軸1.8m、深さ13cmを測り、不整楕円形を呈する。深さは13cm前後と人を埋葬するには浅いが、生活面が後世の攪乱により破壊されていることを考慮すれば、構築時の全体像を把握することは困難である。また、弥生時代の土坑が数基ずつグループを呈しているが、本遺跡では単独に1基のみの検出である。類例としては、石川町上森屋段遺跡(菅原他1977)の存在のみで他に類例を知らない。現段階では遺跡全体の調査をした例は少なく、各遺跡で土坑が群生していることを考えれば、本類の土坑は特殊な例であろうか。今後、周辺の同時期の遺跡において集落や墓地との関連を明らかにした上で再考する必要があるであろう。

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は全体の規模が明らかなものを含め3棟検出されている。調査区の南西部に集中しており、以下に述べる特徴がみられる。

各建物跡の掘形は1辺が30cm以下で埋土は黒色土、柱痕と考えられる直径10cm前後の黒褐色土が確認されている。他に黒色土を含むピットを南東部の調査区で検出したが、柱列および建物跡として把握することはできなかった。また、規模は1号建物跡が2間×2間で、他の2棟は、西側が水田造成のため削平されており不明である。

南西土層断面の観察により、掘形は本遺跡の基本層である第Ⅱa層上面より掘り込まれている。これらの建物跡の時期を推定することは、掘形埋土内の遺物も出土せず切り合い関係も不明である。昨年を試掘時に本遺跡の基本層である第Ⅲ層を掘り込み奈良・平安時代と考えられる竪穴住居跡や、第Ⅱ層上面より掘り込む本建物跡に類似するピットが検出されている。このため、掘立柱建物跡は奈良・平安時代以降の構築と考えられ、西側の未調査区にも本建物跡に類似する掘立柱建物跡が存在していた可能性が強い。(高橋信一)

第3節 鍛冶遺構について

2号溝状遺構内に検出された遺構は、次のような理由から鍛冶跡と考えられる。その理由の第1は、炉体が製錬炉のように大規模ではなく、簡単で小規模な構造をなしている。第2に、炉体の内外から採集された鉄滓中に含む鉄分が少い(磁石使用による方法)。第3に、炉体やその付近から出土の鉄滓の量が少なく、製鉄を行ったとは考えられない。第4に、原材料が検出されず、また木炭も少量しか検出されなかった。第5として、遺物の羽口は鍛冶用の小型のものである。以上のような理由から本遺構は原料の砂鉄等を製錬して半製品を得る製鉄工程のものではなく、半製品となった鉄を加工して鉄製品を得るところの鍛冶工房跡と考えられる。

次に、本遺構が築かれた時代としては、2号溝状遺構との関連から平安末から中世という時期が考えられる。その理由として、2号溝状遺構は底面が整地され、その後溝の斜面を利用して1・2号炉体が築かれていると思われる、その溝からの遺物は、奈良～平安末頃の土師器を中心とする遺物を出土しており、それらは炉体が築かれた層よりも下の部分から出土していることによる。

遺物の羽口については、鉄滓の付着している部分と、タール状に変容している部分と、灰色に変色している部分が観察され、その跡をみると斜めに取付けられていたと思われる、約40度の角度で挿入していたものとする。また、羽口の製作にあたっては、内部口径がほぼ一定の長さであることから、丸い棒の周囲に粘土をはりつけ棒を若干上下にずらして引抜き形を整えて素焼きさ

れたと思われる。

最後に、鍛冶遺構の考察にあたって、都合により鉄滓の化学分析をすることができなかったのが大まかに一般的な見地から述べてきたことを付記しておく。(辺見陽一)

第4節 唐松館跡との関連について

唐松館跡は、昭和54年7月、当文化センター遺跡調査課が航空写真・伝承などをもとに表面調査を行い範囲を推定した遺跡で、谷田川南岸の河岸段丘先端部に位置する。新発見の遺跡であるため、その築造された年代・館主などについては一切不明である。また、唐松館の主要部分は、今回の調査区域の東側の方形の平坦部約15,000㎡(空堀部の面積を含む)を指しているが、今回の調査では、その部分は調査の対象にならなかった。ただ、昭和55年度に試掘調査を行い館としての確認を得ている。そこで試掘の結果と本年度の唐松A遺跡の調査結果とをもとに考察をすすめてみたいと思う。

まず、昭和55年度における試掘調査の結果をみると、館の東側水田に設定した1号トレンチから、上幅10m前後、現水田面からの深さ1.5m程の底面が平坦な緩いU字形をした空堀跡を検出した。また、館の東南と西南コーナーに土塁の一部が最近まで残存していたという聞き取り調査もあり、この館は東西約110m、南北約80mの東西に長い方形の郭を中心とし、周囲に幅10～20m前後の空堀を巡らした単郭式の館跡であるとされた。遺物は、12号トレンチから奈良～平安時代と思われる住居跡から非ロクロとロクロ成形の土師器や須恵器の破片が出土し、さらに中世陶器と思われるものが数片表面採集されている。

次に、今回の唐松A遺跡の調査結果をもとに検討してみると、調査区域のG～I-8～9グリッド内で検出された溝は、その形状や大きさなどから考えて館に付属する空堀跡と思われる。また、B～D-6・7グリッド内に検出されたピット群は、その埋土の状態や間口の規模などから考えて掘立柱穴群と思われ、一応3棟の建物があったことが想定され、館に関連する施設と思われる。これらの空堀跡や掘立柱建物跡から考えて、この館は東部主要部分15,000㎡とともに、今回の調査区1,200㎡についてもその範囲の中に含まれると思われる。このことから、唐松館跡は当初試掘の段階で単郭式の館と考えられていたが、今回の調査によって二つの郭をもつ連郭式の館跡として位置づけることができると思われる。

次に基本的な問題として、いつ、誰が、どのような目的で館を築いたのかを検討してみよう。現在本館跡について明確な年代を明らかにする遺物や文献的史料は残存していない。従って当地方の歴史的背景と館跡の構造をもとに考えてみる。まず館の築造について大きく第1期鎌倉時代、第2期南北朝時代・室町時代、第3期戦国時代の3期に区分して考えてみたい。

まず、鎌倉時代における本館跡を含むこの周辺の地域についてみると、この地域は「田村庄」といわれる荘園に属し、その領主田村庄司によって支配されていた。田村庄は平安時代中後期頃に安積郡から分立した。そして、その領主田村氏については、建長6年(1254)に成立した『古今著聞集』巻20の中に田村郷の領主前刑部大夫仲能朝臣として初見されている。この仲能朝臣については、江戸時代の新井白石の『藩翰譜』水谷の項で次のように述べている。

鎮守府將軍秀郷七代の孫近藤武者景頼が嫡子左近將監能成が二男仲教、田村と名乗り、四男親実水谷と名乗る。仲教伊賀守に任ず。其子刑部大輔仲能、関東の評定衆となる。其子淡路守重輔又水谷と名乗り、(中略)…重輔が子孫世々陸奥国猿田の城に住す。猿田館殿と云ふ。

これによれば刑部大輔仲能の子淡路守重輔が水谷と名乗り、その子孫は代々陸奥国猿田に本拠地を構えたとされている。この「猿田の城」については、『仙道田村庄史』では旧田村町岩作字東猿田にあてている。現在、岩作村には「東作田」という地名はあるが「東猿田」という字名はみあたらず、その城(館)がどこにあったのか不明であるが、おそらく初期の田村氏は、岩作村守山村を中心とする地にその本拠地があったと考えられよう。この岩作村内にある本館跡もこの田村氏の本拠地と何らかの関係があるだろうと思われる。

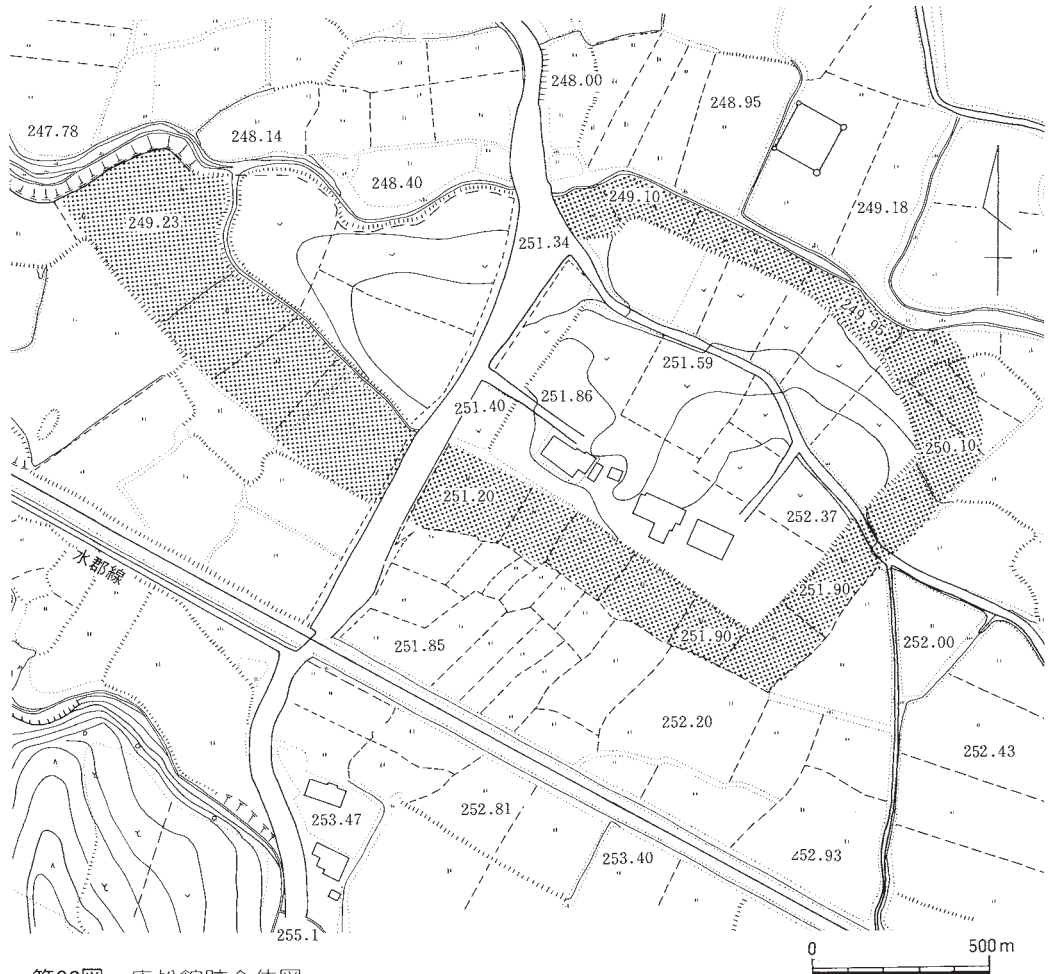
次に、南北朝の動乱期から室町時代の時期における田村庄についてみてみよう。南北朝の動乱期においては、県内は周知のように霊山、宇津峯等いたる所でその戦乱の渦の中に巻き込まれていくが、田村庄司一族もまた最後まで南朝方に味方して、しばしばその本拠地である守山近辺で北朝方と争っている。とくに、文和元年(1352)7月3日には奥州管領の吉良貞家と田村庄柄久野原で合戦を行っている。また、応永2年(1395)9月には田村庄司則義・清包父子らが阿武隈川の戦及び唐久野原合戦などで北朝の軍と戦っている。この柄久野(唐久野)原は田村郡守山(郡山市)と岩瀬江持(須賀川市)との境の方1里ほどの原をいう(『白河風土記』)。このように南北朝の動乱期に田村庄はその戦いの主戦場となり、その中で田村庄司一族は最後まで宇津峯城を支える主力となっていたのである。このような情勢のもとにある田村庄の中で本館跡もなんらかの役割を果たしていたということが考えられないだろうか。なお、この後、応永2年(1395)以降、田村庄司一族の勢力は衰え、代わりに三春田村一族がその勢力を伸長し、その本拠地も三春を中心とした地に移っていくのである。

最後に、戦国時代における田村地方をみてみると、三春田村氏がその支配権を確立して主に三春・船引・大越・滝根・小野等にその勢力を伸ばし、それら主な地に館を築き一族や家臣を配している。しかし、一方鎌倉から室町時代にかけて田村庄司一族が勢力を得ていた守山・岩作村などには三春田村氏の館はあまりみられず、本館もそれら三春田村氏に関連するものとは思われない。また、構造的にも複雑・大規模化していく戦国時代の館の範疇にも入らず、ここまで時代が下るとは思われない。

以上のことを基にして、本館跡について機能の面から再考察すると、谷田川の川沿いに立地しており、10mを越す空堀跡や土塁跡、連郭の構造を持つことを考えると、戦いにも十分対応できるものと考えられる。本館跡は前記に述べた田村庄司一族となんらかの関連があると考えられ、その年代はおそらく鎌倉～室町時代と仮説することができないだろうか。

また、本館跡の東方約500mの地点には、昭和54年に当遺跡調査課が発見した単郭のカナイ館跡がある。谷田川流域には多くの館跡がみられるが、本館との関係は明らかではない。

中世の平館としては、喜多方市の新宮城（鈴木他1974）、須賀川市の蛭館（福島県文化センター遺跡調査課1980）、国見町の金谷館（日下部・寺島他1980）等が知られている。しかし、発掘調査例が少なく構造等についても不明瞭な部分が多く残されている。今後、本館跡について考える場合、谷田川流域の館跡や旧街道、社寺・板碑などや文献資料等による検討を通して今後明らかにしていきたい。（辺見陽一）



第32図 唐松館跡全体図

第5節 唐松A遺跡の変遷

1～4節までの検討を踏まえ、本遺跡の変遷過程を明らかにしたい。時期区分は縄文時代・弥生時代・奈良・平安時代・中世以降について説明を加えていく。

縄文時代早期中葉の遺物である田戸下層式期・野島(槻木I)式期の土器片が少量出土している。これは遺構を伴わず、遺物だけが出土している。本遺跡のみならず他の遺跡でもみられる現象であり、どのような性格のものであるかは不明である。しかし、この期の土器が出土するという事実がある以上、生活の場として利用されたことは明らかであろう。

早期後半の遺物である大畑G式期になり、本遺跡は定住的な小規模集落がつくられる。2号竪穴状遺構やB・C-4・5グリッド検出の焼土遺構・ピット群はこの期の竪穴住居であり、2・13・18号土坑が機能していたと考えられる時期である。

陥し穴状の土坑は、出土遺物・性格から所属時期を推定することが困難な遺構である。23号土坑から前期中葉II-b類の土器が出土しただけである。陥し穴状の土坑の検出は、本遺跡が猟場として利用されていたことを裏づける遺構であろう。

前期(大木3・4式期)から後期までの遺物を検出したが、遺構は検出されず本遺跡周辺がどのような状態にあったかは不明である。縄文時代において「移動性に富んだ生活」の中で、本遺跡は定住地または猟場として利用されていたのであろう。

弥生時代は、空白の時期の後、中期末葉に15号土坑がつくられる。この土坑は墓跡と考えられるものであり、単独に存在する意義や周辺の遺跡の検討を通じて集落と墓地との関連で考えていきたい。

奈良・平安時代に到り、定住的な集落がつくられる。昨年(2019年)の試掘では数軒の竪穴住居跡を確認しており、栗圀式期以降と考えられる土器片が出土している。8世紀前後は県内において、集落の数が増加する時期である。

平安時代から中世にかけて2号溝状遺構が構築される。現況で観察される周囲の低い水田面は堀跡と考えられ、東西約110m、南北80mの東西に長い方形の郭を内郭とし、四周に幅10m前後の堀を巡らした単郭式の館跡と考えられていた。しかし、今回の2号溝状遺構の検出と、丈量帳の検討から唐松A遺跡の東西側まで堀がつづく可能性を指摘した(第32図唐松館全体図)。また、B・C-6・7グリッド内検出の掘立柱建物跡は、西側にも検出される可能性がある。館に伴う掘立柱建物と考えられる。

2号溝状遺構が埋没した一時期に、鍛冶遺構である2号炉が構築される。2号炉使用後、1号炉や27号土坑が構築される。溝状遺構周辺は整地されており、旧溝状遺構にはロームで貼り床が

施され、小鍛冶場として使用されたと考えられる。鍛冶遺構と館との関係は不明である。

他に、いくつかの土坑がつくられるが、時期・性格等は不明である。

唐松A遺跡の変遷について簡単にまとめてきた。結果的には遺跡の時期や性格が複合し、一方、検出した遺構・遺物は少なかった。このため、論述が飛躍した部分や不明な点が数多くなった。本遺跡は郡山市東南部において最初の発掘調査であり、今後周辺遺跡の調査成果を蓄積し、指摘した問題についてさらに比較検討していきたい。(高橋信一)

参 考 文 献

- 角田文衛 1936 「陸前船入島貝塚の研究」『考古学論叢3』
- 伊東信雄 1940 「宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告書」『奥羽史料調査部研究報告2』
- 加藤 孝 1951 「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院女子大研究論集1』
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史14』 東北史学会
- 経済企画庁編 1959 『土地分類基本調査』『白河・郡山』
- 小池一之 1965 「阿武隈川中流域の地形(短報)」『地理学評論38-8』 日本地理学会
- 福島県 1967 『福島県史25・自然・建設編』
- 興野義一 1967~1970 「大木式土器理解のためにI~VI」『考古学ジャーナル13・16・18・24・32・48』
ニューサイエンス社
- 阿武隈川第四紀研究グループ 1968 『第四紀・No13』 第四紀総合研究会
- 福島県 1969 『福島県史1・通史1』
- 馬目順一 1971 『岩代陣場遺跡の研究』 福島県本宮町教育委員会
- 竹島国基他 1973 『赤石沢遺跡発掘調査概報』 福島県飯館村教育委員会
- 今村啓爾他 1973 『霧ヶ丘』 霧ヶ丘遺跡調査団
- 窪田蔵郎 1973 『鉄の考古学』 雄山閣
- 鈴鹿良一・玉川一郎他 1974 『崎山弁天遺跡』 岩手県大槌町教育委員会
- 鈴木 啓他 1974 『新宮城跡』 福島県喜多方市教育委員会
- 馬目順一他 1975 『大畑貝塚調査報告』 福島県・いわき市教育委員会
- 福島県教育庁文化課遺跡班 1975 「鳴神遺跡」『東北新幹線関係遺跡発掘調査略報Ⅱ(福島県文化財調査報告書第48集)』 福島県教育委員会
- 小林清治・鈴木 啓・野崎 準他 1975~1976 『梁川城跡Ⅰ・Ⅱ(梁川町文化財調査報告書第2・3集)』
福島県梁川町教育委員会
- いわき市 1976 『いわき市史8・原始・古代・中世資料』
- 白石市 1976 『白石市史1』
- 須賀川市 1976 『須賀川市史1・自然・原始・古代』
- 宮沢 實・今井康博 1976 「縄文時代早期後半における土壌をめぐる諸問題-いわゆる落とし穴について」『調査研究集録第1冊』 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 高橋一夫 1977 「製鉄遺跡」『考古資料の見方(遺跡編)』 柏書房
- 伊禮正雄 1977 「中世城館址の調査」『考古資料の見方(遺跡編)』 柏書房
- 保角里志 1977 「山形市大森A遺跡の縄文前期前葉の土器について」『さあべい第2巻・第4号』 さあべい同人会
- 菅原文也他 1977 『石川町上森屋段遺跡発掘調査概報(福島県文化財調査報告書第60集)』 福島県教育委員会
- 森嶋 稔他 1977~1978 『開畝製鉄遺跡(第1・2次調査報告)』 長野県坂城町教育委員会
- 馬目順一 1978 「入門講座・弥生土器-南東北1~4」『考古学ジャーナルNo148・151・154・156』
ニューサイエンス社
- 三春町 1978 『三春町史第7巻・資料編Ⅰ』

- 目黒吉明他 1978 「赤根久保遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ(福島県文化財調査報告書第67集)』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 福島県教育庁文化課遺跡班 1978 「柿内戸遺跡」『東北新幹線関係遺跡発掘調査略報Ⅴ(福島県文化財調査報告書第63集)』 福島県教育委員会
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄文』 先史考古学会
- 八巻正文他 1979 『大木囲貝塚(七ヶ浜町文化財調査報告書第4集)』 宮城県宮城郡上ヶ浜町教育委員会
- 馬目順一他 1979 『広谷地B遺跡調査報告(葛尾村埋蔵文化財調査報告第1冊)』 福島県双葉郡葛尾村教育委員会
- 村田文夫・倉沢和子他 1979 『黒川東遺跡』 川崎市
- 目黒吉明他 1979 「達中久保遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ(福島県文化財調査報告書第74集)』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 日高 努・芳賀英一 1980 「源平A遺跡」「源平C遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅳ(福島県文化財調査報告書第84集)』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 日下部善己・寺島文隆他 1980 「金谷館跡」『伊達西部地区遺跡発掘調査報告(福島県文化財調査報告書第82集)』
福島県教育委員会
- 福島県文化センター遺跡調査課 1980 『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅳ(福島県文化財調査報告書第83集)』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 菅原文也・大竹憲治他 1980 『唐神遺跡調査報告(鹿島町文化財調査報告第4集)』 福島県鹿島町教育委員会
- 福島県文化センター遺跡調査課 1980 『矢吹地区遺跡分布調査報告Ⅰ(福島県文化財調査報告書第86集)』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 鈴木 啓・根本豊徳・辻 秀人 1980 『郡山台Ⅳ(二本松市文化財調査報告書第6集)』 二本松市教育委員会
- 福島県文化センター遺跡調査課 1981 『石橋遺跡発掘調査報告(都路村文化財調査報告書第1集)』
福島県田村郡都路村教育委員会・(財)福島県文化センター
- いわき市教育文化事業団 1981 『竹之内遺跡の概要』
- 鈴木良一他 1981 『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅱ(飯館村文化財調査報告書第2集)』
福島県相馬郡飯館村教育委員会
- 福島県文化センター遺跡調査課 1981 『阿武隈地区遺跡分布調査報告Ⅰ(福島県文化財調査報告書第98集)』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 目黒吉明他 1981 『日本城郭大系3』 新人物往来社
- 阿部俊夫他 1981 「唐松館跡・唐松A遺跡」『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅴ(福島県文化財調査報告書第97集)』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 松本 茂他 1981 「地藏田B遺跡・カナイ館跡」『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅴ(福島県文化財調査報告書第97集)』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 玉川一郎・芳賀英一他 1981 「大久保遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅶ(福島県文化財調査報告書第96集)』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 高橋雄三 1981 「花積下層式土器の研究」『考古学研究28-1』 考古学研究会
- 渡辺一雄他 1982 『関畑遺跡(本宮町文化財調査報告書第5集)』 建設省福島工事事務所・福島県本宮町教育委員会
- 目黒吉明・鈴木良一・橋本博幸 1982 『馬見塚遺跡』 相馬市教育委員会
- 木本元治・鈴木八重子他 1982 『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅴ(鳴神・柿内戸遺跡)(福島県文化財調査報告書第101集)』 福島県教育委員会



1 唐松A遺跡遠景(1)(北から)



2 唐松A遺跡遠景(2)(西から)



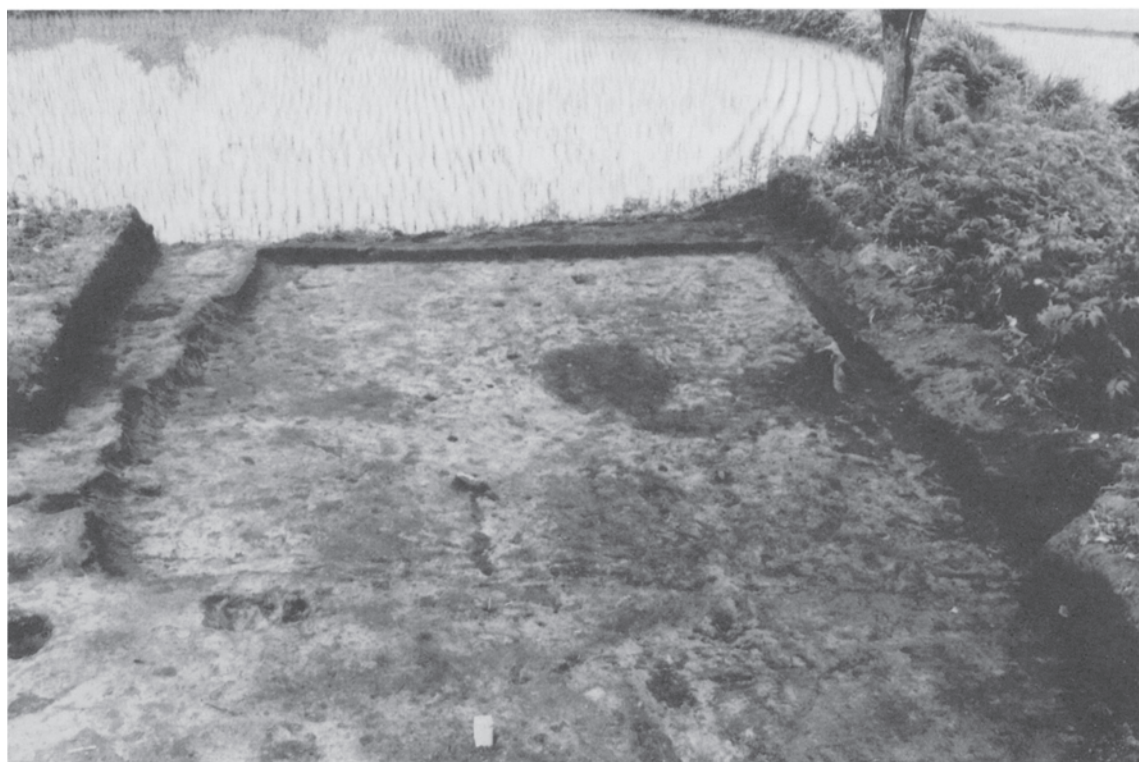
3 唐松A遺跡全景(1)



4 唐松A遺跡全景(2)



5 1号竖穴状遺構検出状況



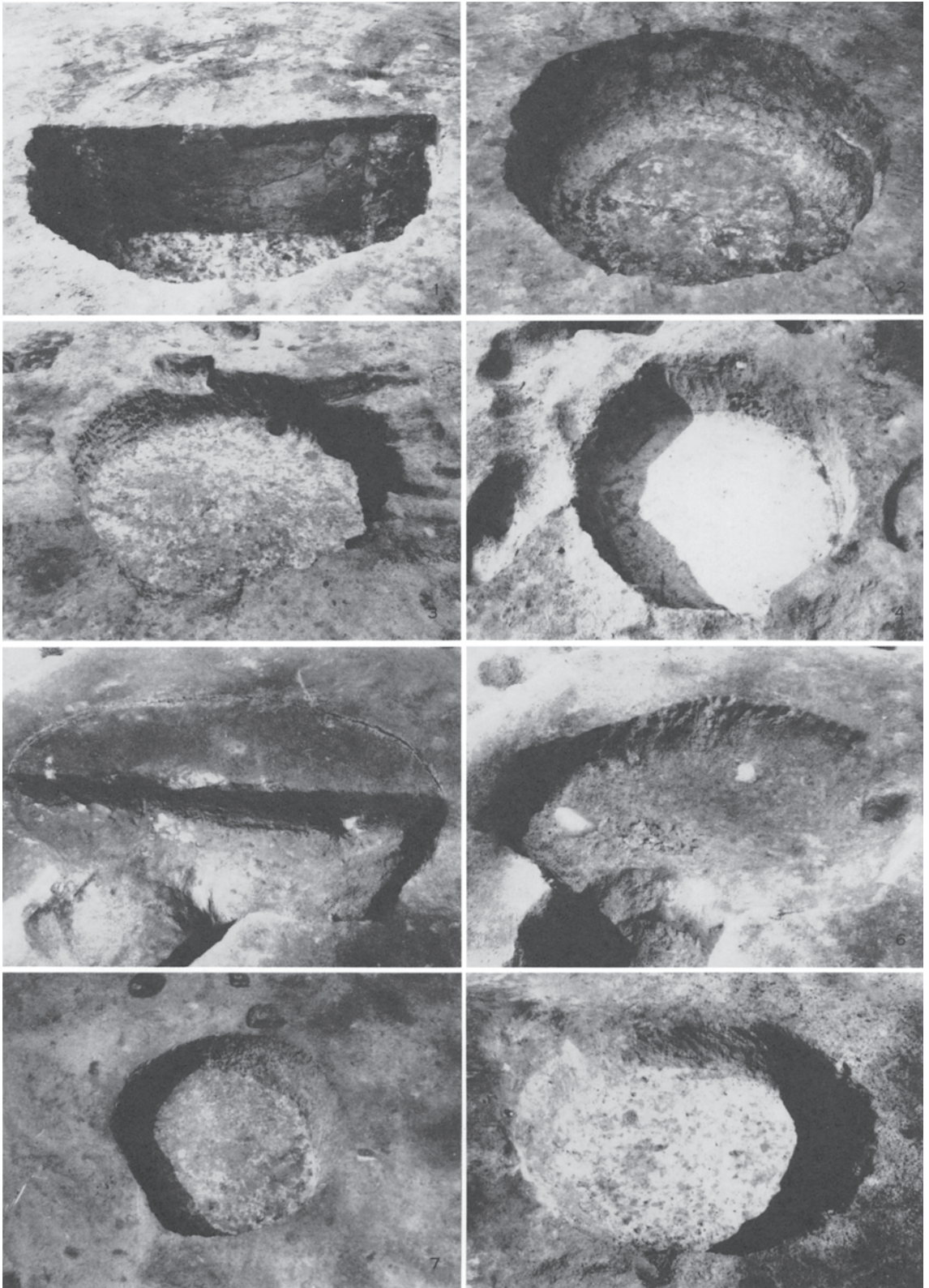
6 1号竖穴状遺構



7 2号竖穴状遺構検出状況



8 2号竖穴状遺構

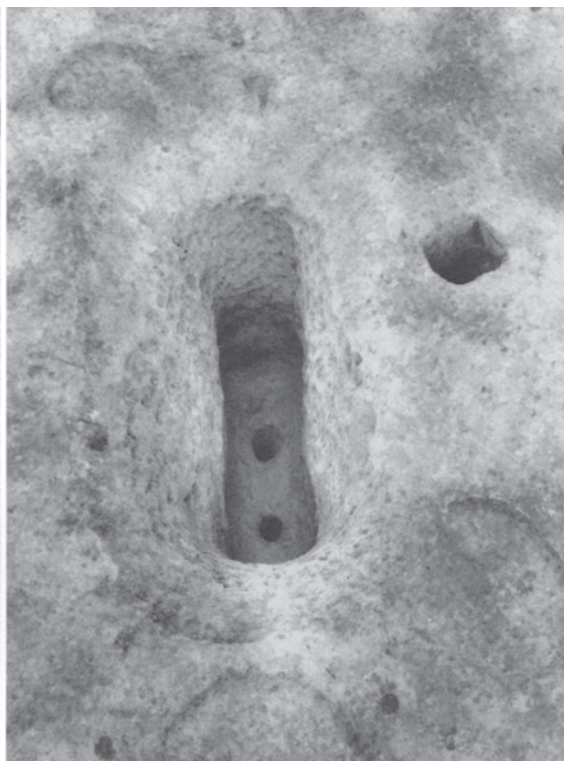


9 各土坑全景及びセクション

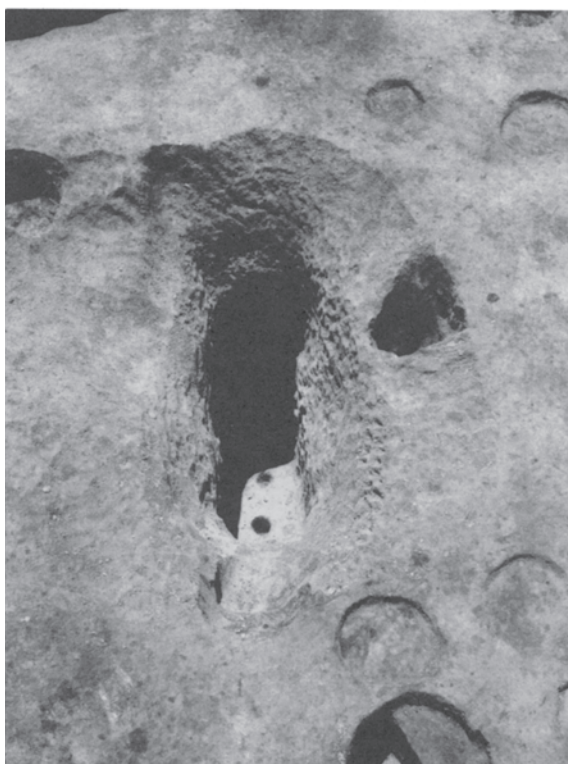
1・2… 1号土坑 3… 2号土坑 4… 12号土坑
5・6… 13号土坑 7… 24号土坑 8… 26号土坑



10 3号土坑



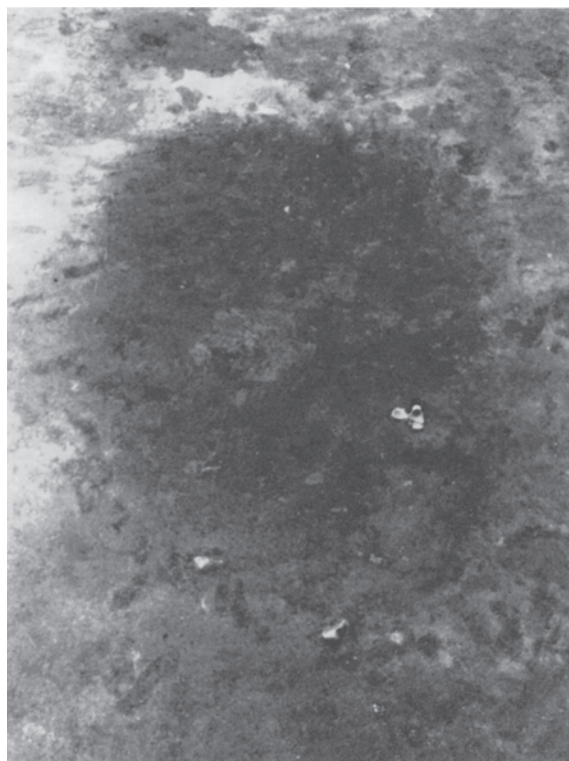
11 5号土坑



12 6号土坑



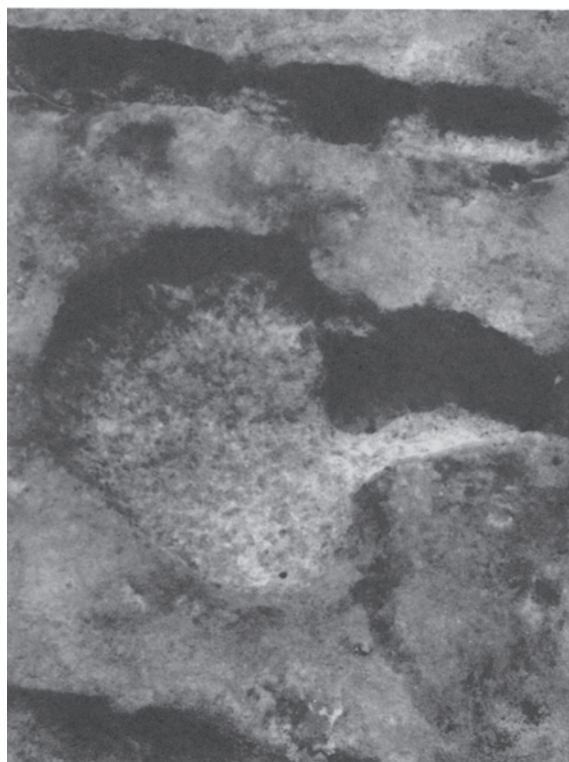
13 23号土坑セクション



14 15号土坑検出状況



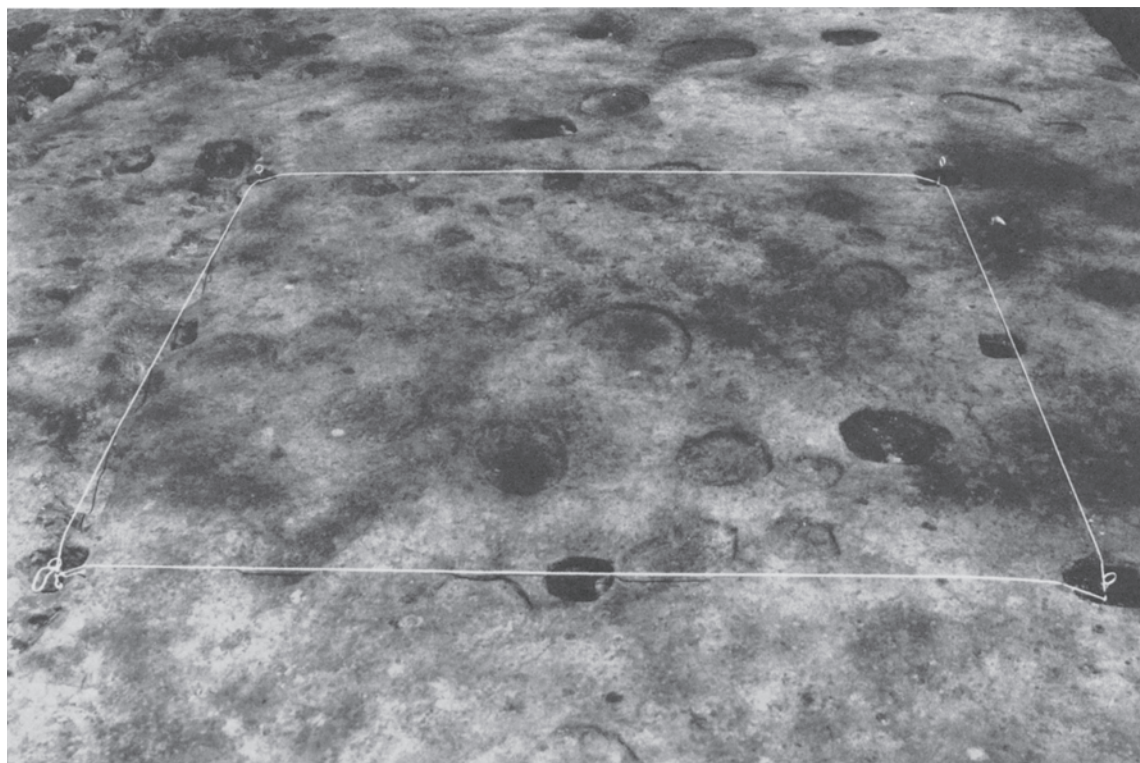
15 15号土坑



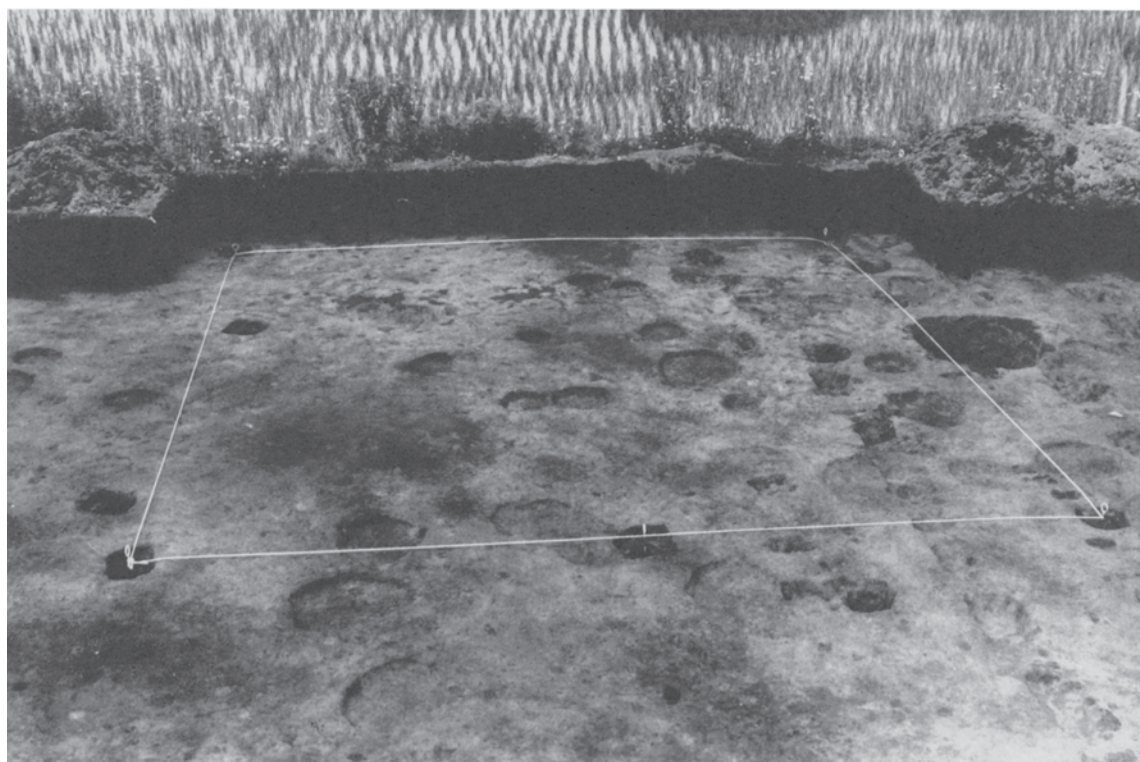
16 13号土坑



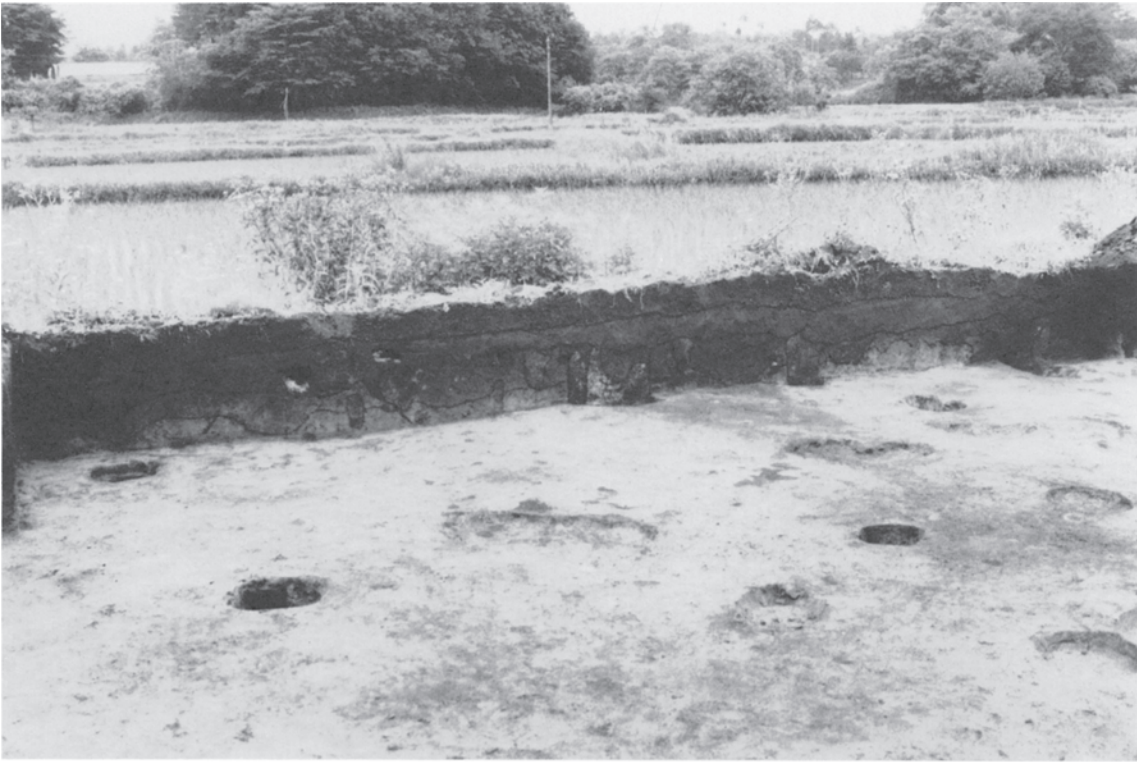
17 23号土坑



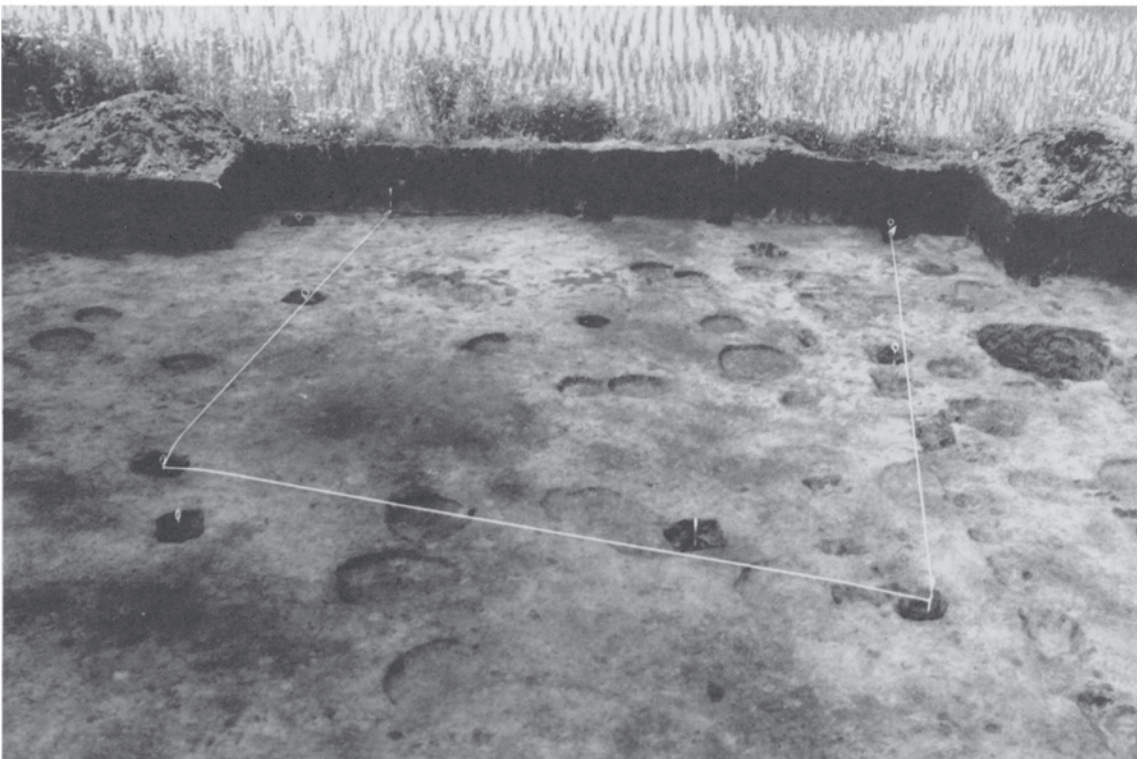
18 1号建物跡



19 2号建物跡



20 B-6-7グリッド西壁土層断面



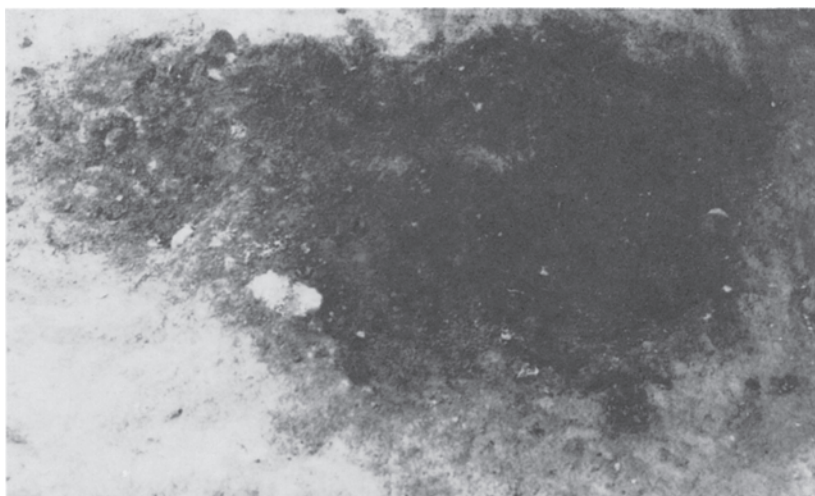
21 3号建物跡



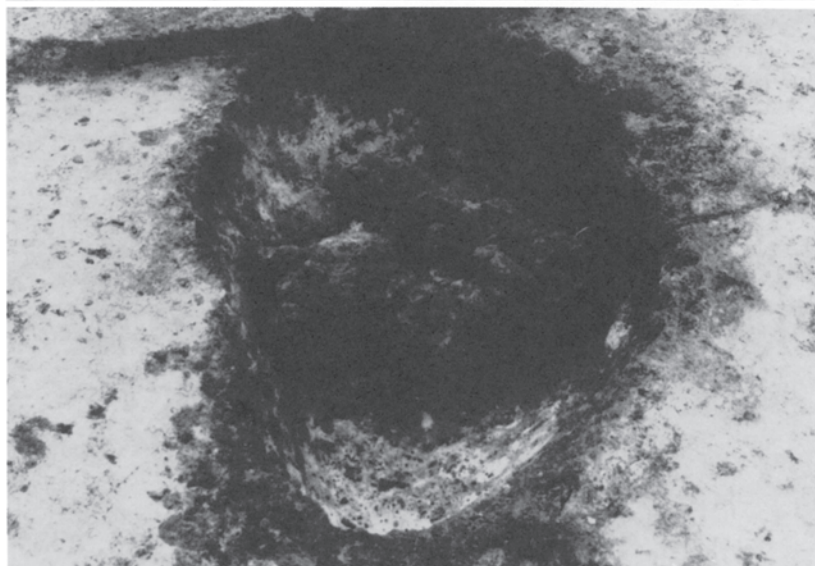
22 鍛冶遺構(1)



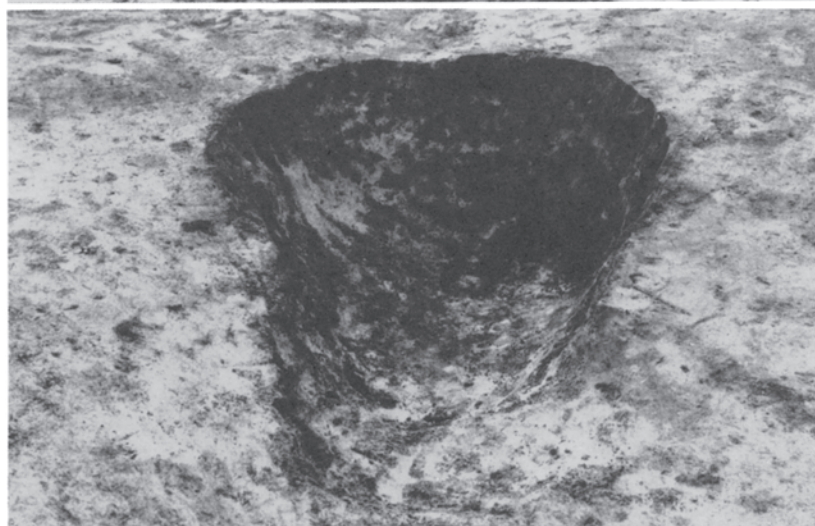
23 鍛冶遺構(2) (左は27号土坑)



24 1号炉検出状況



25 1号炉(1)



26 1号炉(2)



27 1号溝状遺構



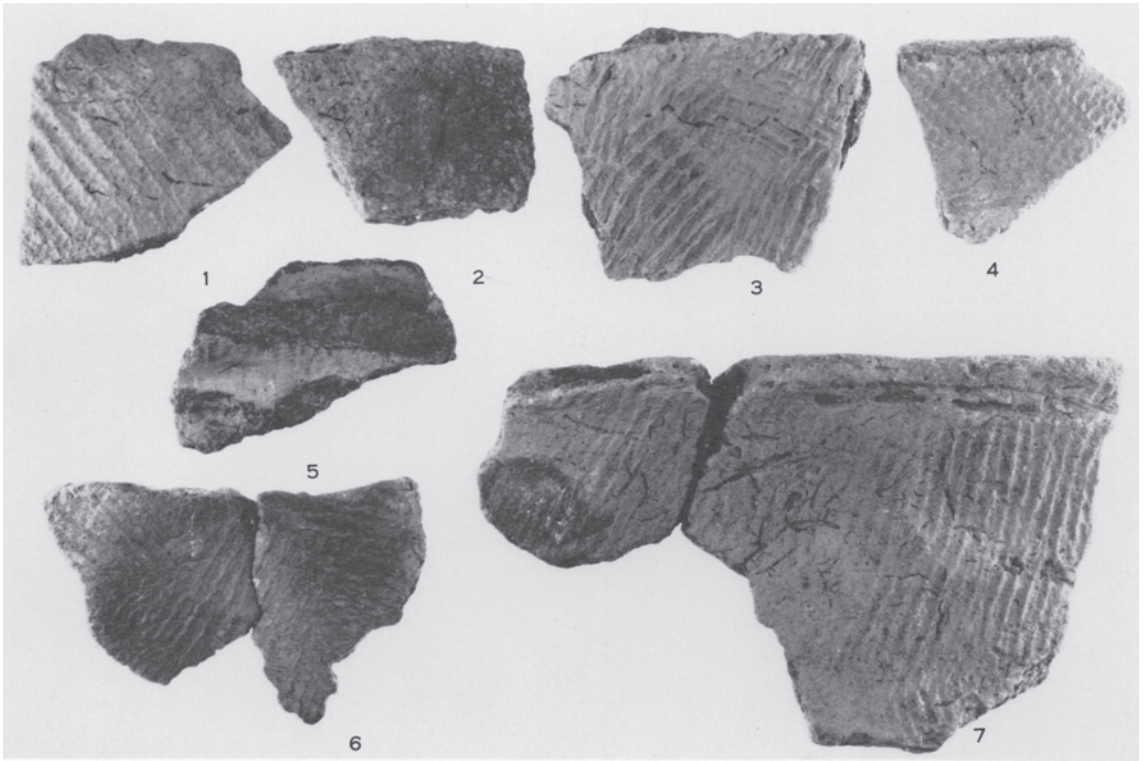
28 2号溝状遺構



29 特殊遺構

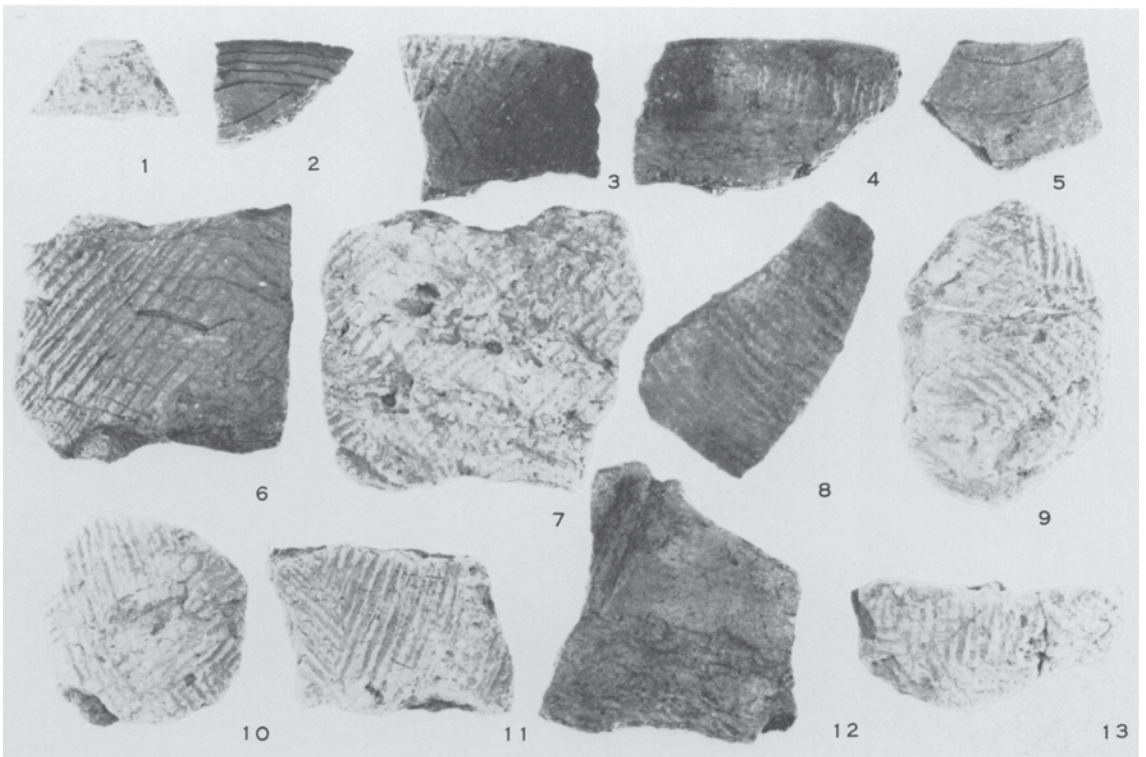


30 B・C-4・5グリッド内焼土遺構・ピット群



31 1・2号 竖穴状遺構出土土器

1・2 1号竖穴状遺構
3~7 2号竖穴状遺構



32 13・15・18・20・23号土坑出土土器

1・3・7・9・10・11……18号土坑
2・4・5・8……15号土坑 6……13号土坑
12……23号土坑 13……20号土坑



33 縄文土器(第I群a・b類)



34 縄文土器(第I群C類)



35 縄文土器（第Ⅱ・Ⅲ群）



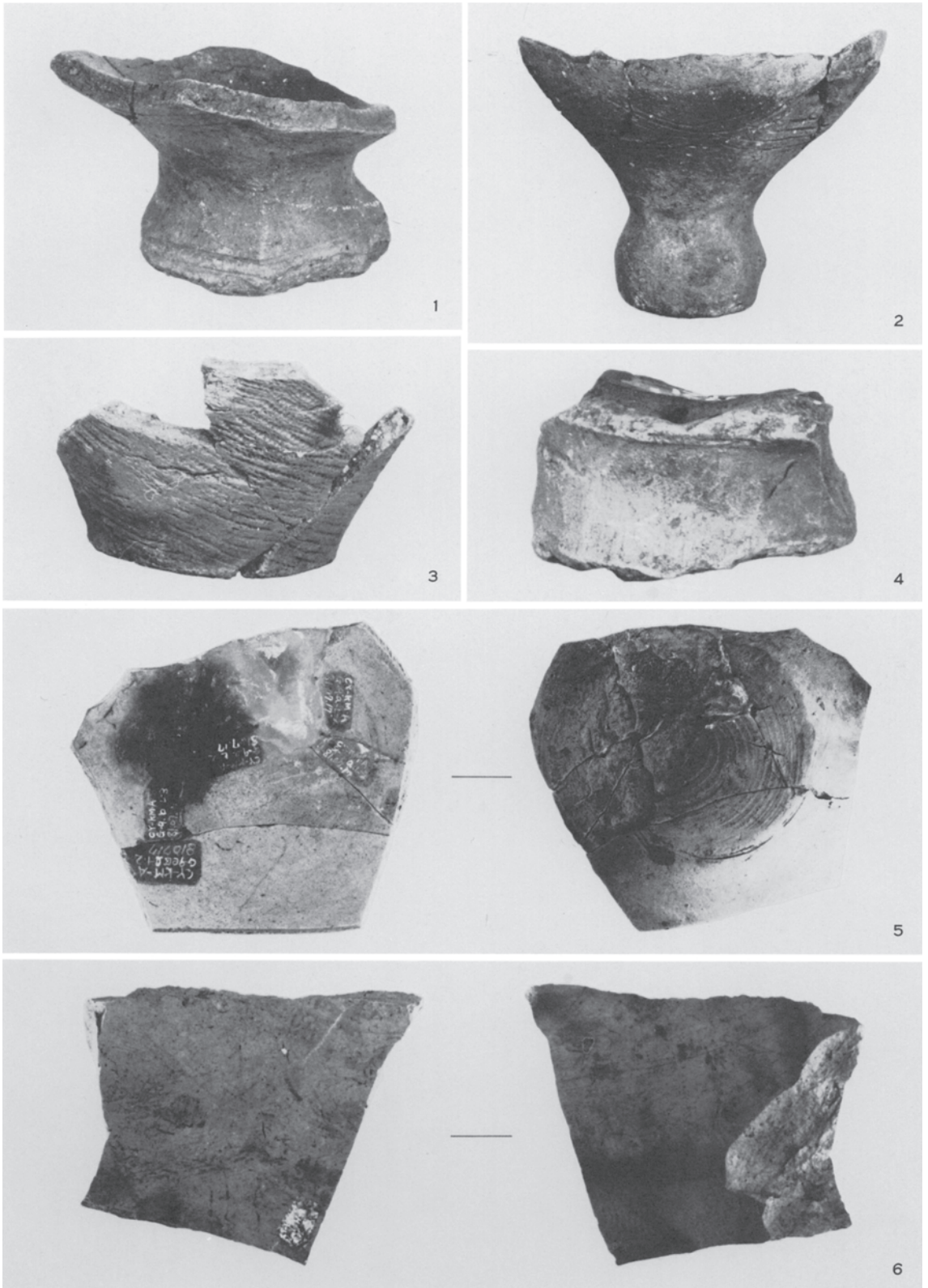
36 縄文土器（第Ⅲ群）



37 弥生式土器(第V群)

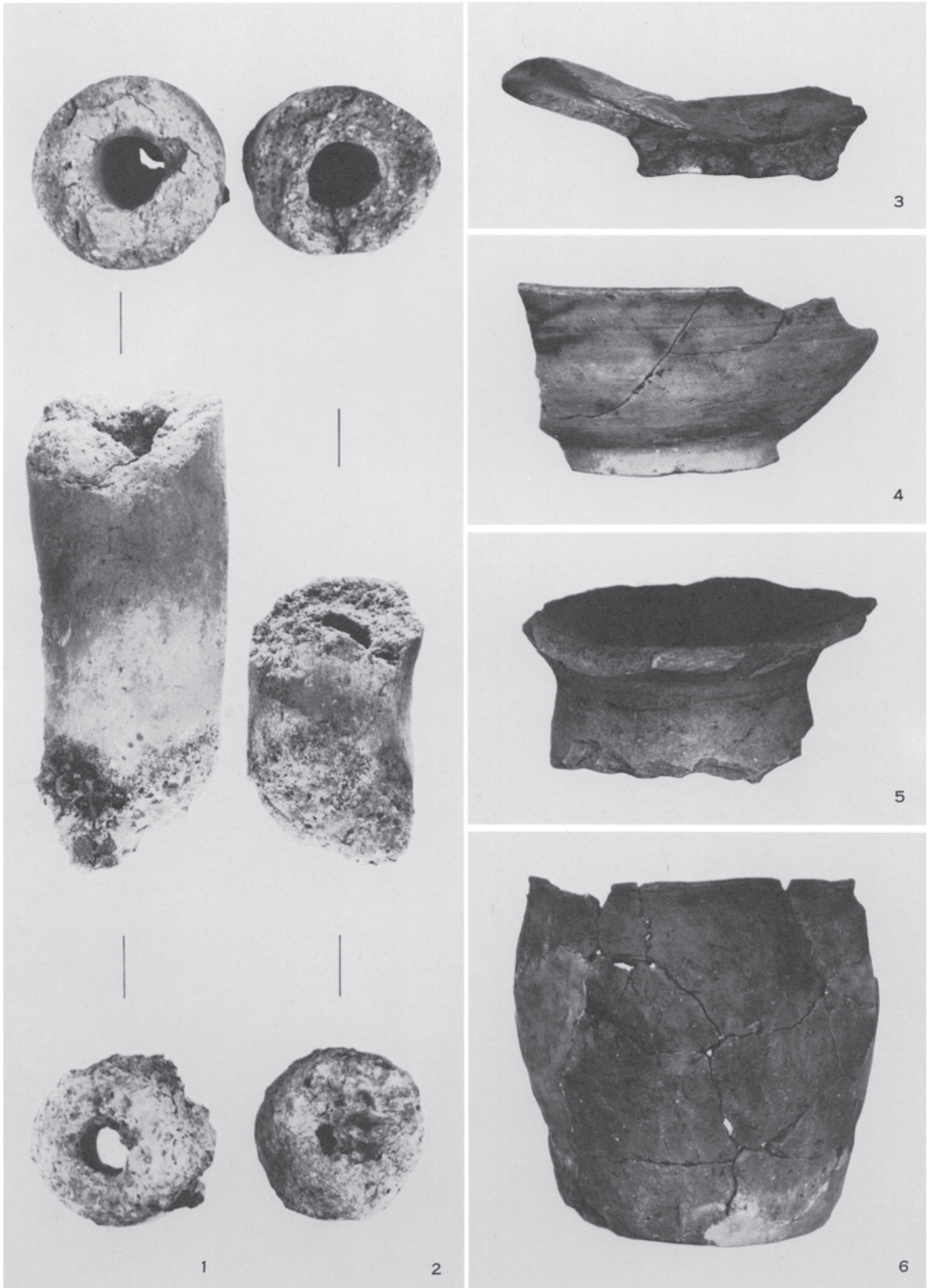


38 縄文土器・弥生式土器底部資料



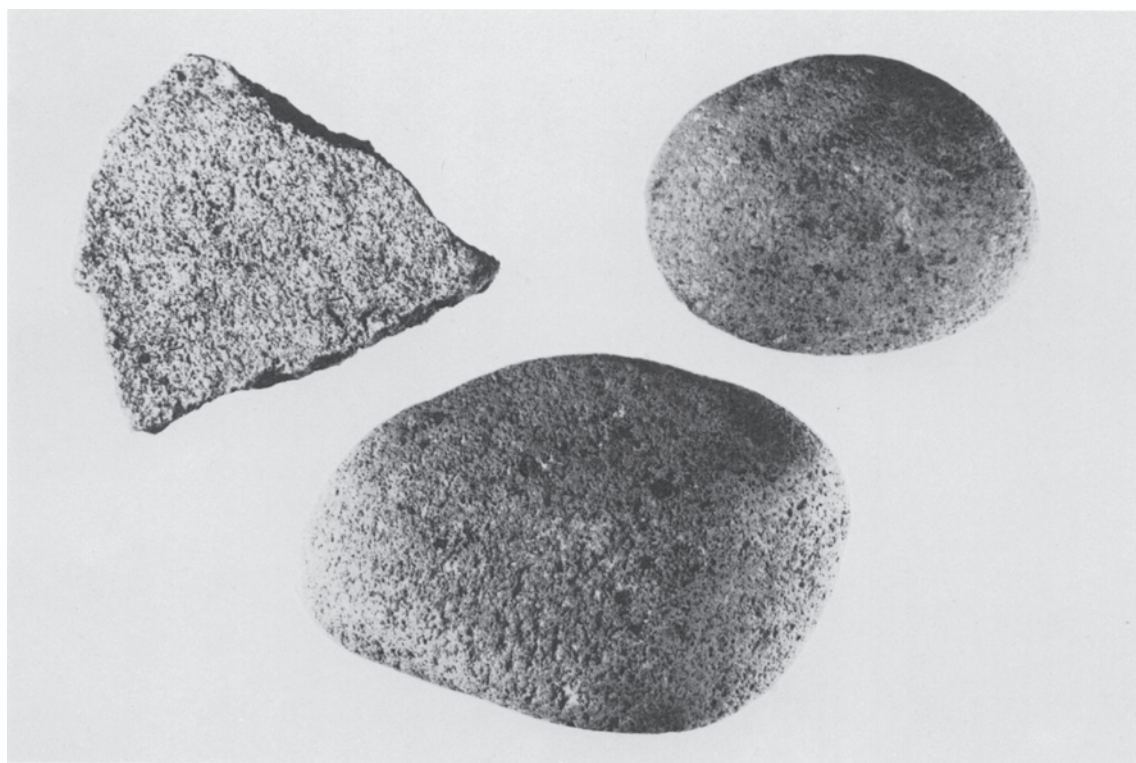
39 15号土坑・G-9グリッド・2号溝状遺構周辺出土遺物

1, 2……15号土坑 3……G-9グリッド
4~6……2号溝状遺構周辺出土遺物



40 鍛冶関連遺構・2号溝状遺構周辺出土遺物

1・2 ……羽口
3～6 ……2号溝状遺構周辺出土土師器



41 石器(1)



42 石器(2)

第2編 又兵衛田A遺跡

遺跡記号 SKG-MBD・A
所在地 須賀川市大字小倉字高柴
時代・種類 縄文時代-住居・埋甕・土坑
その他
調査期間 昭和56年9月7日～10月30日
発掘担当者 目黒吉明
調査員 若林仲亮 辺見陽一
橋本博幸 高橋信一
協力機関 須賀川市教育委員会

第1章 調査経過

第1節 位置と地形

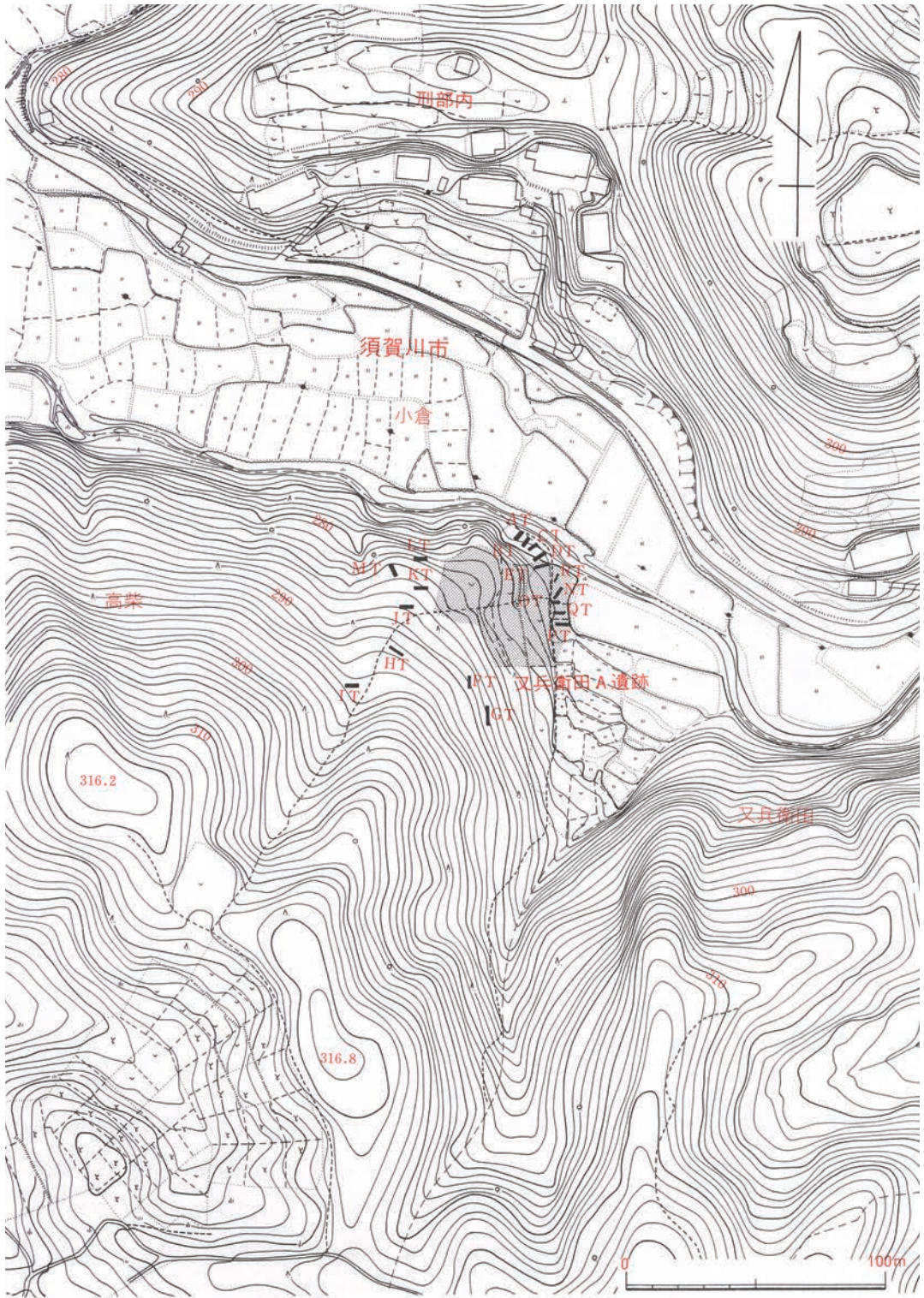
又兵衛田A遺跡は、須賀川市大字小倉字高柴地内に所在する。国鉄水郡線小塩駅より南東方へ1.5kmに位置する。

阿武隈川東岸は、阿武隈山系より西方へ高度を下げ幾筋にも延びる丘陵と、そこを水源とし西流する小河川によって開析され、東方に深く侵入する開析谷によって形成されている。開析谷は南北方向にも入り込み、なお一層複雑な地形を呈している。本遺跡の立地する場所は、小倉川が開析した谷底平野に面し、北東方に舌状に張り出した丘陵先端部の緩斜面と、その東側の裾部にあたる。現在、遺跡の部分は桑あるいは蔬菜畑として利用されている。その南・西側は山林となっており、遺跡前の開析谷部は水田と化している。遺跡が立地する部分の標高は、調査区域の西側高部では287m～281mであり、斜面下では278m前後と調査区域内において最高10mの落差がある。昨年度、県文化センター遺跡調査課が調査を行った沼平塚群は、東西に延びる丘陵尾根上に立地するが、その中で、一基だけやや離れてある42号塚の存する南北に延びる支丘陵の先端部に本遺跡が位置する。

この付近の遺跡分布状況を見ると、本遺跡の東方1.8km、現在水田となっている開析谷部に、本遺跡とほぼ同時期のやはり埋甕を伴う一斗内遺跡(昭和55年11月試掘調査)が確認されている。また、本遺跡の北側に谷をはさんで相対している丘陵西端には、中世以降に築かれた刑部内館が存するほか、東方に3kmの丘陵頂部には滑津館跡、西方1kmの丘陵西端には細杵城跡があるなど、中世には重要な拠点となっていたことがうかがえる。その他、丘陵尾根上には沼平塚群のほか、又兵衛田塚・土取場塚群・田畑塚群などいくつかの塚群が確認されているが、性格など詳細は不明な点が多い。(橋本博幸)

第2節 調査経過

又兵衛田A遺跡は、昭和53年6月に県文化センター遺跡調査課の表面調査によって発見された遺跡である。その後、昭和55年度の試掘調査によって、縄文時代後期の遺跡であることが確認され、約600㎡がその範囲としてくくられた。そして、昭和56年に東北農政局母畑開拓事業所から本遺跡が工事区域に入ることを提示され、各機関が事前協議の上記録保存ということになり、本調査に至った。



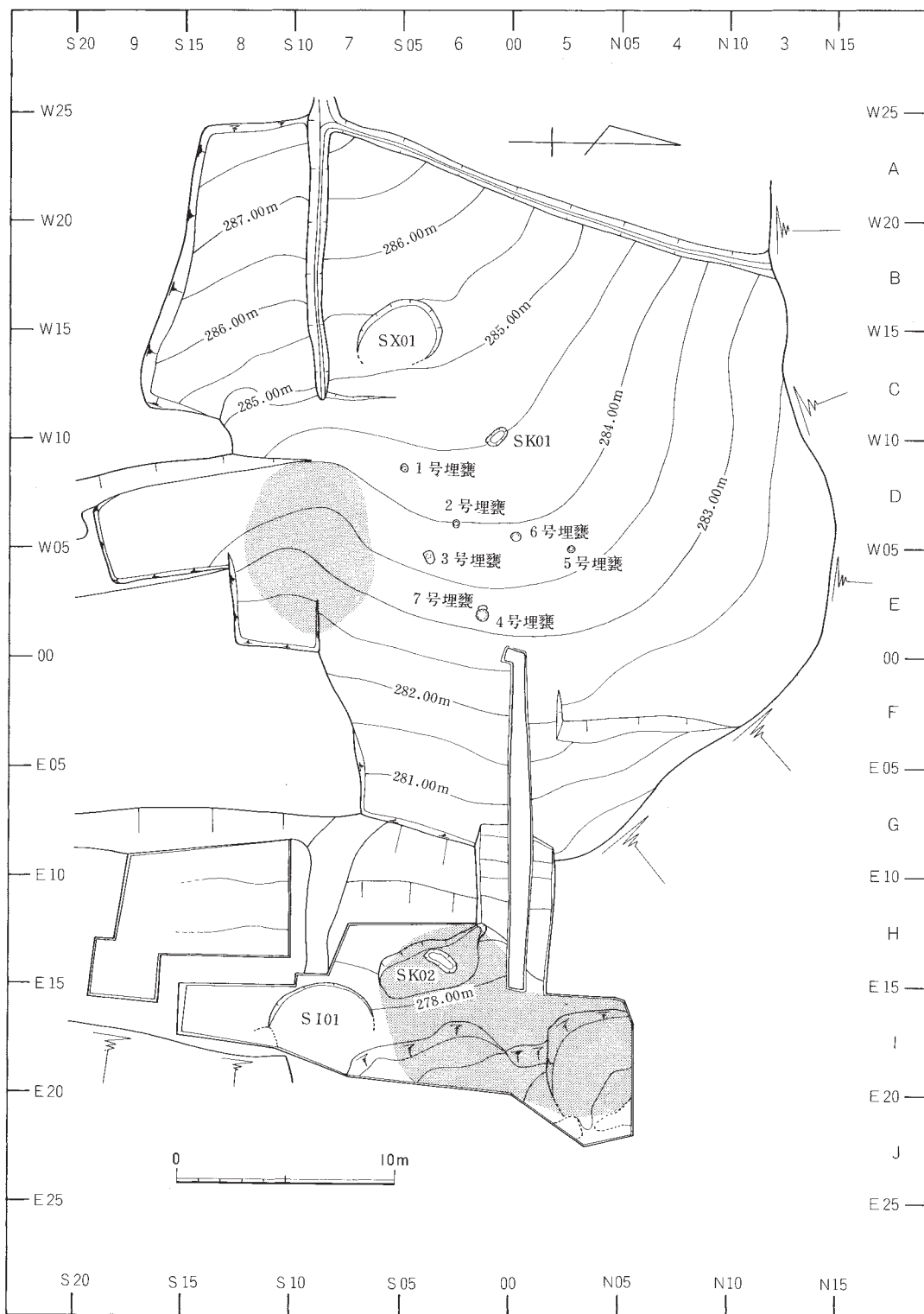
第1図 又兵衛田A遺跡周辺地形図

調査の方法は、調査区域が急な傾斜面と平坦面とからなるため、斜面に平行に任意の基準線を南北方向にとり、それを基に5m四方のグリッドを設定した。基準とした南北の軸線はN-1°-Wを示している。遺跡の基本層序は、昭和55年度の試掘の際にI層は耕作土、II層は黒褐色土で、その下が茶褐色粘質土の地山となることが確認されており、上部斜面部分は調査時間の短縮を考え、重機により遺構確認面上までの排土を行った。

調査面積は約1,100㎡である。確認された遺構は住居跡1軒、土坑2基、埋甕7基、特殊遺構1基であり、ほかに遺物包含層が2カ所検出された。調査にあたっては、小河川や水田に阻まれ本遺跡に至る道路がないため困難をきわめ、調査は9月7日から10月30日まで延35日を費やした。

発掘調査日誌概要

- 9月7日 本日より調査に入る。調査区内の下草刈り。
- 9月8日 ベンチマークの移動。遺跡の東側斜面裾部にNo.1 標高278.80m、傾斜面先端部北側にNo.2 標高281.40mを設定。また、A～Eトレンチを設定。本日から重機導入。
- 9月9日 基準杭設定開始。遺構検出作業継続。
- 9月11日 基準杭設定終了。南北を北より1～8、東西を西よりA～Jとする。S K01検出。
- 9月16日 4号埋甕の埋土より装飾玉が出土。本日より高橋調査員が加わり4名で担当。
- 9月17日 現在まで埋甕5基確認。遺跡の西側高部にB. M. No.3 標高285.30mを追加設定。
- 9月18日 H・I-6グリッドの表土はぎ、S K01精査。
- 9月29日 6号埋甕確認。Eトレンチを含むH・I-5～7グリッド部分が、遺物包含層であることを確認する。
- 9月30日 5号埋甕精査終了。Eトレンチから土偶出土。
- 10月2日 F-6グリッド内より弥生式土器片検出。
- 10月12日 4・6号埋甕精査。
- 10月14日 C～E-6・7グリッド内の黒色土部分が遺物包含層であることを確認する。4号埋甕の精査。
- 10月15日 遺跡の広がりを調べるため山林部にトレンチを設定し、調査に入る。7号埋甕検出。6号埋甕の精査終了。
- 10月19日 遺跡の東側桑畑にもトレンチを設定、(N～Rトレンチ)、範囲確認を行う。
- 10月20日 H・I-5～7グリッド内の遺物包含層の精査。
- 10月21日 遺跡全体図作成に入る。I-7グリッド内で竪穴状遺構(S I 01)を検出。
- 10月22日 N～Rトレンチの精査、埋戻し。H-6グリッド内でS K02検出。
- 10月23日 S I 01・S K02の精査。
- 10月27日 S I 01の補足調査を終え、本遺跡の調査を完了する。 (辺見陽一)



第2図 又兵衛田A遺跡遺構配置図

第2章 遺構と遺物

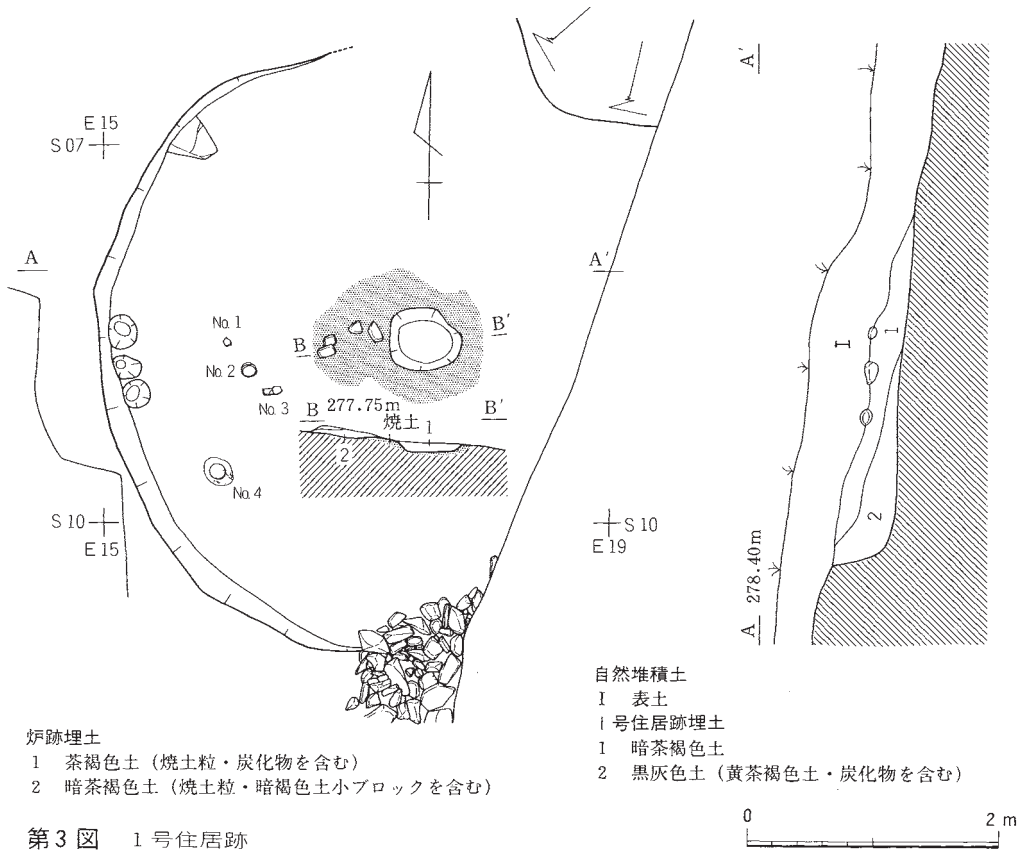
第1節 竪穴住居跡

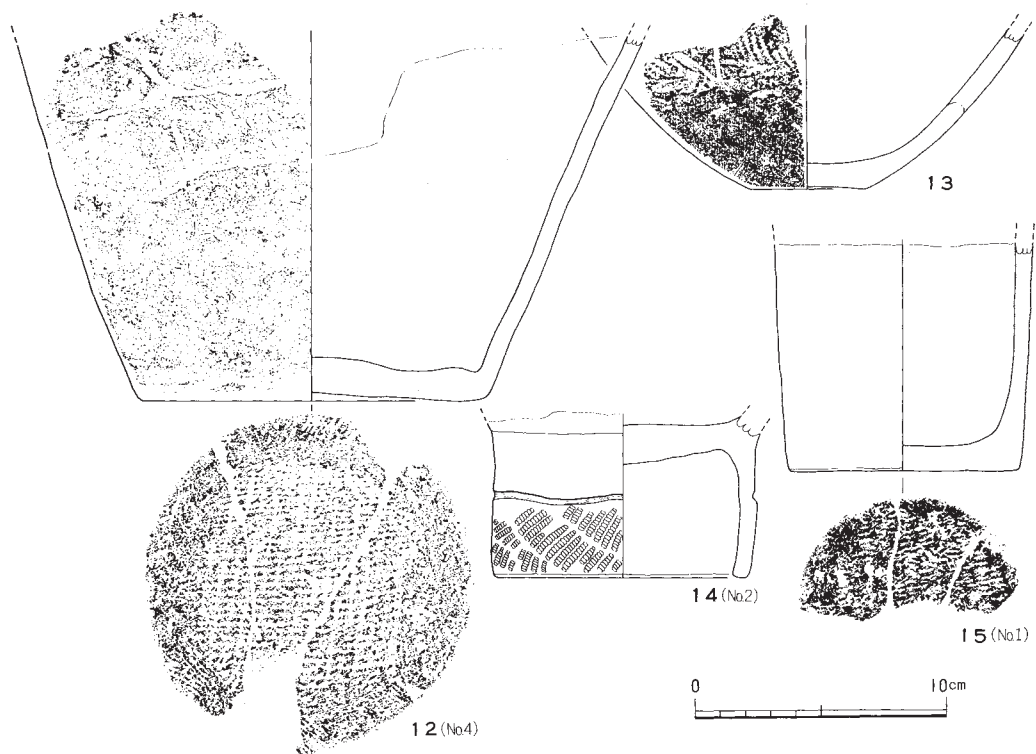
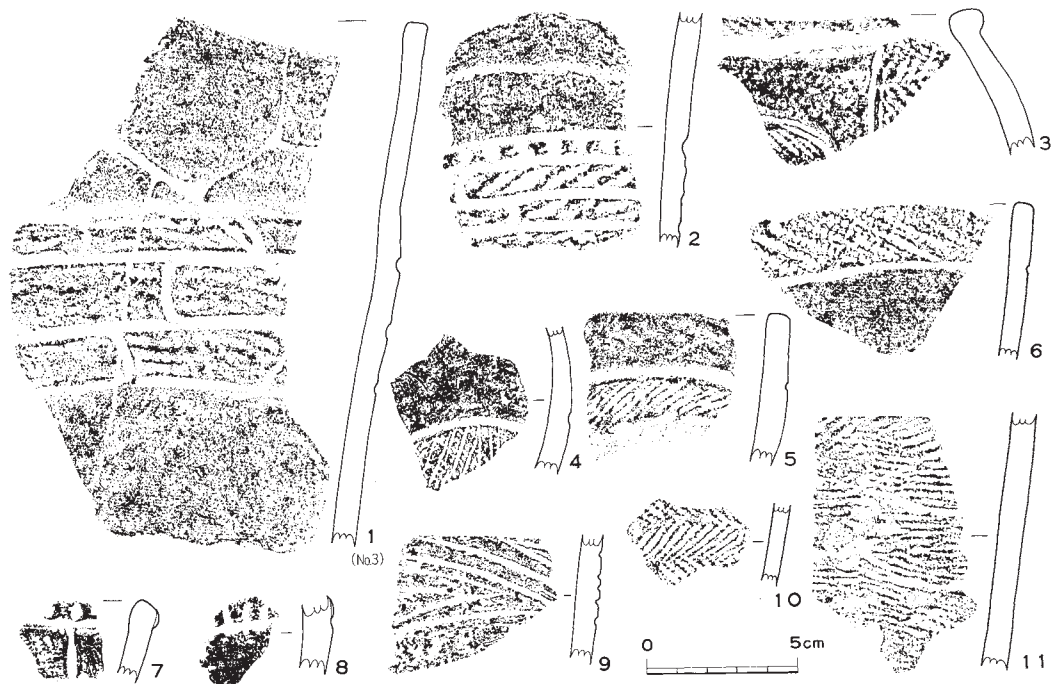
今回の調査において検出された竪穴住居跡は一軒だけである。終了間際に確認された遺構である。耕作等による削平・攪乱を受けて遺存状態は良好とは言えないが、本遺跡より住居跡が検出されたことは、予想外の大きな成果であった。

1号住居跡

遺 構(第3図, 図版3・4)

H・I-7・8グリッド内で検出された。本遺構の検出位置は、7基の埋甕が検出された丘陵先端の裾部にあたり、調査前は農道として利用されていた所である。遺構は表土下40cmで検出されたが、確認面でのプランは本遺構が東側に若干傾斜する部分にあり、東半が削平を受けている





第4图 1号住居跡出土土器

ことから明確に把握することはできなかった。また、本遺構の南側には拳大～人頭大の河原石が密集しているが、これは、後世に耕作等のための土留に利用した石群と考えられるものであり、本遺構の南壁部分を切っている。

本遺構の平面プランは径約4.75mの円形を呈していたと思われ、中央よりやや北側に炉を伴っている。東半は耕作等による削平を受けているため、床や壁は存しない。残存する床面は、地山層である黄茶褐色粘質土面を利用しており、ほぼ平坦である。検出された壁面は遺存状態の良い所で確認面より約35cmを測り、床面より約70度の傾斜角をもって立ち上がる。北西壁部分には、地山層に入っていた礫が露出している。ピットは西壁下で3個検出されたが、3個とも径20cm前後の円形を呈するものであり、深さは約20cmである。

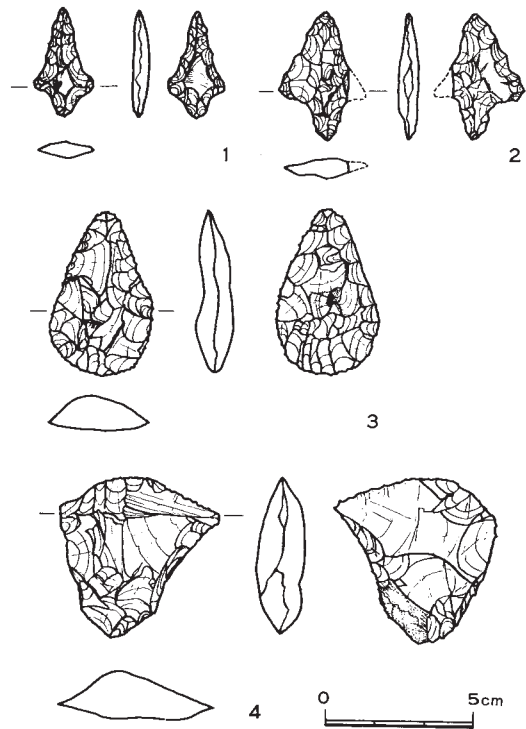
炉は遺構内中央よりやや北よりにある地床炉で、遺存状態は良くない。焼土面は東西140cm、南北110cmの範囲に広がっている。中央部は東西60cm、南北50cmの楕円形に若干窪んでおり、その下は非常にかたく焼けてしまっている。覆土は2層に分けることができ、上層は小礫を含む暗茶褐色土、下層は木炭や黄茶褐色土粒を含む黒灰色土であり、いずれも自然堆積の状況を示している。

遺物(第4・5図, 図版13・14・25)

床面及び埋土からの出土遺物は土器片が主であり、完全に復元できるものはなかった。出土土器は、I群2類に属する土器が中心である。12は底部から胴部下半にかけての遺存であり、内外面には不定方向のミガキが施されている。底部は網代編圧痕である。14は浅鉢形土器の台部と思われるものである。石器は、部分的に一次剝離面を残す有茎あるいは茎部が丸味をもった石鎌3点(1・2・3)、また剝片に部分的に2次剝離を加えた不定形石器1点(4)が埋土より出土している。

まとめ

本住居跡は、前述のように遺存状態は悪く東半を削平されており、正確な規模は不明である。本住居跡の床面や埋土中より出土した土器片は、土器分類からI群2類に属することから、構築



第5図 1号住居跡出土石器

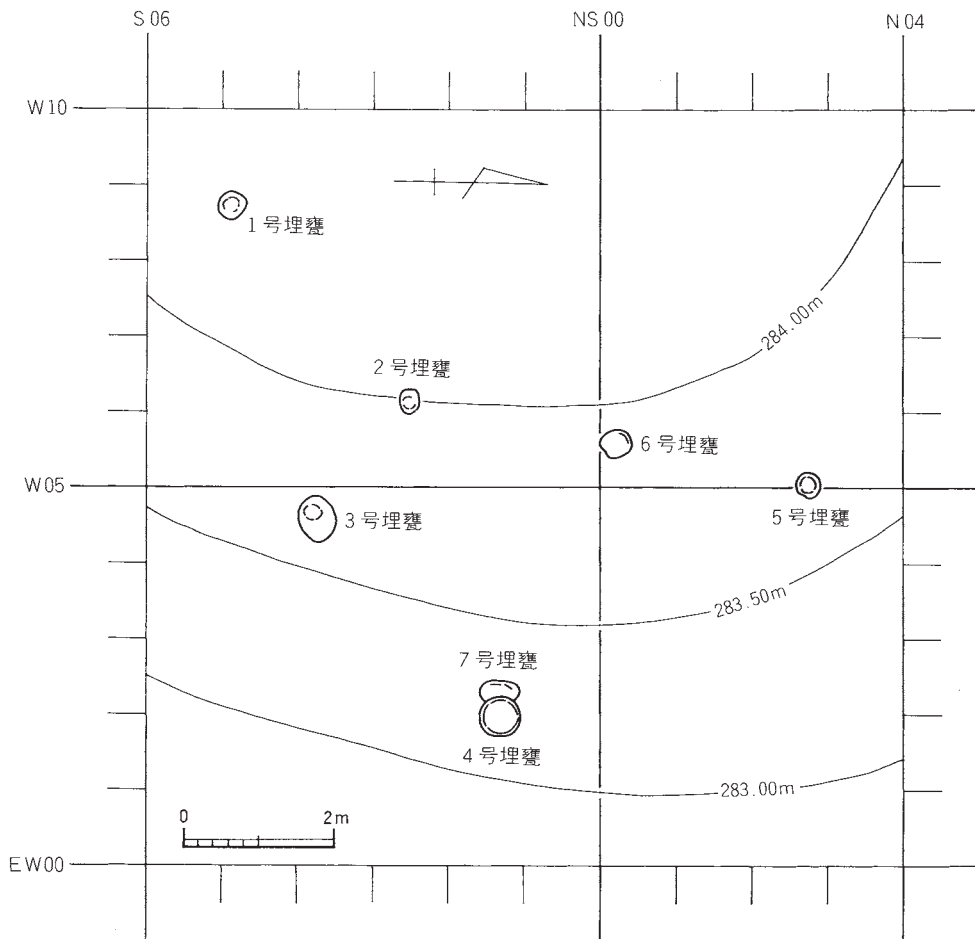
時期は、それ以降の時期が考えられる。

第2節 埋 甕

D・E-6・7グリッド内において7基の埋甕が検出された。その分布状況は、傾斜面に沿って南北に点在している。後世の削平などにより遺存状態は良好とはいえず、埋甕の上部は破壊されていたが、埋設土器はすべて正立状態にあることを確認した。以下各埋甕について説明を加える。

1号埋甕（第7図，図版5）

D-6・7グリッド内において検出された埋甕で、埋甕群中最西端に位置する。検出面は地山で



第6図 埋甕位置図

ある粘質茶褐色土上面である。埋甕は、楕円形を呈する掘形に納められており、耕作等により上半部を欠損したと考えられる。

土器を埋置するための掘形は、長軸38cm、短軸31cmを測る。検出面からの深さは東西方向の緩斜面に埋設されているため東西壁で若干異なる。西壁で14cm、東壁で10cmを測る。掘形の中央には、胴部上半を欠損した深鉢形土器が正立状態で埋置されていた。埋甕内には、上層に暗茶褐色土、下層に黒灰色土の2層が確認された。これらから少量の木炭を出土したが他には何も検出されなかった。また掘形と埋甕の間には地山とは明らかに違う少量の小礫を含む暗茶褐色土が詰め込まれている。

遺物(第8図, 図版12)

埋置されていた深鉢形土器は、胴部上半部を欠損している。残存胴部最大径26cm、残存高15cm、底径8.5cmを測る。器面は磨滅のため荒れており胎土の砂粒が浮上している。残存する胴部上半には、羽状縄文が施されているのが、不明瞭ながら観察される。底部中央には、径3cm程の穴があいているが、磨滅のため人為的に穿孔されたのか否かは不明である。胎土に砂粒・砂礫を含み、色調は茶褐色を呈する。器面が荒れており、調整等は不明確である。内面に炭化物の付着が部分的に観察される。

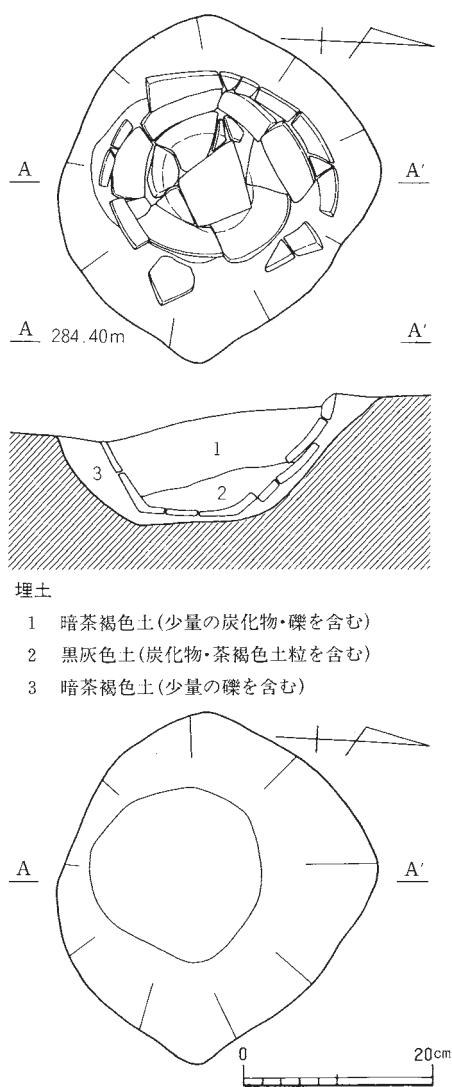
まとめ

胴部上半を欠損した埋甕を検出した。土器は器面が荒れており、一部文様・調整等不明瞭な部分があるが、土器分類によりI群3類に位置づけることができよう。(高橋信一)

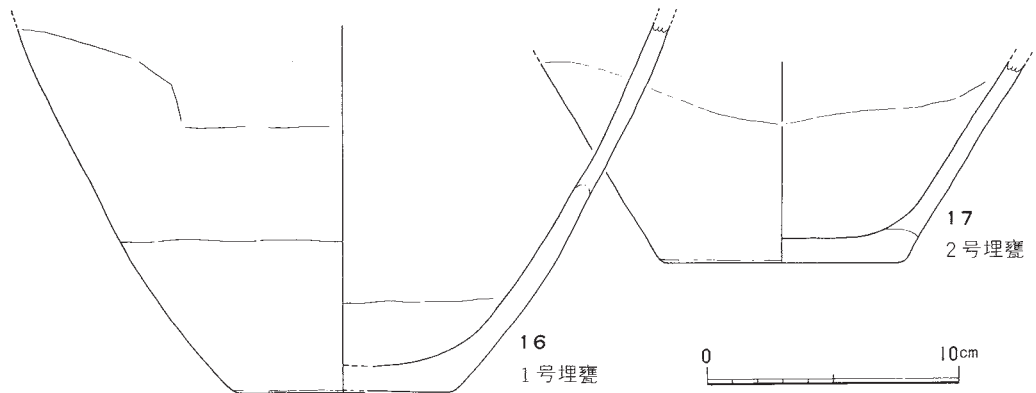
2号埋甕

遺構(第9図, 図版5)

D-6グリッド内において地山である茶褐色粘質土上面で、埋甕の一部と掘形を検出した。3号埋甕の西2m、6号埋甕の南4mに位置する。確認面において、埋甕の上部はすでに耕作等に



第7図 1号埋甕平面図・断面図



第8図 1・2号埋甕

よって破壊され欠損していた。

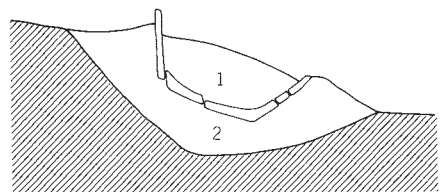
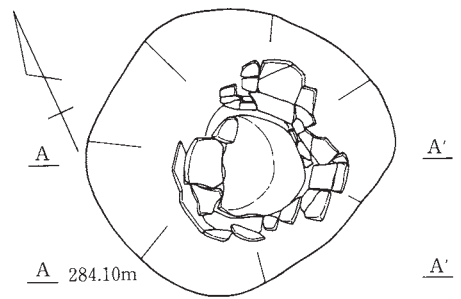
土器を埋置する掘形は、東西33cm、南北30cmの不整円形を呈している。確認面からの深さは、東側に傾斜した部分にあるため一定ではないが、中央部で12cmを測る。断面すり鉢状のピットである。埋甕は掘形内のやや南東よりに胴部上半を欠き、残存部は細片となった状態で検出された。埋置状況は正立状態であるが、約20度東に傾いている。掘形内には、焼土や木炭粒を若干含む暗茶褐色土を入れ土器を固定している。埋置土器内堆積土は、焼土・木炭粒を含む暗褐色土の単一層である。

埋 甕(第8図, 図版12)

埋置されていた土器は深鉢形を呈していたと思われるが、胴部上半は欠損している。残存する胴部最大径は19.2cm、高さ8cm、底径は9.5cmを測る。器面は磨滅が著しい。胎土は砂粒を含み、色調は暗赤褐色を呈している。残存する胴部内側上部には、炭化物が付着しているのが観察される。

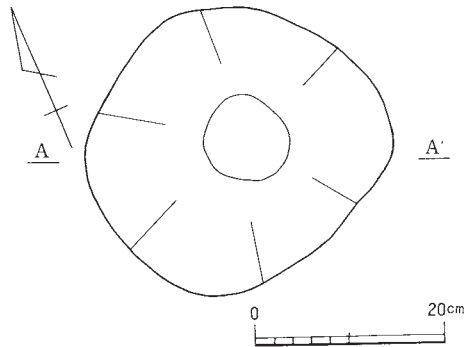
ま と め

埋置土器は、底部から胴部下半の一部を残すのみと遺存状態が悪く、器形・文様などを明瞭にとらえることはできなかった。また、本跡の構築時期は明



埋土

- 1 暗褐色土(焼土・木炭粒を少量含む)
- 2 暗茶褐色土(焼土・木炭粒を少量含む)



第9図 2号埋甕平面図・断面図

確に把握できないが、土器分類ではI群3類の時期が考えられる。

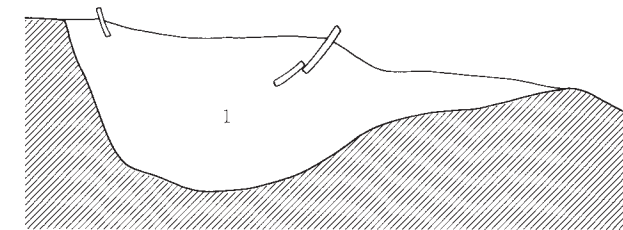
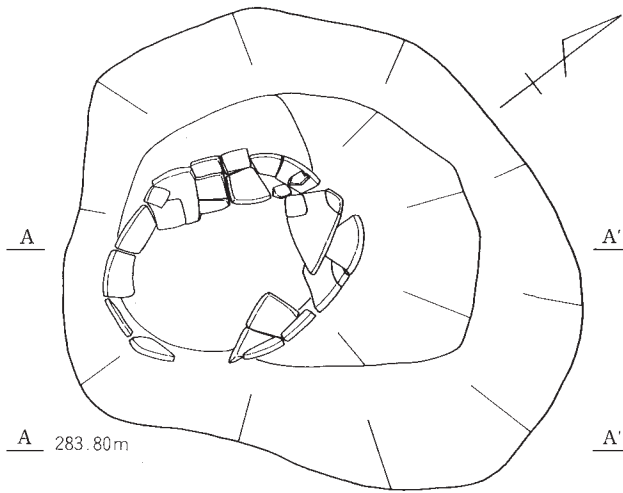
(橋本博幸)

3号埋甕

遺 構(第10図, 図版6)

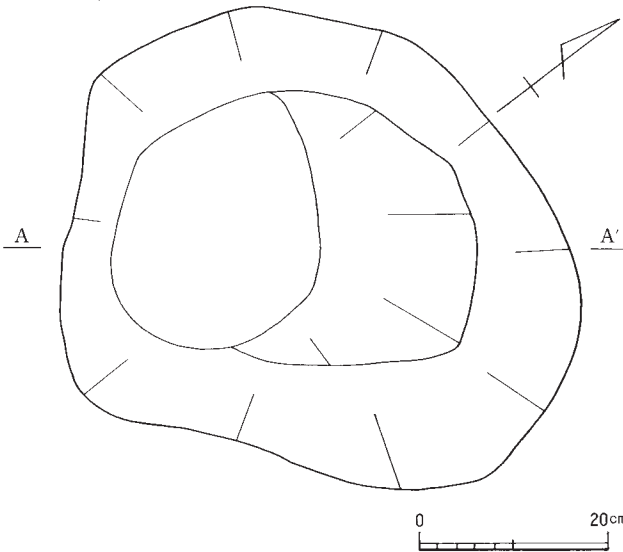
E-6グリッド内において検出された埋甕で、埋甕群中のほぼ中位に位置する。検出時において不整楕円形の掘形と埋置土器を確認した。当埋甕は、埋設状況や掘形の状態を観察するため、検出時の平面図作成後、断ち割りを実施し、地山まで掘り込んだ。

検出面は地山である茶褐色枯質土上面である。茶褐色粘質土は、小礫・黒色土粒・灰褐色粘質土粒を含み粘性強くしまっている。検出面より20cm程で、灰褐色枯質土層となる。この層は、茶褐色粘質土ブロック・小礫を含み粘性強くしまっている。埋甕の掘形はこの灰褐色粘質土層まで掘り込まれている。掘形の規模は東西57cm, 南北48cmを測り、確認面よりの最大深度は17cmである。埋置土器は、胴部破片のみの確認であり底部は出土しなかったことから、底部は破壊した土器を埋置したものと考えられる。口縁部から胴部にかけては、耕作等によって破壊されたものか、胴部だけを掘形に埋置したものか現段階では不明である。埋土においても、埋置土器部と掘形埋土を区別することは困難であった。埋土は、少



埋土

1 暗茶褐色土(少量の炭化物を含む)



第10図 3号埋甕平面図・断面図



第11図 3号埋甕

量の炭化物・小礫を含む暗茶褐色土である。

遺物(第11図)

埋置されていた土器は、粗製深鉢形土器である。破片のため全体像を把握し、図化することは困難であった。検出時の埋設土器の胴部径は26cmを測った。器面は磨滅が著しく脆弱である。胴部外面には、1.5cm単位で10本前後の櫛状工具を用いて、波状の文様が施されている。波状の文様は破片のためはっきりしないが、曲線状に施されている。器面は再加熱を受け変色した部分も観察されるが、色調は茶褐色を呈する。器面内外には部分的に炭化物が付着している。胎土は、砂粒を含みザラザラしている。

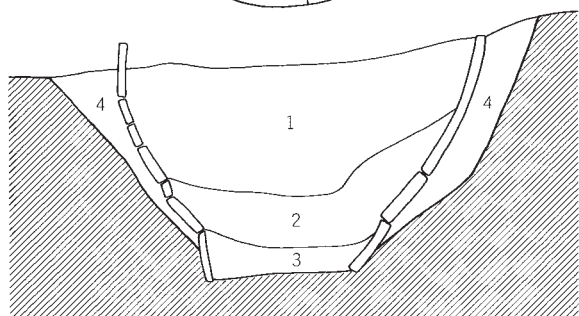
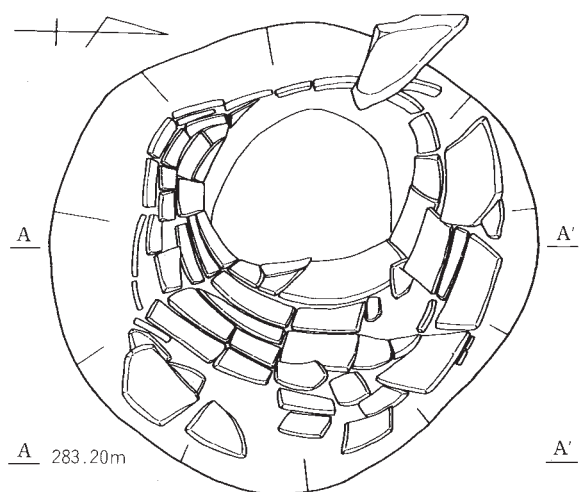
まとめ

胴部破片のみの確認であり、口縁部から胴部にかけては耕作等によって破壊されたか、胴部破片だけを埋置したのか現状では不明である。破片のため全体を把握することは困難であるが、文様等により縄文時代後期に位置づけられよう。(高橋信一)

4号埋甕

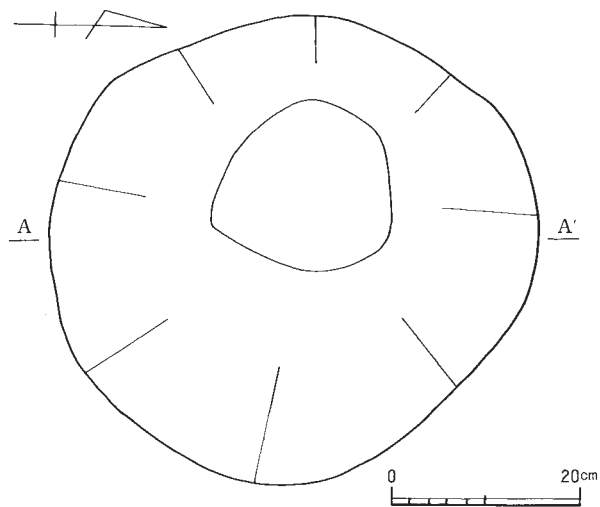
遺構(第12図, 図版6)

E-6グリッド内において検出された埋甕で、埋甕群中最東端に位置する。昭和55年度の試掘調査において、4号トレンチ内で検出された遺構である。本遺跡中比較的規模の大きい埋甕である。遺構検出時において、円形にまわる埋置土器と掘形を確認した。埋置土器の口縁部は耕作等によりすでに破壊されている。本埋甕の精査時に、西側部分において重複する7号埋甕を確認した。新旧関係では、4号埋甕が7号埋甕を切っている。



埋土

- 1 暗茶褐色土(茶褐色粘質土ブロック・礫・木炭を含む)
- 2 暗茶褐色土(少量の黒色土を含む)
- 3 灰茶褐色土(茶褐色粘質土を含む)
- 4 暗茶褐色土(粘質茶褐色土ブロックを含む)



第12図 4号埋壺平面図・断面図

本跡の掘形平面プランは、長軸52cm、短軸50cmを測るほぼ円形に近い形を呈している。確認面からの深さは、緩斜面にあるため東西で若干異なるが24～28cmを測り、底面は長軸20cm、短軸19cmの不整形円形を呈している。壁面は、約50度の傾斜をもって立ちあがる。掘形の中央には、底部より胴部下端部を欠いた土器が正立状態で埋置され、土器埋置後茶褐色粘質土ブロック・小礫を含む暗茶褐色土で埋められている。埋置土器内堆積土は上層より少量の木炭を含む暗茶褐色土(1層)、黒色土粒を含む暗茶褐色土(2層)、灰茶褐色土(3層)の3層に分けられる。本遺構検出時に装飾玉の破片が出土したが、埋置土器内堆積土の1層より出土した玉の破片と接合した。

遺物(第13図、図版12)

埋置された土器(19)は粗製の深鉢形土器で、焼成後底部および胴部下端部を欠損したものである。口縁部から胴部上半は、耕作等によって破壊されたものと思われる。残存高33.3cm、胴部最大径39.8cmを測る。器面は著しく荒れており調整等は不明であるが、外面に羽状縄文が横方向に施文されているのが観察される。また、外面の一部に黒斑がみられる。器厚は6mm程で、断面に3.5cm単位の粘土紐痕が観察される。胎土は砂粒を含み、色調はやや赤味をおびた茶褐色を呈する。

装飾玉(第14図, 図版27)は, 蛇紋岩製の勾玉状のものである。全面非常に丁寧に研磨されている。長さ1.5cm幅0.8cm, 厚さ0.7cmを測る。孔は両面穿孔であり, 径は0.4cmを測る。

まとめ

焼成後底部および胴部下半を欠損した粗製深鉢形土器が埋置されていた。本遺構検出時に装飾玉の破片が出土し, 埋置土器内堆積土の1層より出土した玉の破片と接合してい

る。このため装飾玉は, 埋置時に土器と供に埋納されたものと考えられる。埋置土器は, 文様等により縄文時代後期に位置づけられよう。また精査時に, 西側部分において重複する7号埋甕を検出したが, 新旧関係では本遺構が7号埋甕を切っている。(高橋信一)

5号埋甕

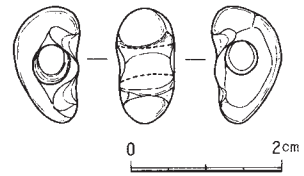
遺 構(第16図, 図版6・7)

調査区域の西側高部のD-5, E-5グリッドに跨り, NS00, W05の基準杭から2.7m北寄りの所で確認された。本遺跡で検出された7基の埋甕中最北にある。埋甕上部は削平等により欠損しているが, 残存部の遺存状態は良好である。土器を埋置している掘形は, 確認面では明確にプランをとらえることができ, 東西33cm, 南北31.5cmの円形を呈しており, 底面も東西20.7cm, 南北20cmの円形である。確認面からの深さは20cmを測り, 壁面は約70度の角度をもって立ち上がる。土器の形状より若干大きめに掘り込んだだけの掘形である。

掘形の中央には, 胴部上半を欠失した土器が埋められているが, 土器の中にもう1個の土器を



第13図 4号埋甕



第14図 4号埋甕内出土玉

内包しており、その中より拳大の河原石が検出された。本遺構は黄茶褐色枯質土の地山面で検出されたが、埋置土器内堆積土の状態は上層が茶褐色土、下層が黒褐色土に分けられる。掘形部分には、地山層とは明らかに異なる黄茶褐色土が埋められている。

遺物(第15図, 図版12)

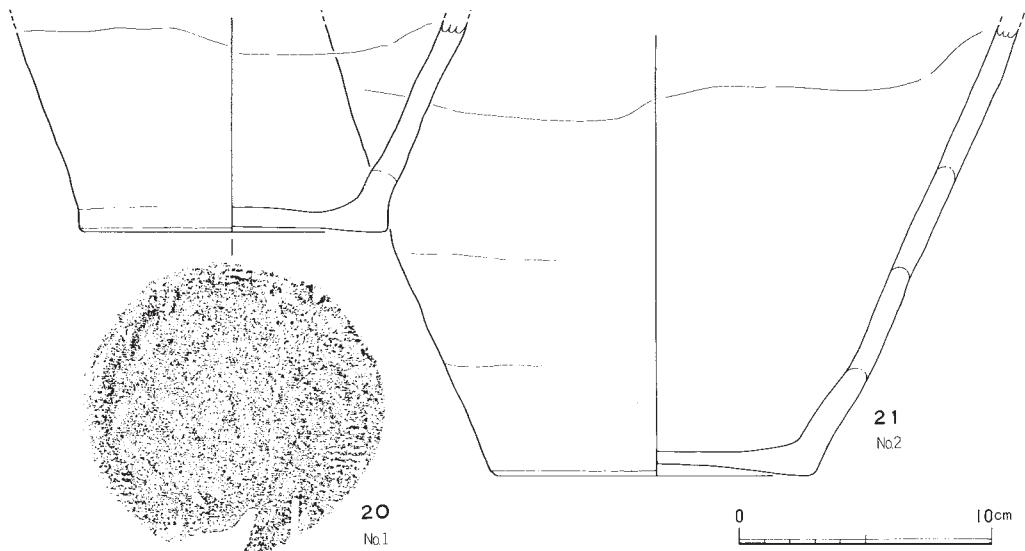
埋置されていた土器は、底部を下にし重なる状態で2個検出された。どちらも深鉢形土器と思われるが、胴部上半を欠くため明確でない。内側の土器(20)をNo.1, 外側の土器(21)をNo.2として取り上げた。

No.1土器は現存胴部最大径17.2cm, 現在高8.3cm, 底径12cmを測る。器面内外ともにナデ調整が行われている。底部はややあげ底風であり、周辺部に網代編圧痕を残し、中央はミガキが施されている。焼成は良好であるが胎土には砂粒多く含み、色調は茶褐色を呈している。胴部内面には一部炭化物の付着がみられる。

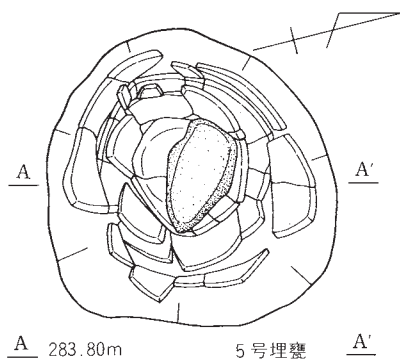
No.2土器は現存胴部最大径27.3cm, 現存高17.3cm, 底径12.5cmを測る。器面内外の調整はNo.1土器同様ナデが施されており、縄文などの施文はみられない。部分的に粘土紐積み上げの痕跡が観察される。また器外面に黒班がみられる。胎土には砂粒を含み、色調は茶褐色を呈している。

まとめ

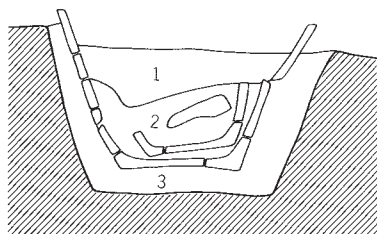
本埋甕は、正立状態で埋置されていたが、胴部上半はすでに欠損していた。土器埋置状況は、土器の中にもう1個の土器を内包するという他とは異なった形態を示し、また、その中に拳大の河原石が入っていたことは、非常に興味深い。埋置土器は器面に文様等がなく明確な時期はつかめないが、他と同様縄文時代後期後半に位置づけられるものと思われる。(辺見陽一)



第15図 5号埋甕

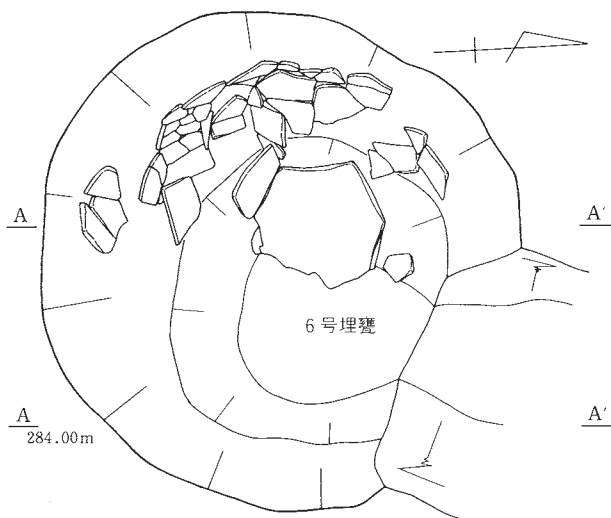


A 283.80m 5号埋甕 A'

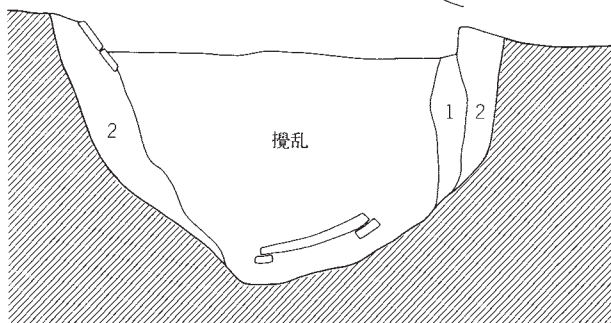


埋土

- 1 茶褐色土 (黒色土粒・土器片を含む)
- 2 黒褐色土 (多量の黒色土粒を含む)
- 3 黄茶褐色土

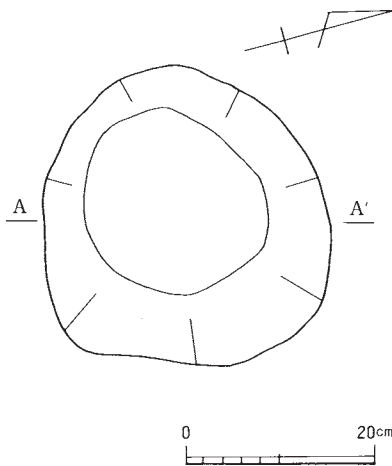


A 284.00m 6号埋甕 A'

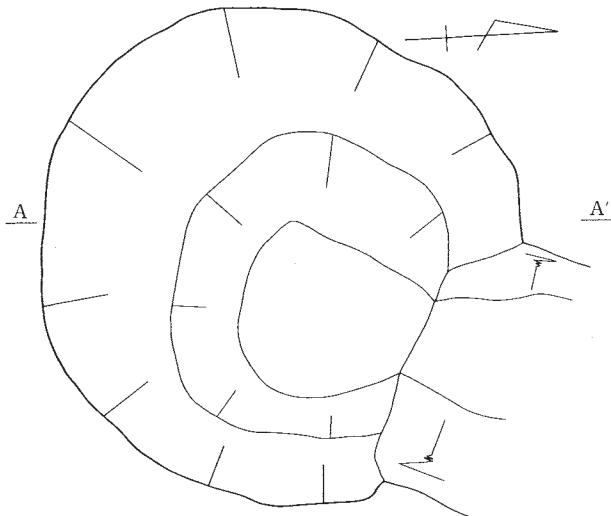


埋土

- 1 暗褐色土 (炭化物を少量含む)
- 2 暗茶褐色土 (炭化物を少量含む)



0 20cm



第16図 5・6号埋甕平面図・断面図

6号埋甕

遺 構(第16図, 図版7)

D-5グリッド内において検出された埋甕で、5号埋甕の2m南側に位置している。本埋甕は当初楕円形を呈する土坑と考えられたが、確認面を精査している段階で落ち込みの西側で土器片が検出され、埋甕であることが確認された。本遺構の東半は、桑根による攪乱を受け破壊されている。また、埋置土器も攪乱を受けている。

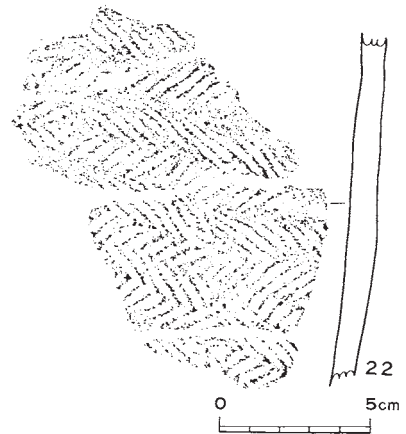
土器埋置のための掘形は、北東部を攪乱ピットによって破壊されているが、平面プランは東西54cm、南北53cmの円形を呈し、地山である茶褐色粘質土を約28cm掘り込んで構築している。埋置土器は、掘形内の西側部分に細片となって胴部の一部が検出されただけであり、これらは攪乱により定位置にあるものは少なく、土器がどのように埋置されたかは不明である。掘形の埋土は木炭を少量含む暗茶褐色土であるが、埋置土器内堆積土は桑根による攪乱のため不明瞭である。

遺 物(第17図)

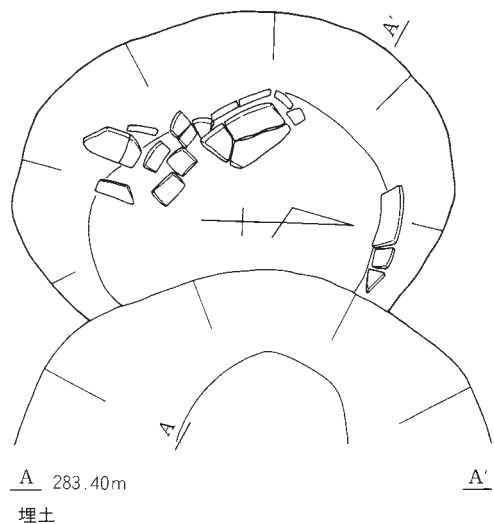
埋置土器は、桑根による攪乱や耕作等の削平により遺存状態は非常に悪い。細片によると、粗製の深鉢形土器で、外面には羽状縄文が施文されていることが観察される。胎土は砂粒を含み、色調は暗赤褐色を呈している。

ま と め

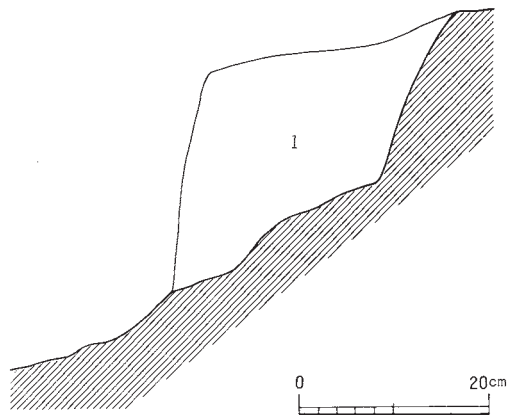
本遺構は、攪乱が著しく掘形は東側を破壊され、また、埋置土器も胴部小破片のみであった。土器は器形や文様を明瞭に把握することはできなかったが、土器分類によるとI群3類に属する土器と考えられる。(橋本博幸)



第17図 6号埋甕



1 暗茶褐色土(茶褐色粘質土小ブロック・木炭を含む)



第18図 7号埋甕平面図・断面図

7号埋甕（第18図，図版7）

E-6グリッドにおいて検出された埋甕で，西側を4号埋甕に破壊されており，全体像を把握するには至らなかった。

掘形の平面プランは，東側が4号埋甕によって破壊されており，推定であるが楕円形を呈すると考えられる。南北長で47cmを測る。底面は東側に急な勾配を持ち，確認面からの深さは15～23cmを測り，断面形は「U」字状を呈すると考えられる。埋置された土器は，4号埋甕や木根により破壊され細片となっており，胴部の一部が北西側で検出されただけである。埋土は暗茶褐色土で粘質茶褐色土ブロック・炭化物を含んでいる。

検出された埋置土器は，器面が荒れており，接合する破片も少なく調整・施文・器形等は不明であるため時期を断定することは困難であるが，遺構の切り合い関係から4号埋甕より古い時期が考えられる。（高橋信一）

第3節 土坑・特殊遺構

本遺跡において，土坑が2基，特殊遺構が1基検出されているが，本稿ではこれらについて説明を加える。土坑は西側高部と丘陵裾部の遺物包含層部分からの検出であり，特殊遺構は本遺跡中最も西側で検出された遺構である。

土 坑

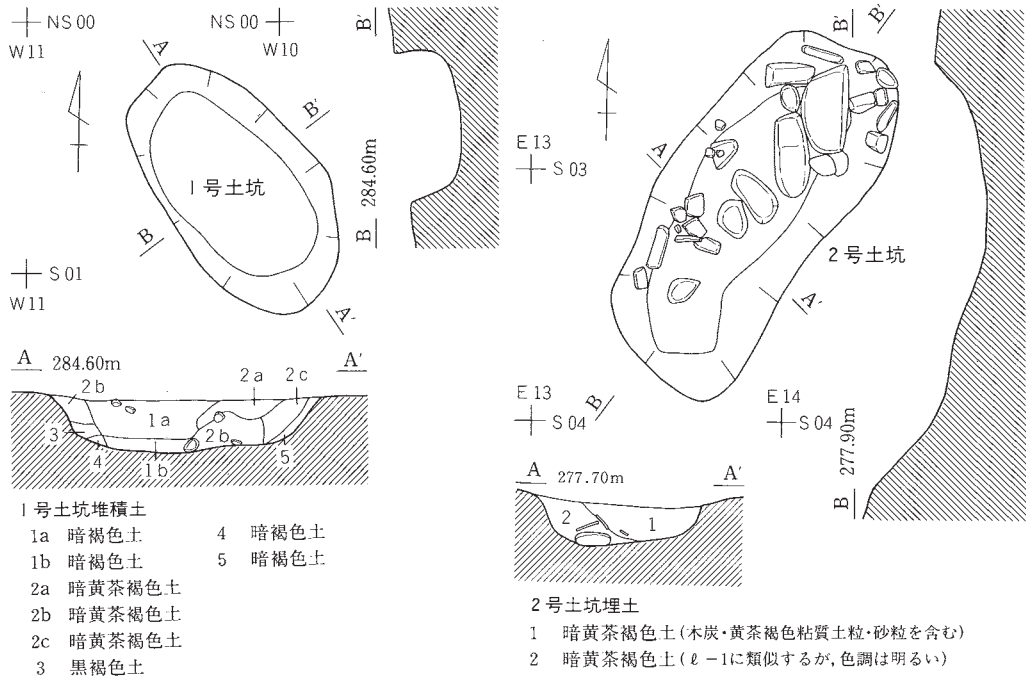
1号土坑 SK01（第19図，図版8）

C・D-6グリッド内において検出された土坑で，黄茶褐色粘質土の地山上面で検出された。平面プランは長軸1.07m，短軸0.6mの楕円形を呈しており，確認面からの最大深度は24cmを測る。本土坑は地山を掘り込んで構築しており，底面はほぼ平坦であるがそれほど堅くはなっていない。壁面は40～50度の傾斜度をもって立ち上がり，断面形は鍋底状を呈している。埋土は，暗褐色土・暗黄茶褐色土が主体をなしているが，状況から自然堆積と思われる。

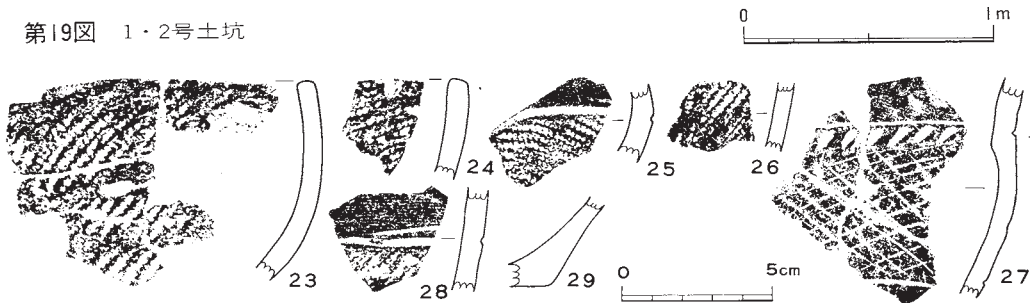
本土坑からの出土遺物は磨石(27)だけであり，また，重複関係も全くないため構築時期や性格等については不明である。（橋本博幸）

2号土坑 SK02（第19・20図，図版8）

本土坑はH-6グリッド内で検出された。ここは埋甕群が存在する丘陵先端部の斜面裾部であり，1号住居跡の北側3.5m付近の若干窪んだ平坦面に位置している。確認面においてプランは明瞭に捉えることができたが，10～30cm大の河原石が多量に入っており，掘り込みは困難を極め



第19図 1・2号土坑



第20図 2号土坑出土土器

た。平面プランは長軸1.5m、短軸0.67mを測る長楕円形を呈しており、長軸は南北方向を示している。確認面からの深さは約20cmを測る。壁は外方に大きく開いて立ち上がる。底面は地山である黄茶褐色土面であり、全体的に凹凸が認められる。埋土は含まれるものによって2層に分けられるが、暗黄茶褐色土が主体をなしている。本土坑内には、河原石が多量に混入しているが、それらは大部分底面より浮いた状態にあり、自然に堆積したものなのか、あるいは人為的なのか判断し得ない。また、本土坑の性格も不明である。

遺物は、埋土内から十数片の縄文土器片が出土しているが、細片だけであり図化できるものはなかった。これらは土器分類からI群2・3類に属するものであり、本土坑の時期は縄文時代後期中葉以降であろう。

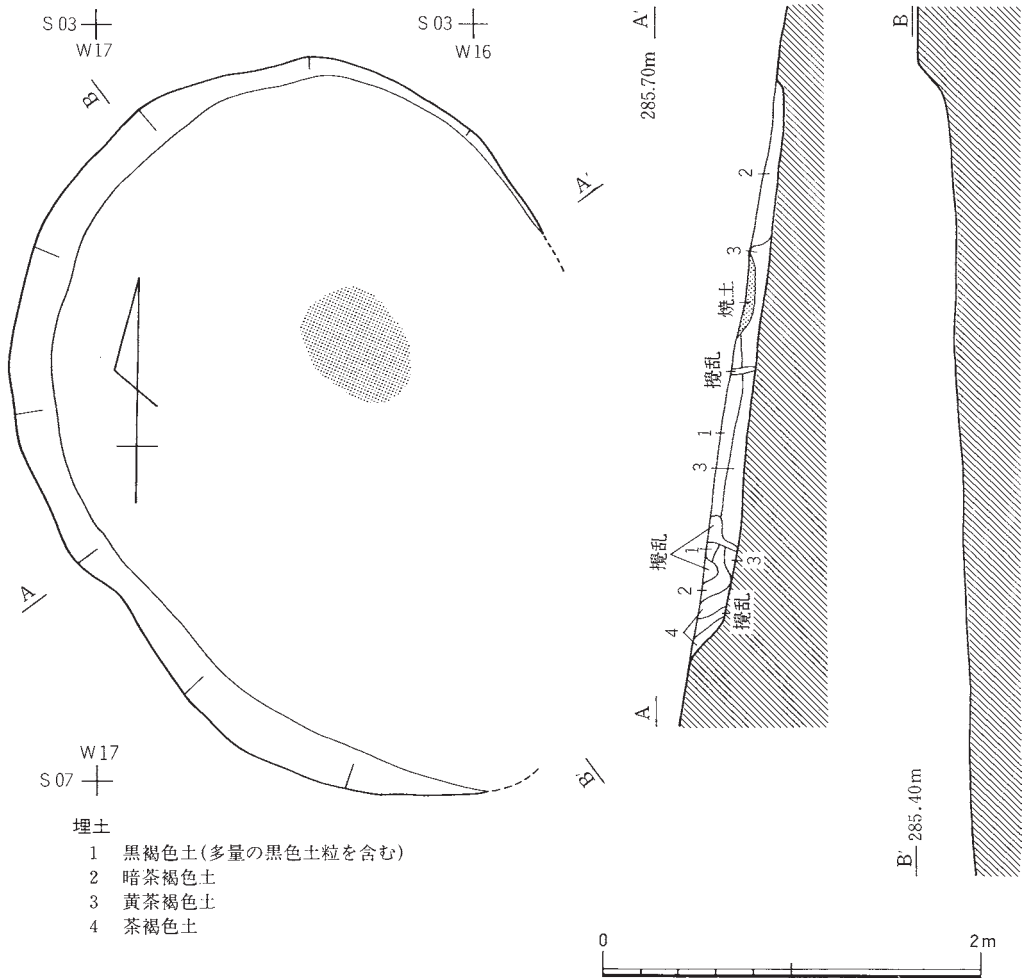
(橋本博幸)

特殊遺構

1号特殊遺構 S X01 (第21図, 図版9)

調査区域の西側高部B・C-6・7グリッドの中央部で検出された遺構であり、本遺跡中最西端に位置している。確認面における本遺構の堆積土状態は、中央部に黒褐色土、そのまわりに茶褐色土や黄茶褐色土が分布しており、地山である黄茶褐色粘質土と類似する色調のため、平面プランを明瞭に捉えることはできなかった。

遺構は北東方に傾斜した所にあり東側部分は遺存しないが、平面プランは東西約3m、南北約4mを測る楕円形を呈していたものと思われる。壁高は西側部分の遺存状態が良く20~30cmを



第21図 1号特殊遺構

測るが、東側にいくにしたがい低くなり地山面と同位になる。底面は東側に若干傾斜しており、また軟弱である。堆積土はほぼ3層に分けられ、上層から黒褐色土・暗茶褐色土・最下層に黄茶褐色土が堆積している。全体的に桑根などの攪乱を受けている。

本遺構の中央部よりやや北側に径約50cmの焼土面を検出したが、これは、1層目(黒褐色土)が焼けて赤変したものであり、本遺構が埋没した後加熱されたものと思われる。

遺物の出土はなく、本遺構の性格や構築された時期等は不明である。(辺見陽一)

第4節 遺物包含層・その他

本遺跡からは、遺物包含層が2カ所検出された。出土した遺物をとりあつかう上で、調査区域に一辺5m単位のグリッドを設定し、東西列を北から1～8、南北列を西からA～Jの各グリッド名を付し、区割によって遺物を収納した。遺物包含層には、遺跡の範囲を確認するために、付近に設定したトレンチが重なる部分もあるので、ここでは前にトレンチについて説明を加え、後包含層についてふれたい。

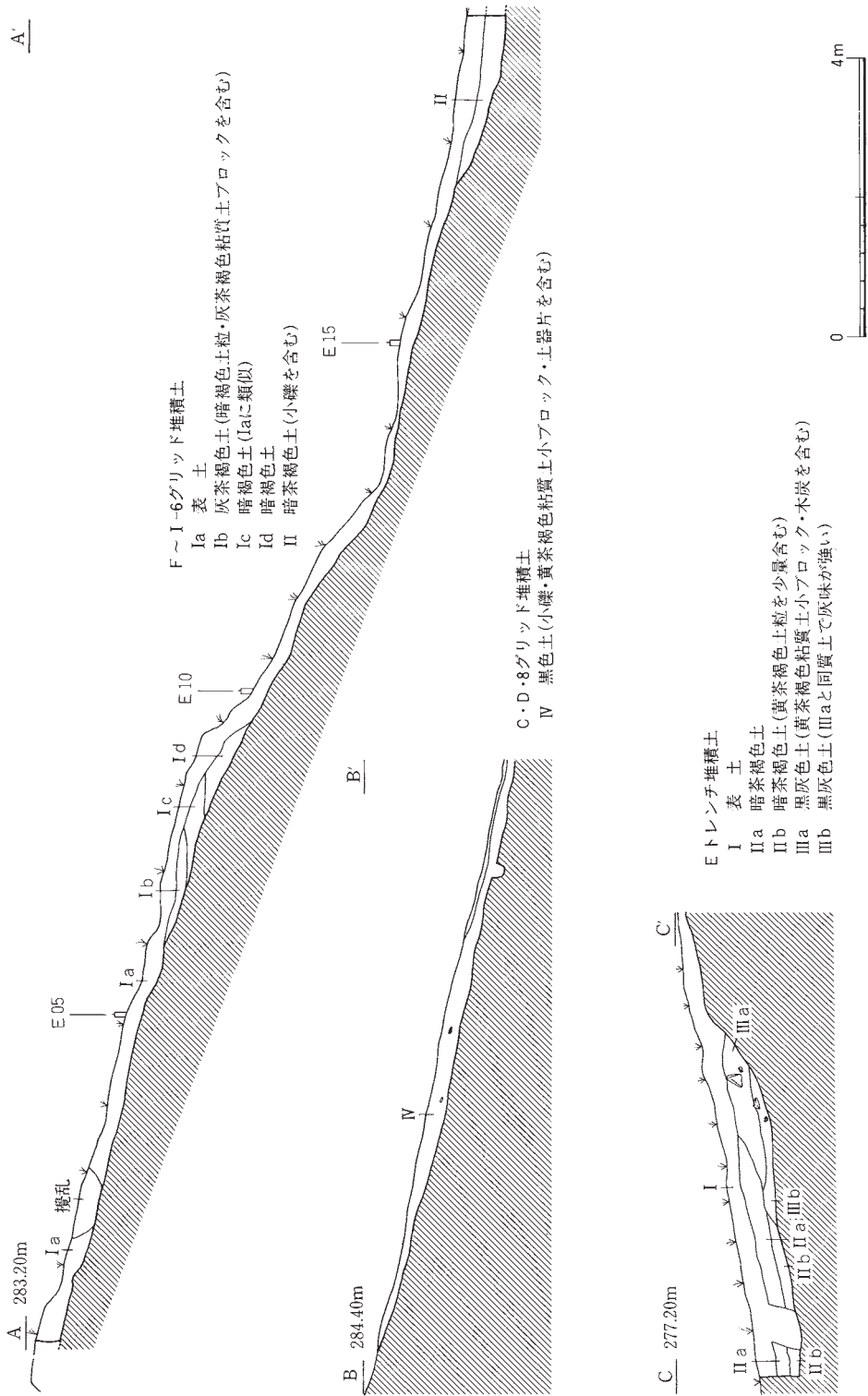
トレンチ

トレンチは、丘陵裾部の桑畑にA～E、N～Rトレンチ、埋甕の分布する丘陵裾部の南と西側の山林部にF～Mトレンチの計18本を設定した。設定したトレンチは、場所に制約され大きさは一様ではない。

A～Eトレンチは、丘陵裾部の北から東側にかけて1m×5mを基本とし、設定したトレンチでA～Dトレンチからは堆積土中より若干縄文土器片が出土しただけであったが、Eトレンチの黒灰色土層からは多量の縄文土器片や石器が出土した。このEトレンチ部分は丁度後述する遺物包含層にあたったものであり、遺物の収納は初めトレンチ名を付して行っていたが、グリッドを設定した後はグリッド名を付し収納することにした。

N～Rトレンチは、東側丘陵裾部の一段下がった部分に設定した。ここは、遺物包含層が検出されたI-5～7グリッドの東方に隣接する調査区域外の小さな桑畑の部分であり、遺跡のひろがる可能性を考え地権者の承諾を得て、桑木の間5本のトレンチを設定し掘り込みを行った。

その結果、各トレンチの土層堆積状況は、耕作土(表土)下に、II層の黄茶褐色土や茶褐色土があり、地山上にIII・IV層の黒褐色土層が順次堆積している。これらは、傾斜面の下方(東側)に厚い自然な堆積状況を示している。遺物の出土はほとんど黒褐色土層からである。N・Rトレンチでは十数片の縄文土器片が出土しただけであったが、O～Qトレンチでは割合多くの縄文土器片が出土している。Oトレンチからは、浅鉢形土器の台部と思われる39が出土している。これは、

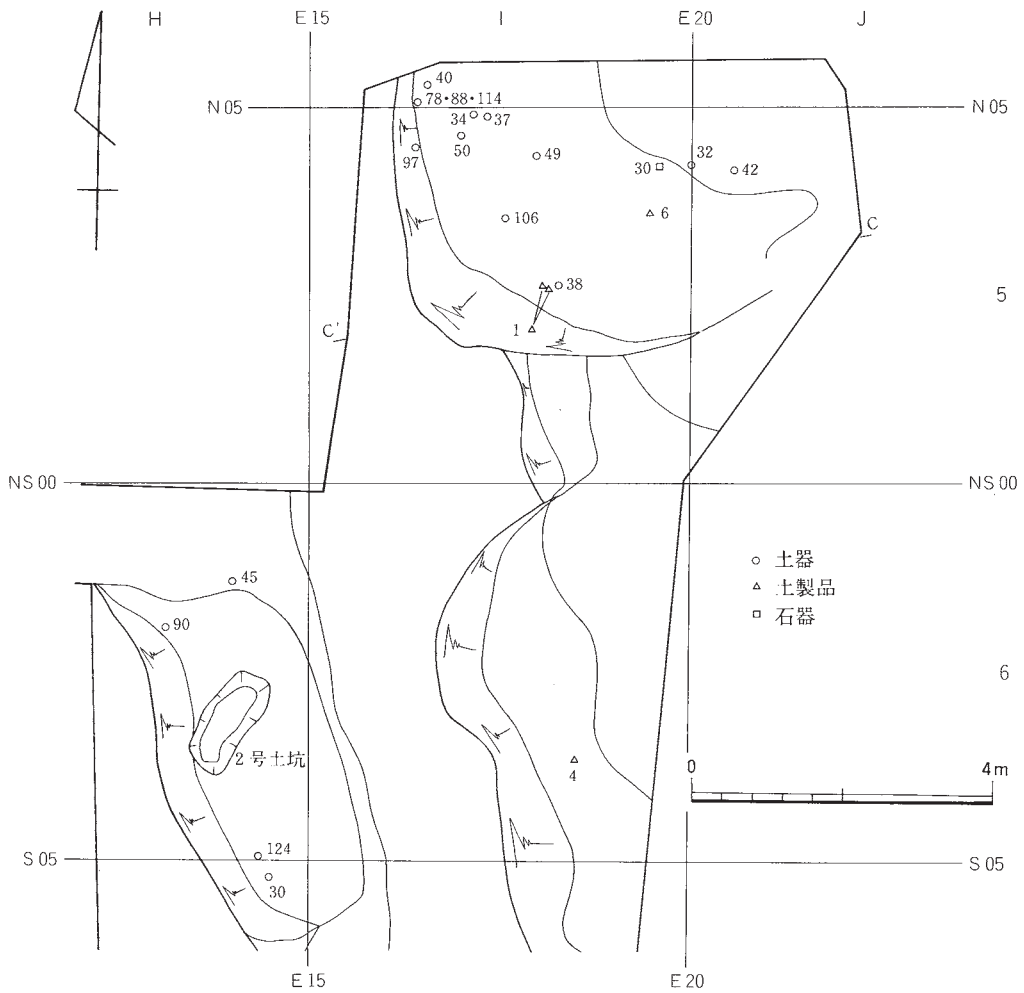


第22図 又兵衛田A遺跡土層断面図

沈線によって区画した部分に矢羽根状のきざみを施したものであり、貼付け瘤や焼成前にあけた円形あるいは三角形の孔を有するものである。また、Qトレンチからはロクロ使用の土師器杯の破片が2点出土している。

各トレンチ内で検出されたⅢ・Ⅳ層の黒褐色土層は希薄ではあるが遺物を包含していることから、Eトレンチ部分から東方に延びる遺物包含層は、この部分にもひろがっていたものと思われる。遺構は検出されなかった。

F～Mトレンチは、調査区域の南・西側の山林部に、本遺跡の範囲を確認するために設定したトレンチである。表土下20cmで黄茶褐色土の地上面となり、遺構・遺物の検出はなかった。結果として、これら山林部には遺跡が延びる可能性は少ないと思われる。(辺見陽一)



第23図 H～J-5・6グリッド遺物出土位置図

遺物包含層

遺物包含層は、D・E-7・8グリッド部分とH-6、I-5・6・7グリッド、J-5グリッド部分で検出された。

D・E-7・8グリッド部分で検出された遺物包含層は、丘陵先端部の東に面する部分に形成された小さな谷地部にある。この付近には、地山である黄茶褐色土層上に黒色土が堆積しているが、この層に遺物が包含される。表土直下の層であり、傾斜面の下方に厚い堆積状況を示している。

遺物は縄文時代晩期に比定される土器片が主体をなしており、他に縄文時代後期や弥生時代中期の土器片が単一層中に混在している。

出土した遺物は、ほとんど小破片であり、復元図化できるものは少なかった。55は、縄文時代後期初頭に比定される土器片であるが、1片だけ出土している。

H-6、I-5・6・7、J-5グリッド部分において検出された遺物包含層は、丘陵傾斜面の東に面する裾部にあたり、複雑に窪む地形を呈しているところに形成されている。J-5グリッドの東端には、土留のために積み上げられたと思われる河原石群が南北に並んでいる。その北東側には現在小倉川が西流している。

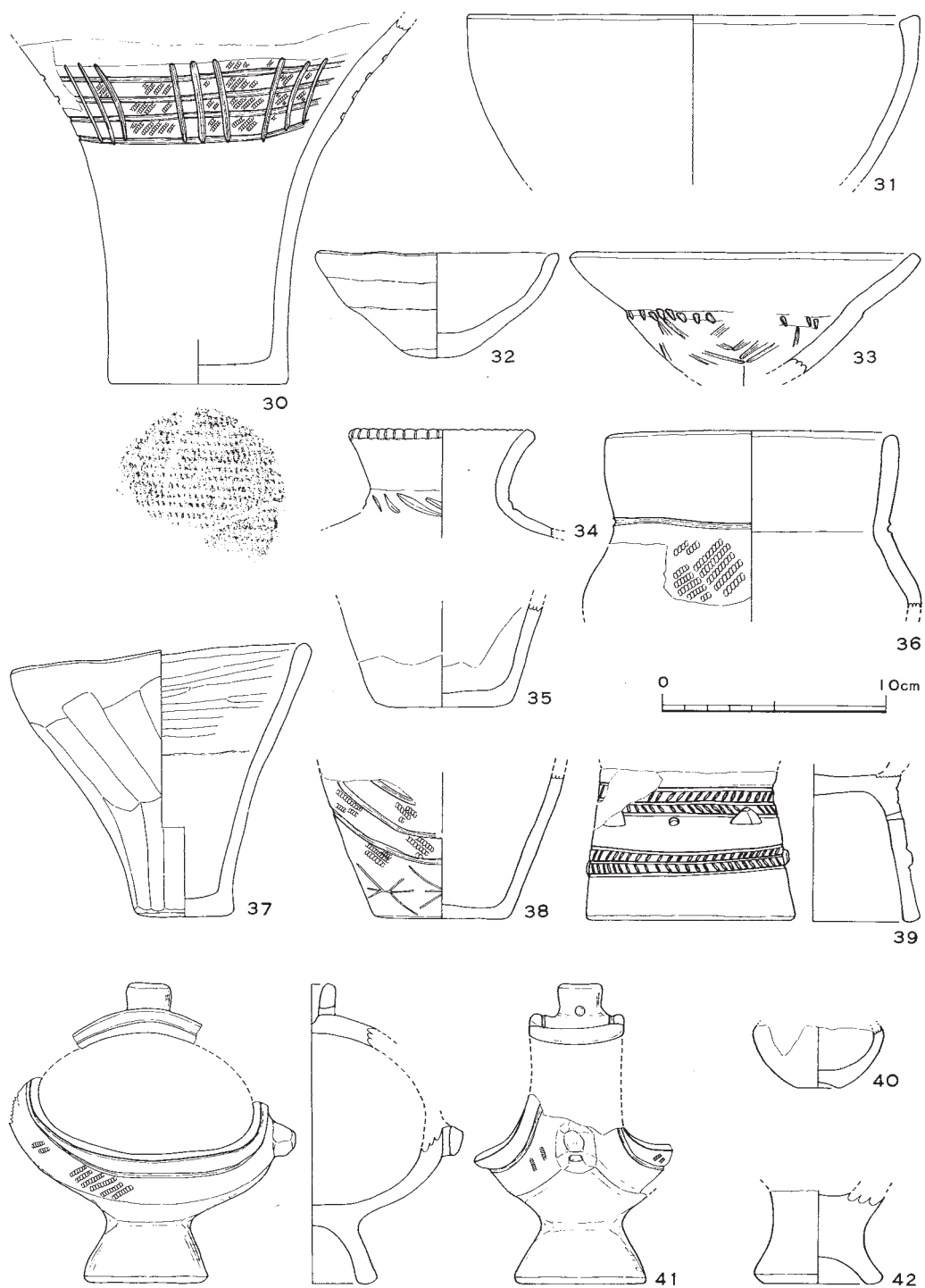
本部分の層序は表土下4層に分層でき、上層からⅡa・Ⅱb・Ⅲa・Ⅲb層とした。Ⅱa・Ⅱb層は暗茶褐色土層で、黄茶褐色土粒の混入状態によって2層に分けられ、また、Ⅲa・Ⅲb層は黒灰色の同質の土層であるが、土色の明暗と遺物の包含状態で分層できた。これらは自然堆積の状況を呈している。遺物は、各層から出土しているが、Ⅲb層に特に集中している。遺物収納に際しては、明確にⅡa・Ⅱb層、Ⅲa・Ⅲb層が区別できない場合、それぞれⅡ層・Ⅲ層として取り上げている。出土した遺物は縄文土器片が大部分であり、そのほか石器・土製品がある。

【土器】I群2・3類に属すると思われる深鉢形・浅鉢形の土器片がほとんどであり、復元図化できたものは極一部である。図化した30・35・37、48~51は深鉢形土器であり、31~33、43~46は浅鉢形土器である。他に壺形を呈する土器34・36、釣手付土器41、ミニチュア土器40などがある。ここでは特徴的な土器について若干ふれ、他はすべて一覧表に記した。

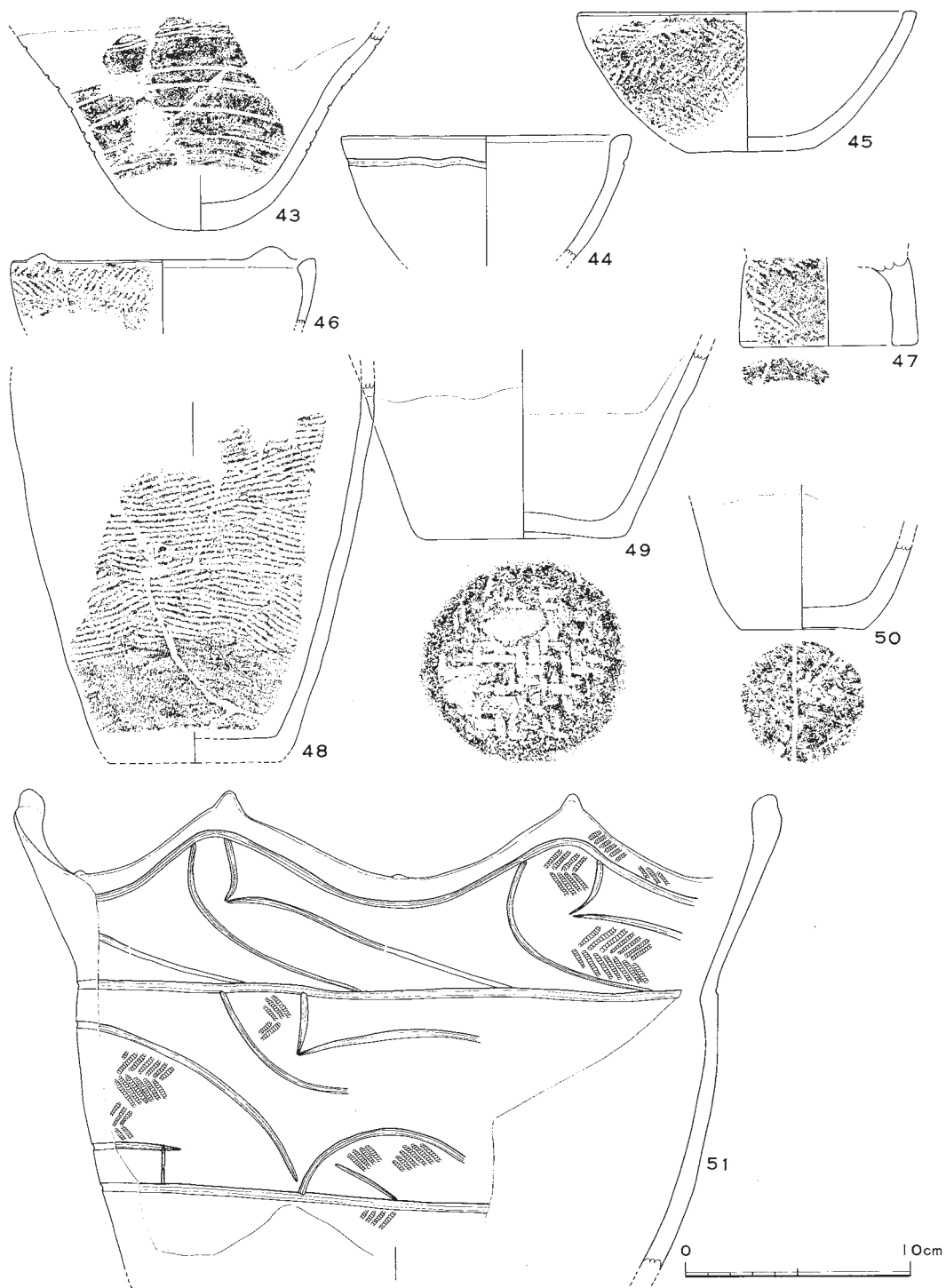
30は口縁部を欠くが、器形は、口縁部は波状を呈し大きく開く深鉢形土器と思われる。文様は胴部上半部に地文に施された縄文は、平行沈線文によって区画された部分だけを残して磨消しが行われ、器面は丁寧な研磨されている。底面には網代編圧痕を有している。

51は口縁部から胴部にかけて $\frac{1}{3}$ 遺存する土器である。形態は波状口縁の深鉢形と思われる。文様は、弧状沈線文による入組状の磨消縄文によって形成されている。縄文は横位の羽状縄文が施されている。

41は釣手付土器である。遺存状態は悪く、釣手部分の両側、胴部の一部と片方の突起部分を欠



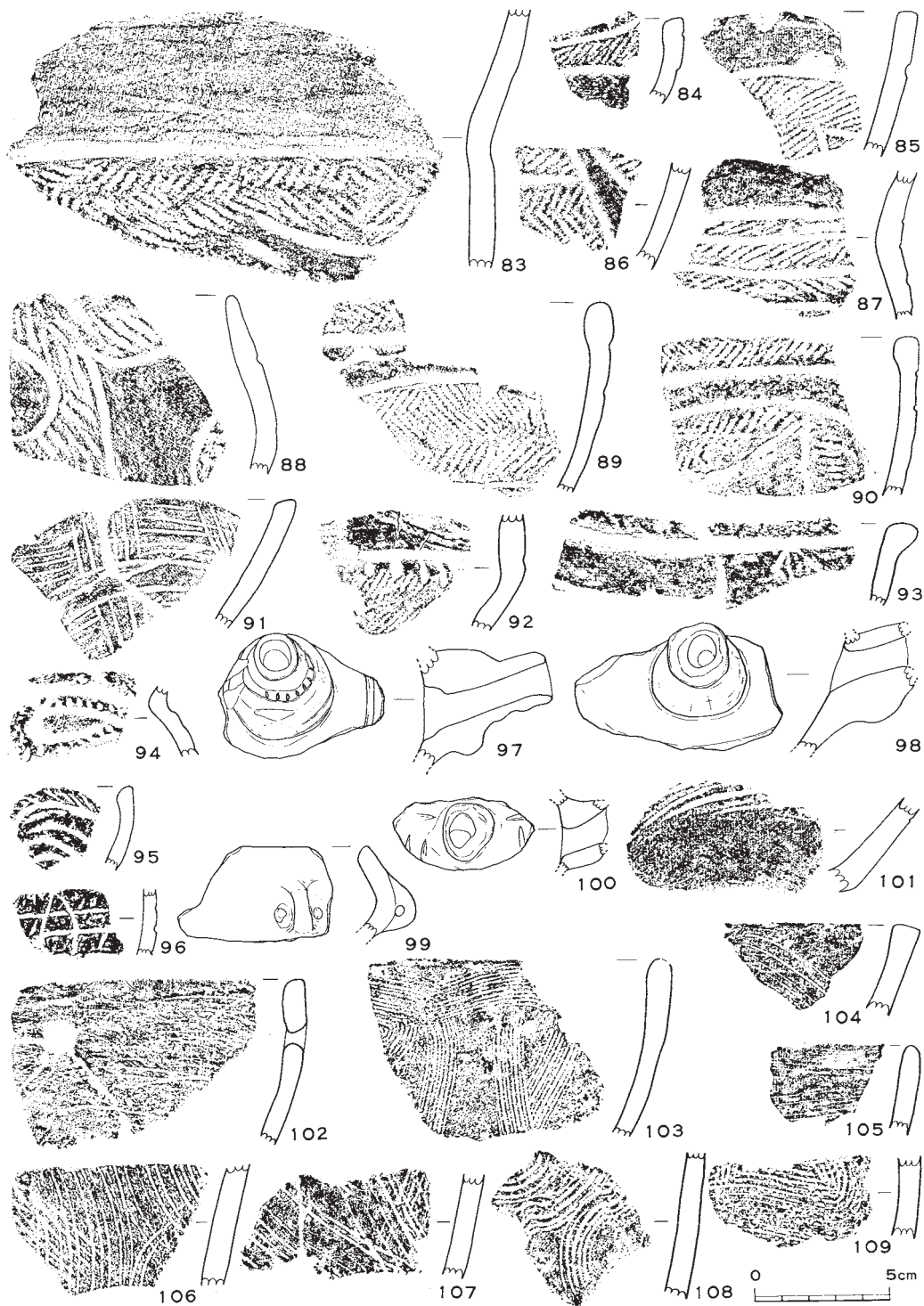
第24図 遺物包含層出土土器(1)



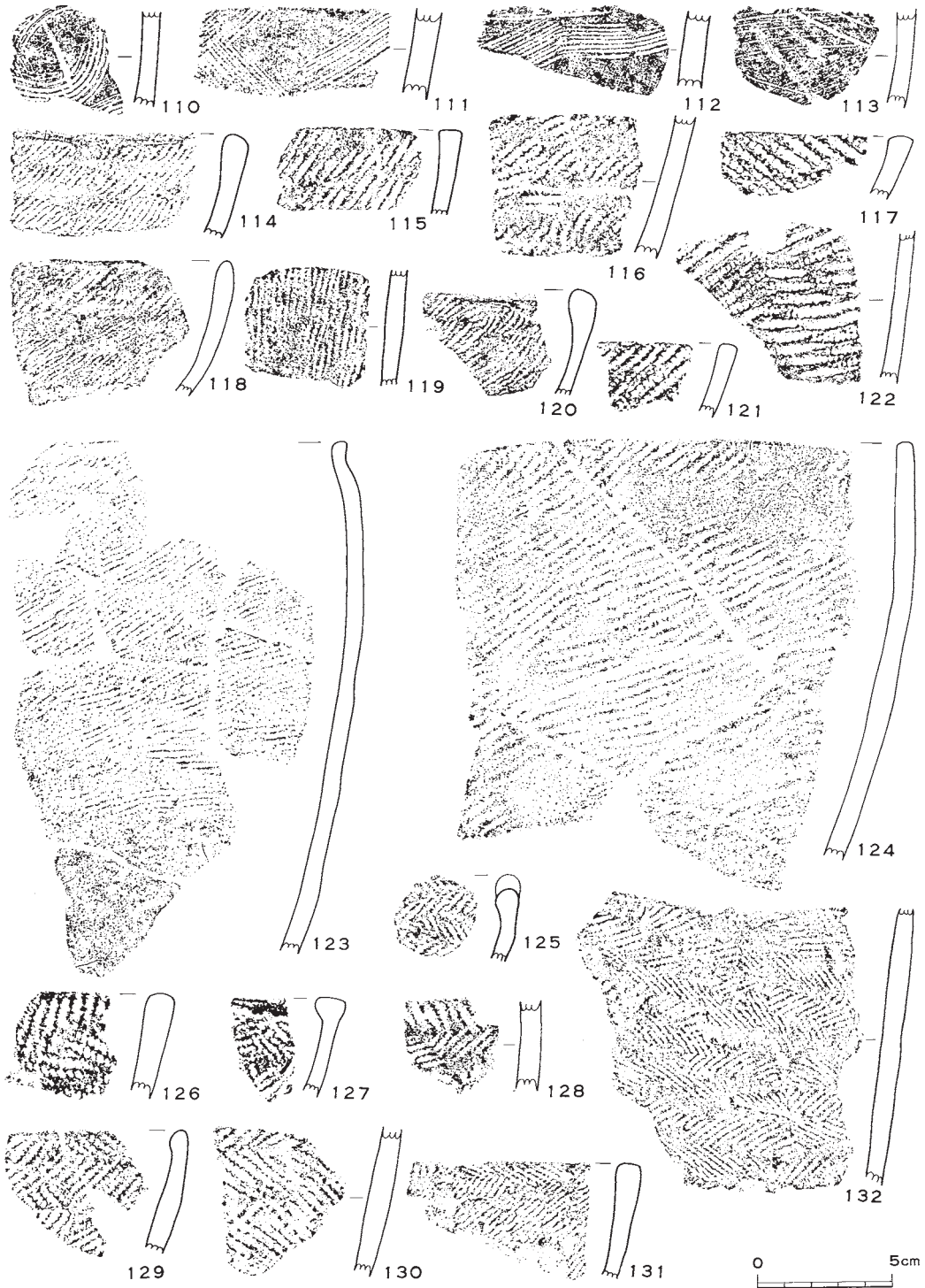
第25図 遺物包含層出土土器(2)



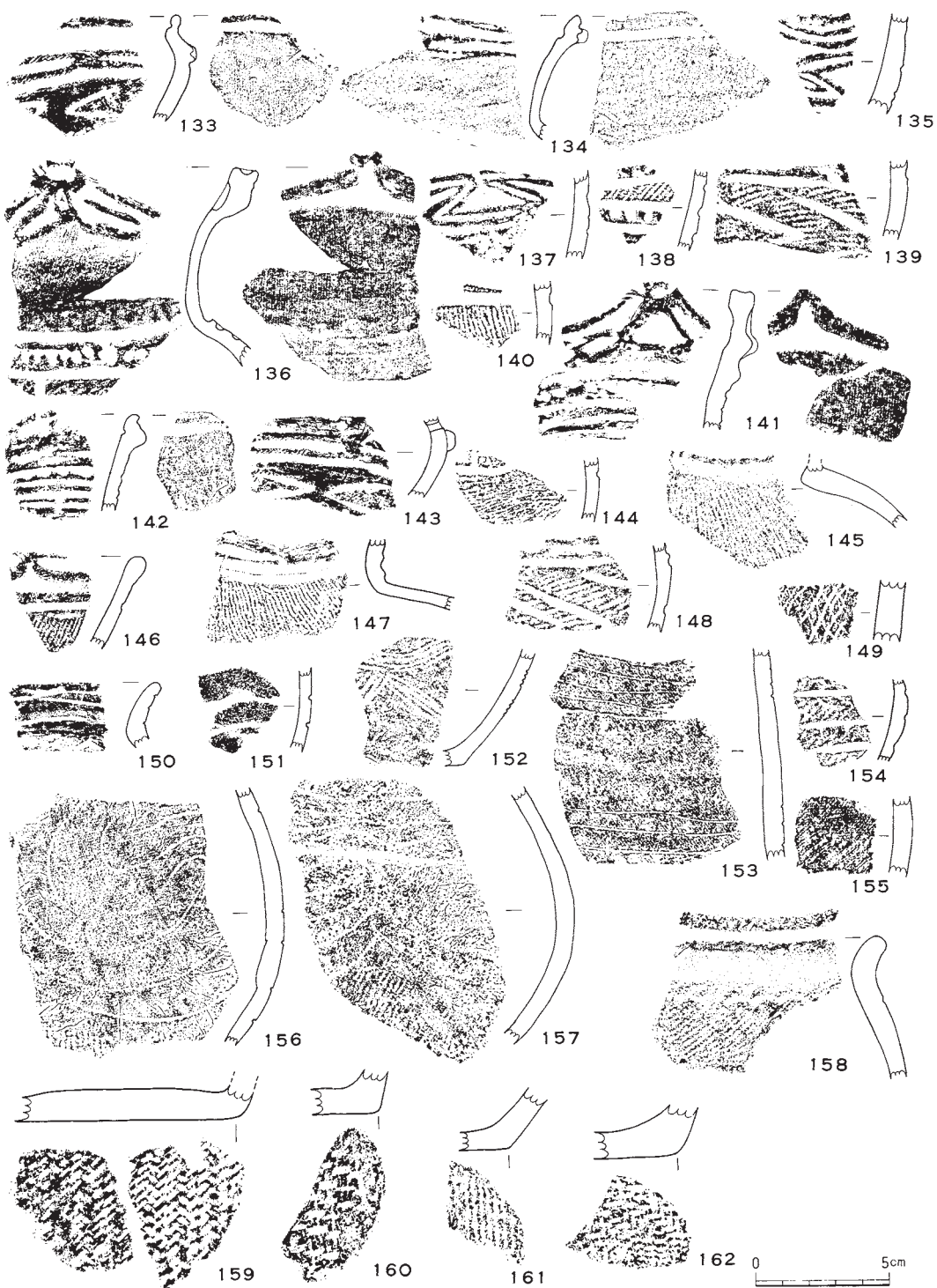
第26図 遺物包含層出土土器(3)



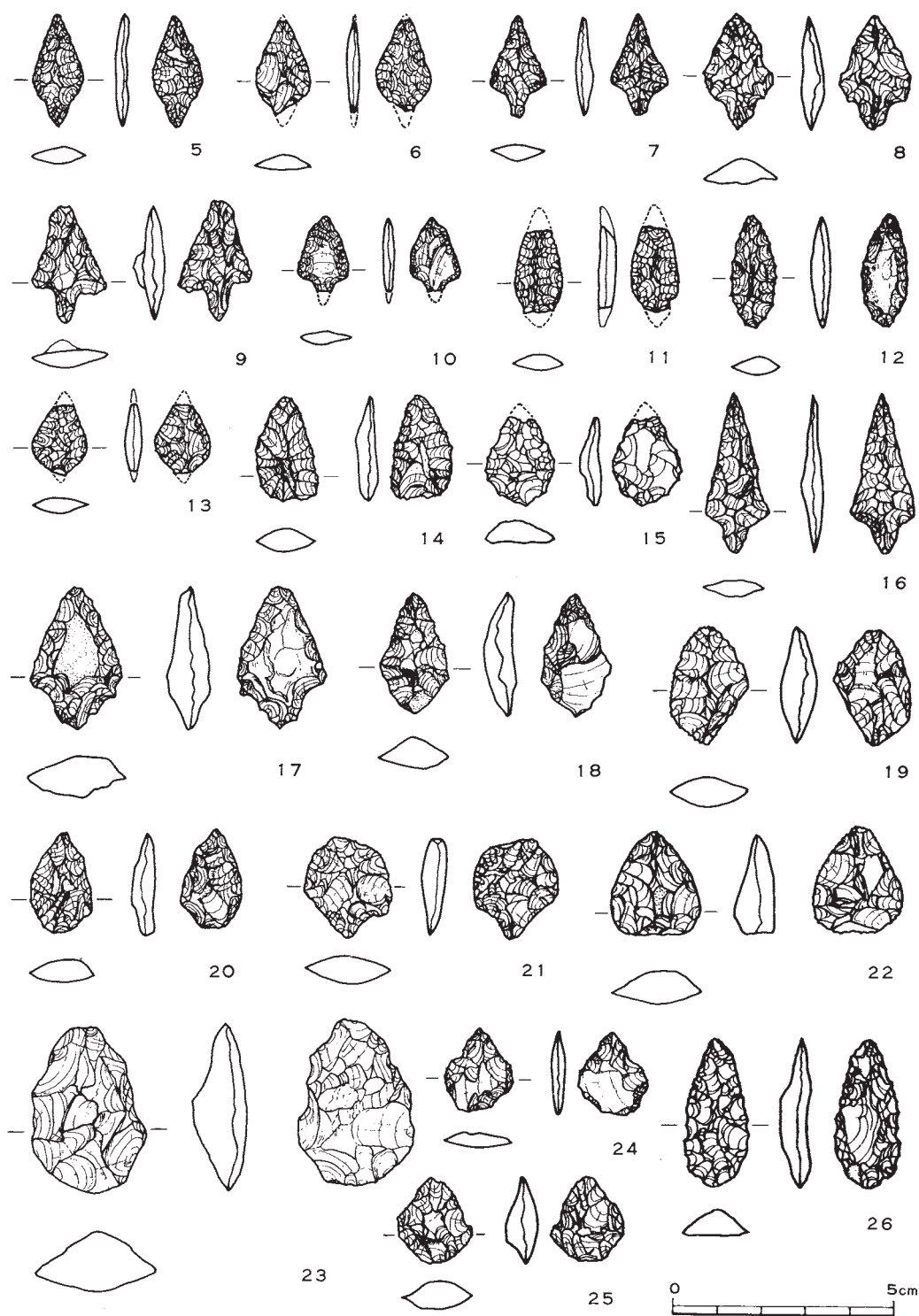
第27图 遺物包含層出土土器(4)



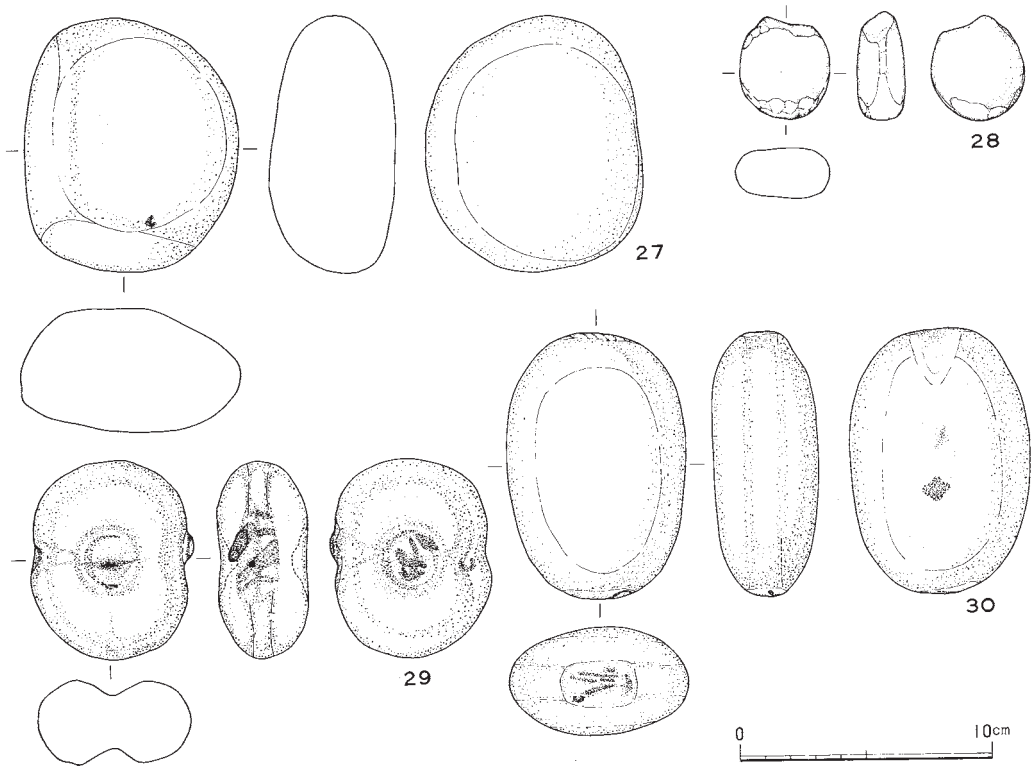
第28図 遺物包含層出土土器(5)



第29图 遺物包含層出土土器(6)



第30図 遺物包含層出土石器(1)



第31図 遺物包含層出土石器(2)

損している。胴部は楕円形を呈するものであり、釣手はその長辺にアーチ状に付され、その頂上には冠状のつまみをもっている。文様は、沈線で区画された胴部から釣手にかけての周縁部、あるいは胴部に縄文(L-R)が施されている。つまみと長辺の両側にある突起部分には孔があけられている。

43は口縁部から体部の一部を欠くが、口縁が大きく開く丸底の浅鉢形土器である。内外ともによく研磨されており、外面には数条の沈線がめぐっている。

〔石器〕 石鏃・磨石・凹石・不定形石器などが出土し、石斧や石匙等の出土はなかった。

石鏃(5~22・24~26)は最も多く出土しており、全体の80%を占めている。大部分有茎の石鏃であるが、未製品と思われるようなもの(23)も含まれる。石質は7は流紋岩、16はチャート、他はすべて頁岩によるものである。

磨石は3点出土している。27は不整形の安山岩、30は楕円形の石英玢岩を使用したもので、全体的に磨滅が認められる。30の長辺の両側面には打痕が観察される。28は側面に磨痕がみられるが、石器であるかどうかは明瞭でない。

凹石は、1点(29)のみの出土である。使用されている石材は明瞭に判断することはできなかつ

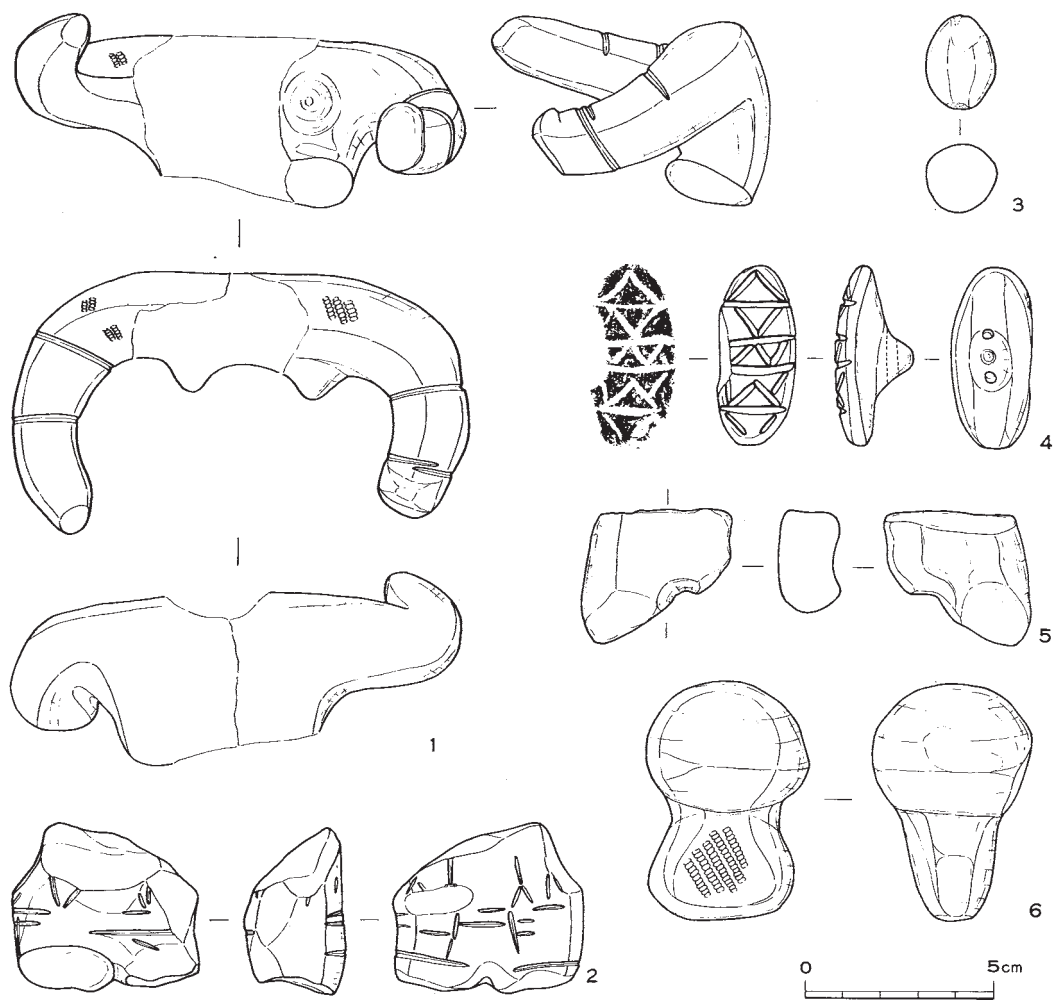
た。楕円形の両面に円錐形の凹みをもつ。また両側面にはきざみが入っている。

不定形石器は1点出土している。剥片の縁辺に二次的な剝離を加え刃部を形成したものである。削器として利用したものと考えられる。

〔土製品〕 土偶、スタンプ形土製品、異形土製品、不明土製品がある。

土偶は2点出土している。1は両腕を有する胸部から腹部にかけて遺存するものであるが、右乳房部分は欠いている。腕部分には縦位の沈線が2条施され、また肩から腕にかけて縄文(R-L)が施文されている。腕は何か物を抱くような形を呈している。2は腹部のみの破片である。前後面に沈線による文様が観察されるが、やや磨滅が著しい。

スタンプ形土製品は1点(4)出土している。施文面は楕円形を呈し、文様は沈線によって形成



第32図 遺物包含層出土土製品

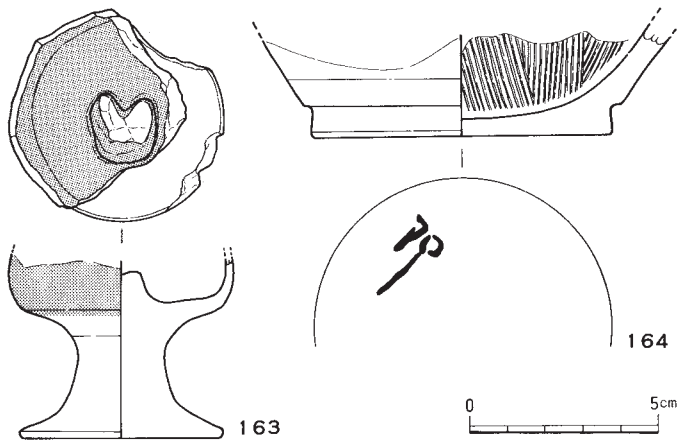
した三角形を組み合わせたものである。つまみ部分はそれほど高くはなく、穿孔は施文面の長軸方向に穿たれている。

異形土製品も1点(6)だけの出土である。上部はほぼ球形であり、下部は、扁平な隅丸台形の「きのこ」に類似する形を呈した土製品である。全体に縄文(R-L)が施文されているが、球形部分は磨滅のため明瞭でない。

他に不明土製品が2点出土しているが、3は穿孔などの加工のない球状を呈するもので、5は土偶の腹部と考えられるような土製品である。

〔その他の遺物〕 遺物包含層より上記した遺物のほかに、平安時代頃のものと思われる土師器片1点、近世以降のものと思われる乗燭・小型播鉢各1点が出土している。

土師器片は、I-6グリッド2層から出土している。底部から体部下半にかけての杯の細片であり、図化はできなかった。ロクロによって成形されたもので、底部は、回転糸切り離し状態のままであり、再調整はされていない。器厚は3~7mmと薄い。焼成は良好であり、色調は内外面ともに黄褐色を呈している。



第33図 その他の遺物

乗燭は、D・E-7グリッドI層より出土したものであり、現存高4.8cm、皿部推定径6cm、脚裾部径5.2cmを測る。ロクロ成形であり、底部には回転糸切り痕を残している。胎土は緻密であり、焼成は良好である。皿部内外面には釉がかけられている。

小型播鉢は、F-5グリッドII層から出土した。現存高

3cm、底径7.8cmを測るものである。内面には幅約1.8cm単位の楕円状の縦のきざみ目が施されている。胎土・焼成は良好であり、色調は暗茶褐色を呈している。底面には、判読できない墨書が不鮮明ながら観察される。

以上のように、遺物包含層からは縄文時代後期初頭から江戸時代以降の遺物が出土している。D・E-7・8グリッド部分では、単一層の包含層に数時期の遺物が混在し出土したが、H・I-5・6・7グリッド部分では縄文時代後期中葉~後葉の時期の遺物が主体をなし出土していることが確認された。

(橋本博幸)

第1表 土器観察表(1)

番号	出土地区	層位	文様	器厚mm	色調	胎土	焼	分類	備考
1	SI01		縄文(L-R),沈線	6~8	暗黄褐	粗砂	良	I-2	
2	SI01	ℓ-1・2	縄文,沈線,刻目	5~6	暗褐	粗砂	良	I-2	
3	SI01	確認面	縄文,沈線	6~10	暗黄褐	細砂	良	I-2	
4	SI01		付加縄文,沈線	6~7	暗灰	細砂	良	I-2	
5	SI01	ℓ-1・2	縄文(L-R),沈線	6~7	暗黄褐	細砂	良	I-2	
6	SI01	ℓ-1・2	縄文(R-L),沈線	5~6	暗褐	細砂	不	I-2	
7	SI01	ℓ-1・2	縄文(R-L),沈線,刻目	6~9	黒褐	微砂	不	I-2	
8	SI01	ℓ-1・2	刻目	8~9	黄褐	細砂	良	I-2	
9	SI01	ℓ-1・2	条線	6~7	暗赤褐	細砂	不	I-2	101と同一個体
10	SI01	確認面	羽状縄文(R-L・L-R)	5	暗灰褐	細砂	良	I-2	
11	SI01	ℓ-1・2	縄文	7~8	黒褐	細砂	良	I-2	
12	SI01	床面上	縄文(L-R)	7~9	暗黄褐	微砂	良	I-2	器高14.3cm,底径13.6cm,網代編痕
13	SI01	確認面	縄文(R-L),沈線	7~10	暗黄褐	細砂	良	I-2	器高?
14	SI01	床面上	縄文(L-R),沈線	6~10	暗赤褐	粗砂	良	I-2	器高6.6cm,台部底径10.2cm
15	SI01	床面上		6~10	暗黄褐	細砂	良	I-2	器高9.0cm,底径8.0cm,網代編痕
16	1号埋甕		羽状縄文?	6~12	赤褐	粗砂	不	I-3	器高15cm,底径8.5cm,炭化物付着
17	2号埋甕			6~10	暗赤褐	細砂	不	I-3	器高8cm,底径9.5cm,炭化物付着
18	3号埋甕		条線	5~8	暗赤褐	細砂	良	I-3	炭化物付着
19	4号埋甕		羽状縄文(R-L・L-R)	4~7	暗赤褐	粗砂	不	I-3	
20	5号埋甕1			8~11	暗黄褐	細砂	良	I-3	器高8cm,底径12.2cm,炭化物付着
21	5号埋甕2			8~12	暗黄褐	細砂	良	I-3	器高17.8cm,底径12.4cm
22	6号埋甕		羽状縄文(R-L・L-R)	7~8	暗黄褐	粗砂	不	I-3	
23	SK02	ℓ-1	縄文(L-R)	6~7	暗褐	粗砂	不	I-3	
24	SK02	ℓ-1	縄文(L-R)	6	暗灰褐	細砂	良	I-3	
25	SK02	ℓ-1	縄文(R-L),沈線	7~8	暗黄褐	細砂	良	I-2	
26	SK02	ℓ-1	縄文(L-R)	5~6	灰褐	細砂	良	I-3	
27	SK02	ℓ-1	格子目状沈線,瓜形文	5~8	暗褐	細砂	良	I-2	
28	SK02	ℓ-1	縄文,沈線	6~7	暗赤褐	細砂	良	I-2	
29	SK02	ℓ-1		5~12	暗黄褐	細砂	不		底部
30	H-7	L-II	縄文(R-L),沈線	6~10	灰黄褐	微砂	良	I-2	器高16.2cm,底径7.7cm,網代編痕
31	Eトレンチ	L-IIIb		6~8	暗赤褐	細砂	良	I-3	口径20.2cm
32	I-5	L-IIIb		6~11	暗赤褐	粗砂	不	I-3	器高4.7cm,口径10.8cm
33	H-6	L-II	沈線 刻目	6~9	赤褐	細砂	良	I-2	器高5.3cm,口径15.6cm
34	I-5	L-IIIb	沈線 刻目	5~7	赤褐	粗砂	良	I-2	器高4.8cm,口径8.3cm,磨滅
35	I-5	L-IIIb		6~8	暗黄褐	粗砂	不		器高4.5cm,底径6.2cm
36	I-7	L-II	縄文(L-R),沈線	6~7	暗黄褐	粗砂	良	I-2	器高8cm,口径13.2cm
37	H-5	L-IIIb		5~8	暗褐	細砂	不	I-3	器高11.8cm,口径13.5cm,底径4.3cm
38	I-5	L-IIIb	縄文(R-L),沈線	5~7	暗褐	粗砂	不	I-2	
39	Oトレンチ	L-III	矢羽根状沈線,透し	6~9	黒黄褐	細砂	良	I-2	器高6.5cm,台部径9.3cm
40	I-5	L-IIIb		4~8	暗褐	細砂	良	I-2	器高2.9cm,底径1.8cm
41	I-7	L-II	縄文(L-R),沈線	5~9	黄褐	粗砂	不	I-2	器高13.2cm,胴径23.5cm
42	Qトレンチ	L-IV			暗赤褐	粗砂	不	I-2	器高4.5cm,台部径5.5cm
43	I-5	L-IIIb		5~12	暗褐	細砂	良	I-2	器高9cm,磨滅
44	E-6	L-I・II	沈線	6~9	暗褐	粗砂	不	I-2	器高5.3cm,口径12.9cm
45	H-6	L-II	沈線	6~8	暗黄褐	細砂	不	I-3	器高6.2cm,口径15.2cm,底径5.5cm
46	I-7	L-II	羽状縄文	5~9	黒褐	微砂	良	I-3	
47	I-5	L-IIIb	羽状縄文(L-R・R-L)	10~12	暗黄褐	細砂	良	I-2	台部
48	I-7	L-I・II	縄文(R-L)	6~9	灰黒	微砂	良	I-3	器高16.5cm
49	I-5	L-IIIb	縄文(L-R)	7~9	暗黄褐	粗砂	良	I-3	器高8.5cm,底径9.3cm,網代編痕
50	I-5	L-IIIb		7~10	赤褐	細砂	良	I-3	器高6cm,底径5.4cm,木葉圧痕
51	Eトレンチ	L-IIIb	羽状縄文(L-R・R-L)	5~13	暗黄褐	細砂	良	I-2	器高18.5cm,口径34.2cm

第2表 土器観察表(2)

番号	出土地区	層位	文様	器厚mm	色調	胎土	焼	分類	備考
52	I-8	L-I	縄文(L-R),沈線	9	暗黄褐	細砂	良	I-1	
53	I-7	L-II	縄文(L-R)	8	暗黄褐	細砂	良	I-1	
54	I-7	L-II	縄文	8~10	暗褐	細砂	良	I-1	
55	E-8	L-III	縄文,沈線	8~9	赤褐	粗砂	良	I-1	
56	Eトレンチ		縄文(R-L),沈線	5~7	暗褐	粗砂	良	I-2	
57	Eトレンチ		縄文,沈線	5~12	黄褐	細砂	良	I-2	
58	Eトレンチ		沈線,貼付瘤	7	黒褐	粗砂	不	I-2	
59	I-7	L-I・II	縄文(L-R),沈線,刻目	7	赤褐	粗砂	不	I-2	
60	Dトレンチ	L-III	縄文(R-L),沈線,刻目	7~8	黒灰	細砂	不	I-2	炭化物付着
61	I-7	L-II	沈線,刻目	10	暗褐	微砂	良	I-2	
62	I-7	L-II・III	縄文(R-L),刻目	7~10	黒褐	微砂	良	I-2	
63	E-5	L-II	縄文(L-R),沈線,刻目	10~11	灰黄	細砂	不	I-2	
64	I-7	L-II	沈線,刻目	8~10	黒褐	粗砂	良	I-2	
65	I-7	L-I・II	刻目	7~10	暗赤褐	細砂	良	I-2	
66	I-5	L-IIIb	沈線,刻目	8	黒灰	粗砂	不	I-2	
67	Eト拉張部		縄文(R-L),沈線,刻目	5~9	暗黄褐	粗砂	良	I-2	
68	H-6	L-II	縄文(R-L),沈線,刻目	8~10	赤褐	細砂	良	I-2	
69	Eトレンチ	L-IIIb	縄文(R-L),沈線,突起	6~8	暗褐	細砂	良	I-2	
70	Eトレンチ		縄文(L-R),沈線,突起	6~11	暗赤褐	細砂	良	I-2	
71	I-5	L-IIIb	縄文(L-R),沈線,突起	5~8	暗赤褐	粗砂	良	I-2	
72	H-6	L-II	縄文(L-R),沈線	8	暗赤褐	細砂	良	I-2	
73	I-5	L-II	縄文(L-R),沈線	6~7	暗赤褐	細砂	良	I-2	
74	Oトレンチ	L-III	縄文(R-L),沈線	7	暗赤褐	微砂	良	I-2	
75	I-5	L-IIIb	縄文(R-L),沈線	5~8	灰黄褐	細砂	良	I-2	
76	H-6	L-II	羽状縄文(L-R?),沈線	6~7	暗赤褐	細砂	良	I-2	
77	Qトレンチ	L-III	羽状縄文(R-L・L-R)	7~8	灰黒	粗砂	不	I-2	
78	I-5	L-IIIb	縄文,沈線	6~7	黒灰	粗砂	良	I-2	
79	L-6	L-II	縄文(R-L),沈線	5~8	灰褐	細砂	不	I-2	
80	I-7	L-II・III	縄文(R-L),沈線	5~7	暗赤褐	細砂	不	I-2	
81	H-6	L-II	縄文,沈線	5~8	黄褐	微砂	良	I-2	
82	H-6	L-II	縄文(L-R),沈線	6~9	黄褐	微砂	良	I-2	
83	I-7	L-II	羽状縄文(R-L・L-R)	8~9	暗褐	細砂	不	I-2	
84	Eトレンチ	L-IIIb	縄文(L-R),沈線	5~7	暗赤褐	粗砂	不	I-2	
85	I-7	L-II・III	縄文(L-R),沈線	6~7	暗褐	細砂	良	I-2	
86	E-6	L-II	羽状縄文(R-L・L-R)	7	灰褐	細砂	不	I-2	
87	D-7	検出面	縄文(L-R),沈線	6~8	灰褐	粗砂	不	I-2	
88	I-5	L-IIIb	縄文(R-L),沈線	6~7	暗褐	細砂	良	I-2	
89	Eトレンチ	L-IIIb	羽状縄文(R-L・L-R)	5~11	暗黄褐	粗砂	良	I-2	
90	H-6	L-II	縄文(L-R),沈線	5~9	暗黄褐	粗砂	不	I-2	
91	I-5	L-IIIb	沈線	7~8	黄褐	細砂	良	I-2	
92	I-7	L-II	縄文,沈線,刻目	7~8	黄褐	微砂	良	I-2	
93	I-7	L-II・III	沈線	7~9	暗黄褐	細砂	良	I-2	
94	I-7	L-II	隆沈線,刻目	5~7	赤褐	細砂	良	I-2	
95	H-6	L-II	縄文(L-R),沈線	4~5	赤褐	細砂	良	I-2	
96	H-6	L-II	沈線	5~6	黄褐	細砂	良	I-2	
97	I-5	L-IIIb	沈線,刻目		赤褐	粗砂	良	I-2	注口土器
98	Eトレンチ		羽状縄文(?)	7~10	黄褐	細砂	良	I-2	注口土器,丹塗り,磨減
99	H-6	L-II		5~6	赤褐	細砂	良	I-2	把手付土器
100	Eトレンチ	L-IIIb	沈線	5~7	黒灰	粗砂	良	I-2	注口土器
101	I-7	L-II・III	条線	6~10	暗赤褐	細砂	不	I-2	9と同一個体
102	Eトレンチ	L-IIIb	条線	6~9	灰黒	細砂	不	I-2	補修孔有り

第3表 土器観察表(3)

番号	出土地区	層位	文様	器厚mm	色調	胎土	焼	分類	備考
103	I-5	L-III b	条線	7~9	黄褐	粗砂	良	I-3	磨滅
104	Eトレンチ	L-III b	条線	7~10	黄褐	粗砂	良	I-3	
105	E-6	L-II	条線	6~8	暗赤	粗砂	良	I-3	
106	I-5	L-III	条線	7~8	灰黄	細砂	良	I-3	
107	H-6	L-II	条線	7~8	灰黒	粗砂	不	I-3	
108	Eトレンチ	L-III b	条線	6~9	黄褐	粗砂	不	I-3	
109	Eトレンチ	L-III b	条線	8	灰褐	細砂	不	I-3	
110	I-7	L-II	条線	7	灰褐	細砂	良	I-3	
111	Eトレンチ	L-III b	条線	8~9	黄褐	微砂	良	I-3	
112	I-5	L-III b	条線	8~9	黄褐	細砂	良	I-3	
113	H-6	L-II	条線	7	灰黄	粗砂	良	I-3	
114	I-5	L-III b	縄文(R-L)	6~10	暗黄褐	細砂	良	I-3	
115	I-5	L-III b	縄文(L-R)	6~8	灰褐	細砂	良	I-3	
116	I-7	L-II	縄文(L-R)	7	灰黒	細砂	不	I-3	
117	H-6	L-II	縄文(R-L)	6~9	黒褐	粗砂	良	I-3	
118	H-6	L-II	縄文	5~6	暗黄褐	細砂	良	I-3	
119	Eトレンチ	L-III b	縄文(R-L)	6~7	赤褐	細砂	良	I-3	
120	I-5	L-III b	縄文	5~10	暗黄褐	細砂	良	I-3	
121	I-7	L-II	縄文(L-R)	5~7	灰黄	細砂	良	I-3	
122	H-6	L-I・II	縄文(L-R)	7~8	黄褐	微砂	良	I-3	
123	G-6	L-II	縄文(L-r)	5~7	暗黄褐	細砂	良	I-3	磨滅
124	H-6	L-II	縄文(L-R)	7~8	暗赤褐	細砂	不	I-3	磨滅
125	I-7	L-II	羽状縄文(R-L・L-R)	5~8	暗黄褐	微砂	良	I-3	
126	E-6	L-II	羽状縄文(R-L)	7~10	灰褐	細砂	良	I-3	
127	H-5	L-II	羽状縄文	5~11	黒灰	粗砂	良	I-3	
128	E-6	L-II	羽状縄文(R-L・L-R)	8	灰褐	細砂	不	I-3	
129	I-5	L-III	羽状縄文(R-L・L-R)	5~7	灰黄	細砂	不	I-3	
130	H-6	L-II	羽状縄文	5~6	黒褐	粗砂	不	I-3	
131	I-7	L-II	羽状縄文(R-L・L-R)	6~9	黒褐	粗砂	良	I-3	
132	I-5	L-III b	羽状縄文(R-L・L-R)	6~7	灰黄	細砂	良	I-3	
133	E-8	L-III	隆沈線, 突起	5~8	黄褐	微砂	良	II	磨滅, 内面に沈線
134	D-7	L-III	隆沈線, 突起	5~9	暗黄褐	微砂	不	II	内面に沈線
135	D-7	L-II	沈線	6~7	灰褐	細砂	不	II	137と同一個体, 磨滅
136	D-8	L-III	隆沈線, 突起, 刺突文	5~11	暗黄褐	細砂	良	II	内面沈線
137	D-7	L-III	沈線	6~7	灰褐	細砂	不	II	135と同一個体, 磨滅
138	AB-8	L-I	縄文(L-R), 刺突文, 沈線	4~5	黄褐	微砂	良	II	
139	E-8	L-III	縄文(L-R), 沈線	5~6	暗黄褐	細砂	不	II	
140	C・D-8	L-III	沈線, ハケ目?	5~6	暗黄褐	細砂	不	II	
141	E-8	L-III	隆沈線, 突起, 刺突文	6~11	黒褐	細砂	良	II	内面に沈線
142	D-7	L-III	隆沈線, 突起, 刺突文	5~9	暗灰褐	細砂	良	II	内面に沈線
143	D-8	L-III	隆沈線, 突起, 縄文	6~10	赤褐	細砂	良	II	穿孔あり
144	E-8	L-III	燃糸文(R), 沈線	4~6	暗褐	細砂	不	II	磨滅
145	E-8	L-I	燃糸文(?)	5~8	黄褐	微砂	良	II	
146	D-7	L-III	縄文(L-R)	5~8	暗灰褐	微砂	良	II	
147	I-8	L-I	沈線, 縄文	4~6	暗黄褐	細砂	良	II	磨滅
148	E-8	L-III	縄文(L-R), 沈線, 刺突文	5~6	灰褐	細砂	良	II	
149	H・I-8-9	L-II	網目状燃糸文	9	暗灰	細砂	良	II	
150	C-4	L-II	沈線	4~8	赤褐	微砂	良	III	
151	D・E-7	L-I	沈線, 縄文	5	赤褐	粗砂	良	III	
152	C・D-8	L-III	沈線	6	暗黄褐	細砂	良	III	
153	D-7	検出面	沈線	6	赤褐	細砂	良	III	

第4表 土器観察表(4)

番号	出土地区	層位	文様	器厚 mm	色調	胎土	焼	分類	備考
154	Eトレンチ	L-III b	沈線	5	暗灰褐	粗砂	不	III	炭化物付着
155	D・E-7	L-I	縄文	6	暗赤褐	細砂	良	III	
156	F-6		沈線	6	赤褐	粗砂	良	III	
157	F-6		縄文(L-R), 沈線	5~6	赤褐	細砂	不	III	
158	E-8	L-III	縄文(L-R)	6~8	赤褐	細砂	不	III	
159	I-7	L-II		9~10	黄褐	細砂	良		
160	Eトレンチ	L-III b		9~11	暗赤褐	粗砂	不		
161	I-7	L-II		6~10	黄褐	細砂	良		
162	I-7	L-II		10~14	黄褐	粗砂	良		
163	D・E-7	L-I				微砂	良		
164	F-5	L-II				微砂	良	底部に墨書あり	

注) ・本表には住居跡, 埋壺, 土坑出土の土器に関するデータも含め表示した。

・胎土の項目は, 胎土に含まれている砂粒の最も多いものを示す。

・分類の項目は第3章第1節に示した分類による。たとえば1-2はI群2類土器を示している。

第5表 石器観察表

番号	種類	出土地点・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
1	石鏃	SI01 B区 $\ell-1 \cdot 2$	22	11	3	0.6	頁岩	
2	石鏃	SI01 B区 $\ell-1 \cdot 2$	25	(14)	4	1	頁岩	一部欠損
3	石鏃	SI01 $\ell-2$	33	20	7	3.6	珪質頁岩	
4	不定形石器	SI01 $\ell-2$	33	25	9	7.5	頁岩	
5	石鏃	Eトレンチ L-III b	25	12	3	0.7	頁岩	
6	石鏃	Eトレンチ L-III b	20	12	3	0.7	頁岩	
7	石鏃	I-6 L-II	23	12	4	0.7	流紋岩	
8	石鏃	I-7 L-II	26	16	5	1.5	頁岩	
9	石鏃	Eトレンチ L-III b	27	15	7	1.6	頁岩	
10	石鏃	Eトレンチ L-III b	(17)	11	2	(0.5)	頁岩	茎部半分欠損
11	石鏃	Eトレンチ	(19)	11	4	(0.9)	頁岩	先端部・茎部欠損
12	石鏃	Eトレンチ L-III b	25	10	4	1.1	頁岩	
13	石鏃	I-5 L-III b	16	12	4	0.7	頁岩	先端部・茎部欠損
14	石鏃	Eトレンチ L-III b	23	13	4	1.4	頁岩	
15	石鏃	Eトレンチ L-III b	19	16	5	1.3	頁岩	
16	石鏃	H-6 L-II	36	15	4	1.5	チャート	
17	石鏃	I-7 L-II	32	20	9	4	頁岩	
18	石鏃	Eトレンチ L-III b	28	15	7	2.7	頁岩	
19	石鏃	I-5 L-III b	26	12	8	2.8	頁岩	
20	石鏃	I-5 L-III b	23	14	5	1.8	頁岩	
21	石鏃	Eトレンチ L-III b	22	19	6	2.4	頁岩	?
22	石鏃	Eトレンチ	24	20	9	3.5	頁岩	
23	不定形石器	Eトレンチ L-III b	33	26	12	5.6	桂化木	
24	石鏃	Eトレンチ L-III b	18	16	3	0.8	頁岩	未製品か?
25	石鏃	D-7 L-III	19	16	7	1.8	頁岩	
26	石鏃	Eトレンチ L-III b	32	14	6	3	頁岩	
27	磨石	SK01 $\ell-1$ No.1	100	85	48	620	安山岩	
28	磨石	I-7 L-II	36	36	19	38.6	?	一部欠損
29	凹石	I-6 L-II No.1	78	61	35	206	?	
30	磨石	Eトレンチ L-III b No.45	105	71	42	500	石英粉岩	

注) ・長さ、幅、厚さは最大値を示す。() は現存値
 ・本表には、住居跡・土坑出土の石器のデータをも含め表示した。

第3章 考 察

第1節 遺物について

土器は縄文土器～弥生式土器など出土総数は3,200片を数え、その他石器が30数点、土製品が6点、装飾玉が1点出土している。ここでは特に土器について、現在の土器型式編年を用いⅠ～Ⅲ群に大別し、さらに細分できるものはその中で分け説明を加えたい。

第Ⅰ群土器 縄文時代後期の土器を一括し、さらに1～3類に分類される。

[1 類] 後期初頭に比定される土器である。中にはこれよりやや古い時期のものではないかと考えられるもの(52～54)もある。出土量は極めて少ない。55は、沈線によってJ字状に区画する文様を有する胴部破片である。関東系の称名寺式に併行する土器片と思われる。

[2 類] 後期中葉～後葉、土器型式編年で加曾利B式前後の精製土器を一括した。器形や文様によって細分が可能と思われるが、ここでは、土器片の最も特徴的なものをあげ、それによってまとめた。器形は、注口土器など特殊なものをのぞいては深鉢形土器が多いようである。

波状口縁となるもの(1・30・51, 56～58) 平行沈線文によって区画された部分以外は丁寧な磨消しが行われるものや、弧状沈線の入組文による磨消縄文が施されているものなどがある。

刻目文を主体とするもの(7・8・33・34, 60～67) 口唇部や平行沈線間に、これと直角をなす刻目を入れた帯状文をもって加飾されたものである。

口縁部に小突起を有するもの(69～71) 口縁は平縁のもの(69・71)と波状を呈するもの(70)がある。

磨消縄文が最も特徴的なもの(2～6, 25, 28, 72～90) 文様は、平行沈線によって区画されたもの、入組文をなすものなどがある。磨消縄文は、全体に縄文を施文した後、沈線によって区画し磨り消しているものが多い。

その他注口土器など特殊なもの(39～42, 91～101)があげられる。

[3 類] 2類同様、後期中葉～後葉、加曾利B式前後に比定される粗製土器群を一括した。大部分後期に属すると考えられるが、晩期のものが少量含まれる可能性もある。器形には、深鉢形土器・浅鉢形土器がある。埋甕はほとんどここに属する土器と思われる。

(102～113)は条線文によるものである。条線は1・2本の単位で不規則に施したものや、8本前後を単位として規則的に曲線あるいは直線的な文様に施しているものがある。

(23・24・26, 114～124)は斜縄文が主体をなすものであり、器面全面に施されている。縄文は単節でRL・LRともにあるが、RLがやや多い。

(10・45, 125~131)は羽状縄文によるものである。斜縄文に比べ原体はやや細いものが多い。他に無文と思われるものも存するが、量は少ない。

第Ⅱ群土器 縄文晩期後半に比定される土器である。大部分は精製土器であり、粗製土器は後期のものと判別できないものが多かったが、網目状撚糸文の149だけは判別することができた。

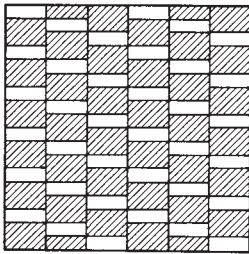
土器型式編年では、大洞A式期併行の土器と思われる。

第Ⅲ群土器 弥生時代中期後半に比定される土器群を一括した。本群で特徴的なのは、一本の沈線によって文様を表出した153・156・157である。156・157は間隔の渦文を描いた胴部破片である。これらは土器型式編年では南御山Ⅱ式に比定されるものと思われる。

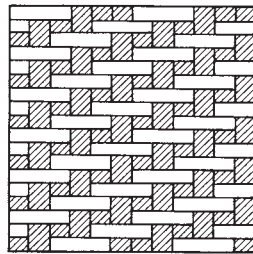
底部について

今回の調査で出土した縄文土器の底部は130数点あり、すべて平底である。遺存状態が悪く詳しく分類することはできないが、網代編痕10点、木葉痕1点、他は無文か磨滅が著しく不明瞭なものもある。網代編痕は、判別できたものについて若干説明を加える。

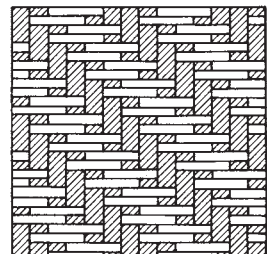
繊維の幅のある方を経線とし模型図を作成した結果、編み方によって1~5類に分類することができた。各類の個体数は、第1類が3点(12・30・160)、第2類が1点(160)、第3類が1点(159)、第1類の裏目(第4類)が1点(20)、他に編み方の基本は経線が2本越え、2本潜り、緯線が2本潜り、2本越えて左へ1本送るものであるが、途中で編み方が変わり判断不可能なもの(第5類)が2点(49・162)あり、また磨滅のため判断不可能なもの1点がある。



第1類



第2類



第3類

- | | | |
|-----|--------------------------------------|---------|
| 第1類 | 経 2本越え, 1本潜り | } 右1本送り |
| | 緯 1本越え, 2本潜り | |
| 第2類 | 経 2本潜り, 1本越え | } 交互 |
| | 1本潜り, 2本越え | |
| | 緯 3本越え, 3本潜り | |
| 第3類 | 経 4本越え, 1本潜り, 1本越え, 4本潜り, 1本越え, 1本潜り | } 右1本送り |
| | 緯 3本越え, 3本潜り | |

第34図 網代編み痕模式図

繊維の幅は、縦糸が3～5mm、横糸が1～3mmで編み方は割合密なものが多い。

第2節 遺構について

本遺跡で検出された遺構は、住居跡1、土坑2、埋甕7、特殊遺構1があげられる。これらのうち本遺跡の性格を考えるうえで特徴的な遺構を取り上げ、それらをまとめて考察を加えたい。

竪穴住居跡

検出された住居跡は1軒だけである。調査前すでに東半は耕作等によって削平されており、遺存状態は悪かったが、地床炉を中心にもつ径5m弱の円形を呈する住居跡であったことが推測される。この住居跡の時期は、埋土や床面上から縄文時代後期中葉の遺物が出土していることから、その場所に位置づけてもさしつかえないであろう。

埋甕群の存する丘陵先端部から4m程下った裾部に本住居跡は位置しているが、ここは、小倉川などによる水害を受けやすい低地である。縄文時代後期初頭頃から集落は谷底平野や盆地内の低湿地に営まれるようになるが、本遺構の場合もその立地形態に合致していることが言える。ただ本遺跡の場合、丘陵先端部に存する埋甕群と本住居跡は、どのような関係にあったのか問題が残る。

埋 甕

本遺跡において検出された埋甕は7基である。すべて上部は耕作等によって削平されており、遺存状態は良くなかった。埋甕は、丘陵先端部の北東に面する傾斜に沿って散在している。最も西側高位にあるものは1号埋甕、東側低位に位置するのは4号埋甕である。掘形はすべて検出されたが、確認面においてはプランを明確にとらえなかったもの(3・6・7号埋甕)もある。掘り込みの結果、埋置された土器は、攪乱の著しい6号埋甕をのぞいてすべて直立状態にあった。これらの内1・2・5号埋甕は底部を有するが、3・4・6・7号埋甕は底部を欠いた状態で出土している。3・4号埋甕は埋置前に底部を打ち欠いたと思われるが、6・7号埋甕は切り合いや攪乱により明確でない。土器は、胴部上半を欠損しているが、粗製深鉢形土器が利用されている。1・2・3・5号埋甕では、土器の内面下部あるいは外面の一部に炭化物の付着が観察されるが、これは、埋置前に煮沸に使用された際に付着した有機物が炭化したものか、埋置後何らかの理由で付着したものか現在のところ明確ではない。これらの埋甕内から出土したものは、4号埋甕の玉だけであり、ほかは何も検出されなかった。出土した土器は、時期を決定づけるものはないが、周辺から出土している土器から考えて、縄文時代後期中葉以降であろう。

現在県内において同様のあり方を示す遺跡はいくつかあげられる。次に、それらについて若干ふれ、本遺跡との比較検討をしてみたい。

三貫地遺跡(相馬郡新地町大字駒ヶ嶺字田丁場)

昭和52年9月～10月に調査された田丁場B地点より、土坑群と共に甕棺墓1基が検出されている。甕棺を埋納するための円筒状の掘形に、焼成後底部を穿孔した深鉢形土器が直立状態で埋納されており、内部より骨片が検出されている。埋納された甕棺は堀之内I式土器併行の土器であり、縄文時代後期初頭に位置づけている。

山田遺跡(伊達郡国見町大字光明寺字山田)

福島盆地の北端の微高地に位置している。調査は昭和46年3月に行われ、縄文時代中期後半の土器埋設石組複式炉が1基、土坑が約30基、そのほか土器を埋納した土坑3基が検出された。埋納土器は、上半部が耕作等によって破壊されており、時期は明確でないが、縄文時代後期と推定され、甕棺もしくは再葬墓と考えられている。

竹の内遺跡(伊達郡国見町大字西大枝字竹の内)

阿武隈川の氾濫原を南に見下す洪積台地の先端部に位置している。調査は昭和47年3月に行われた。その結果、炉跡2カ所、土坑6基と共に土器埋納土坑10基などが検出されている。土器埋納土坑、いわゆる埋甕は、3基前後がひとつの単位として存している。埋置された土器は深鉢形土器で、1点だけが逆位で埋められていたが、他はすべて直立状態で発見された。中には土器の内部にもう一点小型の土器が入っていたものや、骨片が検出されたものもある。

出土した遺物は、縄文時代後期後葉～晩期前葉の時期であるが、埋甕群は骨片などが検出されたことから、埋納施設と考えられている。

大窪遺跡(福島市松川町水原字大窪)

遺跡は、氾濫原の微高地に立地している。調査は昭和47年8月に行われ、住居跡2軒、埋納土器8例が検出された。埋納土器3群8例はすべて粗製の深鉢形土器であり、いずれも掘形(土坑)に納められている。これらは一時的に埋置されたものではなく、時間差があったものと推定している。土器内部からは骨片などは検出されなかったが、底部穿孔と思われる土器も出土しており、ここでは甕棺とみている。出土した土器の時期は、縄文時代後期後葉～晩期前葉としている。

山下谷遺跡(いわき市川前町川前字山下谷)

調査は昭和50年11月に、山下谷橋架替工事にともなう取付道路敷予定地となるため緊急に行われた。遺跡は、夏井川上流の河岸段丘上に立地している。検出された遺構には、配石遺構のほか大洞B式期の深鉢棺14基がある。ほぼ統一された土器群で密集して検出されており、すべて直立状態で埋納されている。土器は底部を欠くものが多く、中には人骨が検出されたものもある。このことから、本遺跡では、埋納された土器は深鉢棺であり、再葬墓の可能性もあるとしている。

一斗内遺跡(須賀川市大字小倉字一斗内)

遺跡は阿武隈山系の西へひろがる開析谷部に立地している。昭和53年6月、県文化センターの

踏査により発見され、昭和55年11月、試掘調査が行われた。その結果、6号トレンチ内から1個体ずつ埋甕を伴う土坑4基が検出された。この土坑は、1m前後の円形、楕円形を呈するものである。精査した1基からは、直立状態で底部を欠いて埋められた深鉢形土器が出土し、内部より骨片が検出されている。また、他の埋甕の検出面埋土中にも骨片が散在しているのが確認されている。出土している土器は、縄文時代後期後半から晩期前半にかけてのものが主体をなしており、当遺跡はその時期の再葬墓ではないかと考えられている。

上記のほかに田村郡小野町梅の木畑遺跡でも、縄文時代後期中葉から晩期初頭にかけてのものと思われる、直立状態に埋置された土器群が検出されている。

以上であるが、これら遺跡に共通して言えることは、土坑を伴い底部穿孔の土器が埋置されているものがあること、大部分直立状態にあることなどである。そのほか骨片が検出されたものや土器の中にもう1点の土器を内包するなど特徴的なものもあげられる。これらの埋甕はすべて埋葬に関する遺構としている。出土土器の時期は、三貫地遺跡は縄文時代後期初頭、山下谷遺跡は縄文時代晩期前半のものであるが、他は本遺跡同様の時期に属するものである。

さて、本遺跡の埋甕について再検討してみよう。埋置された土器は直立状態にあり、底部穿孔の土器があることや、4号埋甕内から装飾玉が出土していることから、貯蔵のための埋甕とは思えない。また、前述のように4号埋甕と7号埋甕には切り合い関係があること、掘形の深さや配置に規則性がみられないことから、同時に埋置されたとも考えられない。

以上のことから、これらの埋甕は、貯蔵のために設置されたのではなく、土器内部から人骨等は検出されなかったが、埋葬のための甕棺とみるのが妥当であろう。(橋本博幸)

参 考 文 献

- 荒木ヨシ 1970 「東日本縄文時代後・晩期の網代編みについて」『物質文化』No.15
柴田俊彰 1972 「竹の内遺跡」『福島県考古学年報』2 福島県考古学会
森 貢喜 1972 「大窪遺跡」『福島県考古学年報』2 福島県考古学会
目黒吉明他 1972 「山田遺跡」『国見町の文化財』国見町文化財調査報告書第1集
加藤 稔他 1973 『玉川遺跡』資料編Ⅰ 致道博物館
目黒吉明他 1975 「大窪遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書(福島県文化財調査報告第47集)』
馬目順一 1976 「山下谷遺跡」『福島県考古学年報』5 福島県考古学会
玉川一郎 1978 『新地町埋蔵文化財調査報告書 三貫地 田丁場A地点調査報告 田丁場B地点調査概報』
新地町教育委員会
金津匡伸 1981 「福島県小野町梅の木畑出土の埋設土器」『考古風土器』第6号
高橋信一 1981 「一斗内遺跡」『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅴ(福島県文化財調査報告第97集)』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター



1 又兵衛田A遺跡遠景(北から)



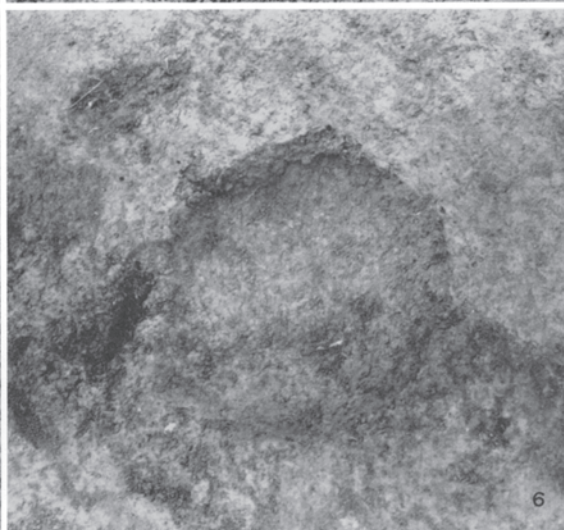
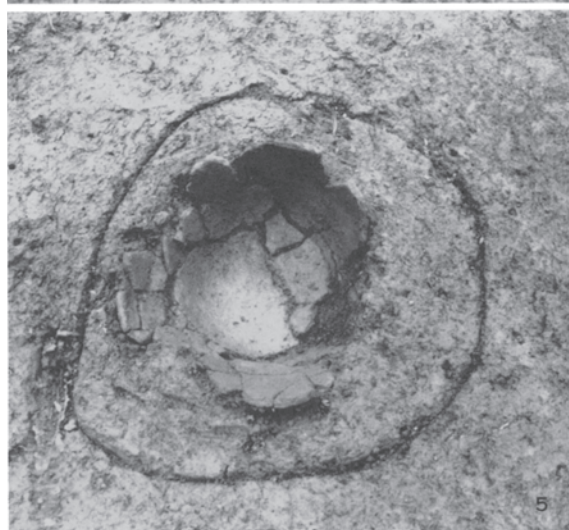
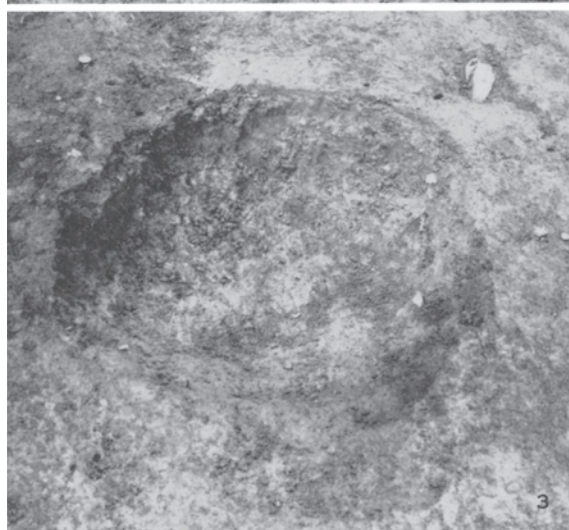
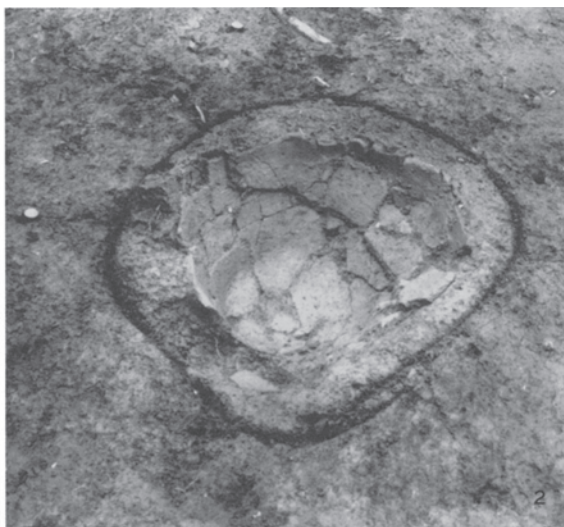
2 又兵衛田A遺跡遠景(東から)



3 1号住居跡セクション

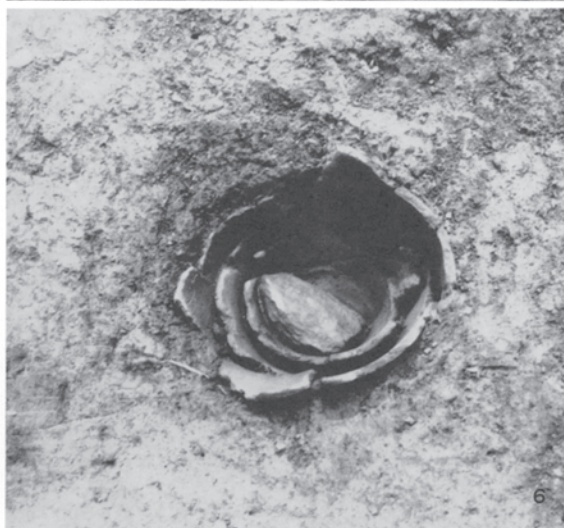
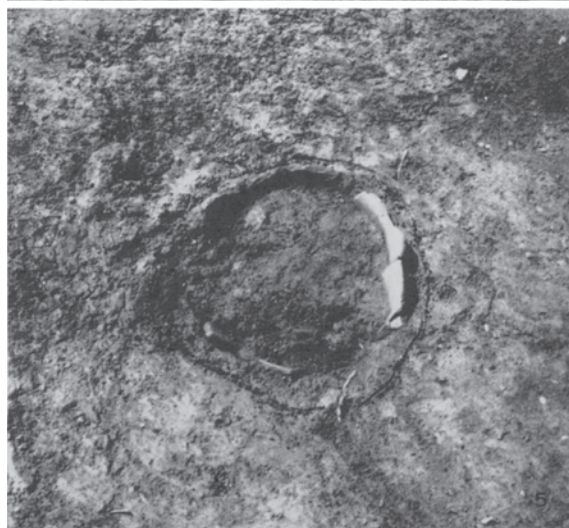
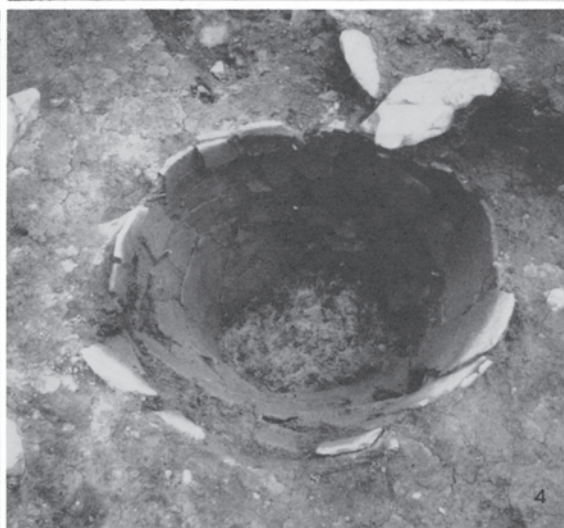
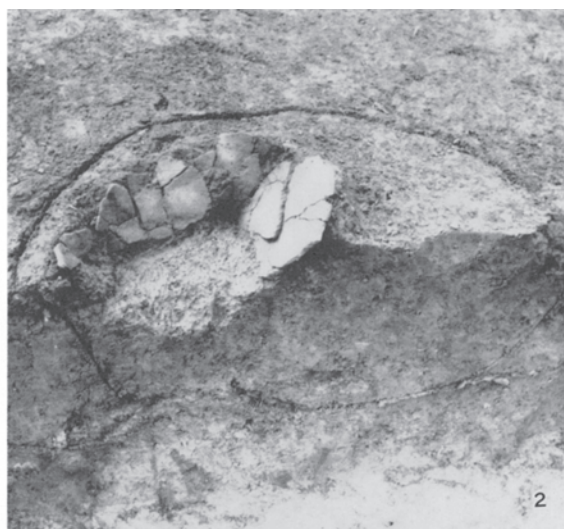
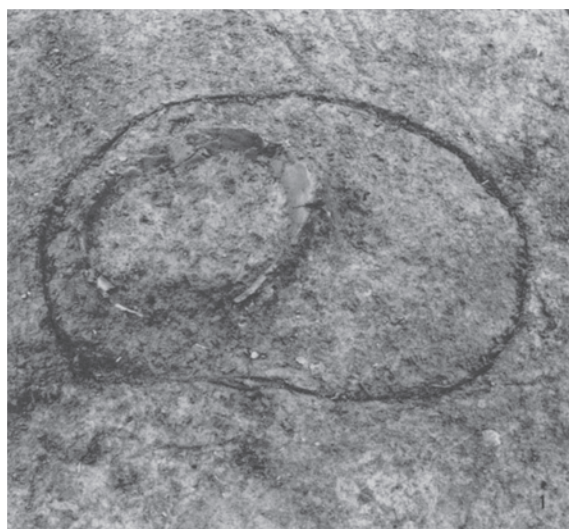


4 1号住居跡全景



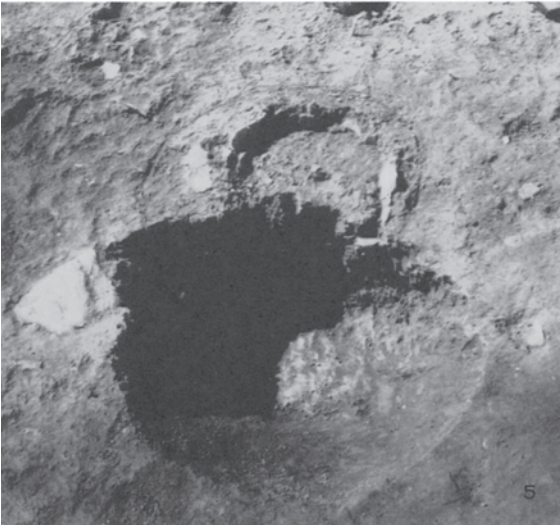
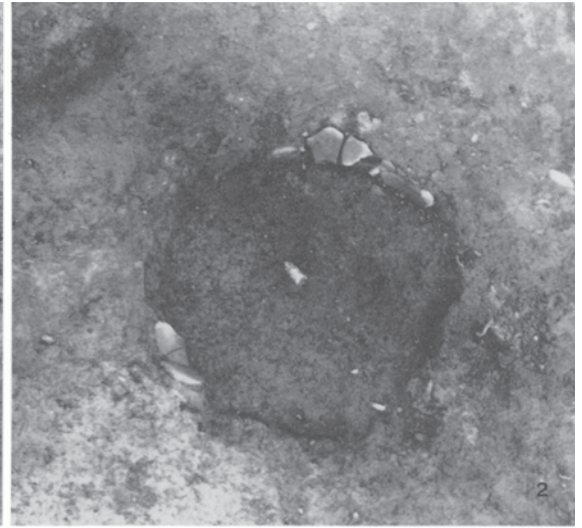
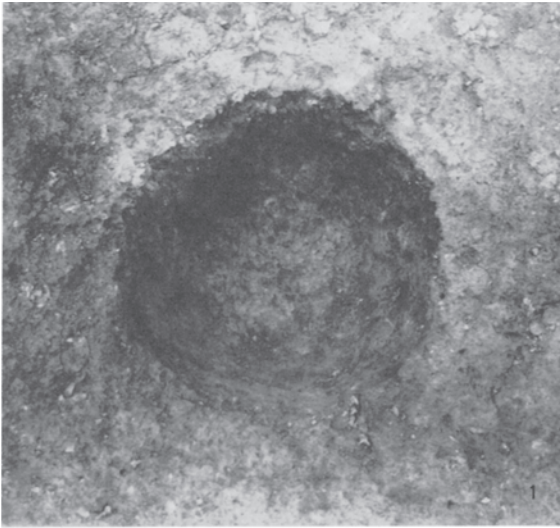
5 埋 壑 (1)

1~3 1号埋壑
4~6 2号埋壑



6 埋 壙 (2)

1.2 3号埋壙
3.4 4号埋壙
5.6 5号埋壙



7 埋 甕 (3)

1 5号埋甕
2~4 6号埋甕
5.6 7号埋甕



8 1号・2号土坑



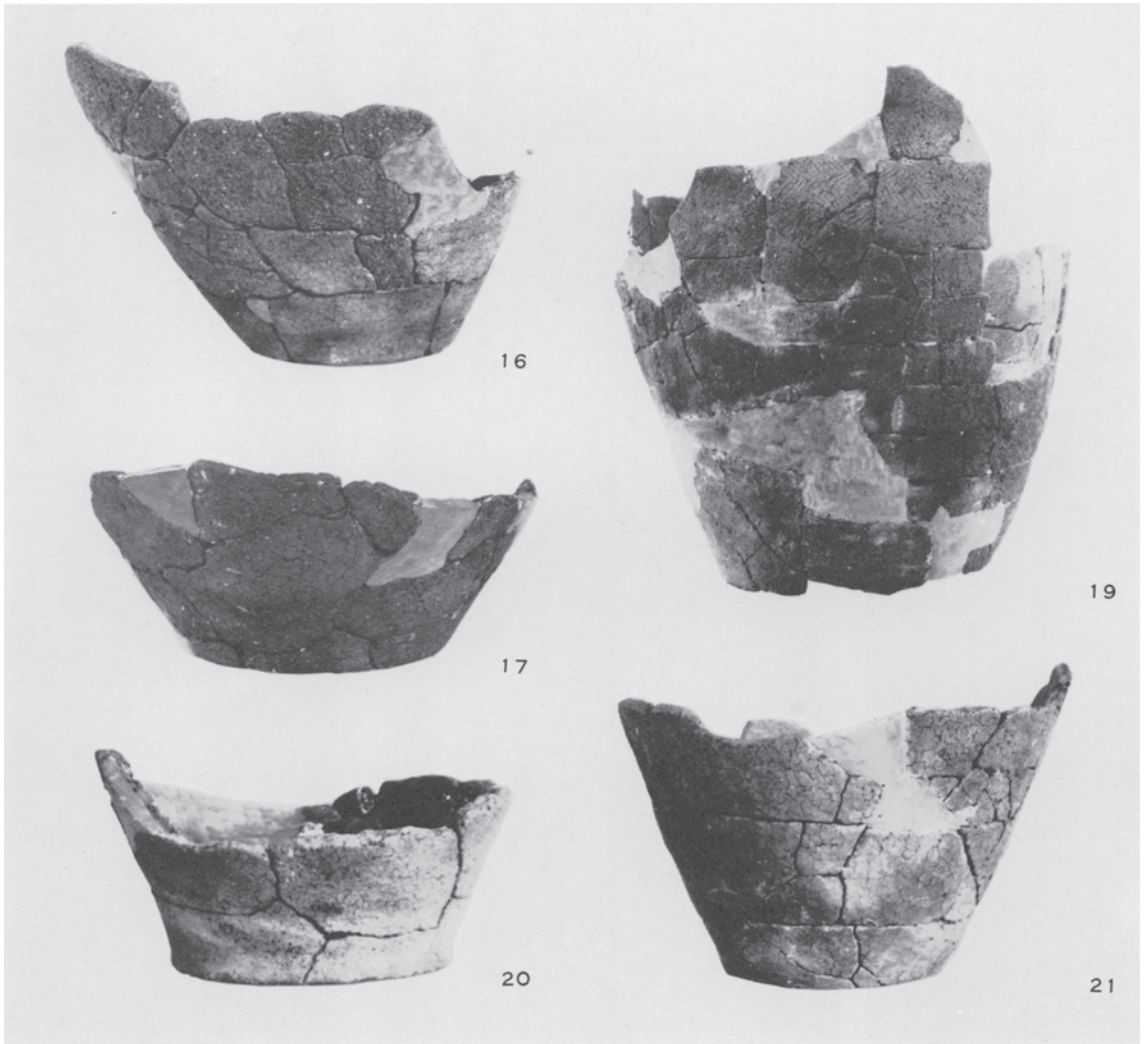
9 1号特殊遺構



10 E・F-6グリッド堆積土断面



11 C・D-7・8グリッド遺物包含部分



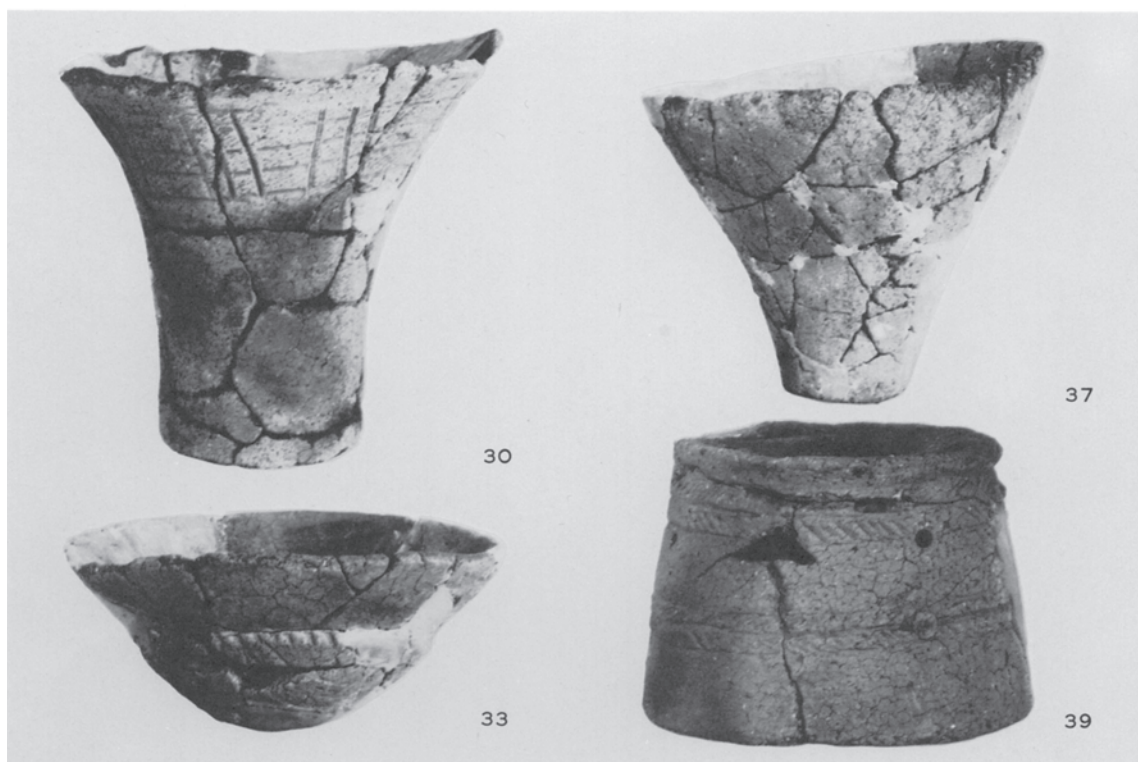
12 埋 甕



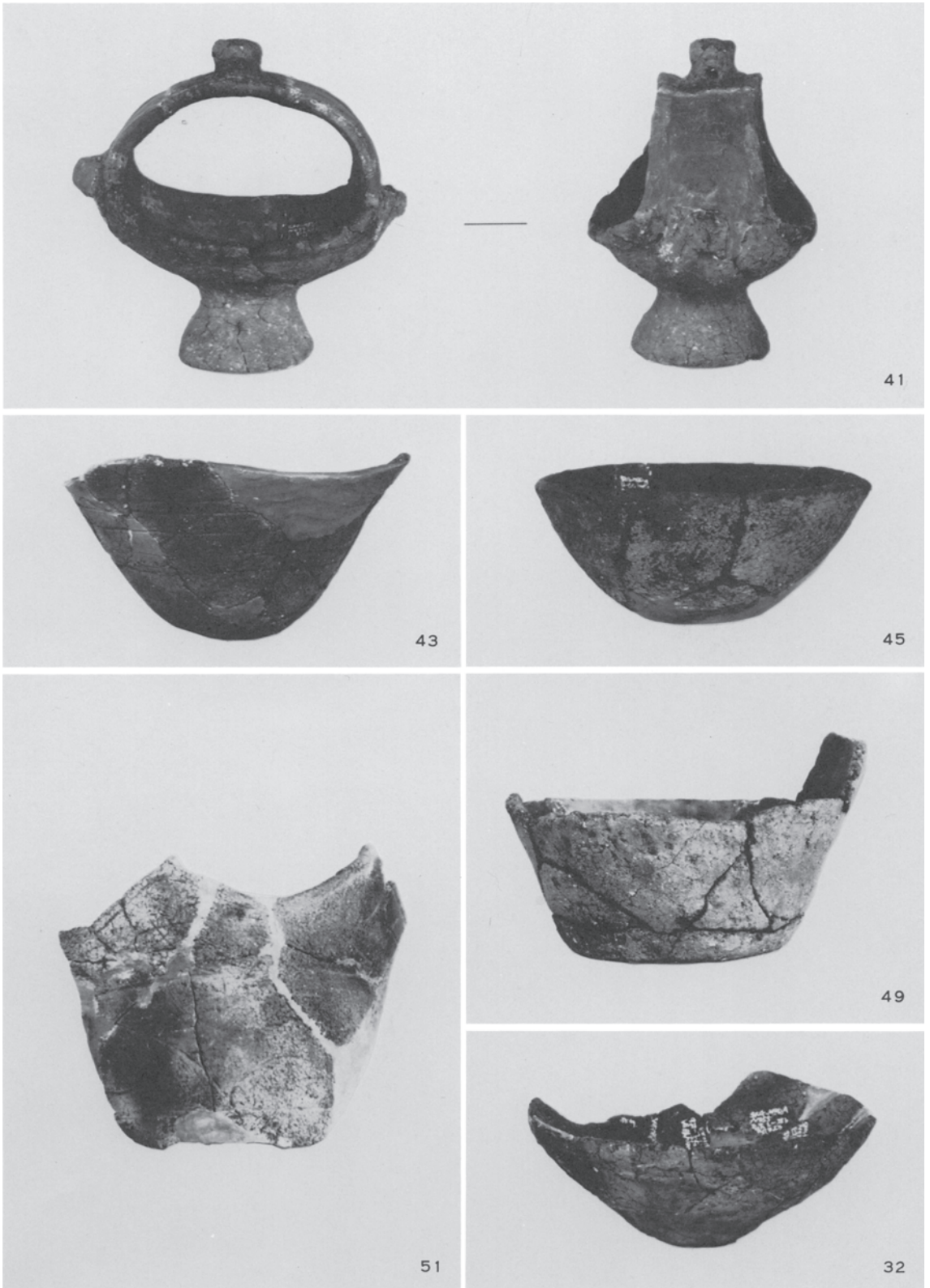
13 1号住居跡出土土器 (1)



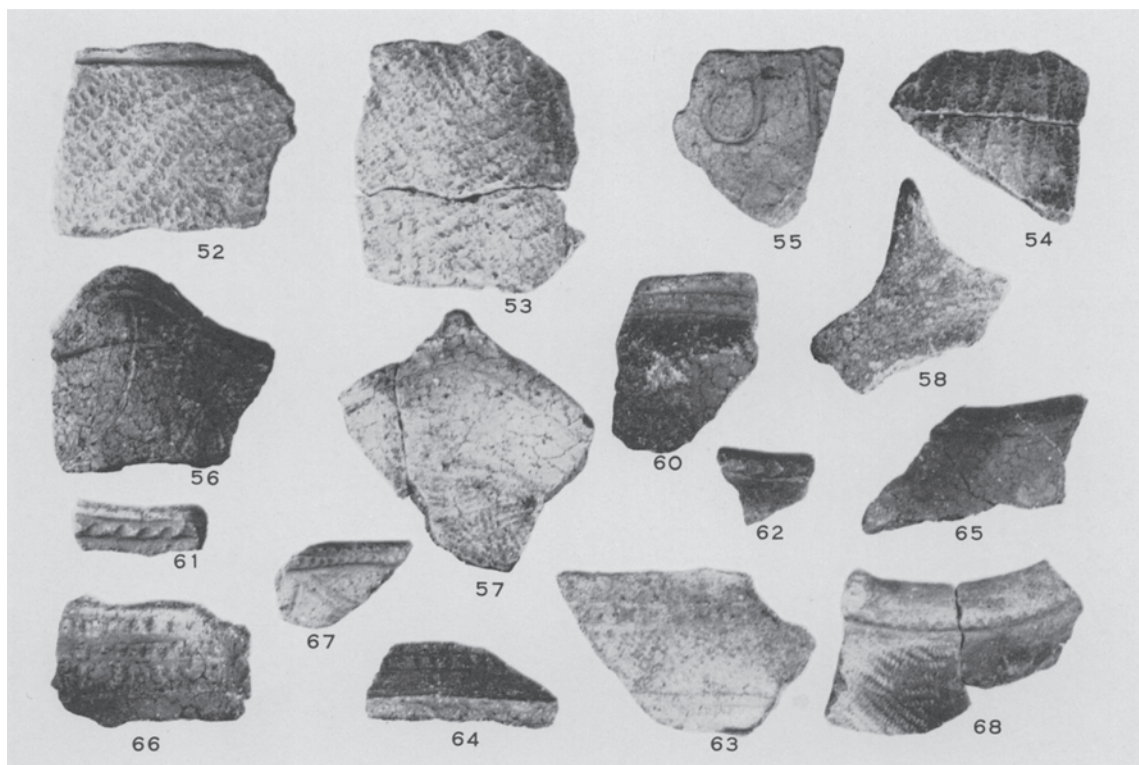
14 1号住居跡出土土器 (2)



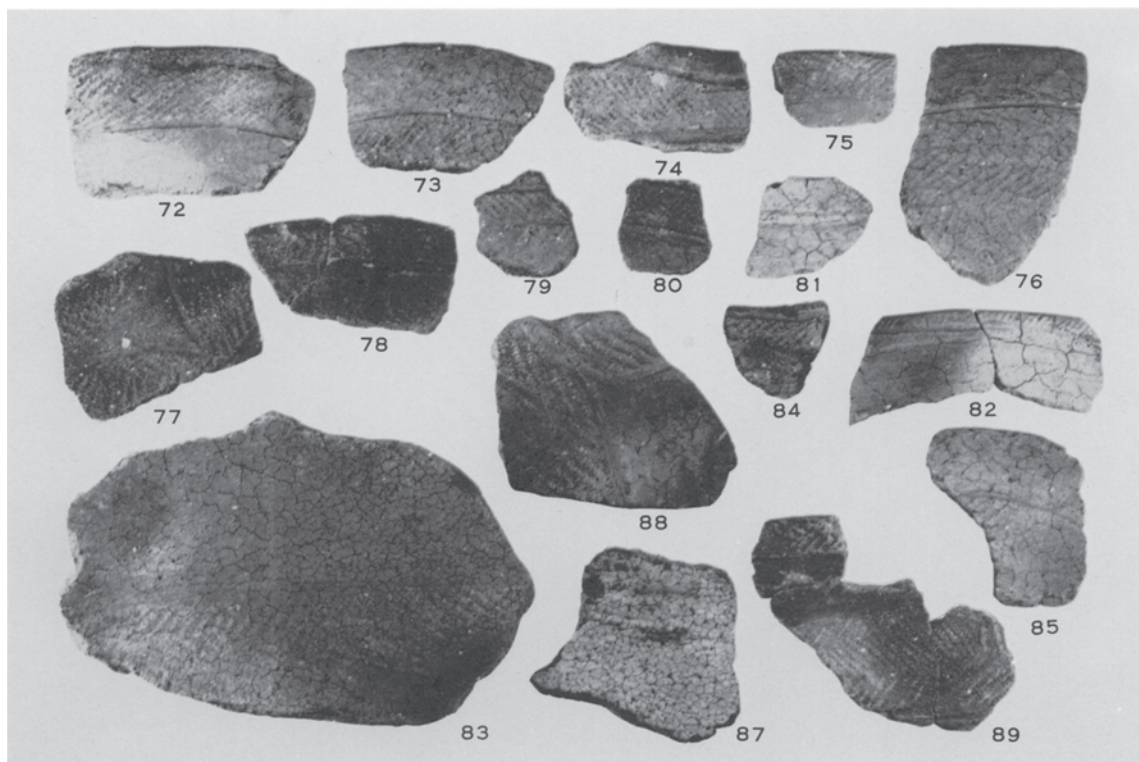
15 遺物包含層出土土器 (1)



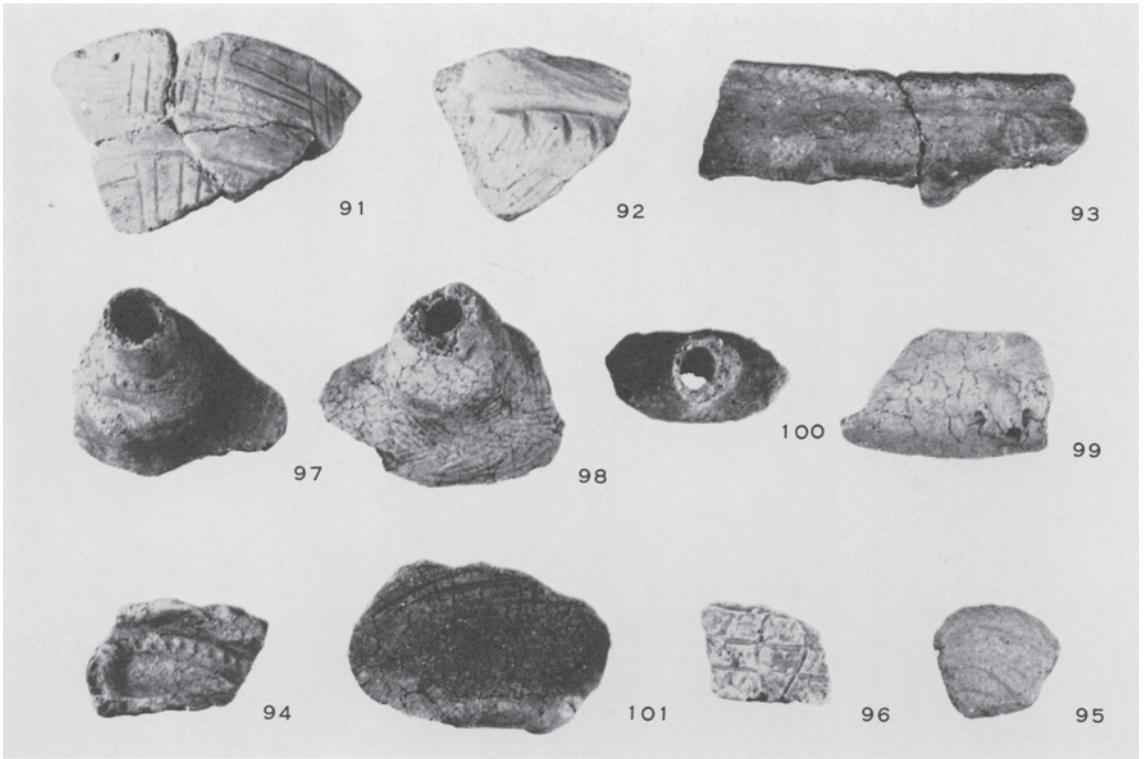
16 遺物包含層出土土器 (2)



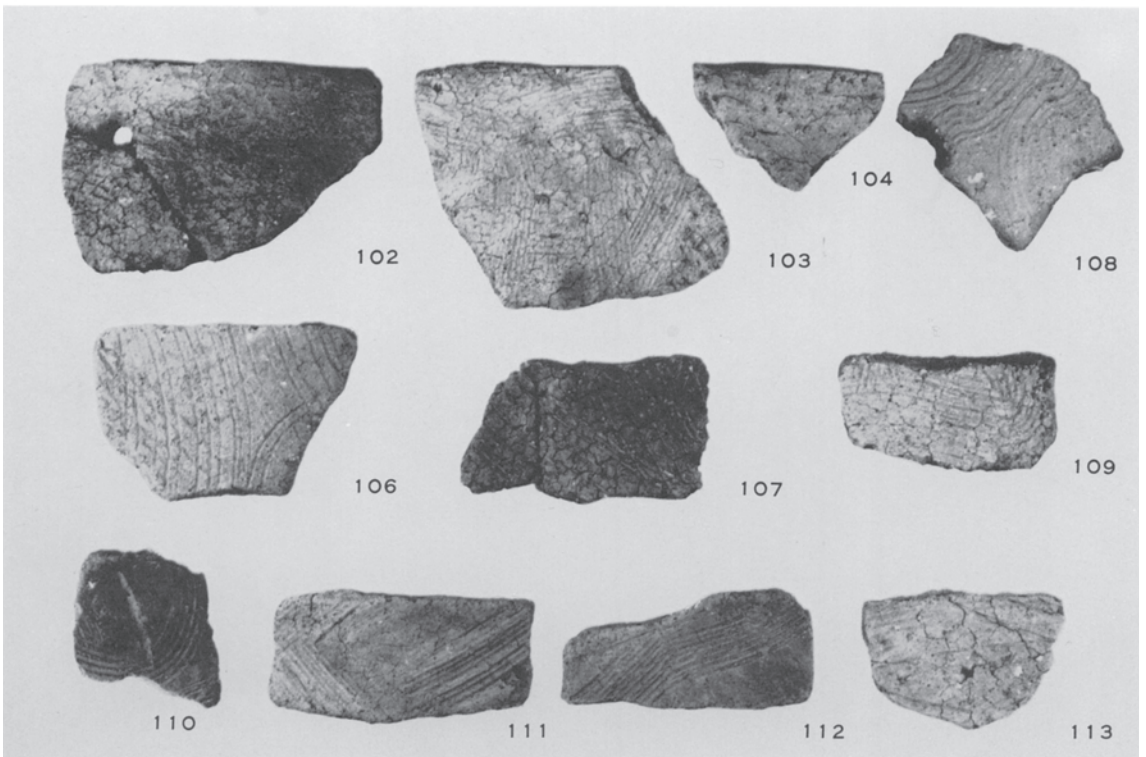
17 遺物包含層出土土器 (3)



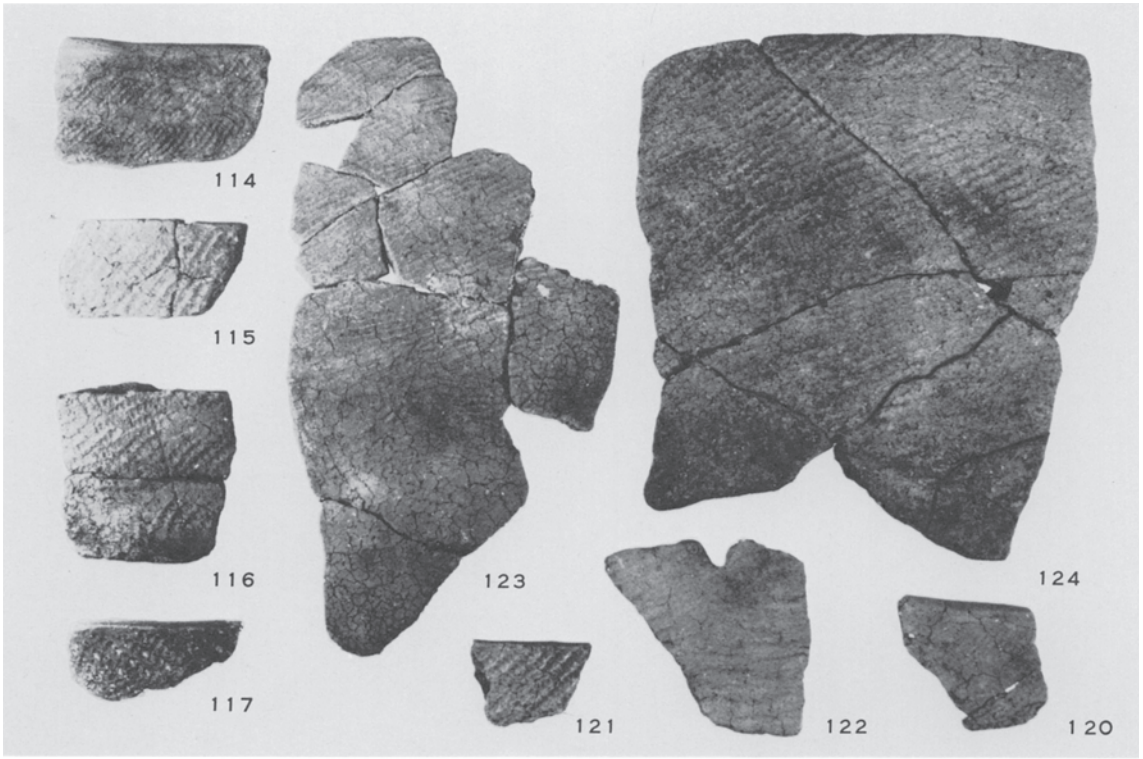
18 遺物包含層出土土器 (4)



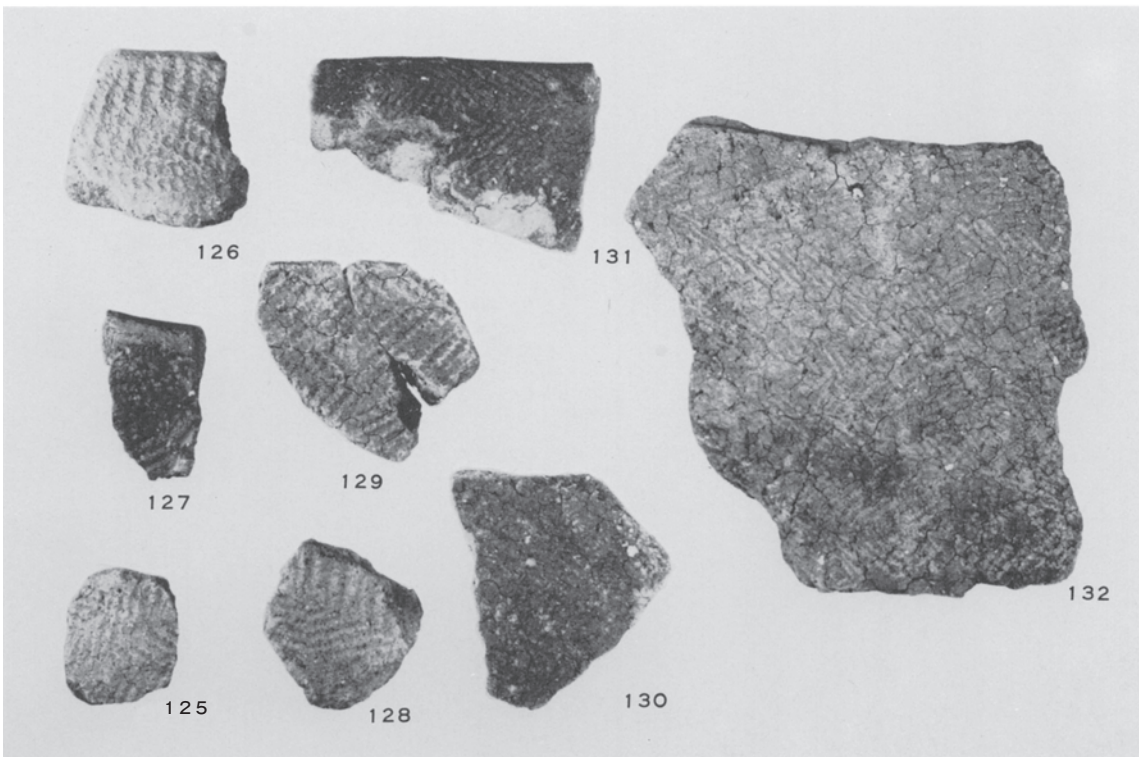
19 遺物包含層出土土器 (5)



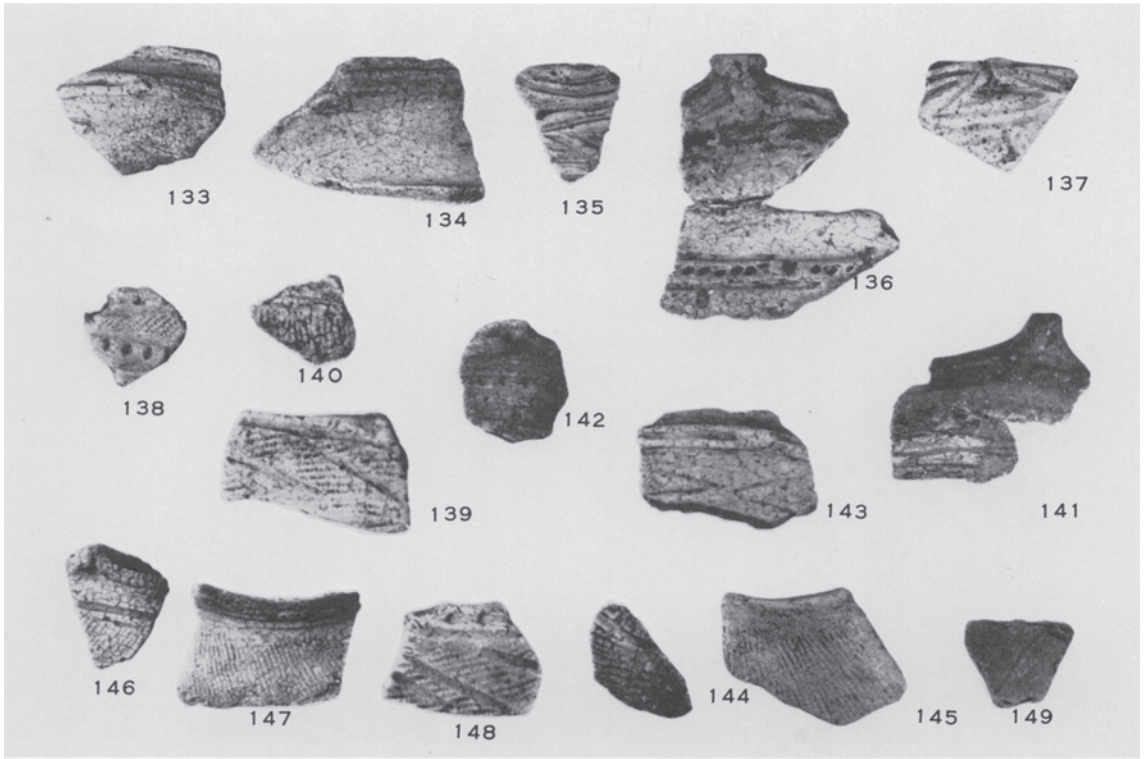
20 遺物包含層出土土器 (6)



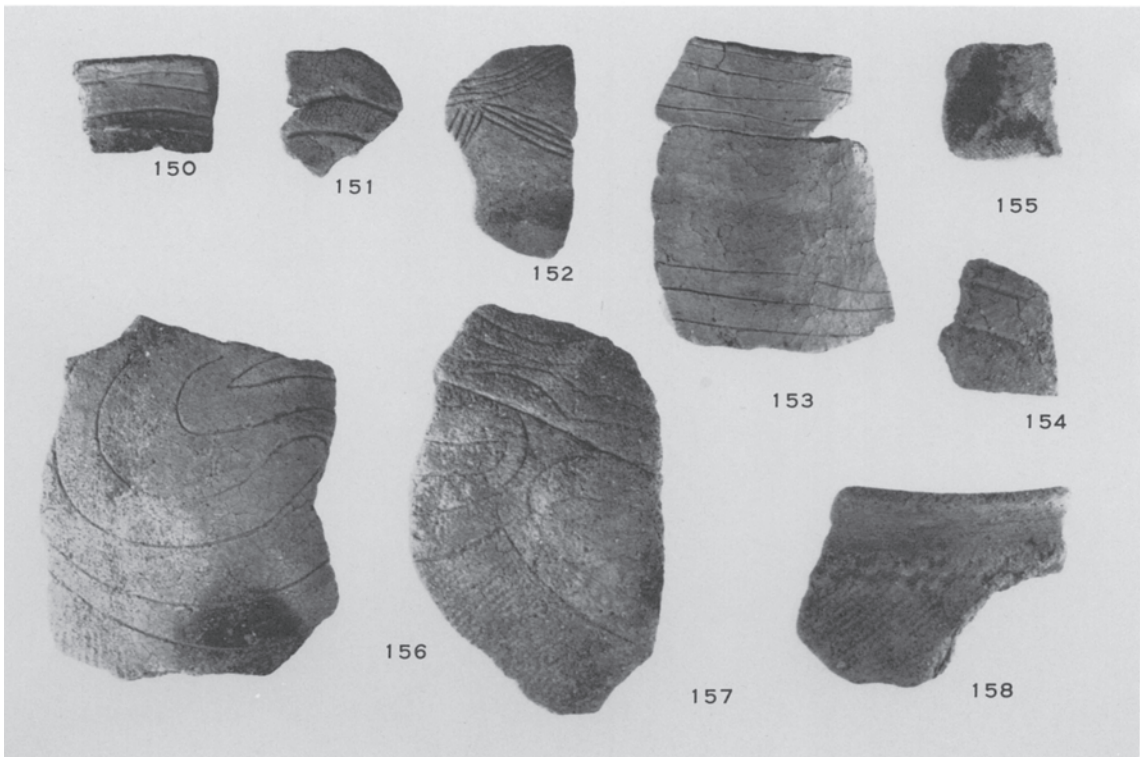
21 遺物包含層出土土器 (7)



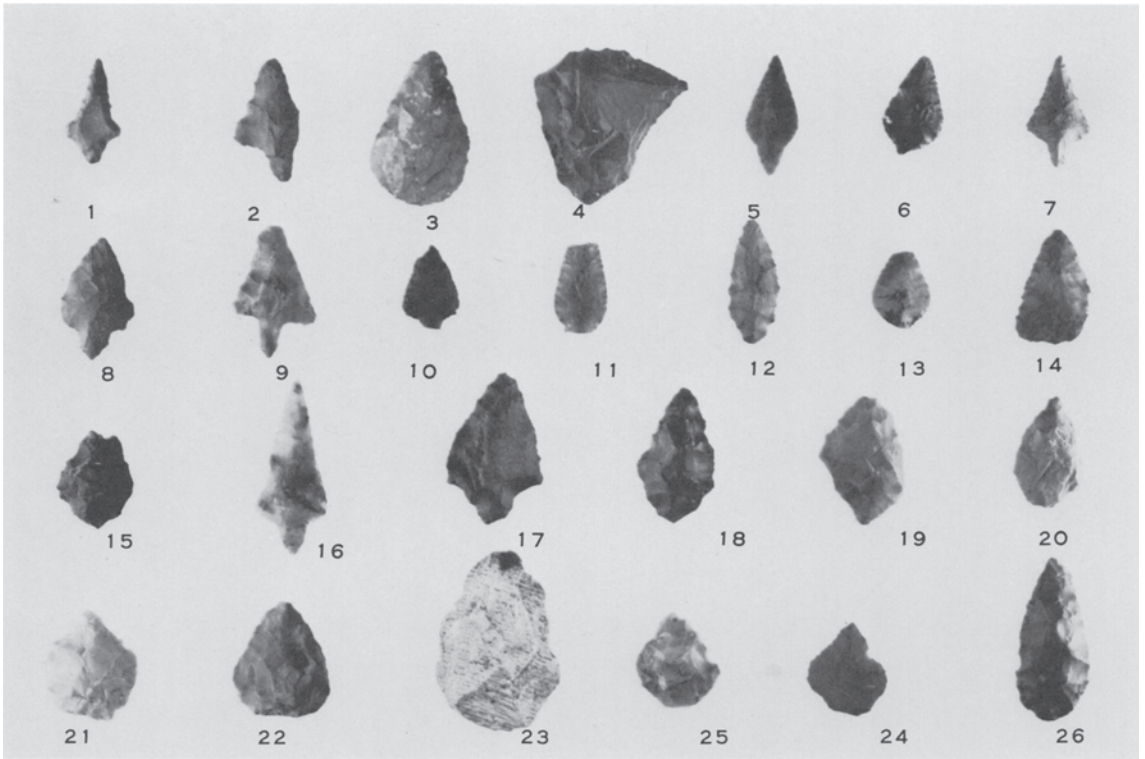
22 遺物包含層出土土器 (8)



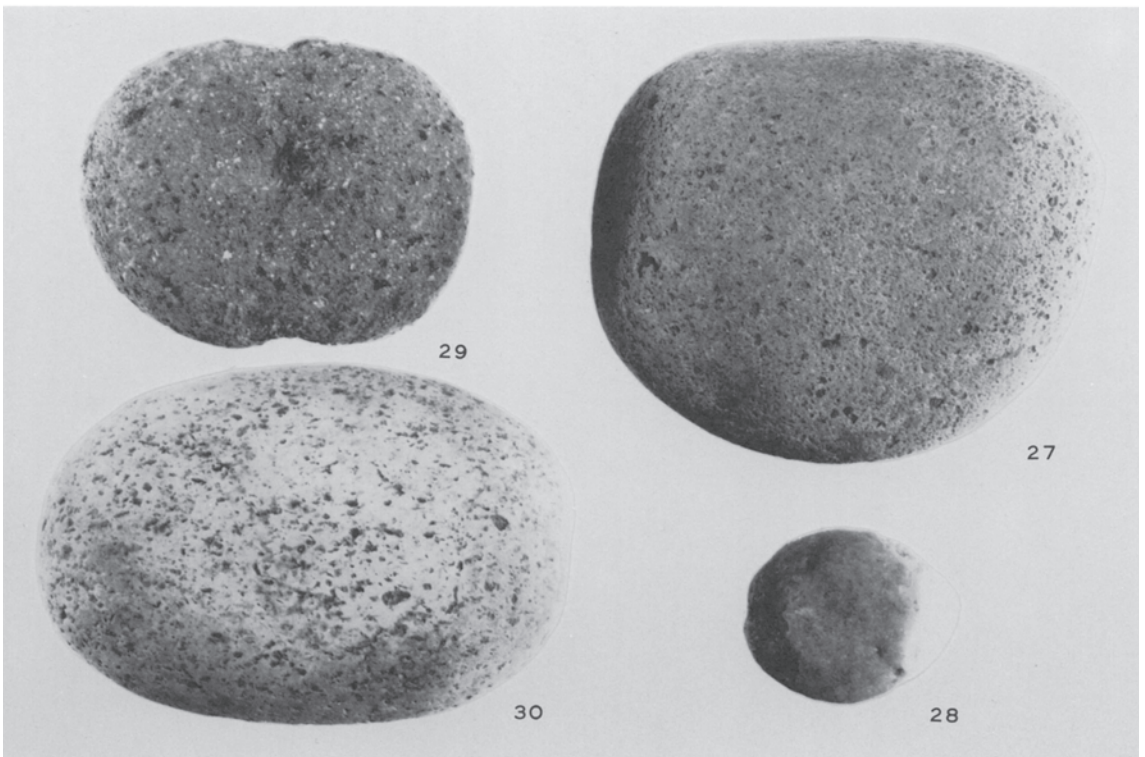
23 遺物包含層出土土器 (9)



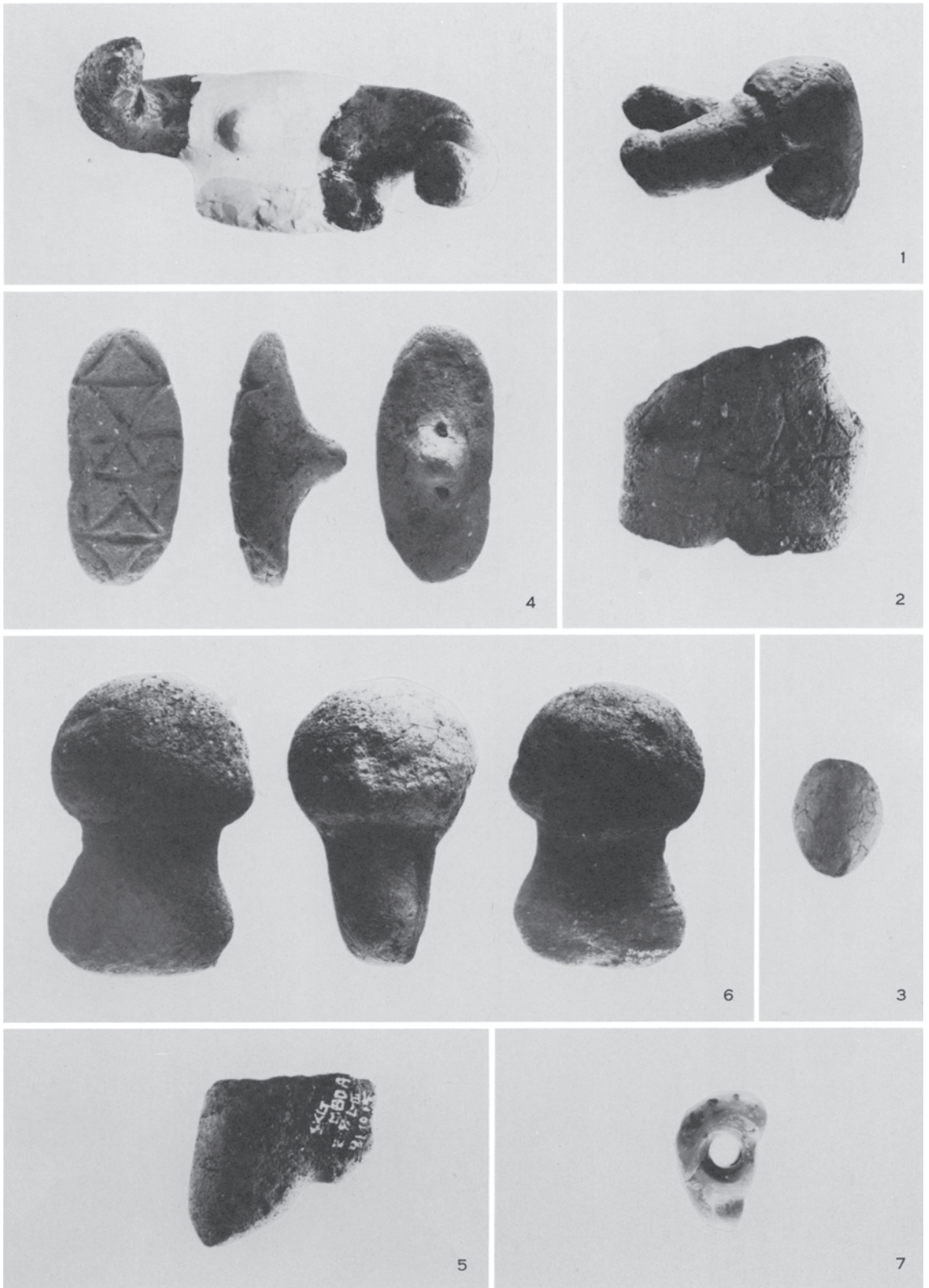
24 遺物包含層出土土器 (10)



25 1号住居跡・遺物包含層出土石器 (1)



26 遺物包含層出土石器 (2)



27 遺物包含層出土土製品・4号埋墓内出土石製品

第3編 戸屋塚群

遺跡記号 SKG-戸屋塚群
所在地 須賀川市大字大栗字戸屋
時代・種類 近世-塚群
調査期間 昭和56年8月3日～8月11日
発掘担当者 目黒吉明
調査員 若林仲亮 辺見陽一
橋本博幸
協力機関 須賀川市教育委員会

第1章 調査経過

第1節 位置と地形

戸屋塚群は、須賀川市大字大栗字戸屋226番地に所在し、昭和54年5月に福島県文化センター遺跡調査課の踏査により発見された遺跡である。

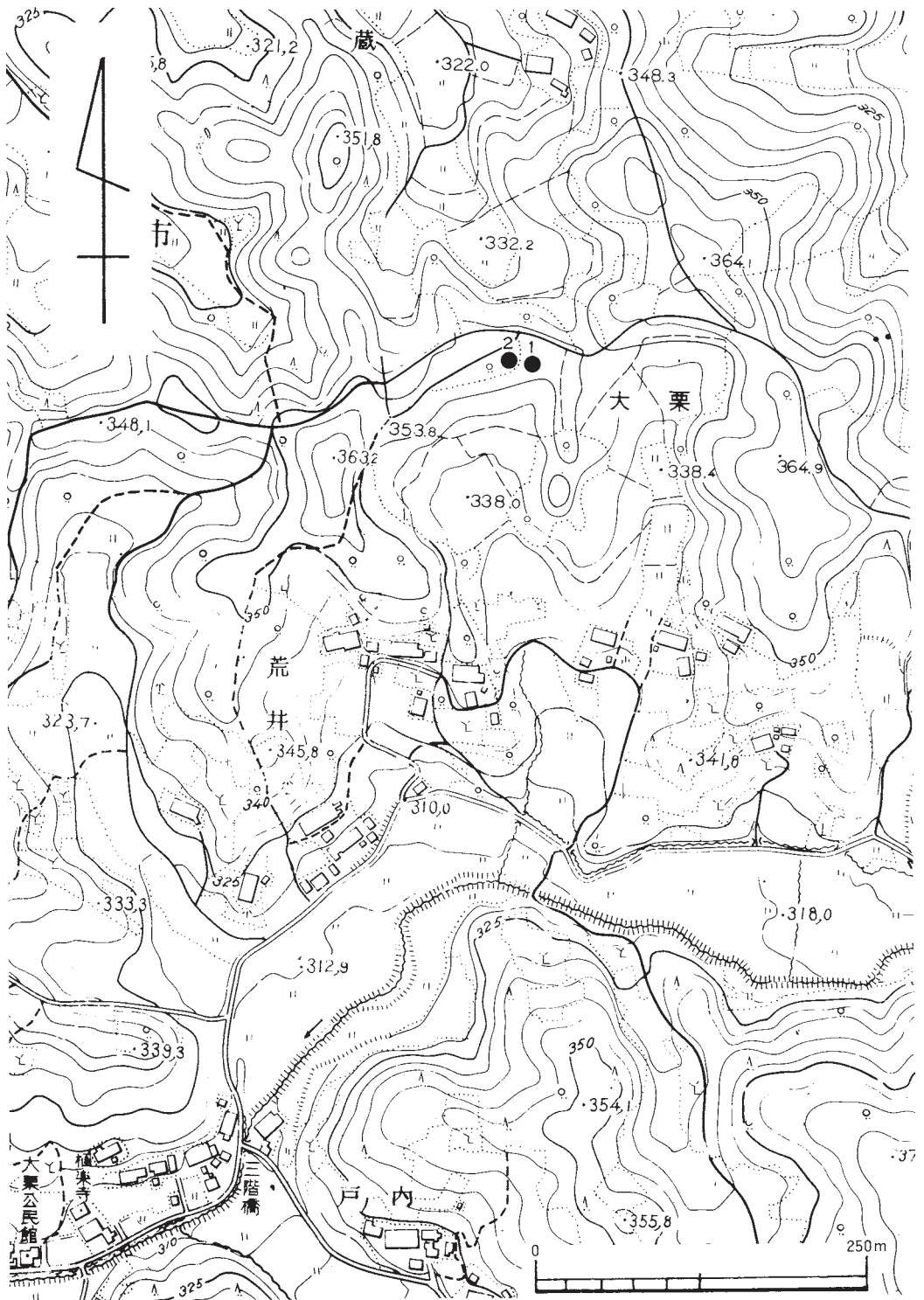
周辺の地形は、海拔高度350m前後、比高50m程度のほぼ定高性の丘陵が散在する阿武隈山地西縁丘陵地帯であり、塚は丘陵頂上部に近い海拔高度355mほどの所に2基存在していた。基盤である花崗岩が風化・侵食されたなだらかな丘陵地帯であり、土壌は深層風化した花崗岩を母岩とする黄褐色森林土壌である。植生は、クヌギ・コナラ等を主体とする落葉広葉樹林であるが、2次的なアカマツ林も広くみられる。塚の所在地は雑木林であるが、周辺のほとんどは普通畑である。

戸屋塚をとりまく歴史的環境については、ほとんど解明されていない。須賀川市東部には24の塚遺跡が確認されており、母畑地区全体の塚遺跡の57%に達する。最大の集団は、沼平塚群42基又兵衛田塚(S56, 12発見)、八沼B塚群2基(S56, 12発見)、田畑塚群2基と連続するもので、旧上小山田村・下小山田村と小倉村の境界をなす丘陵の尾根にそって沼平の西端から田畑の東端まで直線距離1.7kmにわたりほぼ一直線上に並ぶものである。第2の集団は、旧上小山田・雨田・大栗3村の境界付近の丘陵頂部に散在するもので、栗木内・柳作・舌内・関1号・関2号と戸屋塚群2基の各塚が100~500m間隔で位置している。そのほか栗木内に塚状遺構12基が存在するが、密集し、墓地として管理されているので考察から除外した。旧塩田村内には6遺跡の塚があるが、集団としての統一性が帰納できないので性格の推定も困難である。

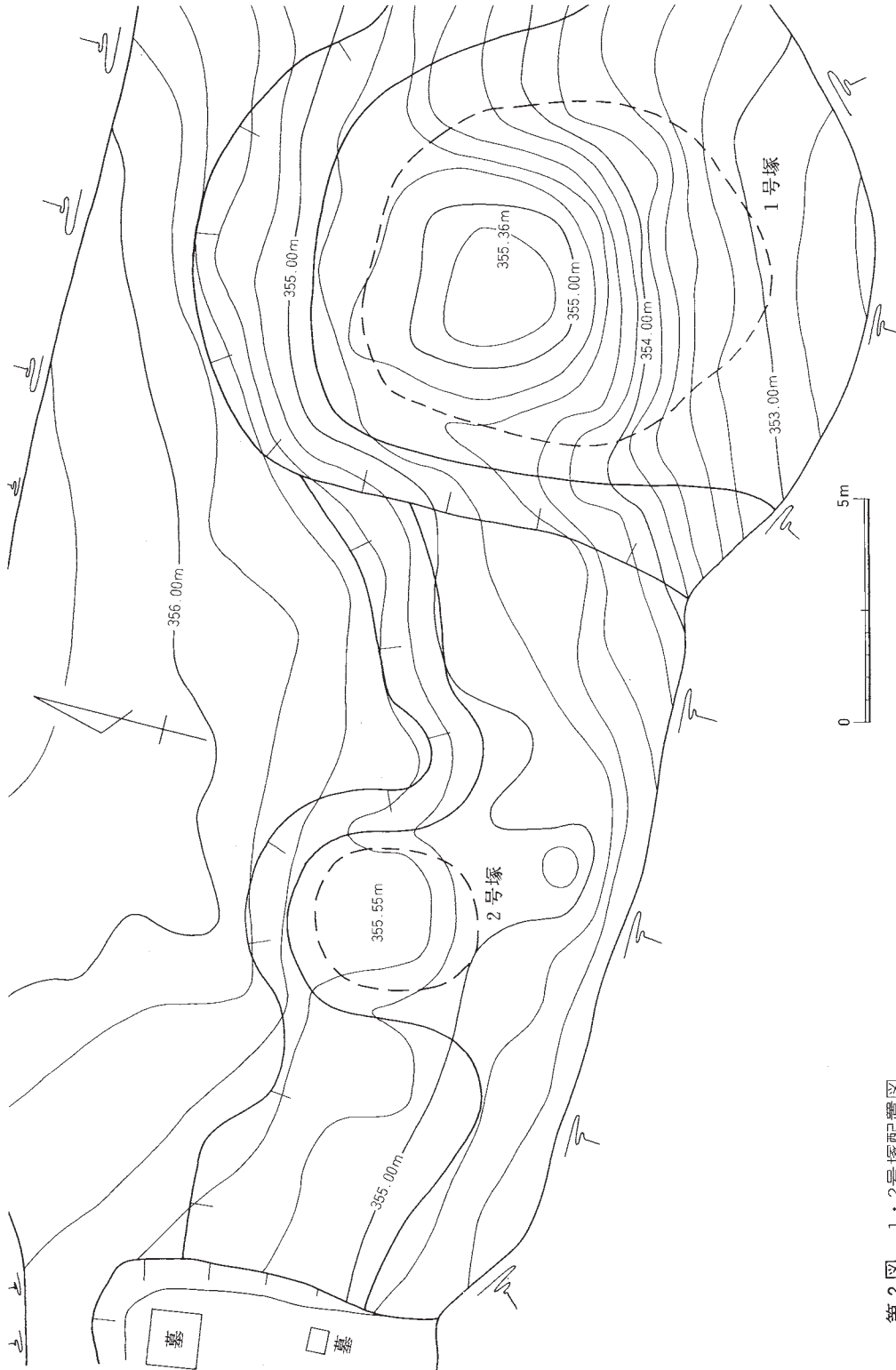
近世の文書史料として『浜田古事考』(須賀川市和田・村越家文書)によれば、大栗・狸森と小山田・雨田他三カ村の入会地公事文書に戸屋塚周辺のことが記録されている。(若林伸亮)

第2節 調査経過

福島県教育委員会と母畑開拓建設事業所との保存協議の結果、記録保存のための発掘調査を実施することになった。8月3日から5日間の調査期間を予定し、下草刈り作業をしたところ、当初1基と考えられていた塚の西方約10mほどの所に径4m弱の塚状地形を確認したので、名称を戸屋塚群と変更し調査は実質7日間を要した。8月4日表土除去。同5・6日平面図と断ち割り。同7日セクション図作成。同10日盛土除去と2号塚断ち割り。同11日調査終了。(若林伸亮)



第1図 戸屋塚群周辺地形図



第2図 1・2号塚配置図

第2章 遺 構 (塚)

塚

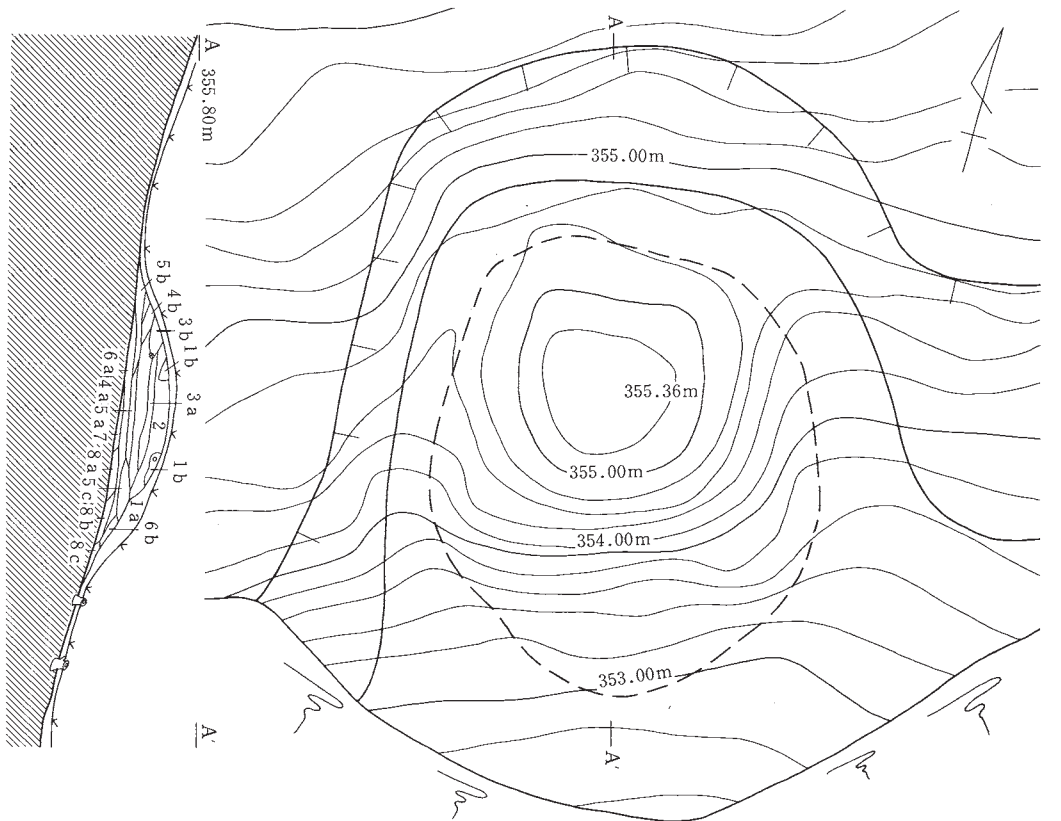
今回の調査は、大小2基の塚について実施した。これらの塚は、阿武隈山地が樹枝状にのびた丘陵の尾根上の南側に傾斜した緩斜面に築造されている。塚の位置は、明治18年の地籍図によると旧大栗村と雨田村・上小山田村の三カ村の村境付近に位置している。塚の位置する現況は山林であり、周囲はたばこ畑によって囲まれている。2基の塚の関係については、それらが約15mの間隔をおいて、東側から1号塚・2号塚と東西に並ぶかたちで位置している。調査は、それぞれの塚の平面図を作成した後、二分割法をとり、南北方向に中央ベルトを設定して盛土を剥ぎ、最終的には地山面まで検出するという方法をとった。1・2号塚とも、その盛土中や検出面からも遺物・遺構は検出されなかった。

なお、今回調査したのは2基についてであるが、以前は2号塚の西側に3基の塚が存在し、それが、西方の墓地を造る時に壊されたという伝承が残っている。この墓地の墓石には享和2年(1802)の年号が一番古いものとして刻まれている。もし、これが事実とすると、塚は少なくともこれ以前に築かれたことがわかる。

1号塚 (第3図, 図版3)

2基の塚のうちでは東側に位置する。塚の位置する丘陵の山頂部付近は標高約355.70mを測り、本塚の頂上部ではそれより低く355.36mを測る。この塚の西方には2号塚・墓地と続き、一方東方彼方には、東山・羽山・蝦夷ヶ岳などの阿武隈山地の山々がみられる立地にある。本塚は、2基のうちでも大型のほうで、最大径は約9m、最小径でも7.7mを測る。その形状は、ほぼ円形を呈している。現表土面からの高さは、斜面に築かれているために北側表土面からと南側表土面からの高さは異なる。北側表土面からの高さは70cmで、一方南側表土面からの高さは3.1mを測る。また、塚の頂上部から垂直に地山面までの高さは1.1mであった。また、第7層から第8C層にかけて旧表土が残存しているので、塚の底面は旧表土の土に築かれたと思われる、その底面は北から南に向かって全体的に約10度の傾斜をもって裾部にいたる。盛土は、塚の周囲が溝状に凹んでいることから、まわりの土を利用して積まれ、そのために2～4mの溝ができたと思われる。その盛土は、全体的に粘着性が強く、赤味をおびた黄褐色土・茶褐色土の層からなる。また、全体的に木の根が多く、その攪乱を受けている。

地山面も、木の根が深く入り込んで攪乱を受けており、黄褐色土の地山面に暗茶褐色土が混入してまだら状を呈していた。盛土の層序や地山面に、土層の乱れや掘り込みはみられず正常な層位をなしていた。そのため、盛土中や底面下に物を埋納した施設と思われるような遺構はみられなかった。また、塚の周囲からも本塚に伴う施設や遺構は検出されなかった。遺物も、塚の盛土中はもちろん、その周囲からも出土しなかった。(辺見陽一)



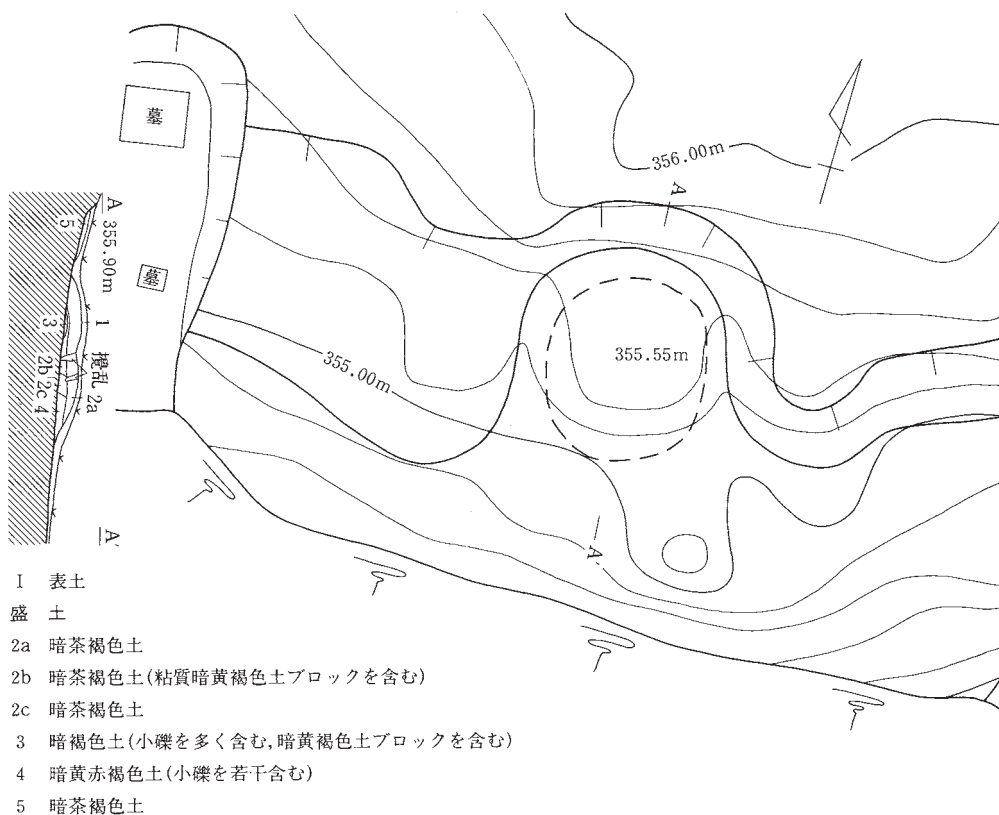
- | | |
|--------------------------|-----------------------|
| 1a 表土(暗茶褐色土) | 5a 黄赤褐色土(多量の茶褐色土粒を含む) |
| 盛土 | 5b 黄茶褐色土(黄褐色土ブロックを含む) |
| 1b 明茶褐色土 | 5c 暗黄茶褐色土 |
| 2 暗黄赤褐色土(粘質黄褐色粒を含む) | 6a 明茶褐色土(黄褐色土粒を含む) |
| 3a 茶褐色土(粘質黄褐色土ブロックを含む) | 6b 暗茶褐色土 |
| 3b 暗茶褐色土 | 7 黒褐色土(黒色土粒を含む) |
| 4a 暗黄赤褐色土(粘質茶褐色土ブロックを含む) | 8a 黄褐色土(茶褐色土ブロックを含む) |
| 4b 暗黄赤褐色土 | 8b 暗黄褐色土 |
| 4c 黄赤褐色土 | 8c 黄褐色土 |



第3図 1号塚

2号塚 (第4図, 図版4)

本塚は、1号塚の調査のため付近の伐採作業を行っている最中に確認されたものである。当初本塚は地ぶくれとも考えられたが、周囲が溝状に凹んでいることから1号塚と同様の塚と判断し調査を行った。本塚は、1号塚の裾部より9.5m西側に位置する小型のものである。大きさは東西3.1m、南北3.6mの円形を呈しており、高さは現表土より0.35mの土饅頭形の塚であることが確認された。調査は、本塚を2等分するよう南北にベルトを中央に残して盛土の除去を行い、最終的には地山面まで掘り下げた。盛土は、旧表土が明確にとらえられなかったことから、地山面上になされていると考えられる。塚の本体は、暗茶褐色土を主体に構築されているが、木根による攪乱が著しい。その下の地山面上には、暗茶褐色土・暗褐色土・小礫を含む暗黄赤褐色土が盛土されている。これらは、本塚周囲の土を利用したものと思われるが、それは傾斜面の下になる南側を除いて、塚のまわりに幅0.7m前後の周溝状の凹部が残存していることから判断できる。本塚に関する遺構や遺物の検出はみられなかった。(橋本博幸)



第4図 2号塚

第3章 考 察

戸屋塚群の調査は、東西に並ぶ大小2基の塚について実施した。このような「塚」については不明な点が多く、その存在的意味についてもはっきりとわからないものが多い。そのため、塚の研究においては、考古学的な面とともに、民俗・文献史学などの関連学問からのアプローチを行いながら、その考察をすすめていかななくてはならないと思う。今、本塚の場合も遺物・遺構が検出されず不明の部分が多いために、考古学的な面とともに民俗・文献史的な面とから考察をすすめたい。

まず最初に、考古学的に1・2号塚についてまとめると、次のようなことが言える。(a)土層の堆積状態からみて、人為的に周囲の土を盛り上げて築かれている。(b)地面を掘り下げ、何かを埋め、その上に塚を造ったものではなく、旧表土の上に塚が築かれている。(c)遺物は塚の底面からも盛土中からも検出されなかった。(d)位置については、ほぼ山頂部に位置し、旧大栗・雨田・上小山田の三カ村の村境付近に存在する。

次に、伝承・文献等の面から検討すると、次の三つのことが考えられる。まず第一に、修験道の山伏塚ということが考えられる。それは、この塚のある土地が、ここから南方約100mにある「東羽山東岳寺大宝院」を管理する渡辺家の所有地で、この寺院は『須賀川市史』近世三に「修験宗天台寺門派 開創は貞享元年 開祖は了宏大徳」と記され修験宗の寺院であることがわかる。修験道の場合とくに山岳信仰と結びつくことが多く、この寺院でも大栗の東方の羽山や出羽三山などを信奉しており、そのため塚をそれらと見立てて山伏達が祭祀を行ったということが考えられる(註 『新版考古学講座』8)。次に、第二として供養塚としての性格が考えられる。これは、村人の伝承によるもので、この地は、昔、村で使われた農耕馬が死ぬと埋葬された所であるといわれそのため馬の供養として塚が築かれたということが考えられる。

第三として、文献をもとにして考えられるもので、村境論争における境塚ということが考えられる。これについては『浜田古事考』(『須賀川市史』近世三に所載)の中で、慶長7年に大栗・小山田・雨田の三カ村の間で入会地における山手銭をめぐる争いがあり、その結果として次のように記されている。

(中略) 右の段々他郡之奉行衆をも相加へ、糺明之上ニ小山田申分在之事ニ而境塚とり上塚こく米ノ道を限り北の山小山田ニ相究候間向後不可有相違候、自然相背儀於有之ハ可被加御成敗者成

慶長七年三月九日

今、この文献中に出てくる「境塚」が本塚群と位置的に符合すると考えられる。

また、以上みてきた本塚群に関する性格を再考察すると、第一の山伏塚や第二の供養塚については、それらに関する遺物や遺構などがみられないことからその妥当性を欠くと思われる。そうすると、本塚群に関する性格は文献中にある境塚としての可能性が大きく、その妥当性が高いと思われる。築かれた時代については、慶長7年には周知の境塚としてあらわれているので、それよりは古い年代に築かれたものであろう。このような村境論争は、これら三カ村だけのことでなく近くの塩田・小倉・栃本の三カ村でも生じており、その結果66の塚が築かれている。また、県内でも郡山地方・会津地方などでも生じている。これは、農民の力が増大し、村の自治組織を確立していく段階で生じ、そのような中で境塚が築かれていったものと思われる。

なお、本塚群の近隣の村々にも塚群が存在している。小倉地区には、田畑塚群(2基)・沼平塚群(42基)があり、沼平塚群の一部については昭和55年度に調査がなされている。また、雨田地区では、関1号塚・関2号塚・柳作塚・舌内塚などがあり、それらの塚が西北から東南方向へほぼ一直線上に並んでおり、これらの塚はいずれも丘陵の尾根上に位置している。そして本塚は、これら関1号塚から舌内塚へと一直線上に並ぶ延長線上に存在し、その一番東南端に位置している。これらの塚と本塚群との関係は今後の考古学及び民俗・文献史的な調査をまたないとはっきりしないが、本塚群と同じような性格をもつものと考えられる。(辺見陽一)

参 考 文 献

- 根本忠孝 1951 「福島県下に於ける十三塚」『福島史学研究』2号
村山修一 1972 『山伏の歴史』 塙選書
中村 允他 1973 『新・仏教辞典』 誠信書房
和歌森太郎 1973 『山伏』 中央公論社
西郊民俗談話会 1976 『大栗・狸森の民俗』
野村幸希 1977 「歴史時代の塚」『考古学ジャーナル』131号 ニューサイエンス社
大場磐雄他 1978 『新版考古学講座』8 「十三塚」「富士塚等」
近 世 三 1980 『須賀川市史』「浜田古事考」卷之拾三
目黒吉明他 1980 『母畑地区遺跡分布調査報告Ⅳ』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
阿部正行・阿部俊夫他 1980 「十三塚塚群」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅳ(福島県文化財調査報告第84集)』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
玉川一郎・安田 稔他 1981 「十三塚E塚群」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅵ(福島県文化財調査報告第95集)』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
橋本博幸他 1981 「沼平塚群」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅶ(福島県文化財調査報告第96集)』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
小林清治他 1981 『福島県地名大辞典』 角川書店



1 戸屋塚群遠景



2 1号塚調査前全景



3 1号塚セクション



4 2号塚セクション

福島県文化財調査報告書第106集

国営総合農地開発事業

母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅷ

昭和57年3月31日 発行

編集 財団法人 福島県文化センター（遺跡調査課）

発行 福島県教育委員会（〒960）福島市杉妻町2-16

財団法人 福島県文化センター
（〒960）福島市春日町5-54

印刷 (有)平電子印刷所 美術写真印刷研究所
（〒970）いわき市平北白土字西ノ内13
